

佐多稲子論  
——社会的弱者表象の展開——

2020年7月

城西国際大学大学院 人文科学研究科  
比較文化専攻

王 晶

## 凡例

1. 年号表記は原則的に西暦として、必要に応じて和暦を併記した。
2. 単行本・新聞・雑誌は『』、作品名・引用句は「」、キーワードは〈〉で示した。
3. テキストは基本的に初出によった。『佐多稲子全集』全18巻（講談社1977-1978）に拠る場合、明記しておく。全集未収録作品は別記した。引用文のルビは必要なもののみを残して省略した。また、引用資料の旧字は新字に改める場合がある。
4. 日本が中国で傀儡国家を作り、「満州国」と呼んだ。中国では「偽満州」と呼ぶ。佐多稲子の作品では満州を使っているが、戦後日本の学界では、その歴史性に鑑み満州に「」を付し「満州」と表記しているので、本論文では「満州」と表記する。
5. 参考文献などについては、原文のままを原則とした。
6. 引用文中の下線は、すべて引用者による。中国語参考文献の翻訳も筆者による。

## 目 次

序章.....	1
第一節 先行研究の概観.....	2
第二節 研究の目的と意義.....	9
第三節 佐多稲子文学と社会的弱者の関連性.....	9
第四節 研究方法.....	13
第一章 少女労働者の抵抗	
——人間的強者の視点から.....	16
はじめに.....	16
第一節 家父長制に起因する多重抑圧へのしなやかな抵抗	
——「キャラメル工場から」を中心に.....	19
第二節 植民者へのストレートな抵抗	
——エッセイ「満州の少女工」を中心に.....	26
第三節 旅館主人への毅然たる抵抗	
——「水」を中心に.....	30
おわりに.....	35
第二章 目覚めた女性の自我表現	
——フェミニズム／ジェンダーの視点から.....	40
はじめに.....	40
第一節 女性の社会的役割と自己実現への成長	
——「乳房の悲しみ」を中心に.....	43
第二節 自我を求める過程の阻害と葛藤	
——「女三人」を中心に.....	51
第三節 制度内に生きる女性の自我の追求	
——「気づかざりき」を読んで.....	63
おわりに.....	69
第三章 植民地化された「外地」の人々の苦境	
——ポストコロニアリズムの視点から.....	73
はじめに.....	73
第一節 「内地」植民者女性の傲慢に対する現地人の抵抗	
——「白と紫」を読んで.....	75
第二節 「満州」に生きる日本人女性の悲哀と矜持	
——「旅情」から.....	84
第三節 「髪の歎き」に隠されているモチーフ.....	91
おわりに.....	100

第四章 マージナルな人々の切なさへの凝視	
——民主主義の視点から.....	103
はじめに.....	103
第一節 貧困に追い込まれた労働者の辛さ	
——「三等車」から.....	105
第二節 暴力や虐待を受ける知的障がい者の惨めさ	
——「泥人形」から.....	112
第三節 事業に失敗した中小企業家の虚勢と気弱さ	
——「黄色い煙」から.....	119
おわりに.....	124
終章.....	127
参考文献.....	134

## 序章

2008年ノーベル文学賞受賞者ル・クレジオが中国の黒竜江大学で講演を行ったとき、文学は生命に対する感知であり、個人の経験を書くことこそ価値が生まれるのであり、一途に先人大家に追随してすでに獲得された経験を書くものではないと述べたように、佐多稲子は20世紀を生き抜いた「短編の名手」<sup>1</sup>として殆ど自分自身の経験をもとに書き続けた、日本近代女性文学を代表する一人である。長い人生において世に何百編もの作品を残している。

その文学活動は3段階に分けられる。前期（1928-1934）は自分の幼少年期に働いた経験に取材した「キャラメル工場から」で文壇に登場し、プロレタリア作家として階級意識の濃厚な作品を書いている。中期（1934-1945）は、戦時下であり、「牡丹のある家」をもって創作態度の変化を示しはじめた。この時期に、同じく個人の体験をもとに書いた「くれなゐ」を代表として、女性の問題を扱い、フェミニズムやジェンダーの視点の強い作品が多い。と同時に植民地慰問の見聞を材料とする植民地問題を扱う作品も少なくはない。後期（1946-1993）は、戦後だが、身の上にかきた戦争責任、共産党との関係を中心テーマとするが、婦人民主クラブの仲間たちとデモや集会にも出かけた「行動する作家」として、社会政治運動や核・性差・貧困・格差などにも強い関心を示す。そしてそれらは「表象化した社会派的なもの」<sup>2</sup>である。いずれの時期も、底辺をさまよひ、社会的強者に翻弄され、権力の圧迫を受けた人間が歴史の激動の中をいかに潜り抜けて生きているかを主眼に据えて描出している。いわば社会的弱者であると同時に、挫折から立ち直り、難所を乗り越えて着々と前へ進む人間の「強者」であるともいえる人物像である。

「キャラメル工場から」「お目見得」のような定評のあるプロレタリア文学があれば、戦時中における「空を征く心」「生きた兵器」「髪の手紙」のような戦争賛美の傾向を指摘される作品も書かれている。自立した女性への目覚めを強く主張する「くれなゐ」「女三人」があれば、根底から自己誤謬を真摯に問い続ける「虚偽」「泡沫の記録」もある。また、労働者・貧困・階級・障がいなど社会現実に関心を示し作品化した「水」「三等車」「泥人形」のような歯切れのよい名作を数多く世に送った。波乱と挫折に満ちた、女と労働者という二重体験を抱えている佐多は弱者の境遇に悲しみ、理解を与えて、そして弱者との共感を作品の中に映し出して、「小さな生活」<sup>3</sup>を題材にした独自の小説世界を作り出した。佐多稲子は終始、ひとりの弱者としての主体を以て弱者を描き、仰視ではなく、俯瞰でもなく、同じ目線で作品中の人物と対話し、一体化を実現する。のみならず、現実にも密着する文学を追求するリアリズム文学者として、時代の変化に応じて、複雑な歴史の流れの中で、社会的弱者の交錯した人間性を誠実に表現している。従って、社会的弱者への眼差しとその表現は佐多稲子文学のメインテーマであり、佐多

が終生貫いた核であると言えよう。

本論文は先行研究を踏まえて、佐多稲子文学に表出された社会的弱者への独自の眼差しはいかに展開されていたかを究明していく。

## 第一節 先行研究の概観

佐多稲子とその文学に関する研究は佐多が文壇に登場して以来、絶えることはない。しかも近年、佐多稲子作品への再評価や新たな解釈が研究者の間で盛んに行われている。2018年6月に刊行された『草茫々通信 12号 特集 凝視の先に——佐多稲子の文学』には代表的問題作品として「素足の娘」「くれなゐ」「私の東京地図」「歯車」「灰色の午後」「溪流」「時に佇つ」「樹影」「夏の葉」など9編を選んで読み直す論文を掲載した。その内、伊原美好「「素足の娘」から——〈家族〉へのまなざし」<sup>4</sup>では、従来の北川秋雄が代表する、「素足の娘」を「自己のありようを問いかえずという経路を経ず」して、その後の「通俗小説」に向かわせた作品として位置付けた論に対して、〈家族〉との関係性から、自己のありようを問いかえず姿から、次第に深層に潜む佐多自身の抵抗運動からの回避・逃避の危険性、危うさを読むべきであると同時に、新しい道を希求する「素足の娘」の姿には、深層に秘めた激しい抵抗と孤独の姿を秘めていると指摘した。また、矢澤美佐紀「佐多稲子『くれない』の現代性——大衆とのへだたり・子供の語られ方」<sup>5</sup>では、長谷川啓・小林裕子等のジェンダー・フェミニズム批評を踏まえ、女の二重労働を描いた女性解放の文学として評価を定着させる一方、現代に通じるインテリゲンチヤである女固有の哀しさや孤独も浮かび上がらせている。しかも、当時の目覚めた女の嘘偽りのない正義感と、その裏に貼りついたある種の傲慢さとが、同時に赤裸々に描き出された点は大いに評価すべきだと指摘した。更に、作品に挟みこまれる子供にメスを入れて、「暗い作品世界に一時風穴を開ける効果を有し、自意識のぶつかり合いというドラマに生活者としての確かな日常性を付加する役割を担うと新たな視点を提出した。

従って、佐多稲子文学の位相をはっきりさせるために、しかも独自の視点を引き出すために、2019年7月に至るまでの研究成果を分析して述べておくことが必要になってくる。まず佐多の文学活動とその研究についてリストアップして概観を把握したい。使用するデータは主に小林裕子編「人物書誌大系 28 佐多稲子」（日外アソシエーツ発行 1994.6.25）とCiNii Articles（国立情報学研究所データベース 1950.1—2019.7）によるものである。

次の図表の1から4は、佐多稲子の文学活動について分類してみたものである。習作時代も含めて、文壇に登場した1928年から逝去の5年前の1993年にかけての時期を対象としている。

図1の年代別作品数から見れば、戦前の昭和10年代と戦後の昭和30年代は創作の旺

盛期で、それぞれ600編を超えている。図2は終戦前後のジャンル別作品数であるが、終戦前は小説が多く書かれたのに対して、終戦後はエッセイ・随筆・評論が圧倒的に多かった。小説家である一方、社会の現実に向けて民主主義運動の先端に立ち、平和や反戦、女性解放のために戦った活躍ぶりが見えてくる。

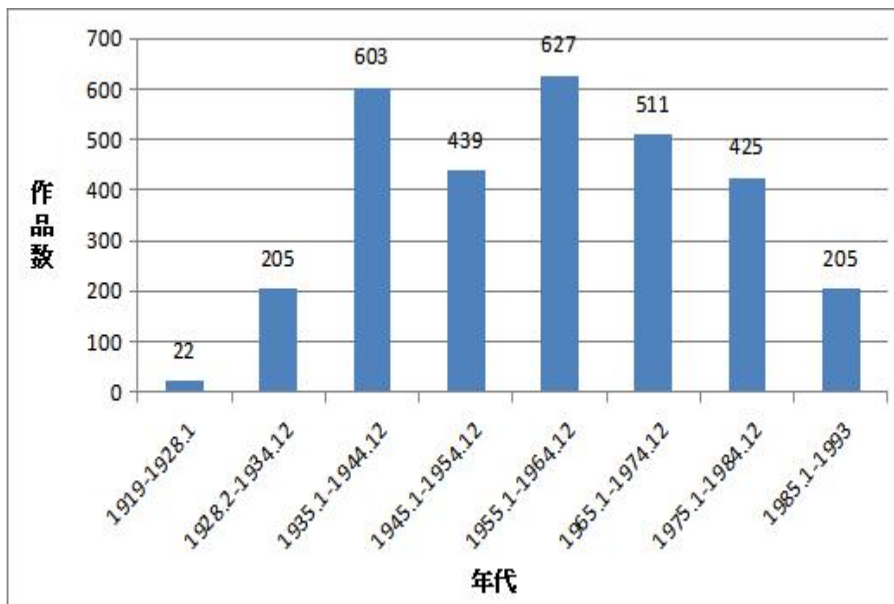


図1 年代別作品数

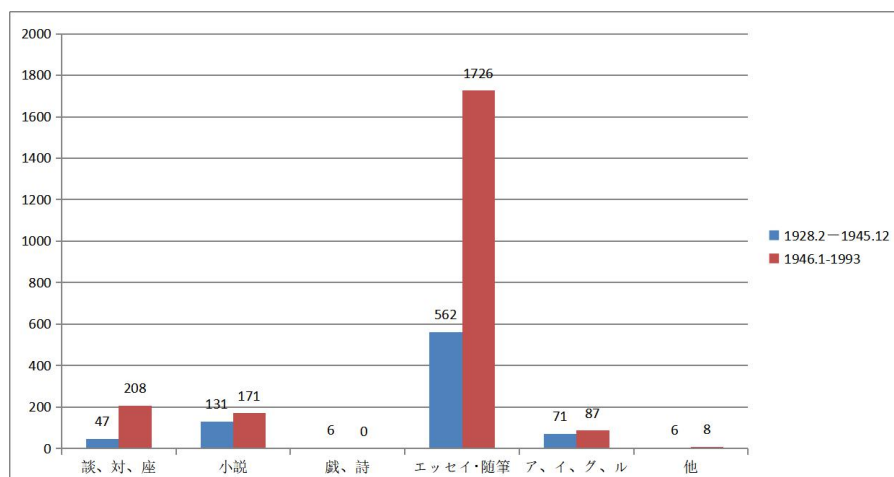


図2 終戦前後のジャンル別作品

そして、図3は作品ジャンル一覧であるが、そのうち、アはアンケート、イはインタビュー・談話、グはグラビア、ルはルポルタージュとされているので多種多様なジャンルを書いていることに気づかされる。長寿作家として、殆ど休みなく書き続けてきたこともわかる。更に、図4に示したごとく、さすがに「短篇の名手」と言われるだけあり、およそ300余編の中で、圧倒的に短篇が多く259編を占めている。

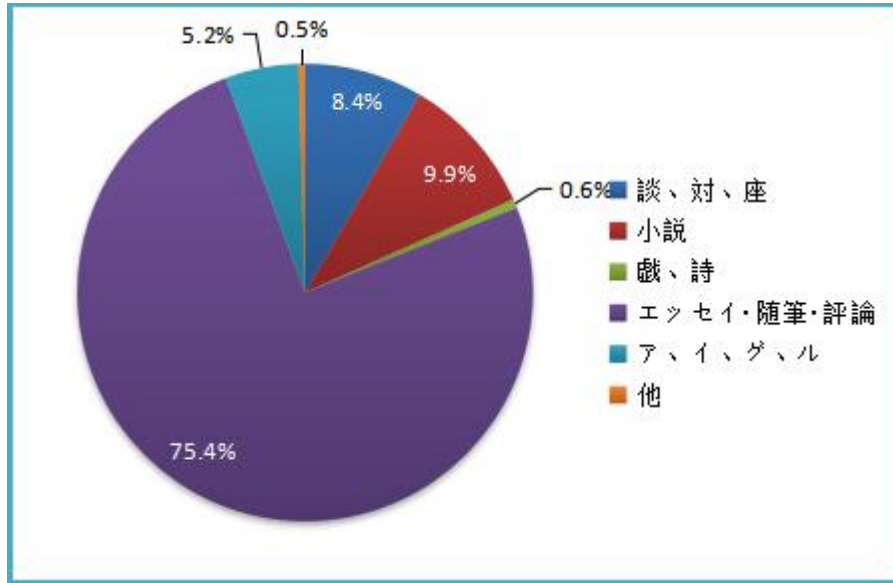


図3 作品ジャンル一覧

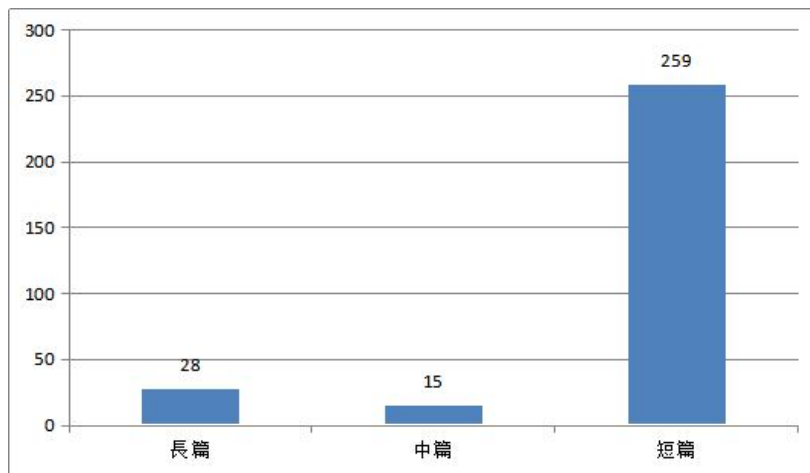


図4 小説形式一覧

さて、佐多の仕事に対する研究は以下の図5から8までにかがうことができる。500人に近い文化人や研究者が佐多稲子の文学とその人について研究を展開している。佐多逝去20余年後の今も佐多文学の意義は再認識されつつある。佐多稲子研究会のメンバーを中心とする日本国内だけでなく、中国の研究者も強い熱意を示し始めている。図5は研究成果の形態であり、延べ千本を超えている。そのうち資は資料、記は記事、小は小説、脚は脚本の略である。うち作品について論じるものは611本と、作家については578本である。研究論文は214本で、16.32パーセント占めている。更に作品論の場合は、図6に示したように、「くれなゐ」をはじめ多く論じられている作品の一覧である。他に「牡丹のある家」「重き流れに」「由縁の子」「思うどち」「哀れ」など延べ122の作品、三分の一強が研究されている。



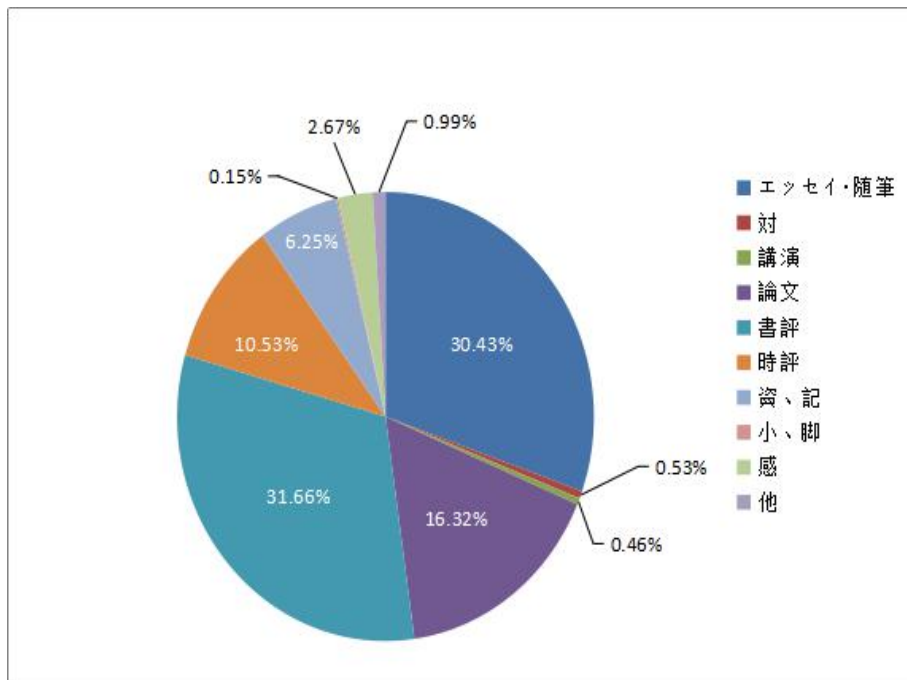


図5 研究成果の形態

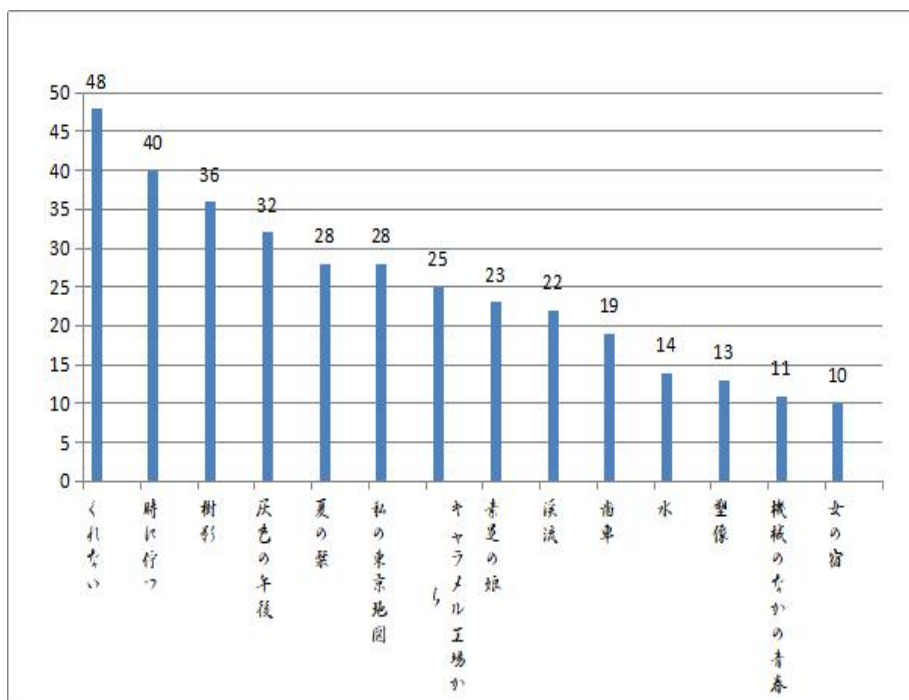


図6 作品論の概観

図7は時代別研究成果を表示したものである。ここ20年は144本の論が多様なメディアに発表されている。しかし、佐多稲子研究にはまだ広め深めていく空間が残っていると見られる。図8は海外に翻訳された作品数であるが、主にイギリス、ドイツ、ロシア

と中国語に翻訳されたが、作品数の割には少ないので、今後の展開が待たれる。

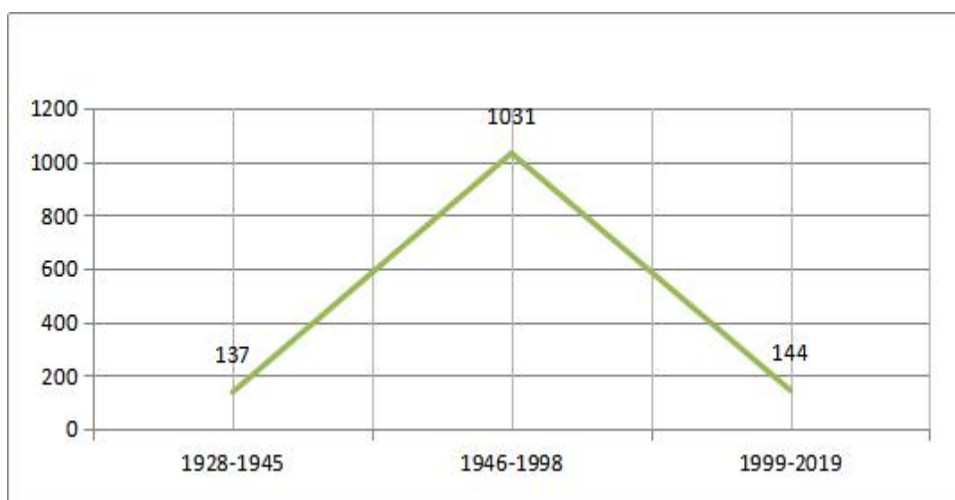


図7 時代別研究成果

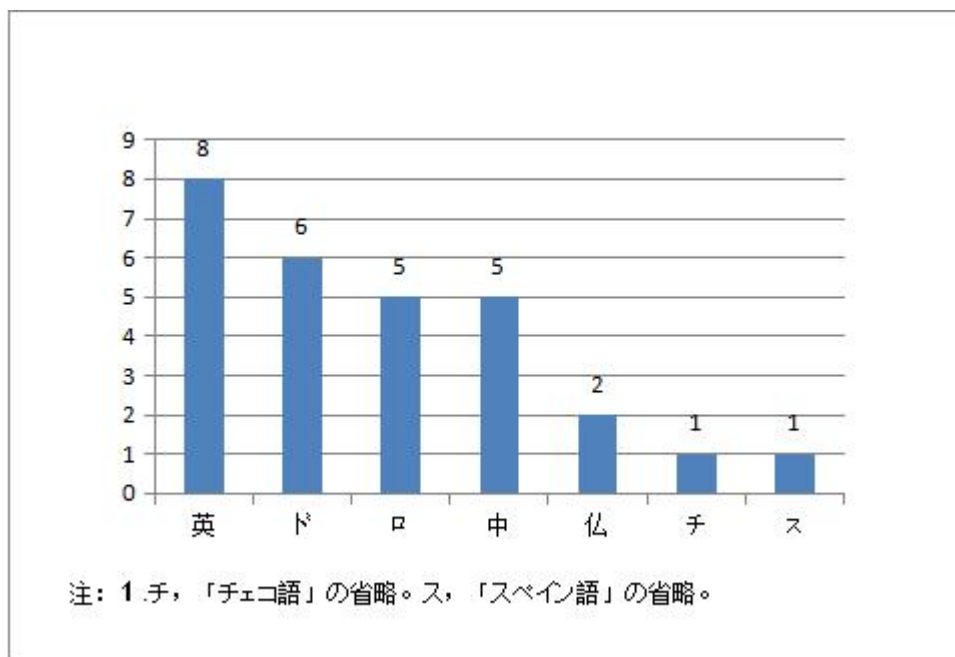


図8 翻訳された作品数

(注：以上のグラフは小林裕子編『人物書誌大系 28 佐多稲子』(日外アソシエーツ発行 1994.6.25)と CiNii Articles (国立情報学研究所データベース 1950.1-2019.7)を基に、筆者が作成したものである。)

以上の検討から、まだまだ佐多文学は論じ尽くされていないことを確認し、本論文では従来あまり論じられていない作品、「満州の女工」「女三人」「気づかざりき」「旅情」「泥人形」「黄色い煙」などにも目を向けていきたい。しかも、フランスの小説家ミラン・クンデラが「エッセイ・随筆こそ生活の真面目を呈している」というように、佐多の2千編も超えたエッセイ・随筆がまさに作家の経験、観察を通しての、人間性の深い探求となっている。しかしそれへの研究はまだ十分展開されていないようであるの

で、本論文でも幾本かを取り上げて論じていくことにしたい。

次に、研究状況においては、各章の内容に応じて言及することにするが、ここで主な論点をまとめておく。

単行本研究書においては、長谷川啓の『佐多稲子論』（オリジン出版センター 1996）は、佐多稲子研究の集大成として作品論と作家論を混じえながら、佐多の各段階の代表作品を取り上げて、主に思想的な側面とフェミニズムの視点から追求している。特に太平洋戦争前後の佐多稲子の屈折の理由とプロセスに光を当て、「自己崩壊を招いた決定的な要因にデカダンスな夫婦関係をあげ、そこから抜け出られなかった理由としてはプロレタリア運動敗走期と日中戦争開始後の倒錯した状況下における孤独感」と「大衆からの孤立感」と分析した。さらに長谷川啓は2018年10月刊行の最新著『家父長制と近代女性文学』（彩流社）の中で、一部分として佐多研究を行った。「佐多稲子は人の痛みを知る作家だ。（略）「私の長崎地図」には、その原点がすべてである」と言い、そしてその文学のいずれも、「日本の民衆、さまざまな女性たちの現場からの声・痛みを表象化している」と述べているように、現在佐多稲子文学を再評価、読み直さなければならぬ意義があるといえよう。

北川秋雄の『佐多稲子研究』（双文社出版 1993）『佐多稲子研究（戦後篇）』（大阪教育図書 2016）は、資料を基に戦前、戦中、戦後の代表作を取り上げて、作品の背後にある政治社会事情と背景とを結び付けて論じた。前著においては、創作方法や小説構造から、戦前・戦中に書かれた佐多の小説・エッセイに基づき、革命運動からの離脱や戦争協力の原因について研究した。しかも「私小説的資質の作家である佐多稲子が、プロレタリア作家として生きなければならなかったことに始まる戦時下の光と影を明らかに」しようとしている。後者においては、佐多文学と戦後日本との関りについて考察したと同時に、「戦争協力を追及されることに始まった戦後の佐多文学が、どのような軌跡を描いて収束したのか、あらためて検証する必要がある」と研究課題を提言した。

小林美恵子の『昭和十年代の佐多稲子』（双文社出版 2005）は戦時中の小説全12作を取り上げ、作品分析を行い、佐多稲子の昭和十年代を、家制度、革命運動内部の男権主義、ファシズムの三点に問題の所在を指摘しながら、「女たち」への抑圧を世に問い続けた道程として跡づけようとした。しかも、従来の戦時下佐多文学の否定的な位置づけに対して、私生活上の動向からいったん切り離し、作品世界の分析に努めた。

小林裕子と長谷川啓共著の『佐多稲子と戦後日本』（七つ森書館 2005）は研究者の論文や講演、佐多の書簡、また『佐多稲子全集』未収録エッセイや随筆も含めている。文体はさまざまであるが、戦後の時期における佐多稲子の作品についての批評・考察になっている。

小林裕子の『佐多稲子——体験と時間』（翰林書房 1997）は、佐多稲子の語彙や語法や、叙述の視点から、佐多稲子文学の表現をその人生と照らし合わせながら論を展開した。

梅地和子の『佐多稲子小論』（ながら見書房 2006）は佐多稲子素描、佐多稲子の追悼と書簡をふくめて、主に佐多の晩年の作品「小さい山と椿の花」を取り上げて論じた。

そして、五十嵐福子の『ふたりの作家——稲子・栄 文学への旅』（菁柿堂 2013）は、人生の友であった佐多稲子と壺井栄の二人の文学について語り、それぞれの作品の背景を実地からも辿り、時に作家や作家の親族との交流から得たエピソードも書き込んでいる。

論文においては、作家論と作品論と資料分析の形で示されている。作家論の前期は主に佐多稲子の「キャラメル工場から」など初期作品をはじめ佐多稲子の強靱な歩み方と凜とした姿勢を論じたものが多く、戦時中の屈折と戦後の自己責任追及も多少触れられてきた。しかし、21世紀に入ると、今までの研究を土台にした上で、さらに労働、女性解放、革命運動、戦争と核、セクシュアリティ、恋愛など研究の視野が多方面にわたり、深く立ち入る有り様を見せた。フェミニズム/ジェンダー、セクシュアリティ、女性労働者など関連作品を通して佐多稲子の現実との密着を追求した。作品論の場合、同じく前期の「キャラメル工場から」（1928）、「レストラン洛陽」（1929）、戦時下の「牡丹のある家」（1934）、「くれなゐ」（1936）、「素足の娘」（1940）、「私の東京地図」（1946）、「灰色の午後」（1958）、「時に佇つ」（1975）、「夏の栞」（1982）、「虚偽」などで、図6に見られるように戦後の作品について多く研究されている。にもかかわらず、膨大な作品と豊富な思想の割には研究がまだ届いていないとは言えず、今後、掘り下げる空間が多く残っている。

21世紀に入り、佐多稲子の戦争協力の証拠づけに関する資料が新しく発掘され、分析された。代表的なものとしては、長谷川啓の「旅の記録・写真が語る戦地慰問-佐多稲子の未発表資料をめぐって」（『城西文学』2000・12）「女性の移動と表現〈資料紹介〉旅の記録・写真が語る戦地慰問(承前)佐多稲子の未発表資料をめぐって」（環太平洋女性学研究会誌『Rim』第2巻第2号2000・6）、西田勝の「佐多稲子と『満州』」（『植民地文化研究資料と分析』12号2013・7）と、鳥木圭太の「女性作家の見た〈南方〉——林芙美子と佐多稲子のスマトラ——」（『論究日本文学』第106号2017・5）などである。しかし、海外では、特にプロレタリア人民大衆意識を共有して、深いかかわりを持っている中国における紹介や研究はまだわずらかしか成果が表れていないのは事実である。しかも、初期の創作傾向を中心に論じただけである。近年来、近代女性の葛藤や解放を視点に「くれなゐ」を批評し、生態学から「樹影」を論じる研究しか行われていない。本研究は、佐多文学には中国関係の要素を多く内包しているが、中国での佐多文学研究が十分展開されていない現状を踏まえ、今後の発展・進化のために新たな視点から問題提起を行う試みである。

## 第二節 研究の目的と意義

「私がものを書くようになったということは、プロレタリア文化運動あつてのことで、もしこの運動がなかったら、あるいはまたこの運動のそばに私がいなかったら、私はきつと読む楽しみだけに満足して書くということはなかつたらうと思う」<sup>6</sup>と、佐多稲子が感慨深く語ったように、佐多（1904－1998）の作家活動の出発は1928年に発表された短編小説「キャラメル工場から」である。それをはじめとした一連の短篇小説によりプロレタリア文学者として広く知られ文壇上の地位を確立した。

さて、一見して、衣食の問題に困らないように見える、物質的に極めて豊かな今日では、なぜ、弱者を主眼にする佐多文学を読み直す必要があるか。

佐多のプロレタリア文学時代は折しも「ナップ時代」の高揚期にぴったり重なっている。佐多自身がこの社会で「弱者」として抑えられている大衆、その中でさらに抑圧された女性を描き出すことにより、社会の基盤となる庶民に関心を寄せ、理解を示し、ピラミッドの底辺を生きた大衆のサイドに立ち語り続けていった。プロレタリアイデオロギーに立脚した佐多稲子は挫折し屈折した経験を抱えているが、現実から後ろ向きにはなり得ず、あくまでも時代とともに「険しい人生を、いつも素足で歩きつづけ、石ころやとげを踏んで血を流し」<sup>7</sup>ながら、現実との密着の上に立った文学を追求してきた。「文学についても生活についても大変鋭いそして健全な洞察力をもっている」<sup>8</sup>というように、その文学に描かれた市民運動、労働組合、核・戦争、フェミニズム/ジェンダー、貧困、格差、子供などをめぐる人間的問題は、時代が変わっていても、人間が抱える問題として変わらなく、現代にも通じている現代性を持っている。「作品の系譜を辿ってみても、当時の社会の現実のかけが、色濃く反映されていない作品は、ないといってよい」<sup>9</sup>。特に、佐多稲子文学の礎となる女性労働者への感情は佐多の生涯を貫通している。従って、強者、権力者支配の背後にある戦争・性差・貧困・生存不安などの社会的弱者の問題を抱えている現在の世の中において、「あらためて呼びかけてくるプロレタリア文学の意義が了解される」<sup>10</sup>。社会的弱者の視座から佐多稲子文学への再認識が必要となっている。

## 第三節 佐多稲子文学と社会的弱者の関連性

一般的に言う弱者は貧困者に相当する。貧困と格差の問題は日本はともかく、アメリカの民主党が打ち出す主張としてはまさに弱者に優しい国を作ること、富裕層と貧困層との格差縮小を図っていることである。それで大いなる支持率を得ていることからわかるように、弱者は一般市民としてその生存難など様々な問題にぶつかっている。中国においても、2015年に習近平主席が「精確な貧困者支援」を国策として打ち立てた。経済的格差は人間の格差につながるので、弱者の問題は世界的問題であり、永遠の課題であ

る。

本論でいう社会的弱者は英語で social vulnerable groups (ソーシャルヴァルネラブルグループ) であり、一般的に言う弱者を内包している。

三省堂大辞林第三版によると、障害者・高齢者・女性・子供や、低所得層・不熟練労働者・零細な農漁民など、社会の中で弱い立場にある人を指す。

社会学からいえば、雇用・就学の機会や人種・宗教・国籍・性別の違い、あるいは疾患などによって、所得・身体能力・発言力などが制限され、社会的に不利な立場にある人、また高齢者・障害者・児童・女性・失業者・少数民族・難民・貧困層などが社会的弱者となり得る。「非常事態が起きた時、高齢者は災害弱者になる。障がい者も病人も、子どもも女も災害弱者になる」<sup>11</sup>。

哲学上では、社会的弱者は社会的強者に対する言葉で、相対性の強い概念である。両者は弁証的で、永遠不変の関係にあるわけではない。要するに、物質上の極端な貧困から社会の底辺に置き去りにされた故、個体としての主体を表す権利を喪失し、「発言権」が与えられぬマージナルな位置に身を置く人々、または歴史的或いは社会的原因で「第二の性」に落ちぶれた女性を指す。勿論、心身障がいや労働能力喪失者や、生理的理由で自立できない老人や子供もみな社会的弱者である。つまり、弱者はマイノリティを指すというよりも、むしろ社会の基盤となる人民大衆を言うのである。

文学上の弱者という概念は、最初はカフカは日記に「弱者の文学」と書き、言語、政治から「弱者」を定義している。しかも「弱者は栄光の一つである。それは弱者はいかなる文学に対して革命を意味しているからである」<sup>12</sup>と弱者と革命の関係を強調している。後に、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズがカフカをケースにして研究した結果、カフカはマージナルマンとして弱者の文学の実践者であり代表作家でもある。弱者の文学の特色としては、人物の外部と内部の問題は常により大きい社会或いは非社会環境と関連している。弱者の文学が内包している要素としては、文学が民衆に関心を持っていることだと分析した。カフカやジル・ドゥルーズが明らかにした弱者と文学の根本的關係は、佐多稲子はその長い人生において終始、女性、労働者、貧乏人、障がい者、子どもなど弱者群への魂の帰依を示して、人道主義の文学特質を呈していることと根底で通じ合っているものということができよう。

にもかかわらず、弱者と言っても、長いものに巻かれろを信奉し、逆境や貧困に甘んじて、抑圧されたまま、勇気に欠けているネガティブな型がある。一方は、権力憎悪で、運命に抗い、落胆もせずに、倦まずたゆまず努力して、人間のあるべき姿を求めつつある積極的なパターンであり、社会を推し進めるエネルギーにもなる。佐多稲子の描いた弱者は言うまでもなく後者で、決して運命に翻弄されたまま、無抵抗で、逆境に甘んじてばかりいて、時代の流れに身をゆだねてしまう弱虫ではない。むしろ「若草」のように、踏みにじられても上へ上へと伸びて成長していく健気な一群であり、人間的強者である。佐多自身も言った通り、「大体、私は、作品を書く場合にも決して否定的な方面

からは描けない人間である。(略)題材にも、鋭く否定するものそのものを描くことはできなかった」<sup>13</sup>。言わば、弱者であっても、ポジティブな生き方を取ることにより、人生の道が開けることにつながるに違いないという民衆的な積極的楽観的人生観である。

東洋の老荘哲学によれば、宇宙の核心は強と弱の関係にある。いわゆる、強者がいかに存在するか、また弱者がいかに存在するかという問題である。一言でいえば、生命がいかに存在するかは宇宙の根本的テーゼである。世界は、一方が他方の存在原因であるという相互関係にある。この思想の下で、生命主体の相互関係を認め、実存の本質は寛容であると主張する。がしかし、ヨーロッパでは、ニーチェの「力への意志」の影響力が大きい。そのコアとなる概念は「権力意志」である。ニーチェによれば、生の本質は「より力強く」を求める力である。抵抗を克服してより強大になろうとする、存在一般の根底にある意志である。権力への意志として存在すること、それが生の本質であるという。生命の存在は、自分の力を発散して、他者を征服し、自分の目的を達成するために駆使されるのである<sup>14</sup>。この哲学理論はヒトラー・ナチスに自分に都合の良いように悪用され、第二次世界大戦を引き起こすために格好の理論的支柱を提供した。よって、ユダヤ人を絶滅させる人類史上の前代未聞の大惨事を作った。この「我を通そうとする」という自分の意志を抑えられることが不可能なまでに強者になろうとする競争意識に駆り立てられた挙句、弱肉強食の生存法則を信奉し兼ねない。

日本では、近代教育の父といわれる福沢諭吉は日本が近代化へ向かうために、また民主運動を推進するために大きな役割を果たしたことは確かである。一方、渡米、渡欧から帰ってきた福沢は「脱亜論」を発表し、「脱亜入欧」思想を固めた。日本の初等・中等教育の歴史教科書において、「脱亜論」を「日本が欧米列強に近づくためにアジアからの脱却を唱えたもので、日本がアジアの1ヵ国であることを否定している」と定義付け、「日本人がアジアを蔑視する元となった脱亜入欧の代表的言説」と教えている<sup>15</sup>。この思想は日本がアジアの各国や民族を侵略するための理論的根拠を提供した。『文明論之概略』においても、西洋が武力に訴えてまで、世界を拡張することにより「文明」を実現したことから、すでに「文明開化」した日本に対して、中国、朝鮮などの未開化の国は文明の国ではないと吹聴する。それを前提にして、日本の中国や朝鮮に対する侵略はその国の文明開化を促進するためだと美化された。その「脱亜入欧」は日本国の領土拡張主義という国際戦略と凶らずも一致し、領土拡張や他国の支配、いわゆる日本国内へ物資を供給する植民地占領をめざした戦争を引き起こしたわけである。日本がやった戦争は、ドイツのヒトラーがやった戦争とともに、領土拡張の野心を最大の原動力とした、まぎれもない侵略戦争だった。しかも、その領土拡張主義が、戦争の進行とともに、はてしもなく膨れ上がって、アジア諸国にはかりしれない惨害をあたえ、最後には日本国民の全体を未曾有の悲劇におとしいれたのである。さらに、第二次世界大戦の後期に太平洋戦争を挑発した。日本はドイツの「生存圏 Lebensraum」理論の影響を受けており、アジア政策構想として「大東亜共栄圏」建設を唱えた。その建設は「大東亜戦争」

の目的とされ、根本方針は、「帝国を核心とする道義に基づく共存共栄の秩序を確立」しようとするににあった。しかし実際は、東アジアにおける日本の軍事的、政治的、経済的支配の正当化を試みたものにほかならなかったといえる。第1次近衛内閣当時の「東亜新秩序」は日本、「満洲」、中国を含むものにすぎなかったが、南進論が強まるにつれて、インド、オセアニアにいたる大東亜共栄圏構想に拡大された。太平洋戦争中における日本の中国、東南アジア侵略の合法化を目的とした指導理論となった。日本が指導者となって欧米勢力をアジアから排斥し、日本、中国、「満洲」を中軸とし、欧州のアジアにおける他の植民地を含む広範な地域の政治的・経済的な共存共栄を図るといふ政策を掲げた。内実は日本への物資の収奪と、その代価としての通貨の乱発、インフレ進行などで、欧米の植民政策と大きな違いはなかった。この戦争を可能にするために、日本人や植民地支配された朝鮮半島などの人々、侵略された諸国の人々の命と平和と人権は踏みにじられた。被害者の諸国は言うまでもなく、日本人民も殺されたり、餓死したり、原爆投下や大空襲でなくなったりした。もともと国家を支える人民は、結局、権力者に道具として利用され、甚大な犠牲を払わざるを得なかった

佐多稲子の戦時下の作品は、その激動の時代を背景に、社会的弱者に目を据えて、権力を握っている強者に抑圧され、振り回された人間そのものがいかに潜り抜けて生きているのかを追求している。佐多稲子自身もプロレタリア文化運動に挫折し、夫の不倫による夫婦生活の沈滞化、「出来る限りの自分の努力を広介（夫がモデル）のためにした」（「くれなゐ」）頃と違い、文学の仕事も家庭生活も「個」として独立したことによる夫婦間の確執、しかも、国家総動員法の暗く沈んだ戦時下に「自由」と「幸福」を掴めない若い娘の時代への抵抗を吐露する「素足の娘」をもって突然流行作家となり、それに伴い経済的余裕ができたため、困窮に陥った周囲の庶民との隔離への恐れなど脆弱で苦渋の立場にしながら、さらにプロレタリア文学の道へ導いてくれた同士である夫の徳憑が加わり、「満州」への旅に踏み入った。その「外地」慰問は戦争への「面従腹背」であり、家庭、隣人、さらに戦時下体制からの逃避でもある。それにしても、「書きたい」という作家の使命を銘記して、弱者へのまなざしは依然として佐多文学のコアとなっている。「満州の少女工」に描かれた若い娘の日本人工場主への訴え、「旅情」「伴侶」そして「重き流れに」に登場した「満州」の異郷に生きた日本人女性の苦境などに焦点を当てて、ひそかに戦争への抵抗を示している。

さて、第二次世界大戦が終わってすでに70余年が経った今日もなお、世界のどこかで戦争を起こし、毎日のように、たくさんの人が亡くなっている。貧しい生活をしている人々がたくさんいる。世界は絶対平和ではない。自国の利益を優先するために、強大な軍事力や経済力を頼りにし、全世界中で、覇権主義と強権政治を推進し、世界を支配する野望を図ろうとする。その一国主義、自国中心主義を達成するために、あらゆる手段を駆使して、反対する国に制裁を施し、従順な国をコントロールしている国策を執っている。このまま放っておくと、世界各地で再び高まっている先の見えない戦争の恐怖や



核の脅威にさらされる。だから今こそ、戦争のためまともに生きられなかった人間の苦しみ、悲惨な営みなど埋もれた記憶を掘り起こし、その抵抗や反戦の声を甦らせてみる必要性が高くなっている。弱者の反抗に意義がある。弱者も世界を動かす不可欠の大きな存在である。要は、弱者の力をどの方向へ持っていくかということである。

「文学は弱者の文学である。文学はその理想の中で弱者のために救われる希望を見つける」<sup>16</sup>。佐多稲子は庶民的作家として「性格、趣味、権力憎悪のかたち、生活倫理にいたるまで、いかに自己形成が庶民的なものによってなされたか」<sup>17</sup>。佐多稲子の文学はまさに「民衆の悲哀の外にはいたくな」く（「くれなゐ」）、たとえ翼賛体制が徹底され、抵抗がほとんど不可能になった太平洋戦争下においても、佐多は一貫して弱者の側に立ち、歴史の流れとともに生きている、近代における一般庶民の生き方、貧しい勤め人の孤独と頼りなさ、他者としての女性の在り方と悩み、宗主国に対する植民地の「外地」における実態を、きめ細かい筆致で浮き彫りにした。特に表現方法において、同時期のプロレタリア文学者である宮本百合子の理性的「思索的表現に特色がある」<sup>18</sup>文体と異なる書き方で表現した。

しかも、佐多稲子の弱者に対する誠実さは、烈しいものであるが、宮本百合子のように弱者への同情や理性的な追求からではなく、体験を通しての弱者への理解から文学を成し遂げたのである。百合子と誠実さを共有しながらも佐多の場合は、ごく自然に湧いてくるものようである。それは佐多稲子の精神の基盤にプロレタリアイデオロギーに立脚した世界観に対する共鳴と理解があるからであり、そのような基盤を持つ精神は本質的に弱者から後ろ向きになり得ない。キャラメル工場の女工、料亭の女中、丸善の女事務員、レストランの女給、これらの経験が、小説を書くという意図のもとに経験されたのではなく、働く者の貧しさの必然性から経験された一女性の人生体験であった。村上春樹が「小説家とは、多くを観察し、わずかしか判断を下さないことを生業としている人間です」<sup>19</sup>といった通り、佐多稲子文学は「自身が登場する作品が多」く<sup>20</sup>、しかも市民の生活感情を手掛かりに、時代の渦中に生きる弱者の心理や辛さの多くを体得し観察して、その目で実際見た物事、その手で実際触った物事を控えめに、きめ細かく描写した。

#### 第四節 研究方法

研究方法としては、各章、各節に応じてそれ相応の方法をとるが、一言でいえば、従来の研究は、作品と作者を重ね合わせて論ずる傾向が強いのに対し、哲学上の社会的弱者という概念を土台にして、作品を作者から独立させて緻密に分析する作品論の方法をとり、フェミニズム/ジェンダー批評、ポストコロニアリズム・スピバックの「サバルタン」、民主主義などの理論も用いて、佐多文学における社会的弱者表象の展開を研究する。しかし、「文学作品は、その書き手である作家の内面を反映したものである。ある

いは、そこまで素朴に信じないまでも、生活者としての作家と作品の繋がりには考慮しなければならない<sup>21</sup>。これは「作品論」の提唱者三好行雄『作品論の試み』（筑摩書房1993）に明らかなおり、「作品論」は「作家論」とペアな形を有しており、常に背後に「作家」を見据えて試みられている<sup>22</sup>。

また、「文学もまた時代と状況の産物であり、それを産んだ時代の文脈と切り離せない。」<sup>23</sup>。特に佐多稲子の書き方からすれば、「書き手」や時代性を無化しえない存在としている。本論では、「作品」を「作家」「時代」の所産であるという前提での「作品論」を試み、佐多文学における弱者に光を当て、四章構成とし、歴史の流れを追いながら、その弱者表象の展開について洞察を深めて研究していく。

## 注

- 1 奥野健男 解説『佐多稲子集 新潮日本文学23』 新潮社 1971年11月
- 2 長谷川啓 「『時に佇つ』に至る道」 『草茫々通信12号』 2018年6月
- 3 佐多稲子「時と人と私のこと」 『佐多稲子全集』第11巻 講談社 1978年10月
- 4 伊原美好「『素足の娘』から——〈家族〉へのまなざし」 『草茫々通信12号』 2018年6月
- 5 矢澤美佐紀「佐多稲子『くれない』の現代性——大衆とのへだたり・子供の語られ方」 『草茫々通信12号』 2018年6月
- 6 佐多稲子「時と人と私のこと」 『佐多稲子全集』第16巻 講談社 1979年3月
- 7 巖谷大四・中島健蔵著『物語女流文壇史』（下） 中央公論社 1977年5月
- 8 宮本百合子「窪川稲子のこと」 『文芸首都』第3巻第3号 文芸首都社 1935年3月
- 9 佐々木基一「佐多稲子論」 『近代文学』 1954年3月
- 10 長谷川啓『家父長制と近代女性文学』 彩流社 2018年10月
- 11 上野千鶴子『ケアの社会学』 太田出版 2011年11月
- 12 林賢治「蕭紅和她的弱勢文学」 『新文学史料』 人民文学出版社 2008年5月
- 13 窪川稲子『女性と文学』 實業之日本社 1943年6月
- 14 王麗平「尼采的権力意志与納粹的理論支撐」 『河南机電高等専科学学校学』 2012年1月
- 15 文教政策研究会『日本教育史』 日本図書センター 2013年2月
- 16 朱必圣「弱者的文学性格」 『当代作家評論』 1996年9月
- 17 長谷川啓『佐多稲子 作家の自伝34 解説』 日本図書センター 1995年11月
- 18 岩淵宏子「近代女性作家の文体」 『スタイルの文学史』 東京堂出版 1995年3月
- 19 村上春樹『雑文集』 新潮社 2011年1月
- 20 佐多稲子「作品のなかの私」 『佐多稲子全集』第17巻 講談社 1979年4月

- 
- 21 今井清人「論文の構成と主旨」 『国文学解釈と鑑賞 別冊』 至文堂 1996年1月
  - 22 山田有策「作家論・作品論の彼方」 『国文学解釈と鑑賞 別冊』 至文堂 1996年1月
  - 23 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』 朝日新聞社 2002年7月

## 第一章 少女労働者の抵抗——人間的強者の視点から

### はじめに

幼年時代は人間の最も記憶が深い時期で、その時のショック、遭遇した幸と不幸は一生ついて回り、その後の人生に深刻かつ甚大なる影響を与えることになるが、同時に生きて行く糧にもなる。作家にはそれを文学創作の題材にする場合が多い。佐多稲子の文学はこういう傾向が強い。

佐多は子供の頃から貧乏な生活の中に育った。というのは、父が小市民根性そのものである勤め人階級（長崎三菱造船所造機課書記）でありながら、決して小さな安逸の中に夢を見ていたような生活ではなかった。会社員であった彼女の父は、周囲から来る生活の重みに自分の力が堪えきれなくなったとき、自ら意識して、身を落とすことを決心したのである。佐多は父の失業と同時に、小学校さえも終えぬ瘦せた小さな体を、金をとるために働かされた。その結果、貧乏と時間に絶えず脅かされ追い回される少女時代の経験は、後の文学創作において、常に小説の中に持ち込まれた。

初期作品では、製菓工場で精一杯労働をしてもその賃金は往復の電車賃に代えられるだけに過ぎない繊弱な「キャラメル工場から」の少女、初奉公のチャンそば屋で、じゃがいもの皮さえろくに剥けないので帰された「お目見得」する少女などを描くプロレタリア労働小説により、文学の道を歩みはじめた。

作家として定着された中期は、女性のアイデンティティに目を向けて、家庭と仕事、夫と自己の板挟みになった苦悶・葛藤など女性解放を目指している時期にあたるが、父親の課長の家へ奉公にやられて、盗癖の有無を試されたこと、奥さんにお愛想をいった恥ずかしさで、「小間使の誇り」を傷つけられた少女、そして植民地慰問など旅中、奉天の鉄西にある「満蒙毛織」を参観したとき、やはり10歳から12、13歳位の少女労働者、朝鮮の少女工、そして「片輪」の少女など酷使される「満州の少女工」に注意を引かれた。

さらに、終戦後の後期、戦争協力への自責の念に苦しみながら、そこから立ち上がって、「女・民衆の視座から男の倫理で成り立つ党権・夫権を撃つ位置に立ちえたのであり、また、男権を撃つことを通して男社会からなる国権を撃つことの可能な位置に立ちえた」<sup>1</sup>ことによって、社会的弱者の少女から目を背けなかったのである。旅館の主人に負けてしまった自分の弱さから母親まで敗北の巻き添えにした口惜しさを抱えながら、ホームの出しっ放しであった水道の蛇口の栓を無意識に閉めた、左足に少し障害のある農家の娘を描いた「水」、故郷で送った少女時代の、若い娘の反抗や悲哀や傲慢や、そして悪事や嫉妬などを追憶した「少女たち」。こうして、通して見れば、働く少女の物語は佐多稲子をとらえて離さなかった文学のテーマであり、これまでの日本文学の中で

はほとんど取り上げてこられなかったテーマであった。しかも、書かれた少女のいずれも社会的弱者でありながら、家父長や工場主が代表する権力者を恐れず、辛抱強く、抵抗を示して、未来に希望を託している人間性的強者である。

本章では、第一次世界大戦の影響により発生した空前の好景気、工業生産が急激に増大し日本の都市社会にも大きな変貌をもたらした「大正バブル」を背景にした「キャラメル工場から」、「満洲は日本の生命線」と位置付けた日本によって引き起こされた中国侵略戦争の結果、1932年に満州国を建国し、満州奉天市鐵西一つの区だけにおいて40余りの工場を立てた<sup>2</sup>、侵略の膨張期に際して、「満蒙毛織」を参観した記録である「満州の少女工」、そして、日本高度成長期の始まりに該当する1962年に発表した「水」を取り上げて、比較しながら経済好調の背後に、厳しい生存環境に置かれた少女労働者が背負った多重圧と、資本家の労働者搾取の実体を解説して佐多稲子特有の現実への情熱を見直したい。

本論に入る前に、今までの研究傾向を述べておく。序章の図6に示した通り、「キャラメル工場から」に関する論は25本あり、「水」は14本くらいある。「満州の少女工」は殆ど論じられていない。

「キャラメル工場から」に関しては、まず佐々木基一が、「歯切れのいい文章と清冽な感覚、勤労する人々の世界に自然に溶けこんでゆくなだらかな感情、自分の哀れさへの滲み出る感傷、その感傷に歯止めをくわせる正確な眼と、抑制のきいた文体、自らの可憐さに溺れることを絶対に許さぬ意地の強さと、社会意識」<sup>3</sup>と讃えた。そして小田切秀雄は、「きびきびした、張りつめた表現によって、非人間的な社会の矛盾を描き出す作者の気迫が鮮烈な厳しい美を作り出している。(略)デスペレートな反逆の気分をも伴うことなく、(略)適確で新鮮な客観的 pursuit がほぼ一貫している」<sup>4</sup>と評し、奥野健男は、「感覚と心理と動作と光景がきりっとした簡潔な文章で過不足なく描きだされている」と<sup>5</sup>評したごとく、主として作品の表現と文体に絞って評価が出されている。

また、黒古一夫が「過酷な労働条件と人権無視の制度」の下で喘ぐ都市の「典型的な若年女子の労働者」<sup>6</sup>の文学と定義したのをはじめ、鳥木圭太の「プロレタリア文学と児童労働」<sup>7</sup>では、キャラメル工場のモデルである堀越嘉太郎商店を史料分析した上、マルクス理論に基づき、「小説として優れているのは、資本主義の本質——資本家が無限に価値を増殖するために労働者を搾取することに突き進んだ点である」と指摘した。坂本育雄の「佐多稲子論」<sup>8</sup>においては、「次の時代の開幕を告げる一徴表である」と位置付けて、「「プロ芸」の芸術理論からかけ離れた自然発生的な作品であったが、(略)階級的視点が開かれなければ永久に生み出されることができなかった」と、プロレタリア文学として捉えている。

更に、小林裕子「キャラメル工場から」は「数多い佐多稲子の作品の中で、この小説ほどすべての評者に好感を持って迎えられ、高い評価を勝ち得ている作品はない」<sup>9</sup>と称賛したうえ、マントに光を当てて、階級的抑圧と家父長制の抑圧という二重の抑圧に苦

しむひろ子を立体的に分析した。記号論的方法を用いた石川巧「彼女の朝から別の朝へ——佐多稲子「キャラメル工場から」論」<sup>10</sup>においては、「言語をめぐる抑圧の構造」を闡明した。渡部麻実の「衣服・はなみず・鉄道：佐多稲子『キャラメル工場から』」において、「プロレタリアートの時空間とプチプルのそれを電車が分離していた」<sup>11</sup>と指摘した。藤枝史江が「「キャラメル工場から」の〈ひろ子〉——戦う涙」<sup>12</sup>には〈ひろ子〉の涙は、語り手の抑制を超えていくのであると同時に、「〈ひろ子〉にとって、大人は〈寒さ〉であり、〈ひろ子〉は〈寒さ〉と戦うように大人と戦っている」というもう一つの「記号」——「寒さ」を解説した。このように、新たな展開を呼び込んだ。

長谷川啓「「キャラメル工場から」覚書き」<sup>13</sup>では、「工場」の内容から、表現、描写、文体にまで、特にひろ子の自意識に注目して、簡潔な言葉で的確に纏めた。岩淵宏子「近代女性作家の文体」<sup>14</sup>に於いては、宮本百合子の文体との比較を通して、女性の言語表現の視点から「キャラメル工場から」の文体について論じた。北川秋雄「佐多稲子文学の会話表現にみるセクシュアリティについて」<sup>15</sup>では、「教育行為を放擲した教師と、教育を受ける機会を奪った父親の、ひろ子に対する酷薄な言葉の暴力が、便所でひとり泣くひろ子の姿を通して浮かび上がってくる」と指摘した。

上述した通り、「キャラメル工場から」に関しては文体論から成立論、主旨論、記号論まで、様々な研究が展開された。

「水」の場合は、同時代評で奥野健男が、「上野駅の列車ホームにしゃがんで泣いている少女を描いて、ほとんど間然とするところなき名作であり、全篇に作者の鋭い気魄と熱く切ない感情がはりつめていて、一字一句の無駄もないと」評価した。さらに、結びのときの蛇口の栓を閉めるというシーンについては、こんな見事なシーンをさりげなく、しかも深く描ける作家が佐多稲子以外にあるであろうか。ここには客観描写でも、主観的表白でもない、主客合一の絶対的時空間がある。説明や理屈を抜きにした境地で、客観と主観とが、理知と感情とが、観察と体験とが、思想と生活とが、外部と内部とが、稀有の一致を示している。ほとんど気合いとも言える俳句的凝縮の絶唱である」<sup>16</sup>と最も高く評価している。江藤淳も、「久しぶりに読むことのできた名短篇であるとし、輪郭鮮明な、娘の悲しみがじわりと胸に迫って来るような佳篇である」<sup>17</sup>と激賞した。そして、松原新一の解題「「三等車」と「水」をめぐる」<sup>18</sup>では、物価が高騰する戦後の背景において、貧しい労働者の視点から、内容をまとめた上、幾代の働くものとしての美質と、そういうものとして生かすことのできない世の中のあり方は旅館の主人夫婦の冷たさに示されており、やはり佐多は言外にプロテストの思いを込めていると述べた。更に、福田和也『鏡花、水上、万太郎』<sup>19</sup>の「私小説の路、主義者の道、みち——佐多稲子」の末尾において、「水」を佐多の短編作家としての腕前を存分に示した作品として、その内容を紹介している。

論文としては、浮橋康彦が「佐多稲子「水」——研究授業を通しての教材研究」<sup>20</sup>において、作品のあらすじを時間構成にそって見たうえ、学生の感想と結び付けて、「水」

への作者の意図は、そういうつみ重なる不幸が完全には奪い去ってしまえない生命力のようなものと、行動が無意識であるだけにいっそう確かに、この若い娘の内部に生きている」と分析して、作者の人間観の確かさと文章のきめこまかい的確さによって示されていると述べた。

鈴木康之「リアリズムの作品における感情調の表現——佐多稲子「水」を材料として」<sup>21</sup>では「水」の冒頭の部分を借用して、リアリズムの手法による文学作品において、感情調が、どのような言語的な手続きによって作り出されているかを細かく分析した。言語的な手続きと文章の表現、文体との関係に注目した。

菅野圭昭「佐多稲子「水」の教材化をめぐる——教材研究と本文批評」<sup>22</sup>には本文の校異、料理人の評言、そして電文の解釈、蛇口の栓を閉める、などいくつかの問題点を取り上げて、評論家の評言を参照しながら、「水」を教材化する適性について論じた。

以上に述べたように、「水」に関しては同時代の評論のほかに、教材化をめぐる論が殆どである。

ところが、「満州の少女工」については、あまり論じられていないが、ただ長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子・1」<sup>23</sup>では「宮本百合子が〈奴隷の言葉で表現〉している」として批判したほどではないけれども、確かにかつて「キャラメル工場から」で過酷な幼年労働者の現実を描いてみせたプロレタリア作家の視線はうかがえない。(略) 満人の主婦や老婆や身体障害者を、再生品工場で安く雇おうとする日本の経営者側から見た書きぶりである」と評しただけのようである。

筆者は上述した研究を認めながら、この三作「キャラメル工場から」、「満州の少女工」、「水」を関連づけて考える場合、作者の文学の主眼はどこにあるか、そしてどんな立場に立ち、どんな表現を用いて、これらの弱者としての少女を見て描いたかという問題が生じてきた。その結果、意外に多層的複雑な構造を持つことに気づく。その点を明らかにするのが本章の目的である。

## 第一節 家父長制に起因する多重抑圧へのしなやかな抵抗——「キャラメル工場から」を中心に

家父長制といえば、前近代な大家族を連想させるため、過去の遺物のようにみなす人もいないわけではない。

ソコロフは家父長制を「男性が女性を支配することを可能にする社会的権力関係の総体」と定義する。家父長制をめぐる様々な定義を整理しながら、最終的に次のような定義にたどりついている。いわば、性に基づいて、権力が男性優位に配分され、かつ役割が固定的に配分されるような関係と規範の総体である。だがこれでもまだ十分ではない。マルクス主義フェミニズムの「家父長制」概念の核心には、この「性支配」には、「物質的基礎」があるという認識がある。家父長制の物質的基盤とは、男性による女性の労

働力の支配のことである<sup>24</sup>。「キャラメル工場から」はまさに家父長と工場主による階級及び同じ階級からの多重の抑圧へのしなやかな抵抗を示している。

「キャラメル工場から」は1928(昭和3)年「プロレタリア芸術」2月号に発表、1930年に戦旗社から日本プロレタリア作家叢書として3千部出版された。佐多稲子の初めての単行本で、デビュー作として位置付けられ、プロレタリア文学者として出発する佐多の純粋な自己形成の、いわば情熱の時期に当たる。書いた当初は随筆として「若草」の題で書かれたが、このままでは惜しいという中野重治のアドバイスで、小説に書き改めた。題も中野がつけたのである。物語の時間は冬の寒い明け方に設定した。主人公は13歳で(本当は11歳)、頼る当てもなく一家で上京したひろ子である。ひろ子は父が無計画に暮らしたため11歳にして小学校を中退し、終日陽の当たらないキャラメル工場で働く。7時の門限に遅れると強制的に休ませられるので、朝食を食べる暇もなく家を出て電車を通った。そのうち、工場では日給制がノルマ制に代わり、少女たちの競争意識を駆り立てた。とうとうひろ子の稼ぐ日給は電車賃にも満たなく、工場をやめチャンそば屋に住み込む。郷里の学校の先生から、学費を工面して小学校だけは卒業した方がよかろうという手紙が来た。ひろ子は暗い便所で読み返して泣いた。過酷な労働、無責任な父親、威張った工場主の妻、競争で身体を痛める女工たちをリアルに表現した。

—

小説内の時間は、日露戦争に勝ってから10年経った1915年、第一次世界大戦開戦の翌年である。その戦争の影響により、日本の商品輸出が急増したため空前の好景気が発生した。大戦景気、大正バブルとも言われる。このブームは1915年下半期に始まって1920年3月の戦後恐慌の発生までつづくが、ちょうど、「ひろ子」がキャラメル工場で働く時期に当たる。工業生産が急激に増大し、日本の都市社会にも大きな変貌をもたらした。このキャラメル工場も潮流に乗り、生産を拡大して、化粧品に加えてキャラメルを生産したため、労働者が必要となった。時代の要求に応じて、地方から大都市に人口が流れ込み、都市人口が急速に増加した。近代化へ猛烈に進んでいく一方、都市における貧民の増加をもたらした<sup>25</sup>、労働者の過酷労働にも拍車をかけた。当キャラメル工場も日給制を廃止し、生産高性を導入したため、「今日までの日給と同じ賃金を取るためにもっともっとその体を痛めつけねばならなかった」娘達が大島の重ねをきて後ろ手をした女主人の監督の下で、「終日陽が当たらなかった(略)板の間に立ち通しで」「からだを機械的に劇しく揺すって」仕事をした。さらに冬の寒さと一日の過労を凌ぎながら「帰刻時間に門のところで女工達一人々々袂と懐と弁当箱の中とを人を使って検べさせた。みんなは番の来るのを吹き晒しのなかに立って待っていた」。しかし外には「石鹼や酒の広告板が立ててあり、その広告板には一日中陽が当たっていた。その日の光は幸福そうであった」。このように、対照的描写を通して表の繁栄の裏に、労働者の辛さ



を映し出した。

## 二

家では、父親の恣意と無責任、窮屈な暮らし、老人の祖母、病者の叔父と幼年の弟を抱えた、母親のいない虚しさに見舞われた11歳の少女ひろ子は生きていくために、一家の生計を小さい肩に担わなければならなくなる。工場の厳しい労働制度、苛酷な労働環境、虐げられた非人間的待遇に耐えるばかりか、同じ弱い労働者の立場に立つ女工頭の妹からもいじめられたのである。このような厳しい環境に立ち向かって、ひろ子は涙、沈黙、戦に行くような気持ち、遅刻を恐れる勝気、「だって」とささやいた一言で、弱い小さな労働者の抵抗を示している。

ひろ子が泣く場面は五箇所ある。

出勤前の朝食時、熱いご飯を「もう一杯食べといで」という祖母に「だって（傍線引用者、以下同じ）急いで食べられない」「だって遅くなると困るんですもの」と泣き声を出した。遅刻すると、わずかな日給では遅刻の分を引くのが面倒だから一日を否応なしに休ませられるという規則なので、凍えるよりはむしろ遅刻が恐ろしかったのである。

次に、一家の家計を負担するひろ子にとっては、7時の門限に遅刻して、休まされたため、悔しくて「ベソをかいていた」。

そして、父にキャラメル女工にやられた時、黙ってむやみに御飯を口の中へつめこんだ。「だって学校が…」と一緒に涙が出てきた。どうしても学校をやめたくないのに、父親の決定に反論しようとするが、生きていくために、やむを得なく言いなりになったわけである。家における父権の強大は祖母に対しても表されている。働きに行かされるひろ子を見て、祖母は「まだお前、可哀想に…」と言ったら、「あなたは黙ってらっしゃい」と、父親が祖母を頭からおっかぶせた。

逆に、「少し無理だな今の所は、遠くて」という、病気で寝たきりの叔父の言葉から、力を得たようで、ひろ子に今の仕事をやめさせた。日本の家庭における男優位、女が服従する立場という封建的家族制度を浮き彫りにした。

さらに、キャラメルの仕事が絶えると、じめじめと水っぽく、冷たい踏み板の上で裸足のまま、化粧液の罐洗いをさせられた時、女工たちが「たまらないわ」「お湯もらいましょう」と強く要求をした。黙りこくって罐を洗っているひろ子の鼻先からなみだが落ちてきた。少し水の外に手を出しているとびりびり痛んで見る見るヒビが切れる苛酷な労働を強いられたのに我慢に我慢を重ねる。

結びには「大したことでもないのだから、小学校だけは卒業する方が良からう」という郷里の学校の先生からの手紙を読み返して便所に入った時、「しゃがみ腰になって彼女は泣いた」。生活困窮に追い込まれ、他のひとには大したことでもない通学は自分にとっては夢のなかの夢に過ぎないという理想と現実の乖離から来る感傷と自己憐憫に流

れてしまう。この手紙については、北川秋雄が郷里の先生を批判する立場から「傷ついたひろ子に追い打ちをかける」<sup>26</sup>と言ったが、しかし、たとえ今のひろ子にとっては、小学校だけでも簡単なものではないため、客観的には「追い打ちをかける」という効果があったとしても、前文に述べたように、当時は「大正バブル」時代であるし、ましてひろ子一家は大都会の東京で暮らしているため、郷里の先生はその辛さの詳細を知るすべがないのだろう。だから「大したことでもない」と書いたのではないか。かえって、教師の責務またひろ子の学習ぶりや成績がよく分かったうえ、簡単に学業を放棄するのを惜しみ、家父長の威厳や封建的儒教思想に負けないで、女兒であっても自分の教育を受ける権利を主張するようにと励ますために言った言葉に違いない。

13歳の少女に大人のような意気軒昂たる反抗を求めることはできるはずがない。しかしながら、ひろ子は決して無抵抗で父親に従順するとは限らない。少女の涙はものを言えないが、弱くて無力ながら、芯からの我慢強さと家父長への抵抗を示し、冷酷な工場主と父親、寒い天気と環境と「戦う涙」<sup>27</sup>となる。その意気込みは、二つの場面にある一連の「だって」も、また帰国時間に門のところで身边を調べられるのを待つとき、「ずい分いばっているね」とささやいたことも、幼い娘の非力ながらの強い反発を示している。

次に、小説の光線からも下層に生きているひろ子をはじめ一般労働者の生活が照らし出される。家では朝、祖母が明かりにすかすような薄暗いなか、弁当を詰めていた。手を動かしても寒さが身体中にしみた。室の中がすっかり暗くなった夜、電燈の下でみんなが内職をしていた。外は、研ぎ立ての庖丁のような夜明けの明るさである。通勤電車のなかは、薄暗い電灯の下には印袴纏や菜葉服がいっぱいで、台所の匂いさえするのであった。仕事場では、終日陽が当たらなかった。地下室の薄暗い通りにふみ板を踏む足音が響いて天井の小さな電燈がゆれていた。キャラメル工場をやめて、住み込みで働く蕎麦屋のお目見得に行った時、先生からの手紙は、暗い便所の中で用もたさず、しゃがみ腰になって読んだ。要するに、家庭の貧困と仕事場の悪条件ははじめから終わりまで一貫した暗さで暗示していた。しかも、弱い小娘の無力と辛抱強さがどこまで続くかは見当がつかないものである。

また一般労働者の生活困窮のありようはお昼の時間、火鉢のまわりでこぼした色々な不平から分かる。

「お正月だってあたし何にも買わないのよ。つまらないわ」

「あたしも思い切って奉公しようかと思うわ。あたしんとこじゃ母さんだけでしよう働くのは。だからもっとおあしのはいる工夫をしなくちゃ」

と、いくら働いても、貧困から救われない人生が伺われる。

更には、「キャラメル工場から」は作者の内面的な体験をリアルに描いたものである。

作者であるひろ子が5歳の時、母親と死別して、没落小都市の勤め人である父親と母親代わりの祖母と弟とそれに「愚鈍者」の伯母と一緒に、母親不在の寸詰まりに詰まった暮らしをしている。しかし、プチブル的な生活に憧れた父親は、またお体裁やであり、無計画家でもあり、酒を飲み家族に怒鳴り散らす気性の持ち主である。家計のために、何気なさそうに、工場の名がいくらか世間へ知れていただけで、わずか13歳の娘を電車で40分もかかるキャラメル工場に働きに行かせた。やっと間尺に合わないと感じたら、「止せ止せ、しょうがないよ。——毎日電車賃を引けば残りやしないじゃないか」とやめさせた。家父長の威張り身勝手さだけを見せて、家族扶養など責任を担わない父親を持った、母親にかわいがられるはずの年齢なのに、母親を亡くした少女の孤立無援が生々しく浮かんで来る。

### 三

人間が孤立を感じる時、精神的にダウンした時、また不安で、心細い時、常に何かを捉まえて支えとする。本章で論じる働く少女の物語は、佐多小説表現のこういう特徴が目立っている。「キャラメル工場から」では、門限に遅れたひろ子は、「マントの下で弁当箱を両手でしっかり抱えてそれで胸の上をぐっと押さえて」、休まされた悔しい涙を堪えた。

上述した表現は1928年12月に『女人芸術』1巻6号に載せた「キャラメル工場から」の姉妹作品である「お目見得」にも十分に示されている。

ひろ子がキャラメル工場をやめてすぐ、父親が口入屋に頼んで、初奉公のチャン蕎麦屋へ住み込みに行かせた。「お目見得」はチャンそば屋での働きを描いている。結局、「低い天井の下に貼り並べた短冊形の赤い紙が油によごれて、煤けた壁にどす黒く沈み、「箱のような支那そば屋」では、陰気で、あまり小さいから包丁は思うように薯の皮の下をとおらなかったもので、給料をもらえずに、口入屋の老婆に引き戻された。

小説の冒頭では、「椅子の背に捉って佇ったまま、ひろ子の視線はおずおずと行き処を失っていた」と、口入屋の老婆が帰ってしまった後、独りぼっちになる11歳の少女の心細さは、椅子の背に捉まることで紛らす。

つづいて、夕方の薄暗い、ある活動写真小屋の裏口の危ない狭い梯子に、「岡持ちを打ち付けないように、肩をしゃっちょこ張らして下げて」一段一段登っていくと、「彼女は手すりに捉って一本調子な声をかけた」。ひろ子の不安げな様子が目に浮かんでくる。

また、夕方の雨の中に、眠った子どもを膝の上に抱いて、あご髯のぼうぼうと伸びた一人の乞食を見て、「子どもは母に死なれたのだろうか。父親は子どもを雨に打たせて悲しいであろう——ひろ子は硝子戸に捉まって、見据えるように見えていたが」、可哀想な乞食に何もしないことが気にかかり、藁口からたった一つの白銅をつかんで外へ駆け

出して行った。「捉まる」ことにより、自分の身の上を考えあわせた哀れの気持を抑えている。

この一連の「捉まる」ことは、少女の頼りなさ・心細さ・可憐・善良を物語っている。

しかし、小説は感傷的だけに留まらない。その間で、银杏返しが頭に載っていることは侮辱を載せていると感じ、银杏返しの輪を揺すぶって、心持ち首をかしげて、厭な髪を自分に似合わせようとした。ひろ子のどうにもならない反撥が生き生きしている。それに、姉女中に「お前さんはだんまりやだね。…お前さんとじゃ陰気でしょうがない」と不満を言われたとき、自尊心を傷つけられたひろ子は口を尖らして、上目をつかうようにして一つ処を幾度も拭くことにより、不平を見せている。

最後に、小説に使われる「マント」という被服を見てみる。「キャラメル工場から」では、朝の門限に遅れたひろ子は、マントの下で弁当箱を抱いて歩いた。退勤時、出口で調べられるのを待っている時、女工頭の妹にマントが生意気だといわれた。これについて、小林裕子は「マントという記号」では、「マントを着るにふさわしい過去の自分こそ、本来の姿であって、いずれはその姿に戻れるはずだという矜持と希望と慰めを支えるもの、それがひろ子のマントであったわけだ。当然それは女工達との距離感も生じている」<sup>28</sup>と述べた。

それを踏まえて、渡部麻実は、「マントは彼女（ひろ子）を、女工仲間のみならず、労働者社会全体から、すなわち彼女が生きねばならない現在の現実から疎外してしまうのだ」<sup>29</sup>と指摘した。

いずれもマントは、ひろ子と他との隔たり・壁として機能することになっている。

被服というものには三つの社会心理的機能がある。（1）自己の確認・強化・受容機能、（2）情報伝達機能、（3）社会的相互作用の促進・抑制機能である<sup>30</sup>。この（1）は、佐多稲子が「時と人と私のこと」<sup>31</sup>にも書いているように、「本当の労働者ではない私」という自己の確認機能を指す。佐多稲子は、父田島正文、母ユキの長女として、長崎に生まれた。正文の父は医者だし、ユキの父も佐賀柳町の郵便局を任されるような、それぞれ由緒ある家柄だった。正文の母も役人の娘で、結婚後も医者の子として贅沢な暮らしをしてきた。その祖父は正文が10歳のころに亡くなってしまい、一家の暮らしはだんだん昔の華やかさを失っていった<sup>32</sup>。「キャラメル工場から」を含めて、初期の作品の中にも自分のことをいうとき、勤め人の娘として小市民根性そのものであると重ねて強調している。

こうして、「私がもし本当に労働者の家の子供であったならば、「キャラメル工場から」を描き得たであろうか、と。「キャラメル工場から」を描いた目は、女工の生活に対する驚きと、不合理を感じる新鮮さであった」<sup>33</sup>ように思えるから、「ひろ子」は、内心に根差している本来の有産階級の自意識と自尊をマントに託している。

そもそもマントは、大正初年から学生やハイカラな女性に盛んに用いられ、特に小学校の女子の間で大流行した。とはいえ、それは都市の有産階級の家庭に限られ、幼い娘

を女工に出す下層社会の住人とは無縁であり、有産階級のシンボルとして社会的にランク付けされた<sup>34</sup>指摘している。従って、ひろ子は父親に製菓工場にやらされる時に、「だって学校は」…と反論し、仕事の合間、仲の良い娘に「学校へ行きたくない」と小声で聞いた。彼女の心には自分はやはりこの女工たちと違い、小市民の階層の人間で、学校へ行くべきだと強く思っている。反対に、工場では下層に生きている女工と一緒に働かなければならない身分となった。内面の矜持と表面の境遇の差異はひろ子の哀れを深めて、彼女を苦しめている。だから、乞食に白銅を施した後、「財布を空にしながらか、施しをしたという金持ちと同じ思いあがった喜びがいつまでも彼女の胸にあった」（「お目見得」）。

マントについては、「お目見得」の結びにも書かれている。

彼女はまた別の奉公口へ遣られるだろう。然し彼女は今は、久しぶりに自分の家へ帰れることが何より嬉しかった。その店に居ては着られないので、持って来た時から仕まい込んであったマントを、彼女はその店から着て出ようか、外へ出てから着ようかと迷っていた。

このように、マントは自分が一般労働者とは違う象徴として、ひろ子の自己の確認を強めているし、今の境遇に抗っている記号でもある。

以上に述べたように、大正初期の日本は、近代資本主義社会へ邁進して、欧米の近代思想や風俗を受け入れて、自由平等を唱える社会になりつつある一方、男性優位の封建的家父長制度が長らく温存されている。ひろ子の父は恣意的に家父長的権力を行使しなければ、ひろ子も工場主に「小さなからだを根限り痛めつけ」られなくて済むわけである。女工頭の妹や姉女中にも虐められないはずである。ひろ子は父からの家族制度の抑圧、工場主からの階級的抑圧に加え、同じ労働者からも意地悪くされた。更にマントを媒介して内に潜んだ小市民としての誇りと自身の置かれた境遇との戦いも彼女の苦しみを深刻化した。ところが、ひろ子は馬に食われる一本の草のような弱い小さな労働者でありながら、また若草のように強い生命力を持っており、踏みにじられても逆境を耐え忍び、しなやかな抵抗であらゆる抑圧に立ち向かって成長していく強い人間である。

「キャラメル工場から」は「働く階級からの創造」というプロレタリア文学の理論から、中野重治に勧められて一生懸命に描いた、佐多稲子の実人生と重なっている作品である。プロレタリア文学としての内容を持ちたいと意識的に書いた作品である。同じプロレタリア文学者の宮本百合子、平林たい子のように自発的に労働者文学を書いたわけではない。地名・人物など固有名詞を意図的に削除することによって、抑圧されたのはひろ子个体ではなく、貧しい少女労働者の一般だと訴えようとするが、作者自身の経験を超越できず、社会的視野がまだ開けないといえる。「私の労働経験が生まれながらの労働者のものでなく、急激にその生活に労働者の生活のその社会的な有り方に対して、

驚きと疑問と、ひそめた怒りとをもって見ひらかれていた」<sup>35</sup>とは言っても、まだ幼い少女が境遇の過酷さに抗って生きる強さが鮮明に描けている。

## 第二節 植民者へのストレートな抵抗——エッセイ「満州の少女工」を中心に

20世紀前半における日本の植民地支配とアジア侵略戦争は、70年も前に形の上では終わり、その記憶を保持している人々も少数となりつつある今、そのことにまつわる収奪や暴力に直接の責任のある人は少ない。現代の日本に住む世代にとって、植民地やコロニアリズムは遠い過去の、自分とは関係のない場所の問題のように思える。ところが、本当に終わったのだろうか。現在、人種主義や国家主義、一国主義が、他者に負の価値を押し付ける差別的発想をむしろ一層強めている。そのような国は世界支配を図るために、武器に訴えて、戦争へと突き進み、数多くの市民がその犠牲となった。さらに経済的格差や貧困を拡大した。

植民地主義は、大別して経済レベル、政治レベル、思想・文化・表象レベルの三つの局面が絡み合いながら、展開した。植民地における支配者は〈自己〉を理想的なものとして確立するために〈他者〉を生産し、自分たちより劣った周縁的存在として排除しようとしてきた。ポストコロニアリズムの「ポスト」とは単に時間的な「後」を示す言葉ではない。コロニアリズムの終わることなき再検証である。その具体的領域としては、旧宗主国を中心にした一国史的歴史を、植民地の視点から反転させて、単なる征服と勝者の歴史ではなく、時間と空間との重層化をはかる歴史的領域、「正典」と呼ばれた支配的文学作品の価値を植民地主義との関係で再考する文学的領域、第三の領域としての証言である<sup>36</sup>。

日本の近代を振り返ってみれば、アジア大陸への野望に突き動かされ、日清、日露戦争での勝利によって植民地帝国として覇権を握ると、領土を一層拡大し、資源を略奪するために、1931年9月18日の「満州事変」を契機に、アジアへの侵略戦争に乗り出し、その結果として原爆投下を受け、戦争における甚大な加害と被害の悲惨な歴史を体験した。特に1932年に「満州国」を建国した後、日本政府は中国の東北地方いわゆる「満州」への移民を重要な国策とし、それを基に中国内地ないし東南アジアを侵略する手段とした。その野望を実現するために、日本軍国主義は「国家総動員」「国民精神総動員」体制を実施し、戦争協力を呼び掛けている。「満州開拓文学」「ペン部隊」はその一具現である。「おびただしい数の「内地」居住の作家や評論家たちが「満州」を訪れた。多くは新聞社や雑誌社の派遣・招待作家として」である<sup>37</sup>。佐多稲子はその中の一人である。

—

佐多稲子は戦時下、太平洋戦争が勃発する直前の1941年には、2回も「満州」を訪れた。第1回目の6月には奉天に離着したが、観光はできなかつたようである。第2回目の9月の「満州」旅行は、朝日新聞社の招待を受けて、関東軍報道部の協力の下で、「朝雲号」を利用した便利な旅だった。エッセイ「満州の少女工」は、「満蒙毛織」工場を見学した記録である。1941年12月の『大陸』4巻12号に載せられ、翌年1942年12月に刊行された『続・女性の言葉』（高山書院）にも収録された。

「満蒙毛織」は「奉天駅」西側の鉄西工場地区にあった。当時、神奈川県鶴見川崎と似て工場街になっており、大きな工場はみんなここにあった。日露戦争で勝った日本はロシアから「南満州鉄道」を受け継ぎ、1906（明治39）年に、南満州鉄道株式会社を設立した。その後、鉄道用地を「満鉄付属地」に改めて、鉄道の西側にある「付属地」を工業地区に定め、鉄西区への企画と資源略奪を始動した。1940（昭和15）年の半ばまでに旧奉天市鐵西区に進出していた50近くの日本人会社の一つである満蒙毛織は、「大正七年夏内閣ニ於ケル拓殖調査委員会ノ決議ニ基ク我羊毛自給自足ノ国策ニ順応シ支那産羊毛ノ利用改良ヲ促シ以テ満蒙ノ富源ヲ啓キ産業ノ発達ヲ図リ、茲ニ經濟上日支親善ノ實ヲ擧ケントシ時ノ関東都督府ノ保護並ニ東洋拓殖株式会社及南満州鉄道株式会社ノ後援ヲ得、同年末創立爾来拾有余年満蒙ノ事情ノ変遷ニ伴ヒ時ニ事変ノ隆替アリタリト雖モ昭和五年初夏工場設備ニ一大改革ヲ断行シ又營業方針ノ刷新ヲ行」<sup>38</sup>だったのである。奉天工場の竣工は1920（大正9）年であり、従業員は日本人が200名、「満州国人」は約2千名、ほかに露国人は7人ぐらいであった。生産したものは帝国陸軍、関東局、満鉄、朝鮮総督府、満州政府並びに被服場に販売している<sup>39</sup>。佐多稲子のエッセイには、

この満蒙毛織といふ會社は、大變變つた工場で、自分の會社で消費するものからゆるものから、再生できるものは更生させて、ふたゝび自分の工場で消費してゐる。（略）

そしておもしろいのは、この古釘を叩き直したりする、その細かな再生品づくりに、人間をも、世間で使へないと思つてゐるものを使つてゐることでもあつた。（略）

そしてもつとおもしろいことは、びつこの子どもなどを、これらの仕事に使つてゐることだつた。少々の片輪ものでも、その仕事の性質によつては差支へない、といふ主義なのである。

と記している。

これについて、宮本百合子が「奴隷の言葉で表現」<sup>40</sup>していると批判したし、長谷川啓も「日本の経営者側から見た書きぶりである」<sup>41</sup>と指摘した。確かに、西田勝にも指摘したように、二度目の「満州」行きは、佐多にとって戦争協力のための旅の皮切りといつてよい<sup>42</sup>。しかし、一見、植民者側に立って、面白げに客観視している記録のよう

に見えるが、佐多稲子が「彼にしる私にしる、「満州国」というもののその性格を知らないはずはない。(略)「満州国」の性質を知っていた人たちが、そこへ脱出を求めたのは、(略)それらの過程の心理には曲折もあったにちがいない。それはあの当時の社会の空気の中でしか、把握され得ぬ微妙さであろう」<sup>43</sup>と書いているが、この点は文章の書き方と捉え方につながっている。

軍国主義が厳しい弾圧を行い、「国家総動員」の暗い情勢の中で、多くの作家が執筆を禁止されたが、佐多稲子は1940年2月に出版された『素足の娘』を契機に、流行作家となった。「おもいがけず印税がつづいて入ったということで夫婦狎れ合って一層、通俗的になり、おたがいがかつて志向したものを崩しつつあるという意識も、毎日の中で稀薄にした」<sup>44</sup>。戦争責任を見つめた「自分について」<sup>45</sup>の中で、出征兵士を送り辛い思いをしている周囲の人々に対して、自分が「安穩」でいるばかりか本が売れているということへの「甘い自責感」と、ジャーナリズムの中での「孤立感」や、隣近所に対する「赤い思想保持者の孤立感」から「周囲に混じってゆきたい」という意識があったと自己分析をした。さらに「作品のなかの私」<sup>46</sup>では、「自分が戦争の場所に行き、日本の青年たちがそこで苦勞をしている、また死んでいる、そういうものを自分の目で見てきたい」、「〈天皇のおん為〉ということを書きさえしなければ、という妥協点に一晩考えた末、軍部に屈服するともおもわずに誘いに応じたものらしい。

そういういきさつで渡満した佐多稲子が、観光者の気分で、当地の風俗と都市の模様を「大連の印象」「奉天所感」に記した。しかし、満蒙毛織を參觀した記録としての「満州の少女工」は、佐多稲子の本来の働く少女への細かな観察と障がい者への温かい感情と彼女らへの希望を表現している。

## 二

「ペンによつて銃後国民に時局認識を深め皇軍の苦勞を伝える」<sup>47</sup>任務を担う佐多稲子は、本当は指針の通り工場參觀でみた工場の生産ぶりを書いて、宣伝と鼓舞の役割を果たすはずだったが、かえって「満州の少女工」をテーマに、工場の繁栄ぶりを書かずに、工場の紹介のポイントは「更生できるものは更生させて、ふたゝび自分の工場で消費してゐる」という当の工場の誇りに置き、そこから自然と、筆先を家庭の婦人、満人のおかみさんやお婆さんを動員したところに移した。さらに、「少々片輪ものでも、その仕事の性質によっては差支へない、といふ主義な」ので、安価に「びつこ」の子供などを使い、朝鮮の少女たちを雇っているところに着眼した。

佐多はこれらの弱い同士の働きぶりを印象的に書いた。

お婆さんがコツコツと古釘を叩いている。その手つき、肩の振り方に、氣を張った日本のおかみさんの姿を思ひ出しているのであつた。(略)十歳から十二三歳位



の少女たちが、内職をやるあの手早い動作で、古新聞を捲いてゐる。(略)手の動作はもう機械のやうになってゐる。それが細かな仕事だけに子供らしさが消えている。

この「片輪」の少女たちのきびきびとしている動作を見て、この少女たちと同じぐらいの自分のキャラメル工場で働く時代を思い出したのだろう。思わず「しんと内に寒いものを感じる」。貧者・老人・少女など下層労働者として抑圧された弱者の苦労に感応している。そこで、少女の労働ぶりから一転して、

ふと気づくと、この少女の中に、くつきりと口紅をつけてゐる娘がゐた。まつ赤な口紅である。よごれた青い衣服、のびた髪の毛との対照で、このまつ赤な口紅の色が、見るものの目を、はつとさせた。気負った眼差しでちらつと私たちの方を見る。そのかたはらに王洋とかいふ満映の女優のプロマイドが貼ってある。

と、少女の化粧・身なり・表情に視線を移した。

大坊郁夫「化粧行動の社会心理学」(北大路書房 2001年10月)では、化粧は変身を実現する「隠す」と「見せる」役割を果たしている。化粧で外部または内部の欠陥を隠したり、特徴を際立たせたりすると言っている。汚れた衣服とのびっ放しの髪の毛にもかかわらず「まつ赤」な口紅をつけているということで、少女が、自分の体の「不具合」を隠し、それに抵抗する情熱を示している。この汚れた衣服にまつ赤の口紅は、植民者の日本人にはアンバランスでみすぼらしく見えるが、しかし佐多の目には、「まだ娘になりきつてはゐない少女なので、その娘らしさがかはゆく」映っている。しかも、中国では、「赤」は血液と火炎の色から、情熱・活発・勇気・吉祥・慶事などの象徴とされているように、その「まつ赤」の裏に隠している少女の権威を無視して恐れぬ姿は「見るものの目をはつとさせた」。そして、日本人の参観者たちを「気負った眼差しでちらつと」みるという表現も、日本人の経営している工場で、日本人のお客さんを前に、少女労働者は障がい者や被植民者の引け目や劣等感どころか、むしろ機敏に仕事ができるという自負を見せている。

そして、口紅をつけたり、映画女優のプロマイドを貼ってゐる雰囲気、このひとりの少女だけにあるのではなく、気がつく、廃品再生のこの工場の少女たちのそれぞれに何かしらただよってゐるのである。

と、釘を叩き直すという廃品再生工場の雰囲気にふさわしくない口紅、映画女優のプロマイドは、まさに最後に書いているように「ただ好きだからではなく、彼女たちの将来の希望にもかけられてゐるわけである」。

更に、次第に仕事に慣れて来て、彼女たちは単価の値上げを要求するのだ。その要求に、会社側が、「お前たちは他の会社では雇ってもくれない片輪ぢゃないか」と嘲笑した。会社側の揶揄的答えに、少女たちが利かぬ氣を現わし、「片輪だからこそ、一日坐つて、古釘を叩いてゐられるので、自分でなければ出来ない仕事だから、値上げは當然だ」と率直に植民者の権勢に抗って、権利を主張している。

「満州の少女工」は、2度目の「満州」行きから帰って書いたのだが、この2度目の「満州」行きについては、西田勝が、明らかに戦争協力のための、佐多にとっての最初の「外地旅行」だった<sup>48</sup>と指摘しているように、仕方がなく時流に乗って、植民者側に立ち、見物人のような書きぶりであったとしても、佐多稲子はやはりプロレタリア文学者としての立場を忘れていなかった。

「銃後文芸奉公隊」の一員として、「特務機関」と「奉天一四五部隊」を慰問、「九・一八記念日」に賑わう「柳条湖」に赴く<sup>49</sup>など、多くの活動の中、街の風景を描いた「奉天所感」と、満蒙毛織工場の少女に光を当てた「満州の少女工」しか書かなかった。そして、「満州の少女工」では、心身障がい者を安価に使うという社長の自慢と、厳しい環境に置かれて貧しいながら、まっ赤な口紅をつけて、壁に女優のプロマイドを貼ることにより、伝えてくれた少女たちの未来への希望と、単価の値上げを要求するに至ったという少女の抵抗に焦点を当てた。

このように、他人の弱みに付け込んで、幼い少女、しかも心身障がい者ばかり集め安く使う植民者のやり方の卑劣と搾取を暴露している。一方、蔑視を受け、平等視されない少女たちの、障がいを持つことで劣等を感じず、かえってまっ赤な口紅が象徴している楽観的人生観、俳優のプロマイドに託する未来への希望、権力者を恐れぬ抗議を浮彫にした。

佐多稲子の心に根差したプロレタリアの着眼点を指摘するべきだろう。

### 第三節 旅館主人への毅然たる抵抗——「水」を中心に

戦後、佐多稲子は自らの戦争責任をかみしめる一方、逆に、その挫折や失敗をプラスに転化して、独り立ちして、書き続けると同時に、民主主義運動に参加していく。今までの、この身で体験したこと、この目で見たことだけでなく、いっそう政治や女の問題をはじめ社会の動きに多大な関心を寄せ続けている。しかも雀百まで踊りを忘れずと自ら言うように、娘労働者へのまなざしは佐多の一生のテーマでありつづけた。

「水」は佐多文学における一つの到達を示す作品であり<sup>50</sup>、「キャラメル工場から」と並び、短編傑作と言える。「水」は1962年5月に『群像』に初めて発表されたあと、翌63年1月には短編集『女の宿』（講談社）に収められた。ヒロインの幾代は「ひろ子」と同じく東京の出稼ぎ者で、左足が短い障がい者であり、場所は四方八方から激しく電車が往来している上野のホームに設定されている。展開は、少女の幾代が上野駅のホームと詰め所との間の陰になった片隅で、乗客の視線にさらされながらしゃがんで泣いて

いる場面から始める。彼女は一昨年の冬から越中釜ヶ淵の農家を出て神田小川町旅館に住み込みで働いている。母への送金もでき、旅館勤めに満足していた。素直な働き者で同郷である旅館の主人も優しい言葉をかけてくれた。が、母危篤の電報が来たのに繁忙期を理由に暇を出してくれない。今朝、母死んだという電報が届いたとき、「狡猾に目を働かせ」て、「死んだものが生きかえるわけでもないしね」と、女主人に冷たい接し方をされた。彼女は反応せずに旅館を出た。主人に負けてしまった自分の弱さから母親まで敗北の巻き添えにした口惜しさで、ホームの混雑の中で幾代は孤独だった。列車が出たのをしおに立ち上がり、水が出しっ放しであった水道の蛇口の栓を無意識に閉めた。「が、幾代は、再びもとの場所にもどってしゃがみ込むと、今までと同じように泣きつづけた。その場所に、遮るものがなくなって春の陽があたった」。絶え間なく流れる悲しみの涙と閉められた水道の水、陰になった狭い場所と春の陽に照らされている場所。この対照に佐多の周到の筆力、観察の鋭さと描写的的確さが光る名作と言える。

—

「水」は、「キャラメル工場から」が工場を舞台にした代わりに、旅館の台所を舞台にしたのである。言い換えれば、「キャラメル工場から」は生産の場所であるのに対して、「水」は消費の場所である。同じく「多忙な時期に、使用人を失いたくない」ほど好景気である。時代背景としては、1960年代のはじめ、日本経済の高度成長期に加わり、1964年の東京オリンピックがある「好景気」とも言える。「地方から大都市への大量の人の流れを生み出し、第一次産業から第二次・第三次産業への産業構造」<sup>51</sup>に変化した。幾代もその一人で、「給料を貯めて、一度母親を湯治に出したいと思って」、神田小川町の旅館へ働きにでた。素直な性質だった幾代の働きぶりが主人から認められ、主人にとっては、「おもわぬ拾い物をしたわけだった」ということになる。「田舎のおっかさんに東京見物をさせておやり…泊まるのはうちで泊めてやるよ」と優しい言葉をかけた主人は、「ハハキトクスグカエレ」という電報を前に暇を出してくれなかった。「それに、もう死んじゃったんだろ。あんたが帰ったって、死んだものが生きかえるわけでもないしねえ」と引きとめようとした。このように、働き者の素直さ、誠実さと、雇い主の冷酷さ、エゴが対照的に浮き彫りにされた。

要するに、生産の場としたキャラメル工場にしる、消費の場とした旅館にしる、資本家の利益は労働者を搾取したことにより獲得したもので、その発達、繁盛、利潤最大化の背後には、働く者いわゆる下層に生きている人々が過酷な労働をしても裕福な生活ができないという貧富の差の拡大があった。時代が変わった現在でも、作品に描かれたあり様は多少形が違って、程度の差があっても、依然として、存在しており、むしろそれによる貧富の差がますます拡大されつつあるのではないか。現代の中国では、改革開放して以来、確かに経済も生活水準も高くなった。しかし一方、一部の企業は、資本主

義制度、例えば生産高制度や競争制度を過度的に導入することにより、ひろ子のような仕事の出来のよくない人がますます生活が困難になり、精神的ダメージを受け、自殺や狂気に追い込まれる現象が度々起きている。そういう意味では「キャラメル工場から」も「水」も深刻な社会問題を掲げた生命力のある作品といえよう。

## 二

「泣く」という行為は、真の辛さを我慢していたら体の中から自分を壊すことを知り、泣けるようになる。辛くても誰にも泣き顔など見せないで、そのくせ心の底には自分の運命を怒り恨む思いを抱え、その感情をそのまま流れっぱなしの水に重ね、まわりにはわかった風を装って生きるのである。しかし佐多はどんな状況でも外の問題に関してぎゅっと蛇口を締め、自分の責任でものをいう覚悟で生きてこられたのである。ひろ子にしろ、幾代にしろ「いずれの主人公も、泣き出すまでには、黙って耐えてきた多くの重荷があり、彼女たちの涙は、逆にそれまでの抑制の強さをきわだたせる効果を持つ」<sup>52</sup>。

「水」は紙幅は約「キャラメル工場から」の半分しかないのに、幾代の泣く場面を11箇所描いた。しかも、上野駅のホームという一つ場所にだけでも6箇所もある。「キャラメル工場から」の、人に見せずに、抑えながら抑えきれなく流れた涙に対して、旅館主人の前で泣けない涙は、雑踏の中で、かえってげげんな顔で人ののぞくのも解ったがしきりに泣いたというように、涙に任せて、涙で悔しさ、悲しさを紛らす涙といえよう。小説の冒頭に「幾代はそこにしゃがんでさっきから泣いていた」。そして、幾行も空けず「自分の膝の上で泣いた」、「どうしても涙はとまらず、そこより他の場所に行きようもなかった」、「コリンとした顔」が「泣きぬれていていよいよ頼りなく貧しげに見えた」、「自分ひとり打ちひしがれた悲哀にいることをそのまま受け入れて、ただ止めようもなくあふれ出る涙をあとからあとから拭きながら、胸の中で母親を呼んでいた」のように、唯一の安心の場所である母親にも死なれたため、完全に一人ぼっちになった彼女は、つかまり場を欲している。しかし、激しく往来している人込みの中では、自分の鞆を抱きしめて自分の膝の上で泣いているよりほかなかった。自分の膝の上以外にすがる場所がないという頼りなく貧しげな光景であった。まるで自分の一切をこの鞆と膝に託してしまう弱さのようだが、精神的支えでもある母親の死は小さい「よそ者」の幾代にとっては大きなショックで、「抱きしめる」と「膝の上で泣く」ことで隠しようにも隠せないやりきれなさや切なさでもある。

ところが、料理人が幾代の働きぶりと誠実さを認めたらうえ、「幾ちゃんはいいかみさんになるよ」とにやついて、幾代の脚のことにふれ、あけすけなほめ言葉までつけ足した。「片足の短い女の人はいそれだけ情が深い」といい、また「性的にも男を満足させる」という巷説があるので<sup>53</sup>、その時自分の悲しみをひそめた身体の中までずけずけと踏み込まれ、侮辱されるようにしか聞けなかった「幾代は唇を噛んで涙を浮かべた」。さら

に、「ハハキトク」の電文を主人の前に出す時、「今から帰ったって富山までじゃ、間に合やしないよ」と言われ、暇が取れなかった時、「幾代は、そこに他人を感じ、夜更けて床についてから、ひとりで泣いた」。主人は普段優しく見えるが、いざ自分の利益につながるとなると、その不人情、威圧と不機嫌を赤裸々に暴露した。続いて、「ハハシンダ」と次の電報が配達された時、幾代は台所の板にへたっと坐ると、「細い、絞るような泣き声を上げて突っ伏した」。いくら悲しくても仕事場では我慢して絶対に涙を見せたくない意気地と、他者としての孤立感が迫ってくる。すぐ後には「彼女はもう朝のやりかけの仕事をしなかった。泣きながら身の回りのものと貯金通帳を鞆に詰め」て、女主人の引きとめをかまわず、毅然と出かけるころ、「それに、もう死んじゃったんだろ。あんたが帰ったって、死んだものが生きかえるわけでもないしね」という女主人の話に対して、幾代は固い顔をして、反応さえ見せなかった。今までの従順でいじらしく働いていた女中から、孤独な人間の抵抗に変貌した。苛められてもその限度があるという、人間の価値に直面しているたじろがない幾代を描いた。一方、有産者の偽善、冷酷、自分のことしか考えないエゴを深いところから描いた。

最後は、首尾を照合させ、ズームを回想からホームに引き戻した。幾代は駅員詰所の先にある出しっ放しの水道を無意識に閉めたら、「再びもとの場所に戻ってしゃがみ込むと、今までと同じように泣きつづけた」。店では我慢に我慢を重ねた涙は、誰も知らない場所では、とうとう崩壊して、つけっぱなしの水道の水のように流れてしまった。しかし、絶え間なく流れる悲しみ、口惜しさの涙は、閉められてとまった水道の水と照合して、自分の内部のとめどない感傷をもぴんと閉め、ジレンマを乗り越えて生きていく決意を象徴しているようである。「キャラメル工場から」におけるひろ子の「戦う涙」に対して、幾代の場合は大都市における他者としての「頼りなき涙」「孤独の涙」であると同時に、雇い主の虚偽に毅然たる反抗を示す「負けん気の涙」であろう。

### 三

そもそも佐多稲子は「私の小説作法」<sup>54</sup>に「そこ（作品）がどうしても自分の生活にくっついてしまう。（略）自分の実感がなくて書き出せない。（略）全くちがった生活の描写の中に、私はそのときの私自身のテーマを付託している」と書いているように、実感から書き出す実感派と言える。しかし「水」は何をきっかけに書かれたのか、現時点では解明出来ず、今後の課題とするが、これについて、「室生犀星の逝去をすぐおもい出してしまふ。室生犀星の告別式が終わった後で書いて、『群像』に間に合わせてもらった」<sup>55</sup>とだけ触れた。

ところが、小説の布石から作者の実感を読み取れる。

「水」は事実そのものではなくても、作品構成の要素から見て、佐多自身の身の上の上に起きたことを作品の中に編み込んで書き上げたリアリティに溢れた作品である。佐多の

7歳の時に母が亡くなった。逝去の前は、実家に養生に行く生活がつづくが、ハイカラな好みを持っていて、稲子の入学には、だれよりも美しい繻子の鞆と紫モスリンの袴をそろえてくれたのだった。一方、夫が夜中に芸者を連れて帰った時は、物言わず彼の顔を叩いたという。こういう色白い美しいひとで、表面は優しげでいながら内にしっかりと強いものを秘めている「母には(稲子が)いつまでも憧憬のような心を抱いている」<sup>56</sup>。

「水」の幾代の母には佐多のこんな心情を重ねてあったのだろう。

作品中の幾代は5歳の時、父親に死なれた。父なき幾代は、母がたった一度だけの湯治に行っても、「大風呂敷いっぱい、つくろいものの衣類を包み込んで持って出た」と覚えている。旅館の女主人と同年齢だというのが信じられないほど腰を曲げて、老けていた母がたった四、五日の湯治から帰ってきたとき、見違えるほど若返っていた。「父親のなくなったあとの苦労の悲しみ」を暗闇の中で手さぐりに知った母親の涙で知った。母親の涙は、亡くなった夫を懐かしんでいるし(父親が亡くなったあと、まだ母と一緒に寝ている幾代が母親の乳を探った。とたんに、母に払いのけられ「いやだッてば」と怒られた。「そんなときの微妙なことは幾代にはわかるはずはない」と)、女一人で家を支える苦しみと辛さを嘗め尽くしたのである。そのために、幾代は給料を貯めて、一度でも母親を湯治に出したいと思っていた。また、「幾代が二歳のとき、高熱がつづいたのを抱いて、富山市の病院へも連れて行ったが」、後遺症が残り左足が少々短くなったのを自分のせいにして謝ることがあった。それで、男の子に「ちんば、ちんば」とはやしられたのを聞きつけた母親はいきなり大声でわめいて小石を投げた。幾代の方が母親の見事に恥ずかしくなったが、自分と母親とのつながりの深さに気付いた。母は自分を保護し、癒す母性の原型であり、信心深く、義務感と責任感が強く、その勤勉さ、忍耐強さと、外からのいじめに対する毅然とした態度で、幾代を守っている。母親こそ彼女の唯一の安心の場所であり、母親の前でだけは自分の身体の引け目を感じずにすむのである。

このように、「キャラメル工場から」に描かれた娘に対する父親としての無責任、冷たさとは反対に、母親としての責任感、深い愛情の有り様がまぎまぎと浮かんでくる。

つづいて、幾代が母親の死に間に合わなかったという設定も佐多稲子の実感から来ると考えられる。佐多稲子の自伝的小説「私の東京地図」の中で、上野の料理屋へ奉公に出される幼い作者を床の上に見送って、「とうとういね子も落ちてゆくか」と涙を留めた叔父である。文学を志し、『埼玉日日新聞』に「文壇の若武者—深谷に身を忍ぶ」とも書かれた叔父が幼い作者に大きな影響を与えて、尊敬されている。その死の知らせが奉公先に来た時、「お前が帰ったところで、叔父さんの命が助かるわけでもあるまい」と、善良な主人も店の忙しさには、子守り娘にも暇が惜しくて、作者は叔父の死に急ぐことができなかった。当時の悲しみの心情を幾代に投影した。

ちなみに、佐多稲子は娘時代、キャラメル工場の女工、中華そばやの目見得、上野の料理屋・清涼亭の主人の小間使い、メリヤス工場の内職、座敷の女中、丸善の女事務員、

カフェの女給を遍歴した。それらの経歴が、小説を書くためという意図のもとに経験されたものでなく、働くものの貧しさの必然性から経験された一人の若い娘の人生体験であった。それ故に、自分の女給としての実感は旅館の台所で働く幾代に生かされたと考えられる。

「水」の冒頭には、

空にはうらうらとした春の陽ざしがあつたが、列車にさえぎられて、詰所との狭い場所は陰になっていた。

そして、末尾には、

幾代は、水道のそばを通り抜けぎわに、蛇口の栓を閉めた。音を立てて落ちていた水が止まった。が、幾代は自分のその動作に気づいてはいないらしかった。それは無意識に行われただけだった。列車は音を立てて出てゆき、明るくなったあとに街の眺めが展がった。が幾代は、再びもとの場所にもどってしゃがみ込むと、今までと同じように泣きつづけた。その場所に、さえぎるものがなくなって春の陽があつた。

作者は呼応の手法によって、日常生活の中で自動化したものを新たに明視した。いわば幾代のこの無意識の行為を通して、彼女の居場所は「陰」から「春の陽があつた」に変わるという光景を具体的に浮かび上がらせ、実在感を伝えている。

20歳にならぬ出稼ぎ娘が雇い主への忍従、無抵抗から、その虚偽とエゴを見透かして、毅然として、反応さえ見せず、ズックの鞆を抱えて旅館の台所口から出て歩き出したことで示したか弱い労働者の抵抗に変貌した。それに加え、無視された出しっぱなしの水道を無意識に閉めた幾代の前で、光がいっぱいというオブジェを仕掛けることによって、その習性から幾代にもたらず明るい未来が暗示されるし、作者の人間観の確かさをも反映している。しかも「佐多の短篇作家としての腕前を存分に示し」た<sup>57</sup>作品となった。

## おわりに

「人間の生活に対する愛情は、作家の本質的なものである」<sup>58</sup>。佐多は自らの経験に取材した娘労働者を扱う短編から文学の道へ旅立ち、終始労働者階級の喜び悲しみ悩みを模索し続けて、リアリズム文学を築き上げた。リアリズム文学の主旋律の一つは、労働者の苦難との戦いぶりを反映することにあるように、佐多稲子は、人間観察の強いモーパッサンの短編小説を愛しながらも、労働者の生き方を否定的に書いたものではなく、現実への働きかけに向かう積極的精神の傾向を持っている。

ところがリアリズムとはいっても、絶対フィクションを許さないわけではない。事実と虚構を機能的に統合できたのは佐多文学の一徴表である。書くべき生活、つまり労働の経験を持つ人間から何かを掘り出そうとするプロレタリア文学理論に立脚し、しかも自分自身のプロレタリア文学から出発することを銘記して、世の中の弱者として抑えられている大衆、その中でさらに抑圧された娘労働者や女性を描き出すことにより、社会の基盤となる庶民に関心を寄せ、感銘を示し、ピラミッドの底辺に生きた大衆のサイドに立ち語り続けていた。人生に対する或る素直さからくる控えめな態度が佐多稲子の描く対象を、弱くしか表現し得ない結果にしている<sup>59</sup>。にも拘わらず、「労働のなかから新しい創造が生み出されなければならない、階級意識に支えられた労働の中に新しい意識、新しい感情、新しい感覚を見つけ出される」<sup>60</sup>ことは佐多文学の原動力になり得る。

「きびきびした、張りつめた表現によって、非人間的な社会の矛盾を描き出す作者の気迫が、鮮烈なきびしい美をつくりだしている。主人公の少女が苛酷な条件にたえて生きてゆく勝ち気な、しかしすなおでけなげな魂を持っていると同じく、作者もまた、下積みの虐げられた人間の立場に立って毅然たる態度で人間性と社会的状況との関係を鋭く追及していく」<sup>61</sup>。上述した3編は、キャラメル工場の劣悪な労働条件と工場主の苛酷・狡猾及び家父長の無責任、冷たさ、在「満州」植民地の宗主国としての傲慢・障がい者に対する搾取・安価に少女労働者を使う卑劣さ、旅館主人の不人情、欺瞞、虚偽を明らかに暴露している。他方、最も重要なことは、幼年労働者のひろ子にしる、障がい者の満州少女工と幾代にしる、これらの娘労働者たちは表面は利発に順応しているだけで、本音のところではおかれた環境に屈服してはいなかったのである<sup>62</sup>。少女労働者の忍耐力と負けん気を捉えたとされてきたこの一連の作品から、この後の佐多稲子作家活動の基本的なスタンスの取り方が読み取れる。

いわば多重の抑圧に対する忍従から抵抗へと立ち上がり、現実の苦難に負けずに、未来に希望を抱える人間性的強者の少女成長物語である。

人間は自分の営みの中でずっと弱者を演じている<sup>63</sup>。しかし貧困が広がる社会を、私たち自身で変えることができる。下流老人、貧困女子など社会的弱者が増えつつ、一億総中流社会の崩壊がより深刻な今、貧困・格差などの問題はだれにとっても他人事ではない。だからこそ平和をねがう市民は暴力を憎悪するという根性をその権利の上にはつきり表明しなければならないであろう<sup>64</sup>。

## 注

- 1 長谷川啓『佐多稲子論』 オリジン出版センター 1996年10月
- 2 奉天市公署『鐵西事情案内』 1940年5月
- 3 佐々木基一『日本文学全集 39 佐多稲子集』解説 新潮社 1961年6月
- 4 小田切秀雄「佐多稲子」 『日本近代文学の思想と状況』 法政大学出版局 1965



---

年2月

- 5 奥野健男『新潮日本文学 23 佐多稲子集 解説』 新潮社 1971年11月
- 6 黒古一夫「都市労働者の論理」 『講座昭和文学史第1巻』 有精堂 1988年2月
- 7 鳥木圭太「プロレタリア文学と児童労働」 『立命館言語文化研究』第21巻第2号 2009年11月
- 8 坂本育雄「佐多稲子論」 『日本文学』 日本文学協会 1967年3月
- 9 小林裕子『佐多稲子——体験と時間』 翰林書房 1997年5月
- 10 石川巧「彼女の朝から別の朝へ——佐多稲子「キャラメル工場から」論」 『国語と国文学』 至文堂 1996年10月
- 11 渡部麻実「衣服・はなみず・鉄道：佐多稲子『キャラメル工場から』」 『国文目白』第54号 2016年2月
- 12 藤枝史江「「キャラメル工場から」の〈ひろ子〉——戦う涙」 『芸術至上主義文芸』第38号 2012年11月
- 13 長谷川啓「「キャラメル工場から」覚書き」 『現代文学』 学術図書出版社 1982年3月
- 14 岩淵宏子「近代女性作家の文体」 『スタイルの文学史』 1995年3月
- 15 北川秋雄「佐多稲子文学の会話表現にみるセクシュアリティについて」 『姫路獨協大学外国語学部紀要』第29号 2016年2月
- 16 奥野健男『奥野健男 作家論集』第2巻 泰流社 1977年1月
- 17 江藤淳「文芸時評（上）」 『朝日新聞』朝刊 1964年4月27日
- 18 松原新一「解題「三等車」と「水」をめぐって」 『佐多稲子全集』4巻月報 1978年3月
- 19 福田和也『鏡花、水上、万太郎』 キノブックス 2017年3月
- 20 浮橋康彦が「佐多稲子「水」——研究授業を通しての教材研究」 『日本文学』 1967年7月
- 21 鈴木康之「リアリズムの作品における感情調の表現——佐多稲子「水」を材料として」 『日本文学研究』大東文化大学 1973年1月
- 22 菅野圭昭「佐多稲子「水」の教材化をめぐって——教材研究と本文批評」 『日本文学』 1979年11月
- 23 1に同じ。
- 24 上野千鶴子『家父長制と資本制』 岩波書店 2002年1月
- 25 7に同じ。
- 26 北川秋雄「佐多稲子文学の会話表現に見るセクシュアリティについて」 『姫路獨協大学外国語学部紀要』第29号 2016年2月
- 27 12に同じ。
- 28 9に同じ。

- 
- 29 11に同じ。
- 30 大坊郁夫他編著『被服と化粧の社会心理学』 北大路書房 1997年7月
- 31 佐多稲子『佐多稲子全集』第1巻 講談社 1977年11月
- 32 佐多稲子研究会編『佐多稲子文学アルバム』 菁柿堂 2013年8月
- 33 佐多稲子「文学的自叙伝」 『新潮』 1939年4月
- 34 小林裕子「マントという記号—『キャラメル工場から』」 『佐多稲子——体験と時間』 翰林書房 1997年5月
- 35 佐多稲子「生活と作品」 『入門文学講座』4巻 1950年4月
- 36 本橋哲也『ポストコロニアリズム』 岩波書店 2005年1月
- 37 西田勝「佐多稲子と「満州」」 『植民地文化研究(2013)資料と分析』第12号 2013年7月
- 38 『満鉄調査資料第104編 満蒙要覧』 [大連]:南満州鉄道 1930年
- 39 38に同じ。
- 40 宮本百合子『婦人と文学——近代日本の婦人作家』 実業之日本社発行 1947年10月
- 41 1に同じ。
- 42 37に同じ
- 43 佐多稲子「時と人と私のこと(13)」 『佐多稲子全集』第14巻 講談社 1979年1月
- 44 佐多稲子「時と人と私のこと(3)」 『佐多稲子全集』第3巻 講談社 1978年2月
- 45 佐多稲子「自分について」 「新日本文学」11巻9号 1956年9月
- 46 佐多稲子「作品の中の私」 「図書」108号 1958年9月
- 47 「国境の勇士を慰問／本社の銃後文芸奉公隊出発」 『朝日新聞』第2面 1941年9月
- 48 37に同じ。
- 49 37に同じ。
- 50 小林裕子「解題——「我が家」への決別」 『佐多稲子全集』第12巻 講談社 1978年11月
- 51 小浜裕久・渡辺真知子『戦後日本経済の五十年』 日本評論社 1996年9月
- 52 9に同じ。
- 53 菅野圭昭「佐多稲子「水」の教材化をめぐる」 『日本文学』 1979年11月
- 54 佐多稲子『ひとり歩き』 三月書房 1969年6月
- 55 佐多稲子「時と人と私のこと(11)」 『佐多稲子全集』第12巻 講談社 1978年11月
- 56 1に同じ。

---

57 19に同じ。

58 佐多稲子「本質的な人間味」 壺井栄著『大根の葉』解説 新興出版社 1946年10月

59 佐多稲子「文学的自叙伝」 『新潮』 1936年4月

60 35に同じ。

61 小田切秀雄「佐多稲子」 『小田切秀雄全集』13 勉誠出版 2000年11月

62 1に同じ。

63 朱必圣「弱者的文学性格」 『当代作家評論』 1996年9月

64 佐多稲子「市民の立場で」 『新日本文学』16巻4号 1961年4月

## 第二章 目覚めた女性の自我表現——フェミニズム／ジェンダーの視点から

### はじめに

佐多稲子が文壇に登場して以来5年間、自分の経験や取材を材料に、働くものや革命闘争に目を据えて、いわゆるプロレタリア文学を書き続けてきたが、個人体験の域を超えることはできなかった。1933年2月に、小林多喜二が虐殺されたのを境に、軍国主義の弾圧が厳しくなる一方であった。ついに、日本プロレタリア作家同盟は解散し、文化人がそれぞれの形で時流と戦わなければならない局面を迎え、また多くの人々が転向する状況にあった。内的には、佐多稲子にとって「この時期は、苦闘の日々ながらも、作家としても人間としても大変に成熟した時代でもあり<sup>1</sup>、私的生活には大きな危機に瀕している。

夫には相次いで別の女性との関係が生じ、出獄した後の文学的再出発は思うとおりに行かず、夫はすでに作家となって一家を支えている妻へのコンプレックスを感じていた。佐多は夫の背信への疑心に「全身鋭い触角を持った虫<sup>2</sup>と化してお互いに傷つけ合った。つまり自分の生活への疑問の空気が家庭内を支配し、「奇怪な傾斜を見せた夜の心の渦巻きと、陽の光にそれをねじ伏せて流してきた両様の、秘かですさまじい葛藤<sup>3</sup>」の時期である。プロレタリア運動の敗走と夫婦間の荒廃が佐多稲子を戦時体制に巻き込んでいった。「暗い情勢の時ほど書物が読まれるということはあるらしい<sup>4</sup>。しまいには表面的に時局迎合した小説を多く執筆するようになった。しかし、佐多の場合は、これまで労働者・革命運動に向けられていた目は、より広く現実の矛盾を直視するようになり、特に、一般の働く女性の現実に目を向けるようになる契機となった。

具体的には1934年に掲載された「牡丹のある家」から、創作態度の変化を示しはじめた。1935年に刊行された「くれなゐ」を契機に、佐多稲子の文学は、従来の労働・争議から、仕事と妻の役割との矛盾に苦しむ女性の葛藤、しかもその葛藤から離脱して解放する、いわば社会の分野で働く若い婦人労働者を扱った視点に変わっていった。長谷川啓『家父長制と近代女性文学』の中では、次のように指摘している。

この世の中での女の生のありようを自覚し、書く行為にまで結び付けていく覚悟ともなった。(略) この自覚と覚悟のもとに佐多稲子は文学的確立をはかっている。いわば「書く女」の本当の意味での誕生、再出発だが、それは又、権力の弾圧によってプロレタリア文学を中止せざるをえなくなった時代の、それに代わる文学的基盤にもなるものであり、以来、稲子の世直しの基点にはフェミニズム思想が置かれるようになった。<sup>5</sup>

では、どうして日中戦争が勃発するさなか、恋愛・家庭・仕事をめぐるいわゆる通俗小説を戦争の緊迫情勢とは関係ないようなのんびりした筆致で描けるのか。またこの一連の「通俗小説」に隠されたモチーフはどんなものであるか。本章では、「乳房の悲しみ」（『婦人公論』1937年3月～5月）「女三人」（『時代社』1940年5月）、「気づかざりき」（『婦人日本』1942年7月～12月）などを取り上げて、社会的に弱い立場に立つ女性のアイデンティティ、恋愛結婚、社会進出に光を当て、戦前の自己の内外における閉ざされた「小さい生活の人々」からのさらなる飛翔、旅立ちへの努力とひたすらな自己拡充への渴望を読み解きたい。

本論に入る前に、まず今までの研究はどんなところに照明を当てたかを把握しておく。序章で述べたように、フェミニズム／ジェンダーからメスを入れる佐多稲子文学研究は「くれなる」「灰色の午後」に集中している。しかし、佐多稲子が言ったように、「人間の持つ愛という感情はそれとして変わらないとしても、その感情を操作する意識は、社会の風潮と生活の条件によって違ってきている」<sup>6</sup>。戦時下の厳しい状況のなかで、女性の能力活用政策という総動員法によって、女性の社会進出が一層促進されつつある一方、女性の母として妻としての自我の生活はどう変わっていったかを、上記の二作以外の、この時期の作品を読み解くことによって、究明できるのではないか。

小林美恵子『昭和十年代の佐多稲子』<sup>7</sup>に収録された「『乳房の悲しみ』論——変容する〈母性〉」「『女三人』論——〈女たち〉の連帯と分裂」「『気づかざりき』論——生贄にされる〈女たち〉」において、「母性」や女性たちの関係性などをテーマに論を展開した。

「『乳房の悲しみ』論——変容する〈母性〉」においては、結婚の失敗・子別れ・自己再生への出発という三つの物語を跡づけて、一人の女の〈母性〉が皮肉にも夫婦心中の直後に目覚めたのである。そして、〈母性〉を手にしたことで、精神的にも強く美しく変身を遂げたため、安易な愛のない結婚によって手にした〈母性〉が真の恋愛によって遺棄されるという、どこまでも女の自由にならぬ〈母性〉を、「乳房」の悲しみという言葉に託して訴えたことを検証した。それによって母娘がともども生きること、つまり母から娘へのメッセージの本質を見極めた。その上で「乳房の悲しみ」の、佐多文学のなかでの位置づけについて考察した。

「『女三人』論——〈女たち〉の連帯と分裂」においては、三人の女性の姿を時代要請と照らし合わせながら跡づけ、未婚女性・家庭婦人・未亡人といった立場によって各々どのような男性中心社会の抑圧を受けていったかを検証した。そして、その圧迫に対抗するうえで、彼女たち同士が生き抜くために、男性に対峙するときは、規範外の同性同士として連帯し合うが、家父長たちの傘下にある時は、また別の連帯を作り、抵抗する同性たちを疎外していく連帯と分裂の構造であると分析した。しかも「女三人」は「通俗小説」に手を染めるその入り口を示す作品と位置付けた。

「『気づかざりき』論——生贄にされる〈女たち〉」においては、「戦争宣伝小説」の色合い、作品内には戦争協力的な表現を認めながら、被害者としての〈女たち〉を描出する箇所が少なからずあると指摘し、女の立場から戦争の酷薄さを書こうとした佐多の意識が息づいていることを明らかにし、佐多が女の立場から戦争に対する否定的な姿勢を維持し続けたことを裏付けようとした。

北川秋雄「太平洋戦争前夜の佐多稲子——通俗小説的創作方法と戦争体制容認と」<sup>8</sup>において、「女三人」を例に、通俗小説的創作方法と戦争体制容認の視点から、婦人問題と小説の通俗化について論じた。「一時の精神的虚無状態からの脱出口として、佐多の再生願望と当時の婦人問題の高揚状況の反映に領きながらも、より広範な〈読者自身のうちに持つテーマ〉を自分のテーマとして、偶然の多用、ほのめかしの手法、風俗描写など通俗小説的創作方法によって作品化することは、戦争体制を容認するという陥穽に陥る危険を同時に抱え込むことでもあった」と、しかも、「庶民を読者の対象とする意識は結果として、庶民に迎合して行こうとする弱さを表し、作家としての自己と庶民との正当な距離感を十分に作品化することではなかった」といって、小林美恵子の論と異なる立場から厳しく批判した。

また、同氏は「佐多（窪川）稲子『気づかざりき』——戦争宣伝小説への傾斜」<sup>9</sup>においては、女性であることの負い目意識払拭の意欲が、国策としての女性の戦争協力に搦めとられた、プロレタリア文学運動期の大衆への連帯意識が、眼前の兵士を戦争の犠牲と認識し、虐げられた彼等の悲哀と無縁ではいられないという戦時下連帯意識に結びつくことで、戦争に対する抵抗感を喪失していったと指摘した。更に「『気づかざりき』と『南京の驟雨』の位相」<sup>10</sup>では、銃後の守りはかくあってほしいという前線の兵士の願いが至上命令のごとき絶対的なものとして小説の前提になっていると位置付けて、戦争の全体性をとらえる視点を生み出せず、作者の関心は、ヒロインがどのようにして、その前提に身を添わせていくかという一点に注がれているときびしい評価をしている。しかも、「この小説をみるかぎり、この時期の佐多に〈侵略戦争〉という認識があったということはきわめて疑わしく、むしろ読者を戦時体制に巻き込む役割を果たすことで作家として戦時体制に協力し、自己の存在を証明する作品である」と、北川は、小林美恵子の論と対照的な論点を打ち出している。

つづいて、岩淵宏子は「戦時下の結婚をめぐる抑圧と抵抗——佐多稲子『気づかざりき』／宮本百合『雪の後』」<sup>11</sup>においては、従来の読みと評価は、「〈出征〉兵士を美化し、彼等の望む銃後の国民のあり方を疑う余地のない絶対的なものとして、〈内地〉の女性がいかに身を添わせていくかという問題を追求した」「戦意高揚の宣伝小説」と批判する北川秋雄論に代表されるものと、この結婚が徴兵検査に合格できない男によって主導される点に注目し、「同世代の兵士に強い同情や申し訳なさを抱いた」銃後の男によって、「戦争に巻き込まれてゆく、被害者としての女性の姿を描出した物語」と読む小林美恵子論と分けるうえで、主人公がなぜ、出征兵との結婚を決意していくかに焦

点を絞ったのである。銃後小説の枠組みをもっていると認めながらも、同時に戦時体制に取り込まれる道程をリアルに浮かび上がらせており、ファシズムの抑圧の構造を明らかにし、抑圧と抵抗という双方から鮮やかに跡づけているとの評価が出されている。

本章では上述したこれまでの研究を踏まえて、時局が緊迫した戦時下、軍国主義の弾圧を前に、むろん佐多稲子自身も作品に描いた女性も権力者に対する弱者としての存在である。にもかかわらず、佐多稲子は文学の中で、控えめながらやはり戦争反対を意図して、戦時体制の社会空気と自分の生存するありようの隙間を、いかに息抜きをせずにむしろ潜り抜けていく女性の自我を表現できたかを明らかにしたい。

### 第一節 女性の社会的役割と自己実現への成長——「乳房の悲しみ」を中心に

アメリカの心理学者マズローが「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生きものである」<sup>12</sup>と仮定し、人間には生理的欲求、安全欲求、社会的欲求、承認欲求（尊重欲求）、自己実現欲求という5段階の「欲求」があり、一つ下の欲求が満たされると次の欲求を満たそうとする基本的な心理的行動をもっている、としている。第5段階だけはこれまでの欲求とは質的に異なっているとされて、最初の4欲求を「欠乏欲求」、最後の1つを「存在欲求」とまとめており、自己実現を達成できた人は数少ないとされている。自己実現欲求は自分の世界観・人生観に基づいて、「あるべき自分」になりたいと願う欲求を指す。

『デジタル大辞泉』によれば、自己実現とは、「普遍的、絶対的自我の実現が究極の目的であり、それに導く行為が正しい行為だとする」<sup>13</sup>倫理説である。19世紀イギリスの哲学者グリーン・ユングは、自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現してゆくことは人生の究極目的であると主張した。

この理論を踏まえて、近代日本女性文学の主要テーマをみると、生理的欲求と安全欲求を満たしたうえ、上の社会的欲求、承認欲求、更に自己実現の欲求に発展していく変遷を辿っている。具体的には、明治女性文学は家父長の桎梏からの逃走のテーマを経て、大正期の家制度にジェンダーへの気づき、引き続き、昭和前期の家・性差を含め社会体制への批判的眼差し、更に戦後のフェミニズム／ジェンダー批評の高揚期を迎え、女性文学のテーマは公的市民権利やアイデンティティから個的自己実現の私的領域へと深まっていく<sup>14</sup>。「乳房の悲しみ」はまさに時代の先を走り、女性の内的深層を剔抉して、自己実現を求める新たな文学のテーマの展開を準備する作品ではないかと言える。

—

「乳房の悲しみ」は昭和12年3月号から5月号の『婦人公論』に連載し、『佐多稲子全集』第2巻に収録された。佐多稲子は「くれなる」の好評を受けて、続けざまに「乳

房の悲しみ」「樹々新緑」「素足の娘」など、女性解放に目覚め、自己実現への意欲に燃えている、すぐれた抵抗文学を書き続けた。作品内時間は、執筆時期とほぼ同時代と思われるが、佐多にとって「灰色の午後」内の時間と重なり、「灰色」の時期であり、苦闘する日々でもある。

この作品は、佐多が最初の結婚で生まれた娘の康子（佐多の長女葉子）に向けて、自分の離婚と再婚の原因というのを手紙文という形で叙述した。プロットの展開、物語の叙述、人物の造型はすべて一人称の「私」を主人公としているため、強烈な直接性を持たせて、佐多本来のリアルな表現が浮かび上がってくる。自分の最初の不幸な結婚、娘が生まれたが離婚することになり、そして新たな恋愛結婚に飛び込むために、苦しみながらも娘を九州の両親のもとで自分の妹として育てられている母親（佐多自身）のことを書いている。作品内時間を確認してみると、佐多稲子は1925（大正14）年に葉子（作中の康子）を生んだ。第一章で8歳の康子が九州へ発つ際に「満州へゆく兵隊さんを大勢載せた汽車が通る時」だったから、実際の時間とぴったりしていると判断できる。そして、12歳で帰京したから、転向時代の重い空気の中で、作家として夫婦生活に矛盾を感じ、続いて摩擦が生じる「生活範囲が狭く」「灰色」の時期である。「くれなゐ」の中で「私は書くわ。女の、いろいろな苦しみや、悲しみを書くわ」と明子が叫ぶように、「乳房の悲しみ」では「私」は「愚かしい女の悲劇の仔細と、それから一人の誕生によって、初めて表面の嘘と忍従の犠牲の大きさに自覚した女の顛末とを書こう」と決意を表明したうえ、「愚かしいこの悲劇、女の歴史を支配したこの悲劇（略）もまたはっきり見定められねばならないのではないか」と呼びかけたように、この作品は単なる娘の生誕以来の母親の喜びと悲しみ、生きがいと不安など個人的人生の描写だけではなく、女性全体の問題を描いている。

「乳房の悲しみ」では、作者は母親の娘に対する愛情の深さから書き始めている。冒頭はホームの大時計の針は、三分、二分と「妹」の康子（本当は娘）を載せた汽車の到着する時間が迫ってくるにつれて、「私」は感情がふくれてゆく。「富士」が構内へ入ると、私の視線は集中して「窓のひとつひとつにお前の顔を見落とすまい、と異常な早さですべった」。そして、私の作った「服をきて、小さく腰かけているお前の顔を見つけた」。「ふくれる」「視線を集中する」「見落とすまい」「異常な早さですべる」と、この一連の動作は、母親の一刻も早く娘に会いたいという切実な気持ちを表している。それに対して、4年ぶりに母親との再会を迎える娘も、「迷いもせずまっ直ぐに私を見つめ、それが私であること認めていた」。康子は8歳のとき、暗い帰郷をした。その時から4年以上たって12歳になっている。お父さんが亡くなり、その淋しさを慰める気持ちも含めて、生まれると間もなくから8歳になるまで育った東京へ、女親の優しさで夏休みのひと月をそこで過ごさせようと旅立たせたのである。母の愛情、そして母と娘との絆というものの強さと微妙な関係を表現している。時代がいかにか違っているとしても、人間本来の感情は変わらないものである。



それから、「私」が康子を含め父の違う三人の子供を連れて近くの海岸で夏を過ごした思い出をたどった。「自分の愉しさを、お前たちの満足にまで強要しようとさえしている」。「その夏の生活は得難いものなのだ。子供たちとだけ朝から夜への毎日と一緒に過ごしているなどということは。」と、母の気持を真摯に物語った。夜になると、「一人がすれば一人も意地になって、おっばい、おっばい」とふざけ始める。「お前まで、私の胸に顔を押しつけてきた」。その時に、「私」は思い出した。

お前が三歳のとき、(略)私はお前を連れて銭湯へ行った。(略)お前は、湯桶の中で、ぴったりと私の胸に自分の肩を押しつけてよこした。(略)お前はその感触をじっと味わっていた。ときどき私の顔を見上げては密かな笑いをおくってよこした。そして私の身体のうしろに立って、鏡の中の私の胸にじっと見入っていた。私がそれにふと気づくと、お前は、にっと微笑、素早くすくいとる仕草で、私の乳房を目がけて両手を差し出してよこした。そして、「そのおっばい、取っちゃお」と、おませなことを言って妙にごまかした。言葉には現わさぬある欲望を、三歳のお前はすでに感じていた。

乳房は人類文化にとって「母」と「生産」を象徴する身体部位とされている。今は審美的・性的な対象に変貌したが、本来の母的な根源的生命の次元だけではなく<sup>15</sup>、母と幼子とのつながりを維持し、母性の愛を象徴するイメージは消失していない。逆に、子どもにとっておっばいは、「命の源」というほど、男の子でも女の子でも、親しみ深い場所であり、母に甘えたい気持ちを表している。それなのに、「私」は思い切ってまだ小さいお前を両親のところへ預け、自分のための人生へと歩みだしたのである。すでにいろいろな感情の陰翳を経験し、敏感に触れるものを持っていることに気づかせられる。「私」は、「お前の淋しさが思いやられ、辛かったのである。お前を淋しさに突きやったということが私自身も淋しく、辛かったのである」。母親としてこの決断をするときの難しさが読み取れる。

## 二

作品は娘への愛情を抱えながら、母親の内なる葛藤、反省、悔恨を描出している。佐多稲子は父18歳、母15歳という若さで生まれた長女である。戸籍は別にしているが、両親のもとで無事に育てられた。母が病弱ながらいつも祖母の叱りから娘を庇っている。小学校に上がる時、当時のハイカラの白いエプロンをして、下げかばんも、他の子どもと違い、ぼたん色の光った繻子の布でできている。母が亡くなる前に、7歳の佐多へ「ヨクベンキョウシテ、ヨイオクサンニナルヨウニ」と鉛筆で片仮名の返事を書いている。これらの記憶から、「私は自分の誕生が、父と母の若き日の愛情の結果であることを誇

りもし、喜んでいる」。母の遺言も佐多に大きな影響を与えている。佐多はよい奥さん、よい妻になろうとしている。大正12年2月10日に発行された『文藝通報』3巻2号に「空想」をタイトルにした詩を載せている。

もし出来る事ならば  
私は、私が三つほしい  
その内の一つは  
さゝやかな美しいカフェーの  
若い女主人として  
音楽会に舞踏会に  
華やかに姿をあらはませう

その次の一つは  
静かな高台の町に  
歌沢のねゞもるゝ  
一つ家のあるじとして  
黒しゆすのゑりに  
いちようがえし それであて  
詩に歌に創作に  
静かに筆をとりませう

その次の身は  
やさしい妻として母として  
万事に主婦ぶり發揮しつゝ  
つゝましくあの方の元に侍ませう

ここに書いているように、佐多稲子にとっては、社会進出、文学創作、良妻賢母は自分の理想的女性像であるが、しかし、現実はそのを許さなかった。最初の夫に新婚旅行の夜に、「貧乏人は金の使い方がわからない。あればあるだけパッパと使っちゃまう、気をつけろ」と言われ、屈辱の思いをかきたてる。続いて、二度目の結婚も結局夫の背信に遭う。理想と現実の隔たりが大きいことこそ、彼女の内面の苦しみと葛藤と悔恨を深刻化した。

「女は毎日の生活の範囲が狭くて、そこから抜け出る道は見出すことさえできない状態、こういう環境に」身を置かれるとき、「自分の運命を変える唯一のものとして結婚へ希をかけるのだ。そして」「そこに尚一層の狭い柵がある」。当時、丸善の店員をしている心境について、佐多稲子は、『年譜の行間』では、貧しい娘が他人にうしろ指さ

されまいとするには、身を固くするしかない。あたしは、うしろ指さされたくないという気持ちで懸命に、変に意地っ張りに暮らしてきた。毎日毎日、朝になるとそこへ通いながら、道々、この線路で死のうかと考えて、ニヒリスティックな心理状態になっていると述懐した。暮らしの貧困と戦い、懸命な生き方と仕事ぶりに疲れて、鬱屈しペシミスティックな心境に陥った。ちょうどその時、上役の紹介で、資産家との結婚に踏み切ったのである。この玉の輿に乗る結婚はやはりうしろ指さされるもので、「私の間違いであった最初の結婚」と反省して、悔恨した。その後、「一婦人作家の随想：隠された頁」<sup>16</sup>にも書いたように、夫の病的な嫉妬、言葉の侮辱、力の暴力や神経衰弱に苦しめられる。「心に平常を失った人の不幸と、それに捲き込まれて行った私との生活は、陰惨と怠惰とであった」。子どもを宿したことを知らずに二度も自殺を謀ったが、どうやら命を取り止めた。ところが、「私」はやはりいじらしく、子どもが生まれたら夫の態度も違うかもしれない、好転するのではなかろうか、もう一度やり直してみようと考えて、結婚生活に幻想を抱えた。それについて、「私の安易な、狡い願いからお前の誕生をもたらしたということは、私にかかわる人生への不遜であり、「女は、自分が生むのだという自然の強さによって、生むことについてはある逞しい神経をも与えられているのかも知れない。あるいは言いかえれば一種の鈍感さであろう」と自覚する。

女の不幸が満ちているとき、子供の誕生も決して喜びの中にばかり迎えられはしない。陰惨な日々の中で、「お前」は「私」の中で成長を続けている。しかしながら、「私」には「お前」の誕生を喜ぶ余裕がないのであった。

佐多稲子が自分の性格について、「よく言えばさっぱりした、悪く言えばねばりの足りないもののあるのは幼時あまりに転々と住居を変えていった、これも長崎の街中でのことだった、ということなどが作用している」<sup>17</sup>と述べたように、佐多が作品に描かれている社会的弱者は、強者に臨んで決していきなりに抵抗するのではなく、常にまずは一步譲り忍耐をして、堪えきれないときに抵抗をするのである。「私」は夫の繰り返す疑いの言葉や狂的な振る舞いに絶望の底で、彼の気のしずまるまで侮辱に堪えていなければならない。しかし、生まれてくる「お前」を一番強く自分の胸に感じた。「私」は自分の生活を自分の手で保ち、その上、生まれるお前を自分一人の手に引っさげて暮らしてゆこうと思ひ立ち、家を出てしまった。これらの表現で、忍従に耐えきれない抵抗を示した。

ところが、その抵抗は徹底的ではなかった。よその地で一人である時、「私は心細く、頼りなく、我が身がみすぼらしく感じられるばかり」だったため、「私」を探している人たちのところへ帰っていくのである。

こうして、こんな錯雑状態におかれた「私」は間違った結婚と母親の苦悶を率直に娘に告白したのである。と同時に、大正時代の男権社会では、女性の、妻や母の社会的役割に縛られて自由にできない、個としての弱さを剔抉したのである。一人の女性が忍従から抵抗へと繰り返しながら成長していく過程を紡ぎだしている。

### 三

間もなく、お前が誕生した。しかし「お前」の誕生により、夫の態度が好転するどころか、「私」の暗い生活が一層の暗澹さで繰り返されねばならなくなった。

ああ、なぜ女は、愛もしない結婚に身をゆだねるのであろうか。愛情の自覚なしに、ただ世の中のしきたりへの服従のために。そして子を産むのである。

自分の運命を変えるものとして結婚へ望みをかける女の愚かしさ、しかも結婚して形成されるべき愛情の生活は子どもの誕生に希望を託す女の忍従による悲劇、そしてそれに繋がる子供の不幸を見定めなければならないのである。「私」は、子供のためにも離婚してはいけないという考え方が一方にはあるが、それ以上にこの生活を続けていくなれば、子供も完全に育てられない。子供を育てていかれないということで、「私」は離婚に踏み切ったのである。しかし、当時は、明治31年公布の旧民法第877条第1項に「子ハ其家ニ在ル父ノ親権ニ服ス」と規定されたような父権であるし、「私」には生活の経済的な余裕もない。さらに、「お前」は小堀家の相続人だから、普通籍は抜けない。それにしても、子どもは離すまいと必死になっていた。愛のない結婚生活でも子供のために堪えられるものなら堪えてゆく、多くの母の悲しい運命と違って、「お前の一生の保護のために、たとい、父親であろうと、その男の生活雰囲気のために、一人の子供の一生がゆがめられるならば、母親はそれに抗しなければならぬ」と考えて、世間の習慣を破った。そこで、将来の計画はないが、子どもときからずっと働いてきた経験の上で自信を持っているから、一人で新しく始まる生活について不安は全く感じなかった。その上、父性愛に欠くことがないように、両親の養女にしたのである。生まれた子供への母としての愛情はかけがえないのないものである。葛藤した末に、子供を中心にした理性的選択をしたわけである。

出戻りで、子どもがあつて、自殺未遂など、世間から悪く言われることは世間への怖れにもつながるが、「私」はこれから自分の思うように生きよう、世間の目に縛られまいと決心した。そのために働かなければならない。働こうと思う暮らしの中で、自分自身は、スカッとしている。人間のそういう生理的な状態の、生命の原動力のようなものを感じており、肉体的にも精神的にも爽快な気分である。しかし、その時は、女が働きたくても、働く場所も職業もたくさんなかったが、たまたま近所のカフェで女給として働き始めた。そして、よくカフェにくる『驢馬』の人たちに出会って、人生を変える転機を偶然の中で迎えた。

よって、『驢馬』とその同人との出会い、またそのうちの一人と恋愛し結婚して、さらに文学の道に導かれた。「この一人の子を産んだ若い女は、新鮮な姿にかえり、総て

にむかって敏感な反応を用意して立ちむかっていたのである」。すでに生活の澁刺さを避ける必要がなく、窮屈だった自分の過去に軽蔑的な目を投げている。本当の青春、輝ける新しい生活を迎えてきた。それはさておき、新たな恋愛の前で、新たな選択をしなければならなくなる。それは、「お前」を選ぶか、それとも自分自身の思うことを欲することにするかの二者択一に直面しているのである。育児と自己の追求との間にせめぎ合いがあることを吐露するのである。そのうえ、当時、子どもを生んだ以上、子どものために、母親の自我が消失し、わが身を犠牲にしてまで尽くさなければならない規範のため、父親から反対された。

康子はすぐ大きくなるよ。女の子だから、きっとお前のためになるよ。ほんのちょっとした辛抱だよ。女は一度お嫁にゆけば、もうそれでたくさんだよ。あとは子供だからね。

祖母に話したら、「子供はすぐ大きくなるよ。だからやっぱし子供を大事にして」とやっぱり反対だった。

母は子どものために一生捧げるべきなのか。「お前」が「私」の長い生涯を「お前」にしぼりつけようと欲するか。「私」は両方に引かれる辛さで身体が引き裂かれるようだった。悩みに悩んだ結果、自分の一生を子供のためにとというのは嫌だし、子供のために苦労して、一生ひとりで通したら、子供が成長したのちに、そのことが子供の重荷になり、負担になるのではないか。

私は初めて自分の人生を持とうとしている。再び愚かな遠慮で、自分の人生を犠牲にしたくない。(略) 私は自分の母としての愛情を疑っていない。けれどもそれに負けてはいけない。(略) 再び人生の後半期になって、わが生涯の失敗を眺めるのはいやだ。そしてお前と、私と、ともどもに生きようと思う。どちらが犠牲になるのでもなく、二人とも生きよう。

新たな恋愛がもたらした新鮮さ、澁刺さ、さらに文学への覚醒、いわば「私の人生はこの十年のうちにすべて華を開いていた」。この二度目の選択によって、自分のあるべき姿を認識でき、一人の女の自己実現への出発を呼びかけている。しかし一方、

私の視線は、二つの愛情の間をさまようていた。その時の私には、もうお前のために、広介兄さんとの愛情を捨て去る、ということも不自然なものになっていた。

(略) もしこの不自然さをあえて犯して、お前との生活に生涯を捧げたとき、片りんばになった私の愛情は、のびやかでない、変態的な強烈さでお前にそそがれるのではないだろうか。(略) 私の淋しさ、お前の苦しい思いやり、苦しければこそ母

への思いやりがお前の負担になるのではないだろうか。そう思う時、私は戦慄の身内に走るのを感じたのである。

と述懐したように、将来の母娘関係をも配慮したうえでの選択ともいえる。

以上のように、「乳房の悲しみ」は「お前と私との間に目に見えず横たわっている愛らしき悲哀は、（略）お前の少女らしい感傷の色彩によって、その愛らしさは灰色の色調を濃くしてゆくのではないかしら。（略）私はそれを拒まねばならない。お前のために、そして私自身のために、二人をつなぐ親愛の情のために、そして真実のために」、手紙文という文体を使い、乳房にまつわる回想を通して、身体と心の感受、母親の切ない心情を切々と訴えると共に、波乱に満ちた生活と、母としての喜びと恋愛との間で葛藤する女の複雑な内面を描出した。その描出を通して、苦境からの逃避、妻として夫への忍従、母として子どもへの切実な愛情から、世間のしきたりへの抵抗、さらに自分の人生を持つとする自己実現を求める道程まで、一人の女の成長を語った。そして、その成長の過程、母親の語りと重ね合わせて、自らの物語を語る人間——作家として自己実現へ向けての成長の過程なのである。それこそ、作家の生への誠実さを映りだしている。却って、仮に子供に縛り付けられ、離婚に踏み切らず、あるいは、新たな恋愛を諦めたとしたら、プロレタリア文学という場がないだろうし、物を書かなかっただろう。

長谷川啓は「恋人も子供もともに獲得する権利意識は、語る母の過去も現在も、持ち合わせてはいなかったものと思われる」と指摘し、彼女の到達した「ともどもに生きよう」という〈母性〉観については「確信をもって母と娘がともに生きる思想を主張できた」<sup>18</sup>と高く評価した。

そして水田宗子編『家父長制とジェンダー』（城西大学出版会、2014・3）収録の「母性を問う——〈母と娘〉という主題」では、ヒラリー・ゴスマンは「彼女は、自分が今、娘のためということで自分の愛情や幸福を犠牲にしたとすれば、娘が成長した時、そういう母親を負担に感じるだろうと考えるのです。母親としての自分の現在にも、娘の将来にも、自分の人生を生きる権利があるという考え方は、今なら当然かもしれないが、昔の日本では勇気のいる決断だった」<sup>19</sup>と称えた。

更に、ヒラリー・ゴスマンが、子供のために犠牲になった母親は子供の親孝行を期待し、それによって子供が親のために犠牲になるという悪循環を呼び起こすものだと指摘し、親子の間に起こる問題に対する、佐多稲子の洞察がここで明らかにされていると<sup>20</sup>評価した。

確かに、現在では女性として結婚か離婚か、夫婦間には破綻が生じた場合、子どもがあるために新たな恋愛を選ぶか諦めるかの自由度が高くなった。しかし、現実の問題として、産む性である女性の経済的、精神的な自立を確定させる環境が整っていないため無理にうその家庭生活を維持した女性もいれば、婚姻が不幸であっても、子どもに両親が健在の家庭を与えたほうが子供の成長によいと思われ、自我を放棄して我慢している

女性も少なくない。逆に、自我を求める名義で、責任感がなく、子供の成長を顧みずに一途にわがままな態度で生きている女もいる。特に現在の中国では、子供を過剰保護して、母親が自我を抹消してまで子に奉じる、或いは子供を溺愛しながら管理しすぎており、潜在意識ではいつまでも子供を自分の手の内に置こうとするのである。他方、子どもは子供で、そんな親に甘えながら逆らってもいる。このように、心理的問題の多くは親子関係のゆがみから起きている。そういう意味から、「乳房の悲しみ」は、現代に通じる母子のねじれた問題や、現在の女性の実体にもつながり、母性の発揮が、自分の成長や人生選択を阻むのではないかと悩む、今日を生きている母親にも示唆を与えてくれるアクチュアリティを持った作品といえよう。

## 第二節 自我を求める過程の阻害と葛藤——「女三人」を中心に

水田宗子が『ヒロインからヒーローへ』において、自らの自我を見つめることによって一人の人間になろうとし、自己実現を追求する近代女性の最大の課題は、恋愛であったといってよいだろう、と述べている。恋愛こそは、近代的個人主義の、そして自由思想の中心的概念であり、近代的自我にとって最も重要な課題であった。特に女性主人公の場合は、恋愛こそが個人の自由を担う思想的根拠でもあった。二十世紀前半の女性の社会参加も、女性の自立に欠くことのできない必要条件である。しかし、個体としての女であることを主張した近代の〈自由な女〉は、恋愛を通して、自己実現をはかろうとするとき、制度の制約を受ける一方、女性の自我——その充足と表現への意志にも関わり、女性の〈本質〉が語られる背後には、女性の自己主張と、その自己表現に対する男性の自我および制度との葛藤がある<sup>21</sup>と述べている。佐多稲子の描いた女性の自己実現は決して恋愛や自己を求めるためにいっさいを顧みずに一途に追求するのではなく、制度の制約を受ける一方、個体として、自己を確認したうえで自我を追求する。つまり「ものごとを鋭角的にとらえない、あるなだらかさの故でもあるらしかった。それでいて私には権力に反撥する強情なものがその底にいつもくすぶっている」<sup>22</sup>のである。この「なだらかさ」、「意地の強さ」は、まさに佐多稲子の庶民的感觉である。それは、消極的に困難な生活境遇に堪え、現状を諦める力となるが、または、社会的弱者である女性一般の生活感情と生活の知恵を理解する助けともなるのである。こういう複雑で微妙な感情や態度は佐多稲子の生き方を支えているだけでなく、作品の主人公にも投影している。

本章第一節では母娘の複雑な絆をめぐって、母性の社会的制約を超えて、女性の自我を獲得する一人の女の成長と育児との衝突、そして過去を告白することにより母娘が和解に達すると同時に、母親としてその悔恨から救い上げる過程を述べてきたが、本節では、「女三人」をめぐり、恋愛と社会参加の視点から、女性の自己実現を阻む要素とその内面の葛藤を読み解く。

戦時下、国家権力の弾圧により、プロレタリア文学運動が壊滅し、軍国主義にひた走った暗い時代において、「昭和の女性文学は階級への自覚から出発するが、やがてジェンダーによる抑圧や疎外の剔抉と、ジェンダーを逆手にとって現実を超越しようという試みにたどり着」いた<sup>23</sup>。佐多稲子もこの時代の流れに乗り、夫との夫婦関係の荒廃をきっかけにジェンダー／フェミニズムに対する関心をこれまで以上に深める。もともとある「市民根性」の故、「庶民という存在の自覚、同時に庶民を読者の対象とする小説形態をも志向させることになる」。1940年3月に刊行された「素足の娘」以降敗戦までの佐多稲子の小説について「通俗的傾向を帯びることになった」<sup>24</sup>。「女三人」はこのような時代を背景に書かれたのである。

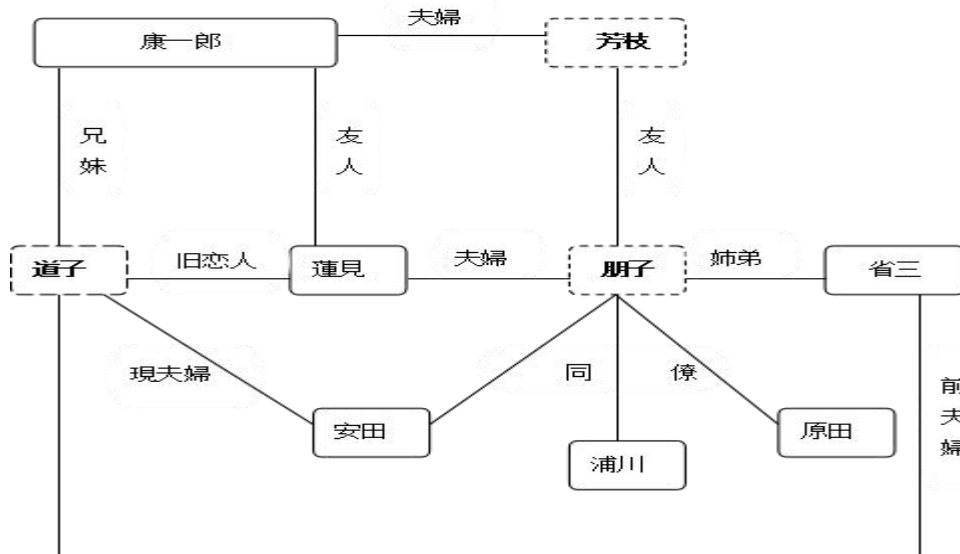
「女三人」は最初「心通はゞ」を題にして、1937年5月13日から11月1日まで『静岡民友新聞』朝刊に連載されたものである。連載される前に『静岡民友新聞』朝刊に「作者の言葉『心通はゞ』」を載せてある。1940年5月20日に、「女三人」と改題して、時代社から単行本として発行された。この間、同じ内容を、それぞれ1937年8月に「女人連盟（『大新京日報』）、1940年1月に「女人開花」（『樺太日日新聞』）の題で連載された。「例え経済的理由によったとしても倫理的に問題がありはしないか」<sup>25</sup>と渡邊澄子が「女三人」の解説で指摘したが、上述したように、樺太と大新京はいわゆる外地の新聞である故、当時では稀ではない現象であり、倫理的問題にならないだろう。

では、「女三人」はどんな作品かといえば、キーワードとして「恋愛」「社会進出」をあげなければならない。夫婦関係の危機と破綻を味わった佐多稲子はその苦痛を「くれなゐ」と「灰色の午後」（1960年）に自伝的に訴えたのに対して、「女三人」は中間小説として、戦時下の特別な時期に、女性が恋愛結婚や社会進出の際の、自己実現を阻む自他の要素をリアルなドラマとして展開している。

まず、登場人物の関係を粗筋も含めてまとめてみる。

#### 人物関係図





上の図に示したように、小説は女三人の道子、芳枝、朋子を巡って物語っている。道子は兄の康一郎三人家族と一緒に暮らしている。兄嫁の芳枝を通じて、その友達である朋子とも友人になった。道子は兄の大学時代の友達で、今も同じ会社で働いて、よく康一郎の家を訪ねるやや古風なサラリーマンである蓮見とは小さい頃から親しんでいたの、「自然に現在のやうな結婚といふ関係がお互の間に約束された」。しかし、朋子の弟である省三が現れたため、道子は蓮見との結婚話を拒んで、無職の省三と同棲したが、「可哀そうな、馬鹿な、仕様のない、弱気なくせに、ずるいところもある」省三は隣に住んでいた誰かの妾であるおはまという年上の人に誘われ、道子を裏切った。

芳枝は専業主婦として、夫が自分の友達でもある朋子という異性に対する好意に焼きもちを焼き、疑心暗鬼を生じたが、良妻賢母として描かれている。

一方、朋子は小さい会社の上司である浦川の性的嫌がらせを拒んだため、やめさせられたり、次の会社の、蓮見の友達である原田からも仕事を口実にして横浜はずれにある別荘に呼ばれて、性的関係を強引に要求されたりしたが、うまく逃げてしまった。

作品は最後に「陽春」で示したように、女三人と男五人の絡み合った関係は、結局、道子は朋子の旧同僚安田と、朋子は蓮見と結婚して、芳枝は康一郎との間に二人目の子を妊娠して、省三は「満州」に勤め口があって行ったというように円満に結ばれている。

要するに、物語は女主人公の三人による三人の関係から広がっていくのである。つまり丸の内の会社でタイピストをしている道子と専業主婦の兄嫁である芳枝と、一年前に夫に死別した、銀座の裏にある三人しかいないしらけた侘しい「化粧の新聞社」に勤めている、芳枝の友達でもある朋子との関係である。次は、道子は兄と、兄の学生時代からの親友であり同僚でもあり、そして許嫁でもある蓮見との関係である。それから道子と朋子と朋子の弟である省三との関係である。省三は道子の一目惚れの恋人で、しばらく同棲したが結局別れた人でもある。また、道子と省三の間に第三者である年長のおはまの介入、道子との結婚話が破綻した後の蓮見と朋子の新恋愛、離縁した道子が朋子の旧同僚安田との間にほのめかしたデリケートなつながり。さらに朋子と安田と浦川との

旧同僚関係、蓮見の仲立ちによって彼の高校時代の同窓生である田原の洋品店に職を得た朋子と原田との間の上司と秘書の関係である。

というように、三角関係の構築も用心深い。通俗に言えば「女三人寄ればかしましい」「女三人寄ると富士の山でも言い崩す」「女三人寄れば市をなす」「女三人寄れば囲炉裏の灰飛ぶ」「女三人寄れば着物の噂する」と、やや女のことをそしる響きがあるが、「三」だと、一つの平面ができ、無限に広がっていき、複雑で錯綜した関係が作られ、物語性が豊かになるばかりでなく、立体感も呈するといえよう。津島佑子が「悲しみについて」<sup>26</sup>の中にも「三引く一は二」といって、家族としてはやはり三人でいると平衡が保たれ、調和がとれるように考えられ、二となるとバランスが崩れるようなもので、「三」の不思議さにも気づいているらしい。したがって、女三人の間にどんなストーリーが展開されるか読者に一種の期待を与えている効果がある。そういえば、佐多稲子文学の世界を見る場合には三人による物語は実に多い。「女三人」はともかく、「キャラメル工場から」のひろ子、父親と祖母、「くれなゐ」の明子、岸子と広介、「素足の娘」の桃代、父親と川瀬、「四季の車」の章子、佳枝と志津子、「灰色の午後」の折江、数子と和歌などである。また、作者の実生活を見ると、その身上にはよく「三」により結ばれた人間関係が形成されていく。例えば、宮本百合子、壺井栄と、原泉（中野重治の妻）、玲子（中野重治の妹）との女同士の関係、それから鶴次郎、田村俊子と、鶴次郎、玲子と、中野重治、原泉との微妙な男女関係などのようなつながりの中に、佐多稲子文学が育まれている。

「小説の言葉というのは、すべて仕掛けられた言葉」である<sup>27</sup>。作者はわずか十人の間に結ばれた多重な三角関係を巧みに織り込み、関係人物の邂逅、絡み合い、苦悩などは、会話文や行動を大量に駆使して描き、動的画面をクローズアップしてドラマ同様の効果を与えてくれている。

## 二

「女三人」は上述したストーリーを通して、三人三様の女性の恋愛結婚と社会参加に焦点を当てている。

作品内の時間については、前掲の北川秋雄の「太平洋戦争前夜の佐多稲子」では、「小説時間は1937年の晩冬から翌年の春までと考えられる」<sup>28</sup>と書いてある。小林美恵子の「『女三人』論」では「作品内時間は昭和12年春から翌春までの一年間と確認できる」<sup>29</sup>と意見が違っている。作品の内容を辿ってみると、小説の最初の「待ちぼうけ」の章では「今年はこのまゝで春になってしまふかしら」と書いてある。そして「真夏の愁ひ」の章では「その劇場は、松竹資本によって今度新しく浅草に建築されたもので、今月の初め開場前から新聞にも書き立てられてみた」。つまり劇場開幕は1937年7月3日なのである。続いて「海邊にて」「秋のはじめ」と「陽春」というタイトルのように、1937

年の春から、夏、秋を経て、翌年の春までの一年間と判断できる。

「女三人」に関しては、「はじめに」に述べたように、北川秋雄や渡邊澄子は、この小説の通俗性が、戦争協力へと発展してゆく危険性を孕んでいることを問題視して、高く評価しなかった。それに対して、小林美恵子は、

そこ（「女三人」）には、女を狭い世界に閉じ込める、男性中心社会への、いくつもの批判や抵抗が込められていた。ことに、家父長制下の女たちが、そこで生き抜くために見せる、連帯と分裂の構造は興味深い。彼女たちは、男性と対峙するときは規範外の同性同士として連帯し合うが、家父長たちの傘下にあるときは、彼らの代行者となって、また別の連帯を作り、抵抗する同性たちを疎外してゆくのだ。<sup>30</sup>

と、女たちの連帯と分裂に目を据え、フェミニズム批評の視点から、女性の内面を剔抉し、佐多稲子の、女たちが抱えている問題の所在を見抜く鋭さを評価した。

20世紀30年代に入って、『恋愛と結婚の書』『私の恋愛観』『国民結婚読本』『結婚新説 恋愛結婚か媒酌結婚か』など、「恋愛論は、一時旺んに新聞雑誌を賑はしてみた。私の恋愛論もその時分に書いたものであるが、私がこの恋愛論でひたすら求めたのは、やはり女性の幸福であった。」<sup>31</sup>というように、佐多稲子は女性の恋愛問題に関心を寄せて、女性の幸福を問いただしている。一方、この時は女性の社会参加が旺盛な時期でもある。当時、軍国主義政府が、労働力不足を女性で補うべく戦時動員を図り、戦争遂行のための人的資源、物的資源を総動員することを目的とした国家総動員法を発令する。「社会的、国家的に重大な意味を以つて言はれる生産力としての婦人への要求」は「今の時期は決して単純に婦人の成長のために、婦人の進出をうながしてゐるのではない」<sup>32</sup>とはっきりと認識している。「女三人」はこういう時代を背景に恋愛結婚と社会進出に光を当てて、女性の自我を阻む外的要素と内的葛藤及び女性の自己認識を軸に描かれている。

まず、家長代わりの兄から阻まれた道子の生き方についてである。

道子は兄夫婦と一緒に暮らしている。許嫁で兄の友人である蓮見が怪我で入院した時、「道子を寄越してくれ」と兄の康一郎に願ったため、仕事を休んで看病してほしいと命じられた。「だつて、そんなわけにはゆきやしないわ。幾ら何だつて、やっぱり勤めてゐる以上は無責任なことはできないわ。」と道子はいつて、不服を示し休まなかった。

そして、退院後、一時兄の家へ休養に来ているとき、蓮見は「会社は休めないの」と聞いたら、道子は「やっぱり一人でも休むと、他の人たちが迷惑するのよ」といつて、婉曲に拒絶した。

荷物をとるために、彼の留守宅を訪ねる道子が、

蓮見の家には這入つてゆくと、軽い恐怖でそはそはした。が、蓮見の部屋の押入

れから蓮見の着物を出してみたら、男性の體臭がさつときて、彼女は急に、自分の一生に約束された蓮見の権利のやうなものを感じ、まるで感覺的に、ほんとうに縛られてゐる縄でも解くやうに、ぶるつと身體を揺すぶつた。

と描いたように、道子は許嫁の蓮見に不愉快を感じ、縛りから飛び出そうという気持ちだった。

途中、朋子の家へ寄って、帰宅が遅かったため蓮見が不機嫌だったのに、道子は、「蓮見は、そんなちよつと時間のおそくなつた位に不服をいふ権利があるかしら。」と腹を立てた。さらに、

「蓮見さんは、恋愛なんてお考えになったことある。」

「私たちはずつと長いこと、私の子供の時から、いはゞいつのまにか決まつてゐるやうな間柄でせう、やつぱりこれは恋愛かしら。」と聞いたら、

「何だつて、今頃急にそんなこと言ひ出したんです。」

「今恋愛論は流行っているから。」

と蓮見はくだらない質問と考えて、軽く、冗談に流すようにいった。

こういうように、蓮見とは話が対等にできない、子供扱いされることを不服に思う道子は、蓮見との結婚をためらった。

蓮見の態度と対照的に、劇場で偶然に出くわした省三は、道子が劇場で彼の前を通る時、「その長い膝を思ひきり引いて通してくれた」。座席に忘れたハンドバッグをとる時、「とつて上げませう。」と代わってくれた。そして荷物を抱えている道子に出会ったら、「荷物、僕持ちませう」と断る道子にかまわずその包みを取った。更に恋愛については、

恋愛は誰か選ばれた人間だけに許されたものでせうかね。第一、恋愛は、恋愛をしようと思つたある日、すぐ次の日から出来るといふものぢやないでせう。また反対に、ある思いがけない機会に自分でも豫期しない印象が焼きついてしまふ。そういうものでもあるでせう。恋愛なんて、好きだ、と思ふ感情ですからね。あらかじめ決めておいて左右出来るものではないでせう。

と省三が言ったのに対して、

私ひとりぢやないんですの。(略) 私たちのお友達なんかみんなかういつてみますのよ、恋愛の相手が周囲にゐないつて、(略) つまり現在の青年に魅力を感じないつていふんですの。

と道子が平静な調子で反発した。それに対して、省三は怒るところが、むしろ「愉快だな、ちょっと。女の人たちがタンカを切つてゐる」といって、蓮見と全く違った態度を描出している。

古風で、家長ぶりを發揮して、女を自分の従属として支配する蓮見に対して、新鮮な、自由恋愛を唱え、若い女心を察し、その言葉をうまく読みとり、そして喜ばせる行動を伴う、対等に話ができる省三に惹かれて、道子は動揺をし始めた。そこで、蓮見との結婚を数か月後にひかえ、別れる決意をした。しかし、「私はやっぱり普通の女だから、世間並みに結婚したい気持ちがあるの」。「私世間の目を恐れてゐますわ」。「習慣を破らない範囲で普通に結婚をしたい」と言って、自分からきっぱりと蓮見を断り、そして省三を兄のところへ行かせてその許しを得なければならない。このように、道子は世間の道徳やしきたり、親身な気持ちを配慮して、回避、家出など極端な行動を取らない。

道子の選択に対して、兄の康一郎は、道子が蓮見の頼みを忘れたとき、「今から未来の旦那様の用をないがしろにしちゃ困るね」と、亭主孝行主義を取っている。

更に省三が無職を理由に、「お前はよっぽど封建的圧迫でもしているやうに思ふかも知れないが、とにかく俺のいふことを聞いてみれば間違ひはないんだよ。」「俺はやはりお前に苦労させたくないとおもつてゐるんだよ」という兄の話を聞いて、道子は、

「だけど、兄さん、幸福つて何なのでせう。女は自分では幸福は見つけれられないのでせうか」

苦労しないのが幸福なのであらうか？人形のように兄の手から夫の手の中へ渡れば苦労はないのであらうか？女が自分の希望に身を任すのはいけないのだらうか？

と心の中では再び疑問を繰り返し、兄の「保護」いわゆる「束縛」から逃げ、素直に恋愛を求めようとしている。

残念だが、省三が呑気やで、口だけうまく、生活力が欠乏しているため、道子は二人の生活を維持するため、カフェの女給に転職した。しかし、省三は道子が夜いない間、隣の年長の女に誘われて、曖昧な関係を持つようになった。改める機会を与えられたが、なかなか関係を絶たなかったため、別れてしまった。最後に、道子は朋子の友人との間の新たな恋愛が始まる。

こうして、家父長制の下で、家長である兄に順応しており、一見して弱くておとなしいようだが、仕事と恋愛の大事なことについては絶対に屈服しない。夫の無職でしっかりしないところは受け入れるが、浮気については大目に見られない。つまり自分に重大なことになれば、あくまでも個を貫き、堅持すべきことを譲歩しない、はっきりとけじめをつける芯の強い女性と言える。にもかかわらず、個を主張する手段として、真正面の衝突、過激な抵抗、生意気な辛辣さをとらず、説き伏せて、しなやかな戦い方をとつ

た。最も重要なのは、作者が読者のために、自分の人生は自分で決める女性像を描写してくれることである。女性の幸福というのは、やはり、人生の選択の間際に、誰にも強いられなく、たとえ家父長から阻まれても、自分の判断で是か非か判断して、受身ではなく能動的に選択できることではないか。たとえ失敗しても悔いはせず、そこに立ち直る。それこそ作者の唱える真の女性の解放であろう。

次は社会進出において阻害された、見かけは強く見えるが芯の弱い勝気な朋子の生き方についての描写である。

社会活動した夫に死なれて、地方から上京して、無職の弟省三と一緒に暮らしている朋子は、厳しく身元を調べる大手会社には入れない。

そういふ過去の生活を持ってあるからこそ、過ぎたことに恋々としてゐるのは現実の敗北だ、と思って、気持ちを振ひ立たせ、現実の生活の中で自分を鍛へるやうに、あのよごれた新聞社へも通つてゐる。然しやっぱり彼女は、しばしば暗くなる自分の気持ちに負けるのであった。——だれも、自分を支へて呉れるものはない。——私が一番強いなんて。——鼻っぱしばかりなんだわ。——結局、私も弱い女なのだ、誰かに頼つてゐなければ暮らしてゆけないのだ。すぐにもほとぼしるやうに泣けさうになって涙が浮いてくるのを、彼女はきゅっと胸を引き締めて、かつかつと靴音だけ舗道に調子をつけて歩いてゐた。

つまり、朋子の場合、自ら進んで社会進出を選ぶ道子と違い、生活に追われ、やむを得ず社会に進出しているのである。外見にはさっそうとした感じの彼女のその姿の上に、境遇や胸の内に、悲哀が絡む複雑さを抱えていた東京のよそ者として、誰かに頼りたがるが、頼れるものは誰もいない。ただ一人の弟も、気楽で気弱である。「早く確りしてくれればいいな」と歎いている。彼女は生きるために働かなければならないのである。

しかし、会社では上司の浦川の性的嫌がらせの食事の誘いには朋子はいつも「今日も用がありますの」ときっぱり断る。そのため、仕事を辞めさせられてしまった。後、蓮見の友達である原田のところへ勤め口があつて行つたが、やはり強引に性的関係をもたされようとしたが、幸いにうまく逃げてしまった。

当時の男性たちは、女性をみるとき、既婚者と未婚者を明らかに分けているという。独身の若い女たちは「立ち入り自由の草刈り場」として、男たちの面白半分のゴシップの話題にされて、めいわくすることひととおりでなかった<sup>33</sup>。こうして職場で度々虐めやセクハラに悩まされてばかりいる一方、可哀想な、馬鹿な、仕様のない、弱気の弟への配慮や世話を余儀なくされる女性が描出された。結局、道子と違って、軍需工場の仕事を持つ、規範内の都会人であるし、女を「保護」する、いわゆる伝統的家父長の蓮見と結婚するのを選択した。「結婚したいといふ恋愛が生じない限り、具体化されない」、

いわば、結婚をして、保障が出来る、安定した生活を得ることができた。

このように、都会人に対して地方から来た外者の孤独、頼りなさ、虐められる境遇を嘗め尽くしながら、無理に頑張っているためには恨みつらみを自分の中に溜め込み、内に弱みを隠して、強く見せる女性を描いた。ところが、朋子は世俗の男に対する抵抗を示す新しい女性として描かれた反面、仕事を通して自分の価値を実現させようとし、自主的に社会へ進出する女性の姿として描出されていない。むしろ生活に追い込められ、いわゆる受身の形で社会へ進出して経済的自立をはからざるを得なく、道子と異なり表に強く見えるが内面が弱い女性でもある。そのため、蓮見との結婚を通して、自分の欲する生活を手にしたのである。

最後に、自分の運命を夫にかけて、自ら進んで良妻賢母になろうとする芳枝の生き方についてである。

康一郎の妻である芳枝は専業主婦として、夫と家庭だけを生活のすべてとして生きている女性である。「女つてどうせ泣き虫なものよ。泣くやうなことが多いんだもの」「女つてほんとに損ね」と知りながら、「亭主孝行」をして妻の座に甘んじている。夫が他の女に引かれるかと心配して、疑心暗鬼を生ずる。そして、常に3歳の娘を利用して、夫を試したりする。子供の語られ方も、佐多稲子文学を読み解くときに見逃せない要素の一つである。第一節の「乳房の悲しみ」や「くれない」「灰色の午後」などの名編に澁刺とした健康的な子供が随所に配置されるばかりでなく、「子供」「子供の眼」「童話」「電話」等のように子供をテーマとする作品は少なくはない。常に子供を、母親の気持ちを紛したり、母親の精神的支えとしたり、また母親に利用される道具として描いたりした。一方それらの行為に気付き、戒めて反省する母親をも描き上げている。こうして佐多稲子の小さくて弱い子供への深い愛情も所々みられる。

道子がわがままの出来ること、朋子の澁刺とした表情、特に夫の朋子への褒め言葉はこれらすべてが彼女を苛める。ところが、日曜日に休んだ夫が「よかったら、今日お前出かけてもいいぜ。俺が留守番してゐてやるよ」といったのに、「日曜なんて混んでますし、たいてい獨りで子供なんか連れてる人ありませんもの、そんな中に行くのは厭ですわ」。こうして、自由時間を与えられても、却って、世俗の目が気になり、その時間を一人で楽しめない。道子と劇を見に行く約束したのに、夫が早く帰宅するという夫の一言で、約束を破り、快く家で夫を待つ。こういう不平不満を抱えながらやはり夫に抵抗できなく、従順に従う一人の女性の姿である。

しかも、自分の家の安定を守るために、すべての邪魔者を排除する努力として、仮想敵の朋子を蓮見に結びつけることにより、一安心ができた。いわゆる家事や子育ては捌けるが、社会進出に自信がないため、家に閉じこもり、浅薄で嫉妬深く、夫に頼りきり、独立性に欠けている、自分でもコントロールできないセンチメンタルな女性のパターンである。

しかし、作者はこういう女性には「陽春」の章で、

二度目の出産を控えてゐる小柄な芳枝は、身體を持ち扱ひ兼ねてゐるやうに重い動作で食事の片づけに立ってゐた。康一郎は美代子を膝に抱いて、夕刊の漫画を読んでやつてゐた。

(略)

「あゝあ、重くて仕様がな、胸まで悶へてくるんですもの。」

「だから、女中が来るまで家政婦を頼めつていつてるぢゃないか。」

康一郎は、いたはりと煩わしさとを等分にした目づかひで妻を見た。

(略)

「ほんとうに自分ながら馬鹿だとおもふわ。道子さんでも朋子さんでも、なんてえらいんでせう。だけど、私には、とても道子さんのやうな真似は出来ない。あなたに馬鹿されても、やつぱり私はあなたに喰つついてゆくよりほかに仕方がないわ。」

褒めるのだとも、けなすのだともとれる愚痴をならべ始めたが、この頃は神経がたかぶり易くなつてゐるつまのことを思つて、康一郎は多くはいはなかつた。

と書いて、芳枝の「亭主孝行」、依怙地な忍耐や嫉妬や閉鎖性などに対して高みから批判的に断罪はしない。むしろ深い愛と理解をこめて、自分の欲しい生活を保つたというハッピーエンドに結ぶことにより、もう一つのパタンの女性の生き方を描いた。

### 三

次に、この三人をめぐる男性に触れてみる。丹野康一郎は典型的家父長であるように、家庭に責任をもち、仕事に頑張り、友達に親切にしながらも、頑固ではなく融通が利く気質の持ち主である。蓮見はやや古風であり、マザコンだが、決して病的ではない。道子との別れは惜しいが、執拗に追いかけず諦めて手を離す。恋には情熱を燃やさないが頼りになれる性質である。省三はのんき屋で、独立性や自律性に欠乏しているが、女の気持ちを察して配慮をする新風な青年である。彼は自分の苛立と自己嫌悪、焦慮と意欲に揺れながら、妻に慰撫を求められずに年上の女との情事に逃避している。ジレンマが背信行為を招き、それゆえ苛立や自己嫌悪が募る。いずれも弱みのある男子である。しかし、これらの男性があつてはじめて、女三人がそれぞれ落ち着く場所を得て、ハッピーエンドで結ばれるわけである。もちろん、佐多稲子は「女三人」の中で読者のために人間関係上、男にしても女にしても生きていく上での理想的な絵を描いてくれたかもしれない。しかし、それは、当時、女手一つで五人家族を支え、夫の浮気を耐えて隠し、隣組に異様に見られた様々な葛藤や苦悶を抱えた作者の望みであるといつても差し支えないだろう。



実際には、世の中は完全なる平等とはただ一つの理想にすぎなく、今まで一度も実現したことはないともいえる。まさに五本の指を出してもその長さも違うし、それぞれの役割も違う。だから平等を求めるより、男にしても女にしても人間は自分のことを正しく認め、自分の求めていることを明確にし、各々分相応、能力相応の（つまり自分の能力範囲）ことをすればよかろう。身の外に認めてもらうよりむしろ身の内を凝視し自分独自の道を歩んだ方がよいのではないか、という佐多の主張を読み取ることができよう。芳枝のように、「道子さんでも朋子さんでも、なんてえらいんでせう。だけど、私には、とても道子さんのやうな真似はできない」と自分のことを承知したうえで、「やつぱり私はあなたに喰つついてゆくよりほかに仕方がない」と「亭主孝行」をし、家族のために奉仕する人生を選択しても悪くはない。実を言えば、家庭に専念にしても必ずしも悪いというわけではない。小からいうと、世の中の基本細胞——家庭、つまり結婚相手と子供のために働く。大には、自分の手によって家庭の安定と調和を作れるし、相手が気安らぎに外の仕事ができ、子供を心身ともに健康に育てられれば、社会への貢献にもつながるに違いない。ただし、ほんとうの幸福感が持てるかどうかは、社会制度の保障や相手にもよるものだから、頼りにならず脆いものであるにちがいない。また、道子のように、蓮見の、会社を辞めて看病してもらおうとする要求に不服であったら、きちんと合理的な理由で断り、蓮見が自分を愛していることが分かるが、「どういふ風に愛してあるのだらう」と疑念を抱えるとき、「このまま結婚をすることがこわくなったの」と明言して、兄の望む範囲にとどまるのではなく、兄の反対も押し切って、自由恋愛の相手の省三の身边に飛び込んで行ったほうが勇気であり、チャレンジでもある。しかし、恋愛の新鮮さや「女性に対する外見だけの取りつくろひの上手な」省三との同棲はいつか平凡な現実生活に浸されては、必然的に価値観上の矛盾が遅かれ早かれ浮上してこざるを得なかったのである。いくら両方とも努めて迎合しあっても、結局破綻してしまった。今度の失敗に直面して、道子は、

だって、二人の生活だつたんですもの、あの人だけが悪くないわ。それはよくわかるの。生意気みたいだけど。（略）私にしてみれば、私からのぞんで這入った生活だつたんですもの、だれに苦情いつても仕様がないわ。それだけは私、自分でしつかり認めようとおもふの。（略）二人の生活が不幸だつたことを、もし過ちだといふなら、それは私たちが若かつたからだわ。

と悔恨でもないし、過去への詠嘆でもないほほえみを浮かべて言った。つまり、自分で自分の人生の道を選んだから、たとえ挫折しても、人生の大きな経験だったので悔いはない。それこそ女性の真の意味における解放で、幸福だと思わざるを得ない。

さらに朋子の場合においては、夫に死なれて無職ののんびり屋の弟を連れて地方から上京した。夫が社会活動家である故、彼女の仕事探しは容易ではなかった。その辛さは

想像もできないわけではない。しかし「勝気な気性なので、他人とみる時はいつも、からつとしてみるやうな態度で、笑って冗談口もきいたりしてゐるのだが、ひとりになると、彼女の顔は急に瘦せたやうになり、瞼などが蒼味を帯びてくるのだつた」というようであつた。とうとう、安定した生活を保障できるような、やや古風なサラリーマンの蓮見に出会うと、今までの強がりを見せた堅持が崩れ、夫が友達の道子との恋愛事件を持ったことがあつても敢えて一步を踏み出した。

女三人はそれぞれ違う悩みを抱えながら人生を送るが、今後どうなるかわからない。しかし少なくとも皆それぞれ自分の意思を貫き、自分の選択した道を歩むことができた。にもかかわらず、「陥穽」の章では、朋子は田原に郊外にある別荘まで仕事で呼ばれたとき、途中から、助手席に移り、「自分の唇で煙草をくはへ、マッチをすった。ふっと一息をはいて」渡したという一連の行為は普通の男女関係をこえたと察していながら、

朋子はなぜか、田原と一緒にだといふことに、心の片方では妙に安心なものを感じてもゐた。行く先に妖しい危惧があるくせに、田原と一緒にならどこへ行つても困ることはない、といふやうな任せ切ることの出来る安心であつた。率直に言い当てゝ見れば、何處へ行かうと原田が連れてゆくならば、羞づかしいことや引け目を見ることはあるまい、といふやうな、至つて物質的な頼りであつた。それだけに妖しい危惧は、彼女の気づかぬまゝにそはそはする期待にもなつてゐるのであつた。街中へ自動車が入り、街燈の明りで、二人並んでゐる運転臺に、人の視線が止まることがある。すると、朋子は羞恥心と同時に軽い見栄えをも感じた。

このように、陥穽であることがわかりながら、栄華富貴の前で、見栄えに負けてしまう若い女性の動揺が鮮明に描かれた。

以上述べたように、「女三人」はフェミニズム／ジェンダーの視点から見れば、女性ということ壁にぶつかつたり、矛盾を感じたり、そういう色々な苦痛を感じたりする社会的な問題において、本当に時代を超えて共感できるものがあつた。家庭か、仕事か、あるいは両立かの選択で悩まされたり、女性に対して、恋愛、結婚は何を意味しているか、本当の幸福とは何か、今も問い続けられている。作中における女三人のように、自分が自分であることを誠実に受け止め、自分で自分相応の人生を選んで、たとえ挫いても悔恨しない態度は私たち現代人に必要ではないかと思えてならない。

要するに、「女三人」は恋愛を主線として、家庭や職場において、女性の様々、男性の色々、男女関係（夫婦間、恋人間、同僚間）の微妙さを巧みに描くことによって、女性の解放とは、自分らしい暮らし方を選ぶことにあると述べている。苦渋に面した時の切り替え方によって、人生も変わって来るといふように、佐多稲子に特有な、物事に執着しない割り切り方でそれぞれの人物を書き上げた。

### 第三節 制度内に生きる女性の自我の追求——「気づかざりき」を読んで

水田宗子が『ヒロインからヒーローへ』で以下のように論じている。近代文学が恋愛を一大テーマとして扱ってきた限り、女性の自我が文学に反映されないことはありえなかった。文学上の女性像をみると、三つの明確な型が見られる。第一は、社会内、あるいは制度内における性役割期待に基づいて、制度的存在としての女性の理想像である。制度内に調和的に生きる女性の理想像である。第二の型は、不満分子としての女性、性役割期待に応えない、人並み以上の知性と自我を持ち合わせた女性、調和的に制度内に生きようとしめない型である。第三の型は、理想的な女性像を、特に救済者としての女性像を制度外に、あるいは制度を超越する存在として描きだす型である。そこで、フェミニズム／ジェンダーの視点から、女性を批評する場合、二つの言説に分かれている。つまり「ひとは女に生まれるのではなく、女に作られる」という有名な命題のもとに、産む性としての女性の本質＝母性が、制度や文化の構造に先行して存在することを否定して、女性研究にひとつの道を開いたボーヴォワールの先駆的な言説があった。一方、それを批判的に乗り越えようとして、女性を制度や文化構造の受け身的な産物であり、被害者であるという見方をしりぞけて、いまだ未知な〈女性なる文化〉の深奥を求め、男性との差異としての女性を強調し、女性特有な身体や性的あり方、表現や想像力や価値観を肯定的に評価する、フランス派フェミニストをはじめとする、産む性＝母性肯定のディスコースが展開された<sup>34</sup>。

以上の論を踏まえて、佐多稲子の生き方とその文学を見れば、疑いなく、女性の特有性を肯定したうえ、いかに制度内に身を置かれながら、縛られずに、自分の求める生き方を成就できるかという佐多稲子自身の生き方であり、描かれた女性像でもあることが鮮明に浮かび上がってくる。

—

「気づかざりき」は1942年7月1日から12月1日まで『婦人日本』に連載された同時代の長編小説である。2000年11月に『近代女性作家精選集 047』として、「南京の驟雨」と合本してゆまに書房により出版された。本稿ではそれをテキストとする。

小説の時代背景は、1941年1月に閣議決定された人的資源確保のための「人口政策確立要綱」による国策結婚宣伝の時代である。「女性報国の道」「結婚報国」というスローガンのもと、〈出征〉兵士の結婚のための一時帰国が許可されるなど具体的な施策もきめ細かく決められる<sup>35</sup>。女性にとっては結婚難・早婚時代でもあるといわれている。

小説の舞台は、作者がよく知っているし、住んでもいる市民の生活雰囲気が濃厚な大塚の横町に設定している。「生まれた家が小市民根性そのものである勤め人階級であり、(略)その小市民根性を多分持ってあるのであります」<sup>36</sup>と佐多自身が言ったように、こういう環境に暮らしているため、自然と周りの人目を気にしながら、世間のしきたり

を身につけ、規範内に生きざるを得なかった。

物語は会社の女事務員宮永昭子を中心に、専業主婦の実姉の正子を副旋律にして展開されている。昭子は会社の同僚山本から自分の友人の萩原との見合いを勧められ、会った。初対面からお互いに好意を持っていたため、山本から、「萩原は、あなたに是非お話ししなければならぬことがことがあるといふのです」と伝えられて、昭子は、萩原と二度会った。そこで、萩原が〈出征〉中の兵士であること、一か月の休暇の間に結婚するようにと部隊長に命じられ、〈出征〉先の海拉爾から一時帰国したことを知った。こういう事情もあり、また劇場や駅での度々のすれ違いのため、二人の関係はとうとう結ばれなかった。しかし、萩原が戦地へ戻った後、昭子は「愛してある、ということがどんな場合にも強くて美しいのなら、自分はその勇気を出さなければならない」とやっと気がつき、萩原に手紙を書けるようになった。

一方、昭子が同居している実姉の正子は、夫の辰夫が〈出征〉しているため、その留守をしている若い妻の苦労をよく味わったため、昭子から萩原の事情を聞いて、「あなたの幸せになるやうにと思って」、〈出征〉中の萩原との縁談に反対している。昭子の目に映る正子は、立派に子供を育てて、その態度や気持ちが立派であるし、偉い人である。

「気づかざりき」に対しては、北川秋雄は「通俗的な恋愛小説が、戦意高揚の宣伝小説に墜していく」<sup>37</sup>と批判しているが、小林美恵子は「被害者としての女性の姿を描出した物語」<sup>38</sup>と読んだ。岩淵宏子は「ファシズムが支配していった歴史を」「その抑圧と抵抗という双方向から鮮やかに跡づけている」と高く評価している。

本節では、「女三人」に続き、太平洋戦争に入った半年後に書いた「気づかざりき」を視座に、厳しい時代において、制度内の女性はいかに恋愛を通して自我を求めて生きていくかを読み解く。

## 二

前節に述べたが、佐多稲子の内に潜んだ理想的な女性像としては、「空想」という詩に描かれるように、仕事、社会活動、家庭が三立できることである。佐多稲子の昭和という長い時代を生き抜いた足取りは、何度も何度もつまずき転んでも、その都度立ち上がり、顔をあげ、自分の歩幅を確かめるようにしてから、曲がりくねった道のりを再び歩き出した。負けず嫌いの気持で「空想」を現実に変えたのである。昔から、貧しい人の味方となって、闘った人だけに、そうした婦人達が何を考え、何を求めているかをよく知っている。そのため、作品を通して読むと、描出された女性は、破滅型ではないし、救済者でもない。むしろ、女性の特有性を生かして規範に調和しながら自我を保ち強靱に歩み続ける女性ばかりである。

「気づかざりき」の昭子はそういうように描かれている。昭子は会社勤めで22歳の独

身の女性である。同僚の「山本も日頃から昭子の勤めぶりの真面目さや、利口さや、優しさを知ってみて」感心しているため、自分の友人萩原との縁談を持ちかける。いわば、世間一般の理想的女性像である。一方、山本の縁談の持ち掛け方は垢ぬけのした社員型からみれば、水に油を落としたようになじまなかったが、昭子は彼の素朴で、大変仕事に熱心で、真面目なのを見抜いているから、この時の山本の話も昭子は素直に聞いた。昭子自身の生活態度も、そして人を判断する基準も素朴で真面目であることで世間並みである。

そして、紹介される相手萩原は「ある自動車工場の技師」、「昭子より六つ年上の二十八歳」、「郷里が九州の福岡」「二男」であり、「東京では妹と二人で暮らしてゐる」という。昭子にしては「結婚難」の時代に希有な好条件なので、「結構なお話」として、姉と相談したうえで「お返事いたします」という。唯一の家族である姉の意見を大事にするという庶民の一般的感情である。

お見合いの日に、自分の美しさを知っている昭子は彼女らしい自負心もあり、彼女のような娘の持つ誇らしい気持ちが許されないため、いつもより飾り立てることを恥とする。しかし「それは、明らかさまに見て欲しい、あとで相手があざむかれたやうな思ひなどしないやうにといふ気持ちだった」。だから傲慢ではなく謙虚なものである。4行のうち2回も「傲慢ではない」と強調して書いている。一般市民として「傲慢」を恐れ、謙虚を美德とする心情を明らかに描出している。そこには人生に対して「慎しみを知る」<sup>39</sup>作者自身の、「思い上がり」を厳しく戒める思いを込めているといえる<sup>40</sup>。

昭子が萩原に逢って、「頭を丸刈りにして」「陽に焼けた顔が」「何か憂愁に似たものをただよはせてゐる」が、「ものおぢしない肩つき」と「地味な、素つけなく」「頼もしさ」、特に「普通の男女の間にはない」し、「会社で働いてゐる時に同僚の男社員が見せていない」、また義兄が示したものでもない「いたわり」が感じられ、男らしいと認め、好意を持っている。「あなたが、もし、出してもいいと思はれるなら、僕宛に直接、手紙をください」と言われたら、昭子が萩原の心の内をもわかったようである。もし自分の心が決まれば自分の一生は決まってしまうという気もある。そう思った瞬間、昭子は二人の男に「威圧されつづけてゐたやうな、變に淋しい氣がした」。ところが、次の日に、山本が「萩原は、あなたに是非お話しなければならぬことがあると言ふのです。」「それについては僕にも責任があるのですが」と聞いたら、何かわけがあるらしいということがわかって、相手の萩原の印象は心底では納得したものがあって、何でも堪えてみせるという彼女の心に張り合う氣力を植え付けているものらしい。しかし、萩原から自分が〈出征〉中の兵士であること、結婚のために一時帰ったということを告白されると、昭子は言葉が出なかった。彼女の見構えて対抗するものは、後妻であるか、子供があるか、或いは先妻との結末もついていないとか、そんな世間的なもので、全然別問題であった。そして、萩原が昭子に遠慮して「この話は白紙に戻してくださっていい」と言ったとき、「何とも言ひしれぬ恥づかしさと、困憊を感じた」。いままで自分

の世間的考えへの恥ずかしさと何でも持ってこいという身構えが崩れてゆく後の困憊である。

ここで、問題となるのは山本のやり方である。山本は萩原の事情を知ったうえで二人を引合わせたのである。しかも、「先生が子供に言ふやうに、口邊にやさしい微笑を浮かべて言った」のは、男としての威圧を示している。後は、「宮永さんには大変私はすまないことをしてしまったわけですね。かんにんして下さい。私はどうも、ただ、萩原君を尊敬してゐるし、宮永さんをも尊敬してゐるものだから。」と弁解したのはたとえほんとうであっても、戦地で死ぬかもしれない人と事実を伏せて結婚させるのは男優位の思考であるといわなければならない。それに対して、

山本はどんな気で私たちを引き逢はせたのだらう、と、あんまり子供っぽいやり方のやうな気がした。いい人なのよ、技師よ、などと姉に言ったことが思ひだされ、いい氣になつてゐた自分が姉の前にも恥ずかしい気がして、昭子は打ちのめされたやうになつてゐた。

つまり、萩原に好意を持っていながら、昭子にとって〈出征〉兵士との結婚はやっばり普通に考えられない話として捉えられているのである。こういう筋立てから見れば、国策や男性優位的な考えにとらわれずに、自分の意志で自分の生き方を決めるというひそかな抵抗を示している。作品の最後には、「萩原に手紙を書けさうな気がした」と書いたように、心が萩原に傾いたが、決して〈出征〉兵士に奉じるためではなく、萩原のことを愛しているという自分の感情に気づいたことを前提にするからである。ところが、二人があつて話ができた場面は2回しかなかったため、十分な時間をもって培った愛情とは質が違うものに違いない。あくまでもお互いの外的条件に引かれるわけである。

### 三

「気づかざりき」は佐多稲子が戦地慰問から帰ってきたあとに書いた作品である。なぜ佐多稲子が戦争協力に結びつく戦地慰問に行ったか。これが所謂「戦意高揚」の内容を含める作品を描いた動機に関わるため、述べておく。情報局第一部が昭和16年に出した「最近に於ける婦人執筆者に関する調査」は、昭和15年4月から約1年間、主な婦人雑誌8誌に登場した女性執筆者を調べたもので、それぞれの読者に対する影響力や思想的傾向を洗い出している。佐多稲子は、特に重要視されている作家群の中でも〈所謂、最前線にある人々〉で、〈指導的婦人の位地にあると見做される人々〉の筆頭に、林芙美子、吉屋信子とともに挙げられていると記している。さらに、佐多稲子についての評言を引用してみる。

窪川稲子は主として雑誌を通じて作品に、評論に其の鋭い洞察力を駆使し、何ものをも見抜き、純、不純を鑑別する能力は他に類を見ないように思われる。(略) 彼女のもので読者ががかなり批判的に、好意をもって見ているとすれば、よい傾向を辿る人である事は見とめられると思う。彼女の過去の情熱が、今、かかる時に好ましき方向に向けられるならば力強い限りである。此の意味に於て窪川稲子の今後期待さる所多い。<sup>41</sup>

ジャーナリズムの佐多稲子への戦地慰問招待は全く意図が明確で、国策の一環として図られたものであることが一目瞭然である。それに加えて、当時、夫婦の間の信頼が失われ、緊密な関係が崩れ、退廃的になっていくと、社会に対する自分の生き方、態度、思想的なことまで、退廃の色合いを持つようになる。更に、「素足の娘」が売れていたため、経済的にも退廃を許す条件ができたことにもなった。もう一つ重要な要因としては、戦争協力に結びつくような行為に対しては、夫の窪川は止めなかったし、黙って行かせたのである。

そのため、国家の立場に立つジャーナリズムの要求があるため、当時に思想的にも生活的にも佐多稲子は戦争協力の姿勢を見せかける以外しようがない部分もあろうが、1932年に発表した「帝国主義戦争のあと押しをする婦人団体」<sup>42</sup>には、

帝国主義戦争反対、ソヴェートを守れの活動は国際プロレタリアートによって闘われている。この八月一日は、国際反戦デーである。我々婦人もこの闘いに参加することによって帝国主義戦争をやめさせ、我らの勝利にむかって進もう。

と強く呼びかけたように、佐多稲子としては戦争の本質を知らないはずがない。だから、佐多稲子の「戦争協力」的小説を読むとき、直接に兵士の「勇ましさ」とか「戦闘意志」を描いたものは一つもない。殆ど若い女性の恋愛を通して、一方、ジャーナリズムにおおむね添うようなものを書きながら、随所に戦争による兵士を含める人間の不幸を巧みに編み込ませることにより、戦争を控訴するのである。

したがって、「銃後の守りはかくあってほしいという前線の兵士の願いが至上命令のごとき絶対的なものとして小説の前提になっている。(略)戦争の全体性をとらえる視点を生み出せなかった。どこまでも佐多の関心は、ヒロインがどのようにして、その前提に身を添わせていくかという一点にそそがれる。」<sup>43</sup>と北川が指摘した通り、確かに、戦争の全体性をとらえられなかったという点が認められるが、ヒロインが兵士の願いに身を添わせていくことを主眼とする理解にたいして筆者は疑問を持っている。それについて姉の正子の言動を見て検討する。

正子は夫の辰夫に戦地へ行かれた留守家族である。二人の間には3歳の男児が一人おり、現在第二子が間もなく生まれるところである。今の境遇には、昭子が同居してくれ

て、何よりの幸せであった。ところが「夫の留守ではあり、姉妹ふたりきりで、自分の現在の毎日も昭子のみてくれる方が心丈夫なので、昭子の結婚のこともあんまりはつきり思つたことがなかった」と自分の立場しか考えないことに気がつき、「この際昭子の結婚問題を何とか具体的にしなければいけない」と決意した。それなのに、正子は、山本の持ち掛けた縁談は無謀だとなじる気持であった。昭子の将来を考えて、妹を〈出征〉中の萩原へ嫁がせるわけにはゆかない。辰夫の友人で、今大学の病院に勤めている青柳のことを急に新しい角度で考え始めていた。しかし、昭子から青柳が間もなく出征することを聞いて、正子はぱつと赤くなつた顔を、陰しくした。「知つてりや、あなたをもらつて頂かうなんて言はないわ。」「これでもあなたの幸せになるやうにと思つて一生懸命考へてゐるつもりなのよ。」という。

正子は自分の場合すでに留守家族であるからこそ、その辛さと大変さがよくわかっているため、妹を兵士と結婚させた<sup>1</sup>ない。毎日、新聞を読んで前線で戦っている夫への不安、一人で頑張つて子供を育て、子供を産むという確りしなければならないという態度はやはり規範内の女性らしさとして描出されている。他方、戦争だからこそ、親身の人を自分のそばから奪われたし、いつも夫が死ぬかもしれないという心配に駆られて、不安に満ちた暮らしをしなければならぬのである。本当に「戦意高揚」の作品だったならば、姉として、妹を萩原のところへ嫁がせるはずだろう。そこには、佐多が従来のプロレタリア文学者として、戦争を反対する意図を込めていると読み解ける。

以上述べてきた通り、昭子にしろ正子にしろ男女の差異を認め、制度内の女性らしさを肯定しながら、個としての生き方を追求している。「お父さんはいちばん偉いよ。」「お父さんの武運長久をお祈りしてくるのね」。更に当時の「子を産めよ増やせよ」という国策にそつて、「この小さな頭が、私の勲章よ。二つになったわね」など時局迎合の色合いが確かにあるが、しかし一方、作者は平俗な表現であつたが、戦時下の女性が国策に束縛されても、自分の大事な恋愛は自分で決めようとする生き方と態度を明らかにしている。現在の日本はすでに世界一の長寿国になり、人口減少と「人生百歳時代」に邁進している超高齢の社会になっている。少子高齢化による社会危機を乗り越えるため日本政府の最重要課題として「女性が輝く社会」を打ち出して、日本及び世界における女性のエンパワーメント、女性の活躍促進のために取り組んでいる。しかし現在、ジェンダーギャップは世界で153国中121位。まだまだ克服すべき課題は多い。こういう時代こそ、女性自身には自己認識を要求され、女性解放とは何かを問わなければならない。

ちなみに、作品中の「結婚難」については、二通り読み取れる。いわば女性の立場から、若い男性が戦地に赴いたことにより難しくなるのは当たり前のことである。男の立場から見ると、正子が代弁したように若い女性は出征する男性と結婚したくないのも事実である。いずれも戦争が招いた「結婚難」である。

そういう「結婚難」を通して、作者のひそかな反戦の態度を巧みに紡ぎだしている



のだと言えるだろう。こういう風に戦時下の人々の日常とその微妙な心理をリアルに描出されている「気づかざりき」は「単なる銃後小説の枠組みを超えた歴史の証言」<sup>44</sup>を伴っている。

## おわりに

「くれなゐ」は佐多稲子文学テーマの転換をしめす作と言われている。それをきっかけにして、文学における社会的弱者表象は初期の少女労働者、工場の働く女性から男性優位の社会におけるあらゆる女性へと広げていく。それによって佐多稲子の女性の解放と自己実現に向かって羽ばたく意識が濃厚になり、社会的弱者へのまなざしは一層鋭敏になっている。

本章で取り上げた3編は共に戦時中に書いたもので、殆ど恋愛結婚をテーマに焦点を当てているいわゆる中間小説或いは通俗小説である。作者の言葉を借りて言えば、「平俗な表現」<sup>45</sup>をもって、家族のために、社会のために犠牲になるのではなく、自分が選んだ道を歩まなければならない女性の姿を見せてくれる。

社会的性役割——母性を認めながら、それに縛られることなく、大胆に自我を求める「私」、家父長の威圧に脅かされても、自己で自分の幸福を掴もうとする道子、国策や世間的規範が厳しい時代にもかかわらず、調和的に我を通す昭子のいずれも、仕事や恋愛、家族などに出口のない日常の苦しみを克服する若い女性たちの姿をリアルに描きだしているし、それらの生き方にひそかに戦争への批判を投影させている。

つまり、佐多稲子が表現するフェミニズム／ジェンダーは決して制度そのものを拒否している「不満分子」、或いは制度を超越する「救済者」ではないし、性別を余り問題としていない<sup>46</sup>。つまり性別より、まず人間であることに注目している。逆に本人同士の意志を無視して、他者により人生を決めることに対して批判的態度を示す。しかも、これらの小説はみなハッピーエンドで終わることにしている。それもやはり作品を通して、女性は自分自身のことをよく認識したうえで、生き方を選択し、自己実現を求めていればこそ、女性の幸福であり、真の解放であると読者に強く訴えかけているだろう。いわば佐多稲子は、無自覚的にせよ、家父長制や男性中心主義の社会体制や性差を批判することから出発した伝統的フェミニズム／ジェンダーによる批判の領域を一步越えて、自分らしさや正直さ、さらに女性の多様化への肯定を戦時中の早い時期に文学として形象化し前景化していたのである。

これらの作品を現在読み返しても、そのテーマのアクチュアリティに驚かされる。作者は、現在ますます複雑になり解決しがたい問題を鋭く描きだしたため、半世紀以上を隔てた今の女性読者も作品を読んで得るところが多いだろう。

最後に、作者の息子が母の回想文を引用したい。

「生涯の喜びを三つ挙げるとすれば、この朝日賞ともう一つがお前と一緒に初めてヨーロッパ旅行したことかな」

ここで、言葉を切って三つ目が直ぐには出ない。(略)

時を経てようやくにしてあかされたのであった。半ば恥じらいを滲ませながら母はこう述べた。

「初めて所帯を持って、掃除のためにハタキを掛けたこと」<sup>47</sup>。

それに若い時の詩「空想」を重ね合わせてみれば、作者の本質の一端——仕事、社会参与と家庭の「三立」を望んでいることを覗き見ることができるだろう。「母性」や女性たちの関係性をテーマに追求した津島佑子が佐多について語ったように、佐多は「女性であることを誠実に受け止めることという、非常に言ってみれば矛盾した感じのぎりぎりのところで自分の位置をさだめていらっしやった」、「女であり文学者であることにもっとも誠実に立ち向かった人」である<sup>48</sup>。そして、このテーマを作品に映しだそうとする作者の強い意志も感じられるだろう。

## 注

- 1 長谷川啓『佐多稲子論』 オリジン出版センター 1996年7月
- 2 佐多稲子「灰色の午後」 『群像』 1959年10月～1960年2月
- 3 2に同じ。
- 4 佐多稲子「時と人と私のこと(3)」 『佐多稲子全集』第3巻 講談社 1978年2月
- 5 長谷川啓『家父長制と近代女性文学』 彩流社 2018年10月
- 6 佐多稲子「時と人と私のこと(10)」 『佐多稲子全集』第11巻 講談社 1978年10月
- 7 小林美恵子『昭和十年代の佐多稲子』 双文社出版 2005年3月
- 8 北川秋雄「太平洋戦争前夜の佐多稲子——通俗小説的創作方法と戦争体制容認と」 『昭和文学研究』第26集 1993年2月
- 9 北川秋雄「佐多(窪川)稲子『気づかざりき』——戦争宣伝小説への傾斜」 『近代女性作家精選集』047 ゆまに書房 2000年11月
- 10 北川秋雄「「気づかざりき」と「南京の驟雨」の位相」 『同志社国文学』第23号 1984年3月
- 11 岩淵宏子「戦時下の結婚をめぐる抑圧と抵抗——佐多稲子『気づかざりき』／宮本百合子『雪の後』」 『国文学：解釈と鑑賞 別冊』 至文堂 2004年3月
- 12 アブラハム・マズロー著／上野圭一訳『トランスパーソナル宣言——自我を超えて』 春秋社 1986年10月

- 
- 13 松村明監修『デジタル大辞泉』 小学館出版 2012年11月
  - 14 岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史〔近現代編〕』 ミネルヴァ書房 2005年2月
  - 15 鎌田東二『乳房の文化論』 淡交社 2014年11月
  - 16 窪川（佐多）稲子「一婦人作家の随想：隠された頁」 ナウカ社 1934年8月
  - 17 佐多稲子『私の長崎地図』 五月書房 1948年10月
  - 18 長谷川啓「母が語る〈母の声〉、そして〈母と娘〉の光景——佐多稲子の自伝小説を読む」 『くれなゐ』第8号 1997年12月
  - 19 水田宗子編『家父長制とジェンダー』 学校法人城西大学出版会 2014年2月
  - 20 『女性作家シリーズ3 佐多稲子/大原富枝』 角川書店 1990年1月
  - 21 水田宗子『ヒロインからヒーローへ 女性の自我と表現』 田畑書店 1982年6月
  - 22 佐多稲子「くれなゐ」 『婦人公論』 1936年1月から5月
  - 23 14に同じ。
  - 24 8に同じ。
  - 25 渡邊澄子「佐多（窪川）稲子『女三人』解説」 『近代女性作家精選集23 佐多稲子 女三人』 ゆまに書房 第26集 1999年12月
  - 26 津島佑子「悲しみについて」 『群像』 1987年11月
  - 27 北田幸恵「在日、家族、居場所探しの物語」 『現代女性文学を読む』 アーツアンドクラフツ 2017年12月
  - 28 8に同じ。
  - 29 小林美恵子「『女三人』論——〈女たち〉の連帯と分裂」 『昭和十年代の佐多稲子』 双文社 2005年3月
  - 30 29に同じ。
  - 31 窪川稲子『女性の言葉／続・女性の言葉』 高山書院 1942年12月
  - 32 窪川稲子「明日を自らの手で」 『女性の言葉』 高山書院 1940年10月
  - 33 福永操『あるおんな共産主義者の回想』 れんが書房出版 1982年12月
  - 34 21に同じ。
  - 35 11に同じ。
  - 36 佐多稲子「自己紹介」 『女人藝術』2巻3号 1929年3月
  - 37 北川秋雄「「気づかざりき」解説」 『近代女性作家精選集』047 ゆまに書房 2000年11月
  - 38 小林美恵子「『気づかざりき』論——生贄にされる〈女たち〉」 『昭和十年代の佐多稲子』 双文社出版 2005年3月
  - 39 佐多稲子「つつむ」 『講談おんな』1巻 筑摩書房 1972年12月
  - 40 小林裕子『佐多稲子—体験と時間』 翰林書房 1997年5月
  - 41 内閣情報局「最近に於ける婦人執筆者に関する調査」 1941年7月

- 
- 42 佐多稲子「帝国主義戦争のあと押しをする婦人団体」 『働く婦人』 1932年8月
- 43 北川秋雄「「気づかざりき」と「南京の驟雨」の位相」 『佐多稲子研究』 双文社 1993年10月
- 44 11に同じ。
- 45 佐多稲子「時と人と私のこと(11)」 『佐多稲子全集』第12巻 講談社 1978年11月
- 46 野本泰子「佐多稲子のフェミニズム」 『九大日文』 2002年7月
- 47 窪川健造「三つの喜び」 佐多稲子研究誌『くれなゐ』第8号 1996年12月
- 48 小林裕子・長谷川啓編『佐多稲子と戦後日本』 七つ森書館 2005年11月

### 第三章 植民地化された「外地」の人々の苦境——ポストコロニアリズムの視点から

#### はじめに

一般的に、外地とは、本国土からみて、外国の土地のことを言う。本章でいう「外地」は第二次世界大戦の敗戦に至るまで、日本国家が、「本土」の外に出て領土拡大をはかった諸国・地域、いわゆる日本に占領されたアジア植民地のことをさしている。以下に述べる「満洲」は現在の中国東北地方であるが、「南方」という言葉にも、当時は「本土」から見た「南方」、そこへの進出を是とする気分が含まれた<sup>1</sup>。実際、「占領というのは、十五、六世紀以来、非常に重要な問題になってきている。占領という問題を除いては、現代の歴史、現代の文学は語れないといってもいい」<sup>2</sup>。19世紀末から20世紀の前半にかけて、アジア諸国を占領しその富や資源を強奪しようと、絶え間なく戦争を引き起こした日本は、明治時代の日清戦争と日露戦争を利用して、朝鮮半島の支配権を争い、朝鮮半島を自分の領土にした。同時に、中国の南満州（大連・旅順）の利権をロシアからゆずりうけて、中国進出の足場を手に入れた。1931年の「満州事変」、1937年の日中戦争、1941年の太平洋戦争と段階的に拡大していき、領土拡張、植民地主義のふくれあがりに対応していた。

「植民地主義とは、植民者に都合のいいように被植民者の記憶を拭い去り、入れ変え、再構成する過程」<sup>3</sup>である。この歴史の中で、文学はいかに表現しているか、いかなる役割を果たしているかについての研究は盛んに行われている。20世紀後半、第二次世界大戦後、世界が脱植民地化時代に突入すると、それまで植民地だった地域は次々に独立を果たしたが、こうした旧植民地に残る様々な課題を把握するために始まったポストコロニアリズム文化批評がエドワード・サイード、ガヤトリ・C・スピヴァクをはじめとして、西欧から発信してグローバル化しつつある。スピヴァクは自身が第三世界の女性の身分であり、人種、階級、ジェンダーなど多重の差別を体験したため、サバルタンなど非主流文化群体に対して積極的に関心を示している。その群体とは植民地宗主国の支配下における第三世界の、圧迫され、周縁化された下層の人々である。その中で第三世界の女性は社会的諸関係において無論より一層周縁化された「従属的・副次的」存在である。スピヴァクによれば、植民地主義が再生産する文脈において、サバルタンの歴史記述がなく語られないならば、従属的地位にあるサバルタンの女性はより深く従属性を被り続ける<sup>4</sup>。本章で取り上げた3編はともに文学的表象を通して植民地における現地人女性や外地における文化としての「他者」である宗主国女性の悲運と覇権への抵抗を描いている。2016年10月に翰林書房が出版した『昭和前期女性文学論』において、日本では、「女性文学とアジア・太平洋戦争のかかわりは、日本近代とジェンダーを考える上で核心的テーマである。前世紀末あたりから女性文学の「翼賛」の面からの研究が活性

化し、近年は「抵抗」についてもポストコロニアルの新たな視点からの研究が進んでいる<sup>5</sup>とする北田幸恵の指摘がある。同書には他に長谷川啓「女性作家のアジアへのまなざし——帝国主義日本の植民地・半植民地支配とその表象」、乾智代「川上喜久子——植民地支配秩序を通じて問う言語の主体性獲得の問題」などのいずれもポストコロニアルリズムの視点から「帝国」の〈外地〉と〈内地〉の抵抗の諸相を論じた論文が掲載されている。なお、佐多稲子に関しては、佐多稲子研究会のメンバーが戦時中と戦後の作品を読み直し、再評価を打ち出し、多くの研究業績をあげている。また2018年6月に書肆草茫々が発行した『草茫々通信12号』には矢澤美佐紀「佐多稲子『くれない』の現代性——大衆とのへだたり・子供の語られ方」、平原奈央子「書き抜き、生き抜く——「くれない」の時代と生活」、小林美恵子「百合子に語る「私の東京地図」——〈私の東京地図〉という矜持」、鳥木圭太「佐多稲子『歯車』に見る「政治と文学」——ハウスキーパーという再生産労働」、谷口絹枝「『灰色の午後』——〈夫婦の共犯〉意識の語られ方」、小林裕子「『溪流』——「わが家」はなぜ失われたか」が収録された。いずれも現在の視点に立ち佐多稲子の代表作の新たな論を展開してきた。しかし、「旅情」「白と紫」「髪の手紙」に隠されている、植民地における現地人や「他者」の戦争への抵抗、人種、階級、ジェンダーなどの差別への批判的視点から、それらの作品を論述するのはまだ不十分だといえる。本章では、以上のような多重圧に喘ぎながら生き抜く女性に焦点を絞り戦時下佐多稲子作品に表れる抵抗の様相を解読する。

戦時中、挙国一致体制を築こうとする政府と、その影響下にあったジャーナリズムは国民の関心を戦局に向けるため、作家の知名度を利用した。「素足の娘」でベストセラー作家となった佐多稲子は大衆から支持され、しかも政府とジャーナリズム双方から重宝される存在になった。戦時中の1940年6月から1943年5月にかけてのまる3年間、佐多稲子が植民地旅行、戦地慰問などで、朝鮮へ2回、中国満洲へ2回、台湾へ1回、中国中部へ1回、そして東南アジアいわゆる南方へ1回と、延べ7回も海外を回ってきた。

西田勝の「佐多稲子と『満州』」<sup>6</sup>では、当時の新聞や佐多の作品によって、佐多が「満州」で、何をしたかについて跡づけ、また、当時の新聞に発表された談話などをはじめ、当時に限らず、戦後に及ぶ作品も取り上げて、「満州」で何を、どのように見たかについて検証している。まとめていうと、第一回目の「満州」行きでの発言や、それを素材にしている当時の作品は、「満州国」——日本による植民地的支配を肯定する言葉はない。しかし、第二回目の「満州」行きでは全く異なる。当時の発言は、消極的であれ、全体として「満州国」を支持するもので、佐多の戦争協力は決定的に、この二度目の「満州」（1941年9月から10月）行きから始まったという結論である。

この結論に関しては、長谷川啓が『家父長制と近代女性文学』において、「最前線の兵士たちを目の当たりにした饅頭山（1942年5月から6月）での体験をはじめ中国戦地慰問体験が決定的な契機となり、以後、戦争協力的な発言が見られるようになった。」<sup>7</sup>

と判断した。

確かに、両氏が指摘した通りに、その後の作品には「女手ひとつで育てた祖母が万歳をして（少年兵を）見送る」（「生きた兵器」）というような戦意を高揚させる内容があった。しかし、北田幸恵が指摘した通り、総動員体制下、転向が強いられ、文化人の言論が厳しく統制された時期、「その活躍は翼賛と表裏一体で進行し、翼賛・動員に抵抗することは、断筆・沈黙・「国外逃亡」するか、さもなければ弾圧により生存が脅かされることを覚悟するか、という極限の選択を迫られた」。「女性作家がそれぞれ独自の経歴と体験、思想によって、（略）根底に独自の抵抗の思想を潜在化させ、現実の矛盾への鋭い告発、あるいは違和感、不同調を沈潜させていた」<sup>8</sup>様々な「抵抗の諸相」を示す。個人生活でまで特別に親しくしていた思想的文学的な仲間である宮本百合子の場合、人道主義、プロレタリア文学から、軍国主義と対峙して国を破る文学をへて、より広い民衆を包摂した反戦、反ファッショ、女性の解放を真正面から取り上げた抵抗文学を担った。百合子と異なり、佐多稲子の場合はむしろ鋭い自覚的立場を貫きながら、逃避・迂回の方法を用い、人間性の剔抉に目を据えて、弱い人間の抵抗と反戦、そして女性の解放、ジェンダー・階級・人種の差別などを副次的に作品の随所に配置することにより、弱者一般の苦境とそこを生き抜く強靱さを描き出している。

鳥木圭太の「女性作家の見た〈南方〉——林芙美子と佐多稲子のスマトラ」<sup>9</sup>では、林芙美子と佐多稲子が「南方徴用作家」として南方へ赴き、その経験をいかに作品に映したかを比較して論じた。両者が「南方」イメージによって彩られた土地で何を見、どのように作品の中で表象したか、そこから生み出されたイメージの差異を浮き彫りにした。林の、現地の人々と積極的に関わり合いを持ち、現地の人々の間に入り込み、彼らとのコミュニケーションを通して、その生活を内部からとらえ、人々を固有名を持つ一人の人間として詳細に描き出すのに対して、佐多の場合では、「髪の毛の嘆き」「虚偽」を例にして考察すると、むしろ民族の特徴や現地での生活の情景を一つの風物として捉えている。佐多は人種や民族の典型を人々の表情の中に読み取ろうとしているが、そこには彼女の意識に予め保存されている現地の知識やイメージがあり、そこから現地の人々の表情を意味づけていくのだと述べた。

以上の研究を土台にして、本章では、佐多稲子が戦時中、朝鮮、中国、南方など植民地行きの見聞を素材にした主な作品『白と紫』『旅情』『髪の毛の嘆き』を取り上げて、日本に占領された「外地」に生きる人々をどんな目で見て、いかに描写したのか、その視点と描写の意義を読み解いていく。

## 第一節 「内地」植民者女性の傲慢に対する現地人の抵抗——「白と紫」を読んで

「朝鮮」という言葉は、佐多稲子の生活の上にも、文学の上にも欠かせない要素の一つと言える。「分身」「樹影」などの作品に出てくる在日中国人を日本人以外の他者とし

て「華僑」で表現している。逆に、数多くの作品においては朝鮮人を自国の一部分として描かれているようで、在日の朝鮮人或いは植民地である「朝鮮」に強い関心を示している。

ざっと見れば、初期の詩作「朝鮮の少女1」「朝鮮の少女2」（『驢馬』1928年5月）から始まり、朝鮮のことをテーマにして描いたエッセイや小説のほかに、その他の作品にもよく朝鮮人を登場させている。「一袋の駄菓子」（『文藝春秋』1936年6月）には、朝鮮の子のチングワが「何をいたずらして叱られたのか、ぴったり締めきったガラスの戸の前で、目を腫らし、顔中を涙でぬらしてわアわア泣いていた。（略）手袋の内職をしていたこれも朝鮮の若いおかみさんが、立ってガラス戸を開け、えび茶色の朝鮮服の身体をのぞかせた」と、長屋の日本人家族と運命を共にする朝鮮人の一家族を描いている。「くれなゐ」（『婦人公論』1936年1月から5月まで）では、「この街での生活は、複雑な感想をいっぱいよんだ。朝鮮婦人もいっぱいまじって」いるとあって、朝鮮人との密接な生活感情を明らかにする。「樹々新緑」（『文芸』1938年5月）では、「労働者たちが睡むように揺られている電車の中で、ひとりいた朝鮮の少女が、ゴム毬をつき始めたこともあった」というように、朝鮮人はすでに日本人の日常生活にも溶け込んでいる。「素足の娘」（『新潮』1940年2月）では、造船所の職工が住んでいた村では、「山を切り拓いている朝鮮人の人夫が三人で」「外輪に足を交わす歩き方で、ゆったりゆったりゆ」きながら、「声を合わせて唄っていた」。「男の声にしては高い優しい声で、訴えるような、嘆くような、その独特のメロディーは、薄黄色い夕陽が下の方から射しているその土堤道にあんまり調和して、私は胸を締め付けられるような悲しさに襲われた」と、性的好奇心で悩まされた寂しさを朝鮮人の男の歌に重ねた。

更に「満州」についてのエッセイでも朝鮮人に触れる。「満洲の少女工」（『大陸』1941年12月）では、「毛織の本工場の方では朝鮮の少女たちも多く働いているが、この方には満人の娘はまだ殆ど働いてみなかった」と、「大連の印象」（『続・女性の言葉』高山書院1942年12月）では、足には何もはいていない「朝鮮のお爺さんの、のんきさうな品のよさに対して、満人のお婆さんは、一家の威を持ってゐる」と一言付け加えた。このように朝鮮人をいつも視野の中に置き、親しみを持って描出する。

しかも、エッセイ「朝鮮でのあれこれ」（『文化朝鮮』1942年5月）には、「かういふ朝鮮の婦人の、日本に住んでゐる生活を、深く取り上げて描いてみたいといふ希みは、私の長年持つてゐる希みなのである」と書き、更に、結びにも「朝鮮婦人の生活について、直かに共感と呼び起こすやうな作品に接したい。そして私たちもまた日本婦人の生活のみならず、日本に来てゐる朝鮮婦人の生活を、一度深く描いてみたいものだと思っている」と述べていることから、いずれ小説に書くことを念頭に、関心を寄せ続けてきたことが窺える。そのため小説の所々に朝鮮人の姿を現しているが、その希みをやっと成就したのは戦後5年目の「白と紫」である。



「白と紫」は朝鮮戦争が開始されて間もなく、1950年9月に『人間』に発表、1957年10月の「人形と笛」に収録、その後『佐多稲子全集』第5巻（講談社）に収録された。また、2018年9月出版された『[新編]日本女性文学全集6』にも選ばれた。しかも1994年に学藝書林により出版された、膨大な作品から、佐多稲子が自選した短編集は、その書名を「白と紫」にしたことから、この短編は佐多稲子にとってどれだけの意味を持つかが浮き上がってくる。

「盧溝橋事変」以降の戦時下において、佐多稲子は、流行作家、美人作家として何度も招待される形で、植民地を回ってきた。1940年6月から7月<sup>10</sup>にかけて、朝鮮総督府鉄道局の招きで、壺井栄を誘って、朝鮮視察旅行へ赴いた。今度の旅行は佐多人生の「外地」行きのお火となり、1年後の1941年7月に、満州を旅行した帰途、浜本浩（1890-1959、昭和時代の小説家、ジャーナリスト）と二人で二度目の朝鮮行きに立ち寄った。この2回の朝鮮旅行はエッセイ「朝鮮印象記」（『中外商業新報』1940年7月）、「朝鮮の子供たち その他」（『新潮』1940年9月）、「朝鮮の巫女」（『会館芸術』1941年2月）、「朝鮮でのあれこれ」、「金剛山にて」（『文庫』1941年4月）と小説「視力」（『文藝春秋』1940年11月）に描かれている<sup>11</sup>。

「白と紫」は前述した通り、2回の朝鮮旅行の体験を土台に書いており、戦争中のエッセイ「朝鮮の子供たち その他」の素材をも使っている。小説は語り手の大沢芳子と聞き手の「私」が茶の間で黙ってニュースの放送を聞く場面から幕をあける。ニュースに触発された芳子は、日中戦争後の皇民化政策の「内鮮一体」が叫ばれ、日本語・創氏改名が強要され、「皇国臣民」の誓詞を唱えさせられた時代、植民地における朝鮮人の田貞姫が代表した被害者の苦痛、トラウマ、葛藤、反抗、しかも被害者である弱者に対する植民者の傲慢、卑下、反省という複雑な心理を物語っている。日本の植民地下にあった朝鮮の悲劇を描き、日本及び一般庶民の日本人の加害性を析出している。全編は芳子の回想によって構成されている。「あそこで暮して、終戦で引き揚げてくるまでの七年間」からわかるように、小説の時間は1938年から1945年にかけての戦時下から戦後にかけて設定されている。

現在に至るまでに「白と紫」に関しては、徳永直の同時代評、小林裕子の部分的な言及のほか、本格の論としては、谷口絹枝の「『白と紫』——隠されたモチーフ」、長谷川啓の「佐多稲子のアジアへのまなざし——反復された戦争の記憶と反戦の言説」があげられる。

自選短編集「白と紫」が出版されて間もなく、徳永直は1950年11月号の『人間』で「血だらけになって正面きった」と評価したうえで、「しよせんは作者の影である」大沢芳子という第三者の「リアリティ」を問題にした。それについて、佐多稲子が1950年10月17日付の徳永直宛の書簡で「大沢芳子を介在させることで、『日帝時代』の日

本人としても、やはり不幸を浴びてゐる問題を、田貞姫とともに描きたかったからに他なりません。（略）日帝時代の、朝鮮民族と日本人との二つの不幸を重ねて描きたいといふ野心のために彼女を介在させました。私はこの作品を書くときに、朝鮮が無惨に壊されてゆくを感じたのです、爆弾によって無惨に壊されてゆく朝鮮、そのおもひが強かったのです。」<sup>12</sup>と書いた。

小林裕子が「『虚偽』『泡沫の記録』——挫折と再起」<sup>13</sup>において、戦中の庶民の加害者的側面をつき、植民地支配における民衆の無自覚的罪を、鮮やかに摘出しているのであると述べ、佐多の戦争協力の苦い自省と悔恨をこめた作品であると評価した。谷口絹枝は「『白と紫』——隠されたモチーフ」<sup>14</sup>では、作品の成立と朝鮮体験に基づき、語り手の芳子を視座に、話題中の田貞姫と聞き役の「私」のそれぞれの位相を通して、「植民地での日本人と朝鮮人の関係を問う」と述べたうえ、「白と紫」は「庶民の植民地責任をあぶりだす意図で書かれた」と指摘し、「佐多は、党活動に奔走して自らの立場に自信を得て来た五十年から五十一年にかけての時代を背景に、声に出すことはためられるが払拭することのできない自身のわだかまりを、第三者である植民者の語りのスタイルをとった『白と紫』のなかに取り込んだ」、「隠されたもう一つのモチーフが読み取れる」と語っている。長谷川啓は「佐多稲子のアジアへのまなざし——反復された戦争の記憶と反戦の言説」<sup>15</sup>において、「『白と紫』にみる植民地（朝鮮）支配の表象」を題に、大量な史料をもとに、日本による朝鮮侵略は日本の植民地支配の「草の根の侵略」「草の根の植民地支配」によって支えられたと述べ、『白と紫』は日本による日本語教育や創氏改名という植民政策と、草の根の植民地支配状況をまさに焙り出していると評価した。植民地暮らしの日本人の意識を深部から抉り出している一方、田貞姫の芳子に反発的な感情を示す時、宗主国の女性への精一杯な抗いが込められて、帝国日本による植民地支配下の朝鮮を通して、日本のアジアへの戦争責任を問うた、まぎれもない反戦文学と位置付けて、佐多ならではの「他者を内在化させた」視点、他者表象であると高評した。

上述した研究を踏まえて、芳子が代表している植民者側の傲慢と田貞姫が代表している被植民者側の抵抗という二重の視点にそって述べていく。

## 二

小説は大沢芳子の当時への回顧と反省を行き交いながら語られている。芳子は日本の女子大を出て総督府鉄道局に勤める女性で、いつも着物で、決して洋服を着ない。自信ありげな薄手の口元は悪戯ずきのはしっこさに見えたが、「佐賀人」の力のある固い淡泊さでもあった。自分の生活の殻をつくるのに必要なだけ、忠実に仕事をしていたし、仕事だけで人間関係に対しては適当に無関心であった。朝鮮人同僚に対しても変わらない。芳子はその場その場を冗談で弾ませ、やることだけはさっさと片づけるという主義

である。それは男たちに対抗するのにいつの間にかそういうふうになった。

芳子は朝鮮人の生活などについて格別関心を持って朝鮮へ行ったのではなく、ただ少し自由に暮らしてみたくて、故郷九州の学校勤めを辞めてひょいと京城へ行ってしまったのである。そこで、学校の教師としての閉塞感から抜け出し、適当に外へ広がってゆき、一種の解放感を感じた。「佐賀人」の力のある固い淡泊な性質から、日本人同僚にも朝鮮人にも距離感を保ち、肩を張った依怙地さで、女の他国での一人暮らしの世界を楽しんでいる。しかし内地を離れ、朝鮮へいく女の一人暮らしは「朝鮮くんだり」と言われ、いわくがあると思われた時代、芳子の選択は勇気がいるものだったろう。また、課長らからいつも「独身主義か」と半ばからかいの気持ちで、また憐れがった調子で聞かれたような場合、意識的に仕事に忠実な態度、何かから逃避するような冗談交じりの言い方と人間関係に対しての無関心さで、抗っている。そして植民地で一度も経験しなかった日本人の画家の優しさ、丁寧さと面白さに心を動かされた。一緒に朝鮮人ばかりの芝居小屋で朝鮮芝居を見る時も、傲った気分で、彼にたいしてもあからさまな素振りでも見せるような構えをしている。そういった身の処し方により、仕事場でも飾り物ではなく観光客の事務万端、接待の手配など、男同様の一人前の働き手として認められている。規範内において社会的弱者でありながら「自分の生活の殻」をつくることにより、最大限に自由を掴み、自分のアイデンティティを保ち、自己実現を求めて、自彊している女性像が浮き彫りにされた。

ところが、そういう男の世界と戦う肩を張った依怙地なものは植民地の人々の前では別の形で現わしている。同僚の田貞姫から親しく求められるのに、常に淡泊な態度で接している。しかも「日光を見ずして結構と言うな」「ナポリを見てから死ぬ」「長城を見ずには好漢とは言えぬ」などと言ったように、それぞれの国に自国の誇りとする景勝があると同じで、金剛山は朝鮮人にとっては一生のうちに一度は見て死にたい彼女の前で、そういう象徴的存在に対して、朝鮮にいる外国人である「内地人」の「私」が、朝鮮の景勝をわがもの顔に自慢する。今になって初めて、自分たちが自慢するとき、朝鮮人のこの悲願を引合いにだしたということの不当、無慙なこと、「朝鮮は朝鮮の国だった」という文化としての他者であることに気づき、反省している。また朝鮮人の少女が日本語で毬歌を歌うのを聞いて、「別に珍しきことでもなく、むしろ普通のことでした」とあるように、日本に侵略、占領されたことは当たり前だという気持ちを無意識ながら持っている傲慢さである。しかも、他国にいるのに、絶対に洋服を着ないで、「肩の折り目ははっきりした茶っぽい単衣にしゃれた縞の博多帯をして、襟元も、帯のあたりも、可能な限り締めつけたようなきりきりしゃんとした着方の着物で通したことにより、植民地の人々に伍して宗主国の優越と誇示を強く主張している。

芳子だけではなく、朝鮮生まれ、或いは朝鮮育ちの日本人女学生でさえ、「私たち、メンタイの子（朝鮮生まれまたは日本生まれ朝鮮育ちの日本人子供）は、どうせ、内地で結婚はできないのよ」という内地人に蔑視される自己認識の上、電車の中で隣に座っ

たお爺さんに「臭いよ。もっと、あちらにへ行かんね」と、なんの逡巡もなく率直に、またつけつけと朝鮮人に対して優越感を示している。同時に、植民地を占領する加害者の「社会的および心理的疎外と攻撃の形態」としての「自己嫌悪」でもある<sup>16</sup>。更に、日本の戦争が所謂「大東亜戦争」になって広がってゆくにつれて、朝鮮も戦時体制が強くなっていった。朝鮮人の態度は明らかに空気を変えるように変わった。それに対してメンタイの子の小さい中学生にしても「朝鮮人は恩知らずね。日本の世話になっとなりながら、ちっとも協力せん、先生がそう言っていたよ」と不服を洩らしている。この言葉から被植民者朝鮮人一般が植民者に協力しないことを読み取り、朝鮮人の植民者への抵抗を裏返しに表している。又、朝鮮に開いた「三越」に入ってきた朝鮮人に「ここは、あんたたちの来るところではないよ。「和信」へ行きなさい」と立ち止まって、朝鮮人の女を見定めていた。「日本人女性と朝鮮人女性は商店などで接触はあっても分離して暮らしている。基本的には日本人は総督府支配機構の中で暮らし、朝鮮女性は被支配民族の社会構成員として生活している」<sup>17</sup>というあからさまな差別が見られる。「内鮮一体」化を叫んだのに、鵲巢鳩占を当たり前とする植民者の乱暴をも露わにしている。このように一般庶民さえも、

「朝鮮くんだり」までという感情は、微妙な実績の上に伝統となって、今日も残っているわけです。内地人同士、暗黙のうちに自己をひけらかし、相手を軽んじあいながら、しかも狎れあっている。そういうものがあるのです。そしてそれらの不幸な感情は、朝鮮人にむかうとき、それが自己の支えであるかのように優越と侮辱とを示すものになるのです。いわば日本人のひとりひとは、朝鮮人に対してすら、一種の卑下感を持ち、その変形されたものとしての優越の誇示となるかもしれないのです。それはまた、根づよい抵抗に対する計算的な、あるいは無智な恐怖の変形でもあったでしょう。

と書いている。植民地にいる文化の他者としての誇示と卑下、優越と侮辱という複雑な心理を抉り出している。

### 三

芳子と対照的に、田貞姫（田村貞子）は芳子と同じ課で、女ではたった一人の朝鮮人の同僚である。いつも朝鮮服を着て、開城人としての誇りを持っているし、日本の女子専門学校を卒業して『源氏物語』『枕草子』など日本古典文学を読んでいるインテリでもある。芳子と反対に、話しぶりは生真面目で、いつも何かを内に制止しているように眉根を寄せた細い目は、特に暗い印象ではないが、明るい表情ではないというように描かれている。

1938年からの総動員体制の下で戦時下の朝鮮女性にはそれまでにはなかった新たな困難が降りかかった。朝鮮総監督府機構を挙げて行われた総動員体制は日本国家の政策として日本の法令下に行われたのである。特に1941年12月の太平洋戦争の開始は朝鮮女性の大量動員を図る契機になった。この時期の朝鮮人女性動員は日本女性を先頭に立てながらも朝鮮女性が置かれた状況は日本人女性と大きく相違する<sup>18</sup>。

そういう情勢に置かれた田貞姫は日本人ばかりの中ではたった一人の朝鮮人女性として、積極的に芳子と親しくなろうとしている。当時、朝鮮人女性の教育の普及率は1941年末まで8%弱にすぎなかった<sup>19</sup>ため、彼女にとって日本で勉強をしたという経歴は貴重なものであったばかりでなく、日本人の会社で卑下的でもなく、競争的でもなく、日本人と対等に働けることは故国では誇りでもある。だから、その表情は、羨望も、また皮肉も、もちろん憤りなどは現していない。しかも日本人の会社なのに、いつも朝鮮服で通していることにより、自分の朝鮮人としての自覚とアイデンティティを維持している。しかし、うちに何かを押しとどめているのである。それはその対等の自覚を彼女は日本の学校にいたときに持ちえたのかも知れないが、かえって、母国の人たちの前で微妙で、苦しい立場に立たされたのである。

ところが、「満州」へ日本からどんどん集団的に開拓民を移入させていたり、色々な事業が満州に広げられているなか、日本の朝鮮植民地支配が続くため、朝鮮は一層内地化されねばならぬ1940年に、朝鮮において皇民化政策の一つとして創氏改名が行われた。地方の内地人官吏は自分の成績を上げるために、強制的に「創氏」を強要した。創氏改名は朝鮮人の家、血統、出自そのものの抹殺を意味するにほかならぬと分かったにもかかわらず、日本で勉強し、監督府関係で働いている田貞姫は田村貞子に創氏改名したのも仕方がないのであった。そこで、改名後の田貞姫はがらりと態度を変えたのであった。以前のような、日本人と同等に自分を自覚するものがなくなり、とげとげしくなった。むしろ暗い調子で、阿諛的なものが現れ、以前のように芳子に近づこうとはしないようにしている。こうして、田貞姫の言動と内心との表裏を映し出した。「日本に同化した自分と朝鮮人としての自分の矛盾に引き裂かれた」<sup>20</sup>朝鮮人女性の苦境が浮き彫りされた。

朝鮮では姓が家だけを現すのではなく祖先を現すものなので、創氏改名は田貞姫など朝鮮人にとってははっきり祖先の抹消になる。更に日本語教育を強いられた空気の中、田貞姫は日本語を誇りとしているが、

『私は言葉が出てこないのですよ。どっちの言葉で書いたらいいのか、日本の言葉もデリケートには出てきませんし、朝鮮の言葉も中途半端になってしまっているのですよ。そうすると、言葉だけでなく、なんだか私は、自分というものが、こう、宙に浮いてしまって、とても苦しいのです。』

そういう文化的な板挟みの悩みに苦しめられた彼女は、一層とげとげしくなった。彼女はひとりの内地の男記者に、

『いいえ、私はそれでいいとおもいますのよ。文章は人です。その文章には私というものが出来ているとおもいますのよ。訂正されると、その文章は死んでしまいますよ。』(略)

『それなら、その原稿は没にしてくださいっていいですわ。』

と、言葉の自由さえも奪われた田貞姫は強く抵抗した。日頃溜まりに溜まった屈辱・憤り・煩悶・トラウマはとうとう抑えきれずに爆発した。

家、言葉、自分であることもともに奪われた田貞姫は、行き詰って自殺を謀ったが、一命をとりとめた。しかし病床の中の彼女は見舞いに来ている芳子をじろりと見つめた。そうかと思うと、ぐるりと顔をそむけて「このひと、嫌いッ」と、はっきりした意思表示をした。そして、朝鮮語の間に日本語の言葉が交じり合って異常な、恐ろしい言葉を叫び続けた。彼女は植民者に対する被植民、母国人に対する親植民者という二重の拘束と闘った果てに、心理的疎外と攻撃の形態として狂気の自殺を選ばざるを得なかったのである。

現地人の抵抗は色々のところから見られる。内地から来た親戚にお土産でも買おうかと思って、朝鮮人相手の「和信」へ行った芳子らがエレベータの中で高声をあげて笑った。その時、運転手の少女は扉をあけるなり「笑いなさんなよッ」と叫んで乗客より先に肩を振り切るような格好で飛び出していった。そのとっさの振る舞いはまさに植民者への反抗であった。逆に、日本人からの「朝鮮人は、扱いにくいね」「鉄道局でも、朝鮮人の従業員がこの頃扱いにくくなった」という表現にも、朝鮮人の日本人に対する抵抗の側面がみられる。

つづいて、タイトル「白と紫」の色彩からも朝鮮人の抵抗を描出している。

そもそも、佐多稲子の作品には色彩をタイトルにするのは少なくない。代表作「くれなゐ」では、女性の結婚と仕事に悩まされる主題であり、やはり「ここに愛の問題を感じ」<sup>21</sup>じたので、「くれなゐ」にした。「灰色の午後」では背信を重ねて受けた一人の女性の鬱憤を描いたため、「灰色」で象徴している。「黄色い煙」は、事業に失敗した中小企業の悲観・気弱さを硫黄の煙と重ねて描いたのである。自分に取材した作品だからこそ、「赤」と「灰色」という、タイトルにかぶせる色彩の対照にも、作家の心情が反映されている。佐多稲子は確かに色彩感の豊かな人間である。エッセイ「色彩」<sup>22</sup>では、色彩と人間の関係についてこう述べている。よく「人間が色彩感覚を持っている」ことに「ありがたくさえなるときがある」、「色が見分けられて、人間は何とまあ、仕合せだろうと」感慨深く述べている。また「人間が色彩を見分け得る仕合せは、また同時に人間が、色彩を創造し得る幸せになる。」、「日常私たちの身のまわりでほどこす色彩

も人間の知恵の発達を示していよう」、しかも「色彩も記憶をそそる」という。「人間が自然のうちに豊富な色彩を持ち、そして、人間が色彩をもっていろいろなものを創造し得る仕合せを持っているのだとすれば、私たちは身のまわりにこの仕合せをもっとも豊富にしなければならない」と語ったように、佐多稲子は「白と紫」においては、色彩を多用して、登場人物の心情を細かく描いている。

田貞姫が芳子に開城の印象を問う場面は、やはり色で表示している。

『開城はどんなふうでした』

『静かなところね。まるで灰色だもの。それでもいちばん、朝鮮らしいけれども。』

(略)

『開城は、私には、白と紫ですよ。(略) あなたに灰色に見えたということは、悲しいですわ。私には開城は、白と紫ですの。』

開城の名家出身故に一層、母国が否定され、誇りを傷つけられるようで、強く主張する。それは朝鮮民族は白を尊ぶ「白衣民族」と言われるし、紫は「五方色」の中間色として高貴、憧憬、美しいという意味合いを持つものに対して、灰色は死と悲哀を象徴しているからである<sup>23</sup>。これについて、芳子は「朝鮮の誇りの意味においてであった」が、しかしやはり文化としての他者である日本人のおこがましき、と後で気づくことがあったと反省する。

そして、見物人としての芳子が見たお寺は、「五色の色彩」をほどこしていた。その石の段々は「枯れたような色で朽ちて」いる。楼門や本堂や廻廊の、「五色の細かな色彩も年月に寂びて、殆ど一色に混じり合った複雑な美しさ」である。牡丹や芍薬だけは「鮮やかな色なのが、あたりのぼうとかすむような色合いの建物の前では不思議なほどでした」。開城については、悲しいほど古さびた街である。朽ちかけた石段の上の「古色蒼然たる」楼の上から見渡す村のうちは、陽を浴びているのに、その陽光に「色あせて枯れたという色合い」である。こうして、作品の所々に色彩で物象、心情をあらわそうとしている。

上述したように、「白と紫」は大沢芳子と田貞姫を通して、植民者側の傲慢と、それによる被植民者の苦境及びそれに対する抵抗を物語っている。第二次世界大戦中、朝鮮人を『皇国臣民』として精神的、文化的に日本人化する<sup>24</sup>植民者の野望と、創氏改名や『国語常用』を掲げた日本語の強制と朝鮮語の抑圧により「家」や言葉が奪われた被植民者の悲哀も一層明らかにされている。

「内地」の女性の自己実現の欲求が朝鮮人女性をいかに傷つけ、植民地政策に加担するものであったかを剔抉しているが、国家総動員令に惑わされ、自己発展・自国の拡充が、他者・他国を傷つけ、侵略することに気付かない日本人一般庶民の無自覚を抉り出している。一方、田貞姫の、日本人の芳子に「求めて親しくなろう」から、「近づこう

としない」、ひいては「このひと、嫌いッ」までの複雑な心理の変化を通して、朝鮮人全体の仕方がなさ、痛みと苦境そして抵抗を描出した。こうして、「日本人女性と朝鮮人女性の間には男性より深い溝が存在している。抑圧者と被抑圧者という関係が戦時下の日本人・朝鮮人女性関係の中にも影を落としているのである」<sup>25</sup>。

ちなみに作者の創作手法について一言触れておく。全編は芳子の回顧を通して展開している。冒頭には「あそこはきれいな町でした。町というより村ですね。きれいな村でした」。続いて、「水原は、美しい、静かな村でした。」「この静かな土地にかつての権力を想像させる」というように、懐かしがらせている。結びには、「私は美しい朝鮮の景色のお話をするつもりだったのに、陰惨なお話をしてしまいました」「ただ私は、田貞姫の国、朝鮮は、美しいところだった、ということをお話ししたかったのです」というように、本章の「はじめに」に述べた佐多稲子の朝鮮への感情は鮮明に表出されている。しかし「白と紫」は朝鮮戦争が勃発直後に書かれたため、その美しさ・静かさは壊されたのではないかという作者のひそかな戦争反対の意図も読み取れるだろう。

佐多稲子にとって最初の海外行きは1940年6月の朝鮮への旅であった。「視力」にはこう書いている。

半月足らず朝鮮鉄道局のお客さん待遇であちこち見物して歩いた藤子は、そういう結構な旅行というものの間に、自分の気持が何とも言えず薄情なものになってゆくことにふと気づいていた。人に対して薄情というのではないが、心持そのものというか、毎日の生活感情というか、他と十分に結び合わないような、そしてそれを決して不満に思ったりはしない自分自身の傲慢さの故で薄情に感じられる、そういうものだった<sup>26</sup>。

佐多稲子の深い反省を込めている。いわば、「白と紫」は植民者女性の傲慢・反省と被植民者女性の怒りと悲哀を細かく紡ぎあげた複雑な魅力をたたえた作品である。

## 第二節 「満州」に生きる日本人女性の悲哀と矜持——「旅情」から

佐多稲子の1940年の朝鮮半島への旅行は朝鮮総督府に招かれた、特権的な結構な旅行なので、「至って単純に朝鮮を見られる喜びでやってきた」<sup>27</sup>のに対して、1941年には2度も満州へ赴き、いよいよ小説家の慰問部隊の一員として満州各地の戦地を慰問することになる。しかし朝鮮に関する表現は、「洗練された」京城、「静かに昔の美を抱いて」いる開城、そして「旺盛な朝鮮の臭気」がする平壤（「朝鮮印象記」）などのように、いかにも鮮やかで明るい気持ちであるのに対して、「満州」の方は、埃、泥臭い、汚いなどの表現で現わしているようにいささか暗く、憂鬱気味である。「当時の日本人から見れば、満州の広大な地は、過去の生活と切り離された新天地であり、不安と希望



が混在する新開地だった」<sup>28</sup>のだろう。

日露戦争に勝った日本帝国政府は、1905年から「開拓団」の中国入植を開始した。黒竜江省社会科学院歴史所の研究者によると、最初は試験移民、次に武装移民、そして国策である満蒙開拓団と徐々にその規模を増やしていった。「九・一八事変」（満州事変）以降、日本の帝国主義的な軍事戦略により、長期にわたって、中国東北地方への開拓団による入植が行われ、実質的な植民地支配が行なわれた。「九・一八事変」から敗戦に至る15年間、中国東北部における植民地支配が行なわれた期間中、農業だけでなく、政治、工業、商業、文化などに関わる人員が続々と移住し、その数は100万人以上に上ったと言われる<sup>29</sup>。多くの内地人を満洲へ引き入れるために、政府やジャーナリストが文人を利用して宣伝している。夏目漱石は「彼岸過迄」において、「満州ことに大連は甚だ好い所です」という。永井荷風も「断腸亭日乗」に、「浅岡氏は…今は鴨緑江の水先案内を業とす」と好意的に描写している。こういうふうには有名人の宣伝下で、日本の狭い社会から飛び出て満洲、朝鮮で生きている日本人に一種のさわやかさを与えている。

こういう宣伝と相まって、昭和5年発行の『大支那案内』<sup>30</sup>では、「刻下の日本の人口食糧問題の上から見れば満洲への移植民の数的考察に於てもその活動すべき地域の広がりには就いても大きな余裕があるわけである」と、満洲への移住を呼びかけている。そして昭和初期以後、満洲への移住者は急激に増え続け、昭和15年に約86万人、昭和20年の敗戦時には約130万人に達し、満洲全人口の4パーセントを占めるほどになっていた<sup>31</sup>。昭和15年、近衛文磨を中心にいわゆる新体制運動が起こり、国民生活が次第に管理強化されていった。芸者、女給、日本では職のない青年、生活を変えたいと思う少年、日本で幸福をつかむことができなかつた人々が、やがて大きな歴史の流れの中で侵略者と呼ばれることになった<sup>32</sup>。「女三人」の省三も「気づかざりき」の真琴も「白と紫」の芳子も、いずれも内地の生活に不満を抱えているため、植民地に希望を持って行ったのである。

さて、佐多稲子の満洲慰問も勿論、当時の満洲植民の宣伝という役割を果たすためである。ところで、「旅情」、「満洲の少女工」、「海拉爾印象」、「奉天所感」、「大連の印象」などを書いた佐多稲子は一体満洲についての印象をどのように伝えているかを検討してみたい。

本節では「旅情」を中心に、そういう時代を背景に「満洲」で生活している女性に光を当て、植民地に生きている内地女性の悲哀・恨みつらみと矜持を析出する。ここでは、日本植民政策が他国だけでなく自国の国民にもたらした被害を映し出していることが明らかにされている。

一

「旅情」は1941年6月に、『大連日日新聞』に小説「四季の車」を連載した慰労とし

て、『満州日々新聞』の招待で当時の「満州」を旅行した時にハルビンで出会ったことを題材にした。佐多はこの作品について、次のように言っている。

「台湾の旅」「旅情」「挿話」の三篇は題材そのものが一九四一年から四三年へかけて、当時の情勢に誘われるままそれに応じていった私の生活を示している。「台湾の旅」「旅情」は太平洋戦争へ入る以前に書き、「挿話」はそのあとになるが、三篇とも、今言えば日本の外に出たときの見聞で書いている<sup>33</sup>。

この旅行は新聞社に招かれ、佐多稲子は永井龍男と一緒に大連に到着、先に大連に着いていた浜本浩と落ち合った。大連から奉天（瀋陽）、新京（長春）、ハルビンへとまわっている<sup>34</sup>。新聞社の慰労の意味での旅行なので、その旅に「気を許していた」<sup>35</sup>。奉天では、浜本の紹介で上田熊生と聡子夫妻と知り合った。奉天を発つ前夜、聡子から思いがけない話を聞かされた。それは、お互いに愛し合っているように見えるが、実は夫が外で愛人を持っている。そういう夫を許さない聡子は28歳からずっと夫と別々に暮らしているという話であった。「旅情」はその旅の後、早速とりかかった作品であった。『中央公論』の小説の締め切りが迫っているため、奉天のホテルですぐそれを素材に書き上げ東京へ送ったという。

「旅情」は1941年9月に『中央公論』に載せ、『佐多稲子全集』第3巻に収録されている。1953年8月に、「旅情」の続編にあたる「伴侶」は『小説公園』に発表、『佐多稲子全集』第7巻にも収録されている。さらに15年後、改めて聡子に話を聞くなどして長編「重き流れに」は完成、1968年1月から1969年12月まで『婦人之友』に連載され、1970年3月に講談社より同名单行本として発行され、『佐多稲子全集』第14巻にも収録されている。佐多稲子の作品の中には改作して書き上げるものが少なくはないが、同じ素材を3回も作品化するものはまずはない。それは作者の心に残ってずっと抱いてあたため続けられている素材であることが明らかになる。

作品内時間は執筆時期と重なり合い、満州のハルビンを舞台にして展開される。小説は二部構造である。「一」の部分では、ハルビンにいる内地女性4人に聞いた話を叙述している。「外地」へ飛び込む事情はお互いに共通のものもあるし、また自分なりの話もある。そして、外地で暮らしているうちに育てられた「雑草の強さを思わせる旺盛な若さ」とかずかずの哀歎を描いた。「二」の部分は後に「伴侶」と「重き流れに」の素材にもなるが、軍国政府の中国入植の政策のもとで、よその国を犯すということは世界の列強に伍してゆく帝国日本の発展の道として当然だと考える一部分の人は、大陸の植民地に夢と野望を賭ける。同時に「そこには大きな将来があり、日本の国威もそこにかかっている」（「重き流れに」）と思い、「その土地で働くことに国を背負って勇んでいた」（同）。そんな一人の青年に嫁ぎ、夫と大陸に渡った17歳の妻として夫だけを頼りにして暮らす外地の生活に宮前夫人は幸福に満ちているように見えるが、自分だけの

ものだと信じていた夫に、愛人がいたことにより夫婦に翳りをもたらした。歴史の激流の中を、明治末年から敗戦に至るまでの日本の運命を背景に生き抜いた一人の女性の孤悶と悲嘆の生き様を描いた。

ところが、戦時下に発表された作品と佐多自身の戦争表現については、長谷川啓『佐多稲子論』、北川秋雄『佐多稲子研究』、小林美恵子『昭和十年代の佐多稲子』などによって既に丹念に論じられているが、「旅情」については独立した作品として論じたものは少ない。長谷川啓の「解題——屈折への道程」<sup>36</sup>では、「作者は透明な写体となって、人々の悲しみを一瞬々々克明に写し取っている。しかしここにあるものはもはや凝視などというものではない。悲しみに溺れ流されていくような危うさを秘めている」。長谷川啓の指摘に対して、矢澤美佐紀が「まさしく「旅情」に流されゆきかねない脆弱さを孕んでもいた。戦地慰問に出かける直前の佐多にとって、この昭和一六年とは、「抵抗」精神がかりうじて保持されていた年だったのだろう」<sup>37</sup>と言っている。確かに、北田幸恵が「文学者は基本的に個人の名において公然とした表現の遂行が前提となるため、総動員体制下の抵抗の困難は想像を絶する」<sup>38</sup>と言ったとおり、「翼賛動員に抵抗することは、断筆・沈黙・「国外逃亡」するか、さもなければ弾圧により生存が脅かされる」時代の中で、戦争反対を掲げて来た人間としての佐多稲子は「旅情」では、翻弄される女性の痛みと悲しみを視座に据えて佐多の得意なひそかな抵抗を示している。

では、作品の内部構造を分析しながら、佐多稲子が植民地とどう向き合おうとしていたか、つまり、言論不自由な時代、権力に抑圧された弱者としての作者はどんな筆致で帝国主義反対をこめるテーマを表現しているかについて考えてみたい。

## 二

そもそも、日本軍国主義者は長期に中国東北地方を占領する目的で、外地では、「家庭教化、銃後の後援、民族協和」という三つのことが最も重要な任務であると示された。それを着実に実行させるために「日満一徳一心」「民族協和」、満州国内のすべての民族が一心団結し「王道政治」を核心とする「建国精神」の教育、宣伝などを通じて思想から中国人民の日本人に対する敵意識を解除させようとすると同時に<sup>39</sup>、内地では、多くの女性作家が翼賛文化団体、銃後講演会、戦地・植民地慰問へと動員され、宣伝文学を書き、満州移民を呼び掛けている<sup>40</sup>。「はじめに」にも述べたように、佐多稲子の満州への旅もそういう一役、いわゆる戦争宣伝の責務を負っている。

では、佐多稲子の実際の旅行と切り離して、作品の世界に入って、「旅情」のテーマを考察する。

「旅情」は満州という異郷に暮らしている日本の女たちを描いている。

冒頭「私は彼女たちの姿をこと更に露きだしにしようと思うのではない」と言ったように、語り手の「私」は彼女たちの痛いところをよく理解したうえで、突きたくないと

いう慎みと同情を示している。「彼女たちの言葉のはしはしに彼女たちの自ら示す健気さと、哀しさとがのぞける許りである。彼女たちの健気さは、雑草の強さを思わせる旺盛な若さでもあろう。その健気さが、私の心にある哀しさを誘う」。そういう彼女たちは皆右も左もわからぬまま新天地・満州へと旅立つ。当時、日本陸軍の関東軍司令部が1936年5月11日に作成した、満州国へ大規模に日本人農民を移住させる「満州農業移民百万戸移住計画」に基づいて、1957年までの20年間、家族単位に100万戸500万人の移民を実現させようとしている。そのために、「北満の沃野へ拓け」という呼びかけのもとで、一般庶民は戦争の欺瞞性を見抜くことができるわけがなく、「戦争によってよその国を犯したという観念は、当時の日本人の大半になく、むしろ世界の列強に伍してゆく帝国の発展の道」（「重き流れに」）と思われ、そこへ希望や救いを託していったらう。満州開拓移民は三段階に分けて進められている。1932年から1936年までは移民テスト、1936年から1941年までは国策として正式に移民を行い、そして1942年から1945年までは移民崩壊期と<sup>41</sup>いうことになる。作品中の時期は第二段階の正式移民期にあたる

取材に応じた4人は、それぞれ出自が異なる普通の労働者階級の若い女性である。群馬県からの女性は、「無理に決められてしまって、すっかり日取りまで決まってしまったんですけど、どうしても身体が慄えるほど厭なんですね、ふっと汽車に乗って来てしまったんですの」と、同じ植民者の日本人同士に対しての不信感からうそをついた。そこで、友達が帰った後、淀みなく誇らしげに語った。「ほんとうは結婚をして、牡丹江の近くの田舎にいましたの。郷里で式を挙げてすぐ来たんですけど、どうしてもその人が厭で厭で、（略）嘔吐をもよおすっていいですけど、ほんとうに吐きたくなんですの。（略）私がどんなにひどいことを言っても、にやにや笑っているんですの」。好ましくない結婚から逃げて、自分が上手に出てやったことを誇らしげに語った。男性植民者と現地人に対してともに「おぞましさ」を感じ、植民者コミュニティと両親に対して、そして男性性に対して深い違和感を持っている植民者女性の悲哀を描き上げた。そして奉天に従兄がいたから、初めはそこへ行こうと思ったのだが、途中で気が変わってハルピンへきてしまったという。友達にも秘めている彼女はやはり従兄にも知られたくないだろう。このような異国にいた知り合いの日本人間にわだかまりなく話さない事情を、関わりのない語り手に打ち明ける彼女の複雑な心理が浮上してくる。更に、ハルビンでの暮らしは容易くはない。12月の中国東北は寒さが厳しい。彼女は、汽車の中で言葉も通じないし、「満人」にいじめられたところを、そばにいる日本人の男の人に助けられた。しかし、ハルビンの駅へ降りたとき、一人で当てもない彼女はその男にくっついていったのだが、置き去りにされた。途方もなく橋の上を彷徨っているうちに、幸い、通りかかる日本人の女の伝手で勤め口を紹介された。日本人の知人の間の警戒心と異国での日本人としての連帯感の微妙なところが描かれている。

語り手に好意を持った彼女は寮まで案内される。寮は「内地の貧民街の路地に似てい

る」。「私は一寸の間、近所の人たちの視線を浴びて立っていた。まっ裸の腹や脚を泥で汚した満人の子供たちがその柵になった木の門によじ登って、頭の前の方だけ毛を残したおかしい顔で、私たちを見ている」。「裸の子供たちは、その家の子供らしくて、細い手脚で猿のよう」である。そして中に這入ってみたら、「上の方はまっ白いのに、下の方ははげ落ちて荒組の竹が見えている。奥が四畳半、そこに彼女は三人で寝るのだという。六畳の方は七人」が住んでいる。台所は共通になっている。「そこで鍋を洗っていた若い満人のボーイが、無表情に私たちを見た」。このように、植民者と現地人の間には目に見えない、埋めつくせない溝の存在を明らかにしている。ほかに群馬県から「自分でもわからなく来てしまった若い女性と、支那服のよく似合っている南国の肌をしている女性、そして両親と一緒に来ている少女を点景として描いた。いずれも、語り手の私の目に映った印象は、何か切実に哀願するような表情だった。

街の風景については、「風が強いので、泥ほこりに馬糞が混じって丈高く襲ってくる」。「白と紫」に描かれた美しい、静かな町とは程遠い。宗主国としての傲慢もみじんも現れていない。しかも、ロシア婦人までも「無愛想に私たちを見て引っ込んでゆく」。

こういう苛酷な自然環境、劣悪な生活状況、現地人に敵視される社会の空気、更に日本人の間の警戒心など悲しみを抱える、よそ者と見做された若い女性が心細く生きている実態を如実に物語っている。旅人の語り手には植民地は決して明るい、希望に満ちている土地として描かれていない。かえって郷愁に似たものを感じさせる。そのため、「旅情」は植民者開拓にひそかな抵抗を示しているに違いない。

### 三

「旅情」は外地で暮らす働く階級の女性の悲しみを描出したばかりでなく、有産階級の宮前夫人の悲哀と矜持をきめ細かく描きだしている。

宮前夫人は下町風の内儀を思わせる厳しさと清潔さが感じられる女性である。17歳のとき、夫についてハルビンに来て、4人の子供を産み育て、すでに35年になる。それにしても、「夫人のどこか少女のような美しさに、この家庭の好もしさがあるに違いない」。

さて、語り手の「私」は数日のハルビン滞在中、宮前夫人に3度も逢った。一度はその家庭へ連れて行こうと言われた宗方（ハルビンを案内してくれた「私」の友人）の言葉を心にうなずいて家庭へ訪ねてゆき、一度は宮前が宗方と私とを一日車に乗せてハルビンを案内してくれたその夕方、宮前が宮前夫人も酒場まで呼び出したとき、そして三度目は旅発つ前日の夜だった。

私にはまだ切れ切れである宮前夫人の印象がまとまりを欲するように浮かんでいた。ひとつひとつが印象的でありながら、強烈というものではなく、何かもっと知りたい、というような、寄り添ってゆく気を起させる人である。彼女の笑うときも

伏目がちになるような静かさが、何か悲しさがそのまま優しさになってしまった、  
というような美しさであるし、もう中年なのに、どこか少女のようなものが、どこ  
かでぴったりしないで、一抹の不安みたいなものを感じさせるのであった。

そして会うたびに、「自分の家に悲しいときがございまして」といって殉教徒の、劇  
しさを内にひそめたような表情だった。仲睦まじくみえるようで、35年も大陸と一緒に  
暮らしている夫婦の愛情の真実を思わせているが、彼女は女性問題で自分を裏切った夫  
を許さず、28歳から今まで20年にわたって別々に暮らしており、形だけの夫婦を続け  
ているというのである。植民地にいるこの35年の間、「こうした土地におりますれば、  
戦争にもあいまして、そのことでこわい思いや、悲しい思いや、うれしい思いも度々い  
たしました」というところを、「人間というものには正直なもので」と、語り手などのお  
客さんの前で、夫に言葉を奪われた。その時に彼女は夫の話のすむのを待っているが、  
相槌を打つわけではない。その一歩譲って自分の話を打ち切る優しさと逆に、当の夫が  
いても構わずに「私の家に、ある悲しいときがございまして、よくひとり夜でも出歩い  
ておりました」と言い、「よく墓地へ参りまして、知らない人たちのお墓でございませ  
が、水をかけてお花をそなえてまいります。そうかと思うとまた、香水屋へ入りまして、  
一軒々々、香水の匂いをかいで出て来たりするのでございますよ。それでもやはり気が  
しずまるのでございます」と言っている。お墓は死の象徴として、自分の女としての一  
生、もしかしたらこの異国に埋葬されるという覚悟を示している一方、町の「香水屋」  
はその逆で、現世を生きさえすれば、日本の下町娘の誇りと矜持を保ち、凜として自分  
のスタイルを貫き通して生きようとする頑固さでもある。時代を自分で選べない受身で  
ありながら、せめて、妻の座を放棄しない、殉教徒のような切実なものがあつた。この  
ように植民地に生きる妻の無念さと、異郷に居て恨みつらみを堪えに堪えて発散口のな  
い苦悶がきわめてリアルに描かれている。それにしても、彼女は妻の座をしっかり保ち、  
一生その男にくっつくという古いしきたりに縛られて、正妻を放棄しないという悲哀と  
矜持も逆射照している。小説では、いわゆる宮前夫人を、女性解放、つまり夫を離れて  
独り立ちの女性像として描出していないが、しかしながら、一人でよその国で4人の子  
供を抱えて生きるには、誰にとってもその難しさは想像以上なものであるに違いない。  
むしろ宮前夫人の選択は自分の一生が生贄になるにしても、生活の面から得た理性的な  
ものだともいえる。小説の中では、戦争と占領を相対させ、語り手の哀れな気持ちに流  
れてしまうが、こういう植民地に暮らした、悲哀と矜持の二面性、また自己と家庭との  
板挟みにおかれた女性の悲劇を通して、日本の植民政策がいかに自国の人々に加害的な  
役割を果たすのかをひそかに訴えたのではないか。

つづいて、小説の末尾は、旅発つ前夜、ホテルの部屋で片づけているところへ、女の  
泣き声が聞こえたと結ばれている。

扉を細く開けて覗くと、黒い薄ものの着物の裾をひいて、帯をしない日本の若い女が息を切りながらそのとき口早につぶやくのが聞こえる。

「日本へ帰りましょう。日本へ帰りましょう」

誰かにすすがるように、急き立てるように、泣きながらつぶやいたのである。

が、誰もそばにいない。怯えたまま前方を向いて自分自身に言っているのである。それは無智な女が、思いきりひどい目にあったとき、思わず洩らす少女のような優しい響きの声である。

しかし、大きな刃物を両手に持っている。対照的に、外地にいた日本人女性の引き裂かれた内面の狂気を浮き彫りにした。

こうして、結びのところに、時代と男に翻弄され、植民地体験を有する若い日本人女性の悲鳴・哀願・狂気を書き上げることにより、外地にいる日本人女性の行き詰った苦境が浮上してくる。これはまさに、「旅情」の重みである。

前述したように、「旅情」では満州に暮らしている、出自や階級の異なる様々な女たちの哀れさと悲しみ、そして郷愁を描出している。戦時の総動員体制下で、佐多稲子は同じプロレタリア文学者宮本百合子のように、人道主義、プロレタリア文学から、より広い民衆を包摂した反戦、反ファシズム、女性の解放をテーマにした銃後の抵抗文学を担った<sup>42</sup>とは言えないが、佐多稲子は独自の文学表現をもって、外地に生きる植民者女性の生きる上での種々雑多な不幸、悲哀および現地人との相いれない関係を描写することにより、植民者の「五族協和」の亀裂を照らし出していると同時に、「北満開拓」の欺瞞性も暗示している。一方国家の政策への順応を強いられた時代に、佐多稲子の根底に潜在した抵抗の思想、現実の矛盾への鋭い告発が浮き上がってくる。

### 第三節 「髪の手ざかり」に隠されているモチーフ

昭和10年代、民族主義再考が契機で、国民文学論がブームになった。第一次国民文学論はジャーナリズムで起こった。そのきっかけは昭和12年8月から13年初めにかけて、出版社、新聞社が作家を中国戦線に送ったことから始まる。昭和15年11月に発表された浅野晃の「国民文学への道」<sup>43</sup>が契機で、第二次「国民文学論」が展開された。浅野晃は、そこで「国民文学」とは「国および国民に対して十分責任を負ふところの文学」であり、「かような責任は進んで国の運命に参加してゐるものにとつては当然至極のものである」とする。太平洋戦争開始以後は、国民文学論は国策文学論へと変質していく。文学自体も国策文学へ傾斜していくようになった。

こういう時代の流れに乗って、佐多稲子は1942年5月に、陸軍報道部の慫慂による新潮社の『日の出』特派員として、真杉静枝と共に大陸戦線の実情、並びに中国中部要地の復興躍進ぶりを視察、その様相を具に銃後へ報告することを強いられたのである<sup>44</sup>。

この年に、「最前線の人々」（『日の出』11巻7号）、「作戦地区の空」（同）、「中支から帰って」（『週刊少国民』1巻11号）、「中支で逢った或る二人の女性」（『芸能文化』9巻8号）、「中支の兵隊さん達」（『婦人朝日』19巻8号）など現地報告が異なる雑誌に掲載された。また「若き妻たち」（『婦人公論』昭和17年9号から12号に連載）、「南京の驟雨」（『オール読物』12巻11号）が刊行された。いずれも中国中部地方の見聞をもとに、戦場における人情の美しさや兵士の苦労に目を向けており、泣き、「そこ（中支・筆者注）に身を置いた当時の「日本」に同化して」<sup>45</sup>、感傷的な文体として執筆される。

そして8月には、海軍の徴用で婦人作家たちとシンガポール、スマトラと、戦地慰問をしている。「南方」を見てきてそれを記事にするという任務を負っている。国内が南方熱に煽られ、木綿だ、砂糖だ、と物質的欲さえ、あからさまにしている。当時の「マレー半島」とスマトラ北部を廻った佐多稲子は、中国で出会ったような辛いおもいをすることはなく、中国でのような、ひそかに泣く、ということに合理化したあの経験は、もうなかった、まるで旅行者の見物に過ぎなかった<sup>46</sup>。そのため旧左翼作家というレッテルをはられて言論不自由を痛感していた時期の徴用は佐多稲子にとってホッとすることがあった。「マライの女性」「旅の日記」「南の女の表情」「南の農園」「マライの旅」「マライの下駄」のように現地の日常生活、習慣、風景などを描く明るい紀行文のほか、「ゴムの実」「髪の手紙」のように、現地の人々と植民者との付き合いを描いた小説もある。

徴用作家たちが書いた報告文や小説などはおおよそ四つのタイプに分類できる。一つは、大東亜共栄圏の思想を信じ、体制側の目によって都合のよい部分だけを報道するもの。二つ目は、情報や伝聞による先入観を現地で確認して報告するもの。三つめは、現地の人と積極的に接触して直接的に情報を収集し、正確さを出そうとするもの。そして、四つ目は、自己の感性をたよりにして、心に触れたできごとを書いているものである<sup>47</sup>。佐多稲子の当時に描かれた紀行文や小説の特徴は、むしろ彼女自身が「時と人と私のこと（4）」で語るように、「旅行者の見物」であり、その地の風景や生活習慣がもの珍しく、たのしんでさえいた。「中国でのような、ひそかに泣くということに合理化したあの経験は、もうなかった」。見るべきものとして用意された植民地の情景を、外部の人間の視点から観察するように切り取るという点にある<sup>48</sup>。

しかし、佐多稲子としては、侵略の本質を決して忘れてはいない。そのため、表面の南方熱の片方に、それを批判する視線も作品の中に潜んでいた。それは「髪の手紙」を読むならば判然としてこよう。

一

「髪の手紙」は、1943年9月『文藝読物』13巻9号に掲載された短編である。『文



『文藝讀物』は『文藝春秋』が発行した月刊誌である。その前身は『オール讀物』であり、大衆作家のほかにも、純文学系の武田麟太郎、丹羽文雄、高見順、林芙美子、井伏鱒二、尾崎一雄などの作品が掲載された。戦時中は敵性語排斥運動に伴い、「髪の手紙」が掲載された9月号から『文藝讀物』に改題され、1944年には『文藝春秋』に統合される。佐多稲子は1942年10月末から翌年4月上旬にかけて、林芙美子たちと「南方徴用作家」としてシンガポール・マレー・スマトラなどを慰問しているのである。その当時の「南方」体験を帰国後いち早く小説化したのは「挿話」（1943年7月）「ゴムの実」（同年9月）と「髪の手紙」である。

「髪の手紙」では、メダン市を舞台に、オランダの混血児ベエを視座に描かれている。戦争により、ベエは家族と共に敵性国人として俘虜収容所に入れられ、父親が行方不明になり、家まで日本軍の管理下におかれる境遇に遭遇している。今までの幸せな家族団らんが失われていながらも、勤務している日本の新聞社のメダン支局でも、これまでオランダの支配下にあったマレーやメナンカバウ人らの同僚、更に小間使いの「支那」人よりも低く見られていたため、自尊心が傷つけられ屈辱を感じる。やがて、母親ロゼエが理詰めで妥協せず争った故、没収された自分の持ち物を引き戻した。それについて、ベエは日本人の支局長に助けを求めたと思っているので、彼に好意を寄せ始め、日本びいきになっている。それによって、今までオランダ人の権利を示した赤い髪も引け目を感じ、歎く対象に変化してくる。そして、スマトラ新生一周年記念のお祝いに出場するミス・大東亜に選ばれることにより、権力者の前で、弱い立場に立つ若い娘が屈服して植民者への同化を求めようとする心を細やかに解剖してみせたと同時に、母親がオランダ人としての誇りを貫き、植民者に抵抗する姿を副旋律として描出している。一方、作品の中では、原住民や「支那」人や日本人の支局長と兵士などの登場人物を通して、人種差別、性差別および同じ弱者同士の差別に示される人間性の問題をも内包している。国策文学の気運が高まる時代において、佐多稲子自身も時代に屈服せざるを得ない、弱者とならざるをえないことを凝視し、一貫して同じ弱者に目を向けて、国策文学の虚偽の隠れ蓑を着せた戦争反対の真骨頂を見せている。

「髪の手紙」について、長谷川啓は「太平洋戦争期の佐多稲子・2」（『佐多稲子論』）において、「オランダを退けて日本の占領下に置こうとした当時の現地の状況の中で考えてみる時、やはり一種時局への迎合と転向を示す国策文学としかいいようがないと思われる」。また『家父長制と近代女性文学』（彩流社2018年10月）では、「短篇「髪の手紙」にしても、当時の敵国オランダの「混血児」の娘が日本最良になっていくという、日本の植民地における皇民化教育政策に添った小説になった。」という指摘を認める一方、この小説に組み入れた人物から見れば、単なる屈折としてだけでは捉えきれない部分を検討することにする。

「髪の手紙」に関する本格的な論としては、鳥木圭太の「同化と異化のはざままで——佐多稲子「髪の手紙」における植民地的主体の形成について」<sup>49</sup>である。論文は佐多稲

子のスマトラ旅程とスマトラの植民地としての歴史的考察を通して、「それまで日本人が抱いていた〈西洋〉へのコンプレックスを、植民地空間におけるベエという「混血児」の身体を通じて転倒させるというきわめて暴力的な試みである。それは同時にベエという植民地主体と作者である佐多自身が巻き込まれていく支配の構造とをアナロジカルに描き出す試みでもある」と指摘する。更に、「佐多のこの暴力的試みは、自身が依拠するプロレタリア文学運動の崩壊と家族の危機を経てきた女性作家の冷めた視点を介在させることで、植民地における日本人男性の主体形成の過程とその欲望を逆説的に浮き彫りにしていくことになるのだ」と析出している。つまり、主人公のベエにメスを入れて、植民的主体の形成について論を展開しているのだ。

人間は周囲の環境に合わせて自分の行動を決定している。戦時中、国家権力の暴力性をおびた弾圧の下で「転向」を強いられた情勢下、戦時中における佐多稲子の作品は、常に「戦争協力」と結び付けられるのも無理はない。確かに否認もできない。しかし、戦争協力的傾向と表裏して、プロレタリア文学者、しかもあくまでも社会的弱者に寄り添った作家として、侵略戦争の本質は知らないわけではないため、戦争反対のモチーフを隠しながら必ず何かを介在させて訴えかける。今まで見てきた戦時下の作品が示したように、主人公が主旋律として時局迎合の色合いを帯びている反面、わき役が副旋律として、戦争反対の思想や言動を伴っている。それは佐多稲子という作家としての引っ込み思案で弱いところであるが、他方、人並み以上の負けん気と強靭さでもある。

「髪の手紙」は現地における人種問題・階級問題・ジェンダーなどに見る人間性の編入により、佐多稲子が見ている別の世界を味わうことができ、そして、そこに見出す新しい発見を通して、別な角度から「髪の手紙」を価値づけることができるだろう。

## 二

「髪の手紙」は同時代の外地を扱った作品である。時代背景としては、1942年、大日本帝国は東南アジアに侵攻し、オランダ軍を破り、オランダ領東インドのボルネオ島、ジャワ島、スマトラ島、オランダ領ニューギニア（高価値の銅山がある現在のインドネシアのパプア州）の重要な油田地帯を占領し、新たな植民者になった。日本軍政下において、旧宗主国の人への「処遇は実際に実行され、一部の協力的な技術要員を除いて多くが俘虜として収監された」<sup>50</sup>が、混血児は純血オランダ人と区別され処遇される。これらオランダ人および原住民を除く外国人に対しては、居住登録制を実施し敵性顕著なるものに対しては拘束を行った<sup>51</sup>のである。舞台は日本の新聞社のメダン支局である。そこで、18歳で混血児の父と母を持っている混血児の主人公ベエは日本人支局長のもとで、原住民、支那人など民族、国、階級、ジェンダーの異なる人々と一緒に働いている。作品は、佐多稲子が愛用する「叙景と会話」<sup>52</sup>の文体で、登場人物の微妙で複雑な関係と心理を描出している。

今度の戦争で、煙草会社に勤めていた父親が行方不明になり、一時ベエたちも母親と一緒に俘虜収容所に収容されたが、母親に仏国とそれにマレー人の血とが混じっているの、子どもと共に釈放された。もとの家は敵性国人のものとして日本軍に管理されていた。こうして、日本に占領されることにより、今までの生活を逆転させて、住むところさえないほど、困窮していた状態に陥った。ベエは長女の穏やかさをもっている娘だったので、まなざしも強くはなかった。この突然の境遇の変化に、ベエは驚きと悲哀を内に抱えながら、一家の生活を支えるために、植民者に屈服して、やっと日本人の新聞社にたった一人の白人として勤めるようになった。そして、日本の新聞社に勤めることができたことにより、大きな安心を得た。このように、ベエ一家のひっくり返した運命の描写を通して、従属国の国民の運命は宗主国に支配され、翻弄されることを物語っている。

ところが、支局長吉川の偽善を看破することのできないベエはかえって、吉川を敬愛し、日本びいきになっていった。ベエは、自分の髪の色が赤いのに肩をすぼめ、疎外感にさいなまれている。彼女は「黒かったらどんなにいいだらうと思」った。「髪の毛が黒かったら、ミスタ吉川に親しい気持ちをもっと率直に表せるだろう。」と懸命に植民者に同化しようとする気まずさを反映させている。しかも、「窓のいちばん端にベエの机もあった。ベエは、正面から入らず、車庫のある横手へ廻って事務室に入っていく。靴音をこまかにひかへ目にたてる。吉川を呼ぶときも、いつも「ゆっくりした小さい聲で呼んだ」。権力者に対する弱者の心細さをまざまざと浮かび上がらせる。

しかし、ベエの苦しい立場は階級の異なる吉川に対するだけでなく、同僚の前でも引け目を感じるのである。支那の小間使い娘アミイの甲高い聲は、ベエを反撥させるけれど、どこかに圧迫されるものがある。原住民のタリブに挨拶するが、ちょっと顔を横に向けられ、無愛想である。

しかも、同じ被圧迫階級同士の間にも、人種、ジェンダー、階級によってお互いを蔑視している人間の冷たさとへつらうさまと疎隔とを描き上げた。オランダ統治期において、中国から流入してきた労務者はオランダ人とは雇用と被雇用の関係にあったが、太平洋戦争により、スマトラは日本の占領地となり、等級関係が逆転することになる。すると、

この支那系の娘だって、米屋だった父が商売を失ってから生活に困って、この支局に泣きつくやうにして働かせてもらってあるといふのに、なんだかベエを下に見る眼つきなので、ベエにはをさまらない気持ちがあつた。

一方、原住民のタリブはシンガポールの大学を出たというインテリ青年の誇りを現し、ちょっと上へあげた肩つきに気どりを見せている。

「ミスタ吉川」

と、ベエが顔を歪めて、衝立のうしろから飛び込んで来た。昂奮して入ったものゝ、何だ、ともう知つてゐるらしい顔で振り向いた吉川を見て、ちよいとたじろぎながら、

「ミスタ吉川、タリブは」

と、一所懸命なまなざしになつて、タリブは、私に命令をする権利があるのか、タリブと私とはどちらが上なのか、と訴へ出した。

実際、原住民のタリブは、電話を聞け、お茶を汲んでくれといつもベエに命令を出している。明らかに白系の混血児であるベエを軽蔑し侮辱している。

ベエの訴えに対して、権力者の吉川は、

「タリブは男であるから、事務員同士の中ではタリブの方が上である。（略）しかし、この支局に於てはすべての権利は、この支局の主である自分にある。」

ベエはその顔をちらと見てすぐ伏目になり、それでも聲を慄はせて、

「それでは、タリブは私よりも上なのか」（略）

「さうだ。タリブは昭南のハイスクールを出てゐる男の事務員であるから」

しかし、そういう明らかな性差別、そして日本人は白系の混血児よりも原住民を上に見ていることからくる侮辱にはベエは反抗するどころか、むしろ堪えようとする。それでも階級の上下を明らかにしようとする。

「アイミと私は？」（略）

「自らその領域が別なのだから、どちらを上とし、どちらを下にするといふ区別をつける必要はない」

タリブとは性によって上下区別をつけるが、アミイとの場合、職種が違う女同士を持ち出して階層の差を無化する。本当に区別するのであれば、ベエは事務員だから、小間使いのアミイより職が上であるはずのため、ベエはその答えに不平を現している。しかし、ベエは理詰めで争っていない。不満があっても、吉川を絶対の権力者としてそれに従属する一方、アミイの旅行話を「軽蔑して聞いてみた」という表現で、同じ階層の「支那人」のアミイと原住民のタリブに対して嫌悪を示していることから、元植民者の心底からの階級意識を浮き彫りにした。他方では、敵国人しかも失敗国としての劣等感と軟弱、のけ者にされたくない心細さ、個体としての存在感とアイデンティティの喪失をはっきりと反映している。更に、是と非の裁定、評価は自分で決めず、権利者に任せる自

己抹消の悲哀も浮かんでくる。

こうして権力者に服従した結果、ベエはやっと、スマトラ新生一周年記念祝いの「ミス・大東亜」の一人に選ばれ、日本人に同化するようになったという安心感を獲得した。「朝夕の出勤に、自転車のベタルを踏む足が、軽かった。」で結ばれたように、他者としてのけ者の寂しさから救はれたやうな、のびのびした気持ちになるのであった。

佐多はここで、植民者の権力に負けて、無理に植民者に同化しようとするベエの設定をすることにより、従属国の人間が宗主国に寄り添いながら、変えようのない肌の色、髪の毛などのような生まれつきのもので歎いたりする、この解決できない矛盾に苦しめられるとき、人間的弱さとどうにもならない苦境を暴露している。人種、民族の差別が人々にもたらす問題の深刻さを剔抉している。

### 三

無抵抗、しかも一途に植民者にへつらうベエと逆に、副旋律として、作者は「髪の毛の歎き」には植民者に抵抗するベエの母親ロゼエというキャラクターを盛り込ませている。ロゼエは吉川の目には強い利己的な性格に映ったが、あくまでも西洋人としての誇りを保ちつづけている気性の傲った母親である。もとの家は敵性国人のものとして日本軍に管理されていたことは不平だったため、吉川のところへ行って没収した荷物を返してもらおうとき、「ベエが遠慮がちに言ふのを、母親のロゼエは何か気負ふように眉を寄せる。「タリブには挨拶しようもしない」。「髪の毛が乱れるほど頭を振って、今日の頼みといふのを言ひ出した」。そういう一連の動作を通して権力者を恐れない強い姿勢は読者の前で展開される。そして、

自分たちに生活が開放された上は、毎日の日用品も一緒に開放されないのは不合理だ。

と言って、絶対屈服しない、あくまでも自己の権利を主張するロゼエである。

あゝいふ女はかなはんな、と、吉川はひとりで首を振った。然しそれから間もなくベエ一家の荷物の一部は持ち出し許可になった。

しかし、「ママ、ミスタ吉川にお礼に行つて頂戴」というベエの願いに対して、「アゝ、行きますよ」と、そんなぐらい何だといふやうな返事で、行かなかった。娘とは対照的に、母親が個としての主体性を堅持して、植民者にへつらわない抵抗ぶりを見せている。そして、

「どうしたの」

「飛行機が来るんだよ」

と、ロゼエがもう昂奮してきつい顔になつてゐる。(略)

「空襲だって？」

「いよいよやつてきたね」

ロゼエは、大仰な身振りで、肩をそびやかして、両手を腰に当てゝ窓の方へ歩いて行つて空を見上げた。(略)

「ママ、空襲つて、どこの国から来るんだらう」

弟がこれもやつぱり不安な顔に、口元にひきつるやうな笑ひを浮かべて聞く。

「どこの国つて…？」

「おゝ、戦争！」

ベエは突然、耳を押へるやうにして、

「ノウー！ノウ！ノウ！」

と叫んだ。(略)

「ノウ！ママ、空襲、いやです。」(略)

「ママは、ママのお母さんはインドネシアでせう。なぜ、空襲を他人事のやうに感じてゐるの？私たちの生活は、日本に守られてゐます。ママは、吉川さんの親切、忘れたの。ママ！」

「ベエ！お前はお父さんを忘れたかい」

「さうぢやない。さうぢやない！あゝ、パパ！」

と、ベエは泣き出した。

以上の母と娘の対話を通して、立場が異なるが、戦争だからこそ、彼女たちのどちらも苦しむ悲惨な境地に陥れたことを現している。戦争こそ、家族の不幸、母娘の間のわだかまりをつくる元凶であると訴える。

さて、吉川についていかに描写されているかを見てみる。

吉川は日本の新聞社のメダン支局長を務めている植民者の代表である。すべての権利は自分にあるのだと強調しているように、宗主国としての傲慢ぶりは一目瞭然である。一方、吉川が管理局に交渉してベエ一家の荷物の持ち出し許可を頼んだことを恩に着せながら、母親の挙動を官憲から注意するよう指示されていることを隠して、「日本人の目で、ベエの毎日を試すやうに考へた」という虚偽と欺瞞が映し出されている。更に、「日本のレディ、どんな風に生活してゐます？」というベエの質問に対して、

「日本のレディはね、君のママのやうに、あんな大げさな身振りはしないんだ。もっと優しくてそれでしつかりしてゐる。」

「おゝ」と、恥しさの混じった微妙な感動をみせて、

「ヤング・レディは？」

「ヤング・レディはね。よき妻、よき母になるために修養をしてゐる。イケバナとかオチャといふ作法があつて、それはしとやかなものであり、日本婦道の哲学をも體得させるものだ。」（略）

「日本では同等の男の人に対してはいつも女の方から、（略）挨拶するね。」

つまり、男性優位の思考で、女性を個人としてみなさず、妻と母の役割に縛る考えである。

こういう傲慢で、欺瞞性に満ちている吉川は近所にある酒保から兵隊の弾く「ピアノの哀調に」あわせて、「哀愁」がただよう小さな声で日本軍歌「戦友の遺骨を抱いて」（1942年に作られた軍歌）を歌っている。「遺骨を抱いて我は行く、シンガポールの街の朝」。つづいて誰かが「男だ、何で泣くものか」、「噛んで堪へた感激を」、「山から起こる萬歳に、おもはず頬が濡れてくる」「一番乗りをするんだと、笑って死んだ戦なの」というように、この所々拾っている歌詞から、また吉川と兵隊、ピアノの音、そして南国の空気のすべては哀愁に包まれるという描写から、戦争の残酷さを痛感させる。作者が意図的に抜き出したことをほのめかしている。

以上述べたように、「髪の手紙」において、植民者から被圧迫者に転落したベエと母親ロゼエ、原住民タリブと「支那」人アミイおよび植民者吉川など典型人物の設定により、戦争を相対化する代わりに、それによる階級差別、人種差別を反映している。そして同じ弱者であるが、お互いに階級、身分などによって分類する人間性の微妙なところを紡ぎだしている。さらに、ベエとロゼエを対照的に描写することにより、周りの人はみな黒髪なのに、自分だけ赤いから、「他者」となるのを恐れている人間の弱さを示すかわら、母親ロゼエは植民者に屈服しない、あくまでも抵抗の姿勢を保つことにより、戦争反対の意思を伝えている。最も意味深いのは、結びのところでは、ベエが「空襲、いやです」と叫んだとおり、戦争は絶対いやだという訴えである。

南方徴用作家として、宣伝の仕事を大別すると三つに分ける。第一は対占領地宣伝、第二は対軍隊宣伝、第三は対敵宣伝である<sup>53</sup>。実際作家は書く自由を奪われたのである。こんな中で、佐多稲子は国家権力の前で弱者としての立場であることは言うまでもない。だからそういう使命を背負った佐多稲子は、「髪の手紙」では表面的に、ベエが宗主国と懸命に同質化しようとする描写を通して植民者の支配をほめたたえるようにみえるが、紙面の背後にはジェンダー、個体の主張、階級、差別、人種などは植民化が存在する限り解決できない問題として浮き彫りした。また、ロゼエの設定を通して、巧みに植民者日本への反抗、植民者の偽りも描き出す。それは「髪の手紙」に隠されているもう一つのモチーフである。

## おわりに

行動に影響する要因としては、また同時に内在的と外在的、現実的と可能性など異なる方面にかかわっている。しかも、個人自らの欲求、理性的な認知とも関係がある。後者はさらに行動に対して自覚、自己意志などの形態を持たせる。個人自らの欲求、理性的認知と内在的動機が相互に影響しあっているうちに、行動をうながす理由の意義は一層内在的表現に変わる<sup>54</sup>。

戦時中、佐多稲子は1940年6月から朝鮮への旅行を切口に、1943年5月までの丸3年間はほとんど一刻も休むことなく海外を廻ってきた。その内、朝鮮に2度と中国「満州」に2度ずつ、そして中国中部、台湾と「南方」には1度ずつ、合わせて7度にわたって日本がかつて植民地支配、または占領していたアジアを旅行している。戦時下の空気はますます強くなって、それがすべてを支配して、作家が執筆の自由を失ってしまった時期には、こんなに頻繁に海外を廻るのは実にまれである。その理由としては、外在的には国策文学の体制下に、作家も国家権力の前で弱者として、受身的に戦地慰問とか徴用とかに応じなければならないからである。内的には、長谷川啓が「太平洋戦争期の佐多稲子・1」（『佐多稲子論』）で分析しているように、一つは夫婦生活の荒廃による虚無感から抜け出ようとする。もう一つは作家としてこの目で現地を見てみたいのである。そして最も重要な理由としては、民衆からの孤立感の解消を図るためである。そのような外在的理由と個体自らの欲求が相互に働きかけて、外地への慰問に拍車をかけた。しかも責務として、戦争協力的傾向を見せる文章を書かざるを得なかった。

本章で取り上げた三編はいずれも朝鮮、「満州」、「南方」で体験した見聞を素材に書き上げたものである。徴用作家として、宣伝する役目を負うにもかかわらず、佐多稲子は終始女性という弱者の立場に立脚して、「外地」に生きている「内地」人や現地人の女性に目を向けて、彼女たちの恨みつらみ、苦境、葛藤を描くことにより、戦争が人々にもたらした悲運を映し出す。真正面に戦時体制を批判することは不可能であっても、戦争反対を隠しながら照射していることが、以上のテキスト分析を通して読み取れるだろう。

さて、佐多稲子には、同じ素材を時を変えて書き直す場合がよくある。例えば「白と紫」は当時の「朝鮮のあれこれ」と重なり、「旅情」は後に「伴侶」と「重き流れに」に持ち込み、「髪の手紙」は同時期に書いた「挿話」及び戦後の「虚偽」に通じ合う。これらの作品の関連性がどうなるかは今後の課題とする。しかも戦時下における佐多自身の両面性（表面上の言動と心の底の意識）はそのまま作品に反映していると考えられるが、佐多稲子を考える際の重要な論点として今後一層徹底的に追求していきたい。

## 注

---

1 黒川創編『〈外地〉の日本文学選1』 新宿書房 1996年1月



- 
- 2 「占領と文学」編集委員会編『占領と文学』 オリジン出版センター 1993年10月
  - 3 アルバート・ウェント「『太平洋歴史会議』での演説」 『占領と文学』 オリジン出版センター 1993年10月
  - 4 ガヤトリ・C・スピヴァク著／上村忠男 訳『サバルタンは語るができるか』 みすず書房 1998年12月
  - 5 北田幸恵「一九四〇年前後の女性文学——宮本百合子・牛島春子・小山いと子における〈抵抗の諸相〉」 『昭和前期女性文学論』 翰林書房 2016年10月
  - 6 西田勝「佐多稲子と「満州」」『植民地文化研究(2013)資料と分析』第12号 2013年7月
  - 7 長谷川啓「〈美人〉作家の効用——アジア太平洋戦争下の中国戦地慰問」 『女たちの戦争責任』 東京堂出版 2004年9月
  - 8 5に同じ。
  - 9 鳥木圭太「女性作家の見た〈南方〉—林芙美子と佐多稲子のスマトラ—」 『論究日本文学』第106号 2017年5月
  - 10 佐多稲子「年譜の行間」 中央公論社 1983年11月
  - 11 長谷川啓「佐多稲子のアジアへのまなざし」 『戦争の記憶と女たちの反戦表現』 ゆまに書房 2015年6月
  - 12 『佐多稲子・中野重治・野上弥生子ほか来簡が語る生の足跡 日本近代文学館資料叢書【第Ⅱ期】文学者の手紙7』 博文館新社 2006年4月
  - 13 小林裕子『佐多稲子—体験と時間』 翰林書房 1997年5月
  - 14 『新日本文学』59(3) 新日本文学会 2004年5月
  - 15 11に同じ。
  - 16 ホミ・バーバ『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』 法政大学出版局 2012年9月
  - 17 樋口雄一「戦時下朝鮮における女性動員」 早川紀代編『植民地と戦争責任』吉川弘文館 2005年2月
  - 18 17に同じ。
  - 19 17に同じ。
  - 20 11に同じ。
  - 21 佐多稲子「時と人と私のこと(2)」 『佐多稲子全集』第2巻 1978年1月
  - 22 佐多稲子「色彩」 『美しい暮らしの手帳』第1号 1948年9月
  - 23 藤田梨那『中国现当代文学中的跨文化书写』 中央編訳出版社 2013年9月
  - 24 谷口絹枝「『白と紫』論—隠されたモチーフ」 『新日本文学』 2004年5月
  - 25 17に同じ。
  - 26 佐多稲子「視力」 『文藝春秋』第18巻第14号 1940年11月
  - 27 佐多稲子「朝鮮印象記」 『中外商業新聞』朝刊 19598号～19599号 6面

- 
- 28 川本三郎『林芙美子の昭和』 新書館 2003年2月
- 29 李晶編『日本開拓団の移民の中国東北地区での暮らし（写真集）』 中国網日本語版 2011年8月
- 30 馬郡健次郎『大支那案内』 春陽堂 1930年1月
- 31 『昭和一二万日の全記録』 講談社 1990年8月
- 32 28に同じ。
- 33 佐多稲子「時と人と私のこと(3)」 『佐多稲子全集』第3巻 講談社 1978年2月
- 34 佐多稲子研究会編『佐多稲子文学アルバム 凜として立つ』 菁柿堂 2013年8月
- 35 33に同じ。
- 36 長谷川啓「解題——屈折への道程」 『佐多稲子全集』第3巻月報 講談社 1978年2月
- 37 矢澤美佐紀「『重き流れに』における佐多稲子の位相」 『佐多稲子と戦後日本』七つ森書館 2005年11月
- 38 5に同じ。
- 39 劉晶輝「『満州国』における婦人団体」 『植民地と戦争責任』 吉川弘文館 2005年2月
- 40 5に同じ。
- 41 浅田喬二・劉含発・鄭毅「关于日本帝国主義満洲移民問題研究的思考」 『吉林師範学院学報』 1989年10月
- 42 5に同じ。
- 43 浅野晃「国民文学への道」 『新潮』 1940年11月
- 44 佐多稲子研究会編『佐多稲子文学アルバム』 菁柿堂 2013年8月
- 45 佐多稲子「時と人と私のこと」 『佐多稲子全集』第4巻 講談社 1978年3月
- 46 45に同じ。
- 47 神谷忠孝「南方徴用作家」 『北海道大学人文科学論集』 1984年2月
- 48 9に同じ。
- 49 鳥木圭太「同化と異化のはざままで—佐多稲子「髪の歎き」における植民地的主体の形成について」 『立命館文學』第652号 2017年8月
- 50 49に同じ。
- 51 「ジャワ敵前上陸一周年」 『朝日新聞』 1943年3月
- 52 佐多稲子「私の愛する文章」 『文藝春秋』 1955年6月
- 53 47に同じ。
- 54 楊国荣「理由、原因与行動」 『哲学研究』 2011年9月

## 第四章 マージナルな人々の切なさへの凝視——民主主義の視点から

### はじめに

民主主義とは人民と権力とを結合したもの。すなわち人民が権力を所有し、権力を自ら行使をする立場を言う。古代ギリシアの都市国家に行われたものを初めとし、近世に至って市民革命を起こした欧米諸国家に勃興。基本的人権・自由権・平等権あるいは多数決原理・法治主義などがその主たる属性であり、またその実現が要請される。民主主義文学は第二次大戦後の民主主義革命論を背景に、旧プロレタリア文学の流れを汲みながら、もっと広範な文学者の結集を目指した文学理念・運動・作品<sup>1</sup>。日本の民主主義文学は、第二次世界大戦後、蔵原惟人、中野重治、宮本百合子らが中心となって、戦前のプロレタリア文学の継承発展を旨とした文学運動である。1945年12月「新日本文学会」が結成され、翌年3月機関誌『新日本文学』が創刊された。プロレタリア文学の闘争第一主義を克服し、自由と平等の理念に立ち、国民的な広がりを求めている<sup>2</sup>。しかし、「新日本文学会」発起人に加わる事ができないと中野重治に言い渡されたとき、佐多稲子は初めて自己の戦争責任を自覚した。そして、「私の東京地図」（1946年）、「虚偽」（1948年）、「泡沫の記録」（1948年）という一連の小説を書き、自己の戦争責任問題に向き合おうとした。敗戦後の3年間は、佐多稲子にしてみれば「戦争責任問題との格闘という、黒いトンネルの時代でもあった」<sup>3</sup>。

一方、戦前の共産党員としてその党の運動とプロレタリア文学運動との最末期の困難を極めた状況の中で、なおよく宮本百合子と共に闘い続けてきた「剛毅のところがある」<sup>4</sup>佐多の闘いぶりは「歯車」（1948年）につぶさに描かれ、自分に対する不公平な待遇にひそやかな抵抗をも示している。

同時に、敗戦直前の5月に、昭和10年代の初頭から揺れ続けていた夫婦関係を解消することになり、佐多稲子の「考へや感情が、はじめて独り立ちをしたやうな気持ちになつてゐる」<sup>5</sup>。そういう気持ちから出発して、「ある女の戸籍」（1946年）を書き上げた。「妻の位置にこけつまろびつしながらむしやらに杵を突き破ってき、（略）古いものと闘ってきた人間の、執着のようなねばりを感じる」<sup>6</sup>と自己肯定的に語っている。それは私的意味では、今までの荒廃的生活に別れを告げて、新生の意欲を燃やし始める作品である。社会的意義としては、日本の民主化と平和の実現へと新しく動き始める時期にあたり、国民の人権の確立、言論・思想の自由、男女平等などが叫ばれるようになった。そういう時代の流れに、佐多は女戸主になり、女家長として、父親が異なる三人の子供たちと継母を抱えて、男を頼らずに独り立ちする女の姿を通して、「新時代を告げるにふさわしい女性解放の書となった」<sup>7</sup>。

つまり、敗戦後の3年間は佐多稲子文学の過渡期である。戦争責任の剔抉とデカダン

スな私生活の清算をして、傷痕からの立ち直りを得た時期でもある。

50年代に入り、そういう挫折感の殻を破り新しく生まれ変わる佐多稲子は他者の目を過度に気にする「他者本位」から自己への信頼を回復し、プロレタリア文学者から出発した原点を取り戻し、「自分らしさ」の解放感を求めている。小さい生活者としての一般庶民の人々の中におけいって、彼らと共に生き、彼らの生の重みを感じし続ける。民主主義文学者として、社会制度、資本家、男性の抑圧に苦しむ下層市民の声を代弁することを作家の使命と感じた佐多は、その文学に一貫した社会的弱者の表象に立脚して、少女労働者、女性の一般から、一層視線が広がり、身近なことや女性の領域の枠を越えて、現実社会の周辺に生きるマージナルな庶民の様々な姿へと目をむけて描き出そうとしている。しかもそれらの人間たちを単に被害者としてその苦境を描くだけでなく、その美点や魅力も逃さずに、個々人の夢や希望、家族との関係などを含める人間性の全体を扱っている。

事実に基づく作品の素材は、「機械の中の青春」に取り上げるような、働く女性労働者が労働環境悪化の中で苛酷な労働を強いられるという、作者が常に抱える題材だけでなく、「夜を背に昼をおもてに」に描かれる反戦・平和を唱える「婦人民主クラブ」のこと、「緑の並木道」に表現している反戦闘争のため、占領米軍に捕まえられた東大生と学生を支持する母親のこと、「樹影」に描出する原爆被害のこと、「溪流」「塑像」に記録された地域、運動体、党、国家にいたるまでの階級的と人間的なこと、「黄色い煙」に登場した事業に失敗した小企業主のこと、「泥人形」の不具者への差別のこと、「三等車」に表す労働者の貧困を取り扱うばかりでない。同時に、「婦人は再軍備に絶対反対する」、「メーデー事件と破防法」「公判傍聴記」「松川無罪確定の後」など、市民の立場に立ち、彼らの権利を主張する戦後民主主義を啓蒙する左翼言論人として、文芸、女性問題、社会問題、差別問題、子供問題などに関する評論・エッセイも旺盛に執筆し続ける。また、それらの問題に関連する、占領政策違反の口実で逮捕された東大生16人の救援活動に参加したり、松川事件のでっち上げなどにたいして闘ったり、婦人民主クラブなど戦後民主主義運動に積極的に参加する。つまり多方面にわたって、作品と行動とによって、人間的、文学的な視点から、社会的弱者の生き方と心理を「高みから批判的に断罪はしない。むしろ深い愛と共感をこめて洞察していくのである」<sup>8</sup>。

そして作品の中心人物は、苦境に立ち向かう強靱さ、人間的努力と抵抗の一方、困難から逃避する卑怯さ、気弱な狡さや、また忍耐や嫉妬や閉鎖性など、社会の苛酷な刻印を残す、底辺に生きているものが多い。本章で取り上げる「三等車」、「泥人形」、「黄色い煙」は、いずれも1950年代に書かれたもので、弱者への深い理解に立った作品である。

1950年代に入って日本は、政治的に、マッカーサー指令による共産党中央委員24名全員の追放とその直後に一部中央委員の数名が表面から姿を隠すという事態、朝鮮戦争勃発、レッドパージ、旧軍人や元特高関係者の追放解除、単独講和と日米安保条約、血

のメーデー事件など戦後史の大きな節目となる事態や事件が起こり、アメリカの長期駐留のもとで日本の再軍備が進んで<sup>9</sup>、ようやく政治的独立を迎える時代である。と同時に経済の自立化を達成しようとしていた。敗戦から1950年代までの時期は、その後の日本経済発展を支えていった経済システムが形成されていた時期である。世界市場の拡大の波に乗るには、経済の安定化と自立化、競争的市場経済への「政策の舵の切り替え」が必要であった。高度成長の好循環過程実現による国内需要の急拡大と技術導入・近代化投資による国際競争力の向上が求められるようになった<sup>10</sup>。社会は活気に満ちる一方、競争力の弱い中小企業は破産したりもする。しかも資本家は、労働者の待遇を引き下げることにより利潤最大化を図ろうとするため、貧困層を拡大しつづける。又佐多稲子にとっては、宮本百合子の追悼講演会、婦人団体の分裂の騒ぎ、それに共産党からの除名、「平和戦線を妨げる佐多ら」という題での非難、アメリカ大使から厚木たかと佐多稲子が定期的に金をもらっているという意外な噂<sup>11</sup>、長男の逮捕、長女の療養生活、執筆の重なりなど、まさに内憂外患の体である。にもかかわらず、「五十にして天命を知る」佐多稲子の戦後におけるリアリズム位相は、政治を稀薄化してゆき、下町で生活感情が最初に形成されたという自らの庶民性を見つめ直し、また民衆との繋がりの中で自己検証することによって自己立脚の場をつかみ取っていた<sup>12</sup>。そのような彼女の痛切な体験から割り出された自分らしさを求めるということは、庶民との共感に支えられた自分や社会的弱者の生活を多方面にまで広げてみつめることができ、序論の作品数のグラフで示した通り、作家としての充実期を迎える。

### 第一節 貧困に追い込まれた労働者の辛さ——「三等車」から

短編「三等車」は1954年1月『文芸』に発表した。同年8月に筑摩書房により出版された作品集『黄色い煙』に、1978年『佐多稲子全集』第8巻に収録された。作品内時間は執筆時間と同時代の作品である。1956年の経済白書のキャッチフレーズは「もはや戦後ではない」であったため、1954年のこの小説はギリギリで「戦後」である。当時は日本経済が激しい物価上昇を経験した時期である。産業活動の麻痺、原材料・資材不足による稼働率の低迷などによって生産が大幅に落ち込む一方で、海外からの復員や引き上げで人口が増加し、需要を拡大させたのである。食糧難が悪化し、戦時中の隠退蔵物資が底をつきはじめると騰勢に転じた。戦時体制の崩壊とともに出現した闇市場での物価は食糧難の深刻化とともに急騰し、国民の生計費を圧迫していった。「三等車」はそういう戦後間もない歴史的環境に置かれた出稼ぎ労働者一家の困窮をリアルに描き出している。

三等車は旧日本国有鉄道の客車等級の一つである。三等制の客車の最下級車。車体両側中央に赤帯で標示。国鉄では1960年二等級制実施により二等車となり、1969年等級制廃止により普通車となる<sup>13</sup>。

一

小説は語り手の「私」の目を見た世相を見せている。小説の舞台は東京から西へ向かう列車内である。時間は年末に近い12月も半ばになっている。仕事その他で忙しい女性らしき主人公の「私」は、鹿児島行きの料金の安い、混雑した三等列車に乗り込む。あわただしく、人の往来も多い年末のことで、列車は満員だったが、「私」は、後ろめたさを抱えながら闇屋に二百円という大金を払い、窓際の座席を手に入れる。後から工員風の若い夫婦が乗り込んで来て、「私」のすぐそばに荷物を下ろした。妻は赤ん坊を背負い、3歳ぐらいの男の子を連れている。妻と夫は、なにやら争いをしている。若い父親は、発車のベルが鳴る前に、列車を下りてしまった。事情があって、母子は父親と離れて暮らすことになるらしい。母親は、混み合った車内で苦労して赤ん坊のミルクを作り始める。「私」や周囲の乗客たちもそれを手助けする。妻は赤ん坊を背負って売店に行ってしまう。一人残された3歳ぐらいの男の子は「私」が預かった。窓越しに父親とお別れする。「私」が子どもに対する父親の姿を母親に伝えたことをきっかけに、母親は、赤ん坊にミルクを飲ませながら、一家の事情をぼつぼつと語り始める。去年、いまよりもっと幼かった二人の子を連れて東京に出てきた。物価高騰の東京では親子四人の暮らしが立ち行かないため、母子だけ故郷の鹿児島に帰ると見栄もなくさらけ出すのだった。出て来たときも、帰るときも、夫の言葉に振り回されたのである。若い母親は、「男って、勝手ですねえ。封建的ですわ」と、吐き出すように言う。周囲の乗客は、若い母親の話の聞くともなく聞いている。三等車内に生まれる同情と共感の空気がこもっている。「私」は闇の座席を買った罪滅ぼしのように、ひざの上に男の子を抱きながら、別れたあとの父親のことを想像する。目覚めた男の子は、窓の外の移り変わる景色を目で追いながら、「とうちゃん来い、とうちゃん来い」と、歌うようにつぶやく。

短い小説ではありながら、多くの登場人物が現れ、そしてそれらの登場人物を通して、底辺に生きている人たちの辛さ、人間的厚みを描き、それらの様子や心情を語っている。

二

鹿児島から東京へ働きに出ている父親は去年妻子三人を東京まで呼び寄せて、家族そろって暮らそうとした。しかし、東京は物価が高くて、暮らしにくく、どうしてもやってゆけないため、その父親だけは東京に残り、妻子三人をひとまず故郷の鹿児島に帰さねばならない。つまり、東京へ来てても故郷へ戻っても、夫は勝手に振舞う。車内まで見送りに乗り込んだ父親は、生活の苦しさに疲れ果てたらしく、怒りっぽくて乱暴なところがある。

誕生をむかえた位の赤ん坊は（中略）混雑した車内のざわめきをかきたてるように泣く。

妻と対い合っ立っている父親は舌打ちをし、

「ほら、ほら」

と、妻の肩の上の赤ん坊をあやしなながら眉をしかめている。（略）赤ん坊の口にビスケットをねじ込むようにする。（略）

「何かと泣きやませないか」

夫は苛々するように細いかん高い声で言った。妻の方は（略）

「おなかが空いているのよ」

当てつけるように言って、身体をゆすった。

汽車に乗り込む前までに、夫婦の神経が高ぶって争いでもしてきたようで、妻の口調で、一層煽られたように、夫は車を出ていった。父親の「眉をしかめて」「苛々するように」「ねじ込む」というような一連の行為は一家さえも扶養しきれない焦燥感からくる憤懣を切実に描出した。そして、発車のベルが鳴り出すと、それまで姿の見えなかった、「痩せて、顔も頭もほっそりした」若い父親が、ホーム側の窓からのぞき込んで、男の子を呼んだ。その声で男の子は父親の方へでようとして、はき古したズックの黒い靴が窓ぶちにかかるのを、

「駄目、駄目、おとなしくしてるんだよ」

窓の外からその足の中へおろして、

「握手、ね」

と、父親は子どもの手を握って振った。

そういう食糧難の時代、懸命に働いてもろくに食べられない父親の弱げな姿が浮かび上がってくる。同時に、夫は子育てにあまり関わらないが、子どもに対して優しくて深い愛情をこめる一側面のある父親像が映しだされている。赤ん坊が泣くのを妻のせいにする夫の叱責、子育てや家庭を背負う妻への苛立ちと子供への優しさを対照的に描くことにより、この若い父親には「男は外で働き、女は家庭を守る」という封建的な男権意識が根強く残っていることを物語っている。しかし同時に、父、夫としての役割を果たせぬための悲しみ、苛立ちがこめられており、複雑な立場の弱者へまで佐多の視線が延びている。

一方、上京も帰郷も夫の指図に振り回される若い妻はねんねこ絆纏で赤ん坊を負ぶっていた。はだけたねんねこの襟の下に赤い色のセーターを見せている。出がけの忙しかったごたごたを感じさせるように、パーマメントの髪はぱさぱさして、口紅がずれてついている。苛立っている夫に黙って視線を外すようにする。若い妻は、いくら生活に困

っているとはいえ、一年ぶりの帰郷なので、やはり郷里の人の前で見栄えのあるように、パーマをかけたり、赤いセーターを着たり、口紅をつけたりしているだろう。しかし、そういう若妻の勝ち気は却って暮らしにくい困窮のためごたごたにってしまった。作者はその赤色で、若い妻のエネルギーな行動力、情熱的イメージを表現すると同時に、妻の欲求不満、短気を起こしやすい、イライラするのをほのめかしている。

夫が妻を残して、出ていったまま窓の外にも顔を出さないで、彼女は一人になった覚悟をつけたようで手提げ籠の中から、何か取り出して、ねんねこ絆纏の身体で、人を分けて出ていった。3歳の男の子を「私」が預かることになっている。夫がそばにいる時、「父ちゃんがもう少し気を利かしてくれるといいんですけどねえ」と言ったように、文句や愚痴をこぼすが、いざ一人になると、母親としての能力を十分振るうようになる。売店へお茶を買いに行き戻った母親は、「ケイちゃん、おとなしくしているの」と聞きながら、しゃがんで、手さげ籠の中をごそごそかきまわした。彼女は「うっとうしい表情のまま粉乳をお茶でといた」。やがて彼女は三人掛けの端に腰をおろして、赤ん坊に乳をのませた。そして乳をのませながら、すぐそばに席を詰めてくれた会社員らしい若い男がいるのにかまわず、胸につかえているものを吐き出すように言い出した。「男って、勝手ですね。封建的ですわ」と。つづいて、見知らぬ他人たちの前で、見栄えもなくごく自然に辛い私生活をさらけ出す。

「去年、お父ちゃんが東京で働いているので、鹿児島から出てきたんですけど、東京は暮らしにくいですわねえ。物価が騰くて、どうしてもやってゆけないんですよ。」（略）

「何しろ、子どもが小さいから、私が働きに出るわけにもゆかないし、しょうがないんですよ。正月も近くなるでしょう。田舎に帰れば、うちが農家だから、お餅ぐらいたべられますからねえ」

こうして、貧困に負けていく庶民の無力さや、かすかな希望を抱いて新生活に向かう姿が妻の話を通して、自然に流れてくる。幼子二人を抱えた母親の生活の匂いも伝わってくる。車内のまわりのひともこの親子に注意をひかれ、「聞こえるほどのものは同感して聞いている」。三等車に乗り合わせる一般庶民の生活実態と連帯感をひそめている。

そして、3歳くらいの男の子ケイちゃんは、傍らの父親によく似ていて、やはり「痩せて頭から顔のほっそりし」ているのである。普通なら東京から田舎に帰る場合、新調ぐらいはするだろうが、しかし、ケイちゃんは普段着のままの恰好で、はき古したズツクの黒い靴をはいて、おとなしく周囲を見て突っ立っている。そして、「不安げな返事」、「遠慮がちに心細さをつい声にだしたというような、ひとり言のような声」はいかにも可憐な子だろう。また、ホーム側の窓からのぞき込んで、自分と呼んでいる父親を見ると、「するすると人の中をホーム側の窓へ渡っていくと、黙って、その窓に小さい足を



かけて父親の方へ出ようとした」。父親が見えなくなると、「子どもはちゃんと承知したように、反対側の私のそばへ戻って、動いてゆく窓の外をのぞいた」。このように、貧しくて、両親がよく言い争う環境のなかで育てられた子供が自然とその年齢にふさわしくなく、気をきかせている。やがて、ケイちゃんは震動の継続に「私」の膝で居ねむりを始めた。

が、子どもの眠りもやはり浅かったと見え、少し経つと彼は頭をあげた。眠りから覚めても、この男の子は何も言わず、母親のいるのを安心したように外を眺めている。男の子のおとなしさは、まるでこの頃からの我が家の空気を感じ取って、気兼ねをしていたようだ。

「ケイちゃん、おむすび食べる？」

母親は片手に赤ん坊を抱いている身体を曲げて、片方の手だけで籠の中からおむすびをさがしだした。母親に声をかけられると、男の子はにやっと笑って、それを受け取った。

ふと男の子が小さな声でひとり言のつぶやきのように、「父ちゃん来い、父ちゃん来い」と歌っている。窓越しのお別れに続いて二度目の、父への思いを自然に子どもらしく表現している。それはほとんど誰も見ていない状況で、無意識的な感情表現である。一方母親の方は赤ん坊にかかりきりで、あまり3歳の男の子のことをかまっていあげられていない。つまり母親からも父親からも放り出されているケイちゃんは、母親に声を掛けられ、おむすびを食べさせてもらうときの安心感と満足感が浮かび上がってくる。そして、子どもだから我が家の生活事情のこまかいことは分かるはずがないが、やはり父親の方に懐いているようで、両親が一緒にいるのを望んでいるごく当たり前の素朴な願いを込めている。しかし、そんな小さな幸せさえも食事も満足に満たされない困窮で壊されてしまっている。

作者の視線は、赤ん坊はおなかがすいたため泣く、ケイちゃんはお母さんからおむすびをもらって、始終黙っていたがにやっと笑う、親子共に十分に食べられないので痩せて顔も頭もほっそりしているという、飢餓状態におかれるマージナルな一家族の不安と悲哀にそそいでいるのである。

### 三

さて、三等車でこの一幕始終を経験している語り手の「私」を、いかに書き上げたのかを検討してみる。「私」は闇で座席を買うのははじめてだったが、「内心ほっとしていた」。しかしながら闇の座席を買うのに、やはり犯罪感を覚える。その罪をほろぼすようにせめて男の子を膝に抱いている。母親にも優しくてちょっとお節介なことまで

やってしまう。「私」の表面的な行動と内面的な心理は、ともに市民生活の雰囲気染まる庶民的人情を示している。そして、前の座席にいた50年配の婦人も同じく闇で200円かけて買ったと知り、「先方も、私も、安心したようになった」。禁止されていることも、みんなでならば心理的な抵抗もなく行ってしまう微妙な人間の心理を素直に描出した。前述したように、1950年前後はインフレが激しくなる一方である。「鉄道運賃の推移」<sup>14</sup>によると、「つばめ」東京～大阪間の三等車の料金は1020円らしい。200円で座席を買えるのは大した金額ではないといえる。だが、幼子二人を抱えた母親はそれ位のお金もないのである。「私」のこの親子に対する良心的不安とうしろめたさが一層強まっていった。

そして、赤色は刺激的な色で知られている。中でも欲求を刺激する色と言われ、女性の真っ赤な口紅がセクシーだと感じられる。「私」は「若い妻のパーマネントの髪がぱさぱさして、口紅がずれてついている。それがつんとしているのが、妙に肉感的だ。」と表現しているように、「私」は彼女のような貧しい人に比べて、やや恵まれている地位にいるのに、「その不格好な若い妻に対して、蔑視や嫌味を感じるどころかむしろ好意を示している」。また、彼女は争いのまま車を出て言った夫が、やっぱり発車までホームに残っていたということを知らずにいると察知した「私」は、「残念な気がして言い出す」。こうして、人を助けよいことを成し遂げさせるという調和的な人との付き合い方を身につけた庶民らしさが描かれている。作者が言ったように「何かの家族間の摩擦の時、それを調節するという神経を私はいつとなしに持った」<sup>15</sup>。そこで、駅ホームに残された父親のことを内心で色々考え続ける。長いが引用しておく。

彼は外套のポケットに両手を突っ込んで、今日一日、行き場を失ったように歩きまわるのかもしれない。彼は気持ちの持って行き場もなく、無性に腹が立っているかも知れない。彼は映画館に入るだろうか。焼酎をのみにはいるだろうか。部屋へ帰れば、この朝、慌ただしく妻子の出で行ったあとがまだそのまま残って、男子のメンコなどが散らばっているかもしれない。彼はそれを片づけながら、ちょっと泣きたくなるかもしれない。口紅がずれていた妻の、つんと口を尖らせて横を向いていた顔が、苛々と目の前に出てくるだろうか。彼はひとりでふとんを引きずり出して転がり込む。ふとんの襟に妻子の臭いも残っている。彼は、彼の方に出ようとして、汽車の窓に片足をかけた小さい息子のズックをおもい出すだろうか。その時もう汽車は、山陽線のどこかを走っている。彼はもうすっかりひとりになった実感におそわれて、ふとんの襟をやけに頭の上へずり上げるだろうか。

しかし、「私」の想像は決して内なる固定的で単純な思考パターンではなく、庶民生活に根差した実感から自然と湧きあがった真摯で、躍動感のある表現である。そういう庶民的生活者であるがゆえに、若い父親が妻子を故郷へ帰すことにより、家族さえ養え

ない窮屈から一時抜け出すだろう。しかし、その解放感は本当に一瞬間だけで、妻子のことを思うと、一人ぼっちになる自分は悔しいだろう。そして、妻子を帰したとはいえ、自分はどう食っていけるかは全く見当がつかなく、未来は暗澹である。佐多は夫を、貧しさを跳ね飛ばし、逞しい生のエネルギーに溢れている積極的な男として描くのではないし、妻を、不満の多いおしゃべり女や、或いは男女平等を唱え始める時代に入っているため、女性の権力主張や解放を求めるキャラクターとしても描かなかつたのである。むしろ生活に苦しまれる弱い人間として、彼らに深い理解を与え、強い共感をこめている。

つづいて、同じ三等車に乗り込んでいる乗客は、「私」のほかに周囲の人もこの親子に注意をひかれている。会社員らしい男が「席を詰めて、彼女の乳作りの道具を置く場所をあけてやった」。彼女の身の上話に対して、「私の前の中年の婦人も身体をさしだしてうなずいている」。「聞こえるほどのものは同感して聞いているし、すぐその向こうではまたその周囲の別の世界を作って、関りが無い」。最下級車三等車という混雑した長距離列車内に置かれた階級的に下の一般市民つまり皆同じ生存状態における人間的厚み、あるいはそれを超える生の重みを示している。若夫婦もケイちゃんもそしてその周囲の乗客も、味方と無関係な、静かな存在感により、非常に濃密な空間を何気なく紡ぎ出している。

「三等車」は20枚にならなかつた短編ではあるが、「私の作品にある、込み合った汽車の中の出来事を、作者の私が見たままのように書いてある。単なるスケッチのようなものである。がこの短い、スケッチ風のものにも、私なりのフィクションが加えられて、(略)私の対象から受けた感動を、一篇の小説に形象した」<sup>16</sup>。だから「三等車」は「作者のすぐれた抒情性を示す」<sup>17</sup>だけでなく、貧困と飢餓に追い込まれた地方から上京した労働者一家の切なさを、洗練された言葉と凝縮した表現で、客観視して生き生きと描き出している。三等車の車内はまるで下層に生きていくマーギナルな人々の生活の縮図のようで、社会を露わにのぞかせている。「三等車」の内実は今の日本人の若者には耳遠い話かもしれないが、しかし、世界のどこかで作中の夫婦のように、貧困に苦しめられているし、ケイちゃんのような痩せて顔も頭もほっそりした子もいるだろう。

こうして小説は、食糧事情が悪く、多くの国民が飢餓線上をさまよった戦後間もない復興期を背景に、さまざまな登場人物の様子や心情を繊細に描く。作者の私的感情を投入せず、歴史上の一瞬として、人間的厚みと生活の辛さを、ニュートラルで少し距離を置いた冷静な筆致で示している。佐多稲子の一貫した労働者階級への深い関心と理解をも示している。「あるとき佐多さんが、「小説って、けっきょく歴史の断片ですもの」といわれた」<sup>18</sup>。それゆえか「三等車」は佐多稲子の優れた短篇の一つとして、2016年センター試験の国語試験問題に作品全体が出題された。60余年後の今も地味な素晴らしさを持つ意義深遠な作品であると言えよう。

## 第二節 暴力や虐待を受ける知的障がい者の惨めさ——「泥人形」から

近代に入って以来、日本の多くの作家が多かれ少なかれ障がい者を扱った作品を残している。作品の中で、作家それぞれの「障害者観を示すとともに、その時代の社会一般の対障害者観をも如実にかがわせる。（略）障害者が社会からどのようにみられどのように遇せられていたのか、明確にかがえるのだ。そうした障害者の実生活や社会や家庭内で受けなければならなかった処遇を」<sup>19</sup>描くことにより、時代の変遷を捉えることにもつながる。

福沢諭吉は「かたわむすめ」を通して、日本の封建的伝統思考を批判する。野上弥生子は「準造とその兄弟」では、大正時代、障がい者である準造が周囲からの差別的言動に闘争心を燃やして政治社会の理想に向かうときに遭遇した挫折と愛憎を現した。壺井栄は「大根の葉」では、赤ん坊の目の手術をするかどうかをめぐって、治療を主張する母親と無駄銭だと絶対反対するお婆さんとの対立を描出することにより当時の家庭内での障がい者に対する態度をリアルに書上げた。佐多稲子は「キャラメル工場から」、「九官鳥」（下女代わりのように働いている知的障がいのある女性）、「満州の少女工」、「水」などのなかにも障がい者のことを介在させて、資本家の苛酷さや弱者への差別を描き出す。そして「泥人形」では知的障がい者を主人公にして、社会や家庭からの暴力と使役を振るわれた障がい者敏子の惨めな一生を真摯に描いた。

障がい者という熟語自体戦後に制定されたものである。その規定する範囲は、肢体・盲・ろうの身体から、内部障害を含み、知的から精神の分野にまで広がっている<sup>20</sup>。戦後まもなく発生した民主主義運動は障がいの有無にかかわらず、国民は基本的人権・自由権・平等権を享有することを唱えているが、しかし上述した文学のように、当時の社会的にも政治的にも家庭的にも障がい者を処遇する時、格差と差別に留まらず、暴力を加えることは決して少なくない。

一口に「暴力」といっても様々な形態が存在する。平手でうつとか引きずりまわすとか身体的なもの、大声でどなるやら、人の前でバカにしたり、命令するような口調でものを言ったりするやら、何を言っても無視して口をきかないような精神的なもの、また嫌がっているのに性的行為を強要する性的なものなどの形態がある。これらの様々な形態の暴力は単独で起きることもあるが、多くは何種類かの暴力が重なって起こっている。また、ある行為が複数の形態に該当する場合もある。

本節で取り上げる「泥人形」の敏子は以上の暴力被害を重ねて受けている甚だ惨めな障がい者である。佐多は敏子の悲惨な運命を通して、人間が貧困に追い詰められたとき、「強者」が障がい者を虐めて利用する人間性の歪みとエゴを細かく深刻に抉り出している。

「泥人形」は1960年11月『群像』15巻11号に掲載され、『佐多稲子全集』第11巻に収録された。1960年は、安保条約改定に反対する闘争で、前年から引きつづき日本国内が激しく揺れていた年である。佐多稲子にとっても多事多難なときであった。安保批判の会に参加して、首相官邸へ行ったり、議事堂内の首相室で岸首相に面会したり、アメリカ大使館前や議事堂周辺のデモに何度か出かけたりしている。「安保反対のデモは、いわば私たちの日常性の中で行われ、我が家では家族総出のときもあった」<sup>21</sup>。また、この時期に、松川裁判傍聴のためにひとりで仙台へ出かけて民主主義運動にも奔走している。そして「共産党に対する疑問が、次第に根付き始めたのもこの頃からである。(中略) 共産党そのものへの不信を秘めている、という微妙な迷いである」。そういう心身ともに疲れ果てた時期の故、書かれた小説は「壺阪」「おもいちがい」「姉妹のまん中」「泥人形」「きっかけ」「振りむいたあなた」のいずれも政治と関わらない女の悲劇そのものである。

「泥人形」は脳足りぬ敏子を視点に、家族や隣人の扱いかたをきめ細かくリアルに描きつくしている。作品内時間は、冒頭の「敏子が二十二になったとき、ようやくもらい手を見つけた」と、結びの「真珠湾襲撃で開始された対米英戦争は、ひろ子の結婚三年目の年であった」。「敏子は丁度四十歳になっていた」。そして、ひろ子の夫が「終戦後まもなく無事に帰った」ある日、敏子は脳溢血で倒れて、「三日目に息を引きとった」により、1923年から1945年までの22年間で、敏子の半生にあたる。敏子は「よく肥えて全体丸まっつい身体をしていた」。「頬がふくらんで口のあたりがほってりとしていた。髪がちぢれているので、島田のびんも張ってはいない」。「赤い模様のある帯をしめ、肩を丸めて坐っている」嫁入り姿は、「白い土で素朴に丸い形をぬき、赤い絵具でもようをつけたばかりの」田舎の泥人形のようなものである。夫となる原田は背が高く荒っぽい風貌の男である。やがて男の子を生んで元気に育った。しかし、いいことは長続きしない。子供が3歳ごろから、夫は敏子に不満を抱きはじめていた。敏子は毎日のように原田から打擲され、動物的な叫び声をあげて転げまわりながら、なぜ自分が叩かれるかもわからなかった愚鈍さである。母親おせきの懇願をうけて、兄の兼之が彼女を実家に引き取った。しかし敏子はそれによって運命が好転するどころか、一層痛ましいものとなる。血のつながる親身の人でさえ、生活的不如意や貧乏のため、彼女を捌け口として暴力を施すだけでなく、下人のように扱い使役している。母親も兄もともかく、姪とその婿までも「もうひとり敏子の主人とな」り、雑事や子供の世話を当たり前のようにやらせる。殊に際立っているのは、母親の小言や兄の暴力、そして隣の左官職の性的嫌がらせなどのような、とことんまで追い詰められたときの、敏子の精一杯の反抗の姿である。ところが、敏子は知的障がいを抱える弱い人間として、その抵抗は無力である。家族からの暴力や使役を嘗め尽くした敏子の半生は、姪の「鼻口をふさいでしまいたい」と思う気持ちで息を引きとった。

さて、作者は敏子の悲惨なる運命をいかに描いたのかについて読み解く。

佐多稲子文学のディスコースにおいては、ドメスティック・バイオレンスについての描写がばら撒かれている。ドメスティック・バイオレンスとは英語の「domestic violence」をカタカナで表記したものであり、略して「DV」と呼ばれる。DVは日本では「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振るわれる暴力」という意味で使用されることが多い。昔から多くの家庭で起きていたが、単なる夫婦喧嘩として、長い間社会的に容認されてきた。近時DVは社会的に不平等な男女の力関係という構造から生まれるもので、人権侵害であり社会問題として捉えるべきであるとの認識が生まれてきた<sup>22</sup>。そういう認識に基づき佐多稲子文学を読み返してみれば、性的なものだけではなく、種々多々のDVを受ける弱い人間の姿を配置している。しかし、今までの佐多稲子研究をみると、それについての研究はあまり展開されていないようで、本格的な論としては、主に女性の性役割からの解放の視点から「夫の暴力」という性的なものに光を当てて論じられているようである。野本泰子はその論において、「夫の暴力」は佐多稲子自身がその体験者であり、彼女の作品に比較的多く描かれている<sup>23</sup>と指摘しているが、実際女性の夫からのDVだけでなく、子どもや老人や障がい者など被害者をも登場させ、それらの悲哀を透徹して描いているものも少なくない。作者は「泥人形」では様々な人からDVを振るわれた人間の悲劇を「いっさいの感傷を排した凝視の姿勢で」<sup>24</sup>描いている。

脳のない敏子の家は、医者であった父親がなくなり、三人の子供を残され、後家になった母親おせきがこれからの暮らしに力みを見せているが、やはり急速に貧乏になった運命から免れられなかった。

敏子は矢島家にとってたしかに厄介ものだったのであろう。母親のおせきは哀憐の情があったにしろ、気性のつよいこの母親は、脳のない娘への愛情も、歯がゆがるという形でだけあらわしがちであった。

母との話に浸り込み、針仕事の手の方が留守になると、おせきが「ほら、手は動かしとらんね。すぐ手ばやめる」ととがめる。兄の兼之が結局またもとの造船所の友達の引きで尾道の造船所に勤めるようになると、女子どもだけになった。送金をしてくれるはずの兼之がなかなかそれを実行しないので、おせきは始終苛立っている。そしてその苛立ちを敏子に当たり散らしている。その上、兼之がいなくなって遠慮がなく、ますます彼女の口やかましさが昂じてもいた。毎朝のように小言をこぼし、しかも朝の内の決まった不機嫌さで、からんでいるようなものであった。

「お前のごとのろのろしとっちゃ、ちっともはかがゆきやせんよ。(略)もうお前いい年をしとって、少しはひとに云われんごとできんね。あたしゃお前のおるけんばっかり余計な苦勞ばしとるよ。ひろ子ば見んね。いくつちがうとですか、少しや考えじゃ」

敏子の前だけではなく、ひろ子がだんだん成長して頼もしくなってくると、あからさまに他人の前でまでひろ子をほめあげ、敏子を嘆いた。こうして、母親でさえ、敏子を個人として尊重しないばかりか、言葉の暴力まで振るって、敏子を痛めつける。

母親ばかりか、兄の兼之も、妻に先立たれたということもあったが、勤めがいやになったという生まれつきのわがままなので、先に上京している弟の直之を頼って、おせきとひろ子姉弟二人と妹の敏子を連れて上京した。しかし、昭和4年秋の不況の中で、慣れぬ土地での就職はきわめて困難であった。新聞広告に頼って、個人経営の鉄工場の事務員になったり、生命保険の勧誘員になったりしたが長続きはしなかった。そこで、彼は生活の不如意による鬱憤を敏子に当たり散らす。酒に酔うと敏子を叱ったり殴ったりする。兄の前では暗い上目づかいをするようになったが、その表情が気にいらぬと言って、ぱんと横ぴんたを張る。敏子は丸く転げながら少女のように「すいません、すいません」悲鳴を上げる。しかしその姿のみじめさで兼之は一層神経が昂ぶるというふうに、「すみませんなにがすまんのか。すまんこと知つとるなら、どこへでも出て働け。お前ひとりただで喰わしとる、うちは今、そんな余裕はなかぞ」と敏子を怒鳴る。食事のときも顔をしかめて敏子を見る。しかし、敏子は「愚鈍」だからこそ、その場を逃げることを知らない。しかし、彼女も人並みに誰かと話をしてみたいこともある。近所の人間と立ち話をしているところを兼之にみつけられ、その時も打たれる。つまり、自分で自分の行動を決める権利はすっかり奪われてしまう。

このように、敏子は血のつながりのある一番身近な人から身体的、精神的な暴力を加えられ喘ぎながら生き延びている。今の時代では、DVは家庭が貧困か富裕か、教育を受けているか受けていないか、文化の背景はどうかとは関係が薄いですが、昭和初期の食糧事情が厳しい時代では、貧困はやはりDVを駆動する重要な要素である。いわば、貧乏に陥れば陥るほど自分より弱い人にその鬱憤を晴らすため当たるのである。

敏子の惨めさはそこにとどまらない。22歳のときやっと貰い手を見つけて結婚して、子どもを産み、利発な元気ものに育ったが、夫の原田は子ども可愛さもあり、敏子を戻すという覚悟もでき兼ねていて、そのむしゃくしゃが敏子にだけ当たり、毎日打擲し続ける。敏子は自分が叩かれる理由さえもわからず、動物的な叫び声をあげて転げまわった。顔が腫れていたり、あざができていたりしたことから、おせきは原田の乱暴を知ると、兼之に懇願して敏子を実家に引き戻した。しかし、それきり敏子は子どもに逢うことはなくなった。基本的人権を享有する権利はこのように奪い取られてしまった。

更に、隣家の左官職の男が彼女を一人前の女として無理に暴行をした。がそのあと、

何も起きなかった素振りで当たり前のように、「何の変わったふうでもなく、相変わらず顔の青い、きむずかしい顔をしていた」。

このように、敏子の身の上に起きた身体的、精神的そして性的暴力を描き出すことにより、障がいのある弱者に対する人間の酷さを浮き彫りにした。

### 三

さて、敏子の悲惨たる運命は、親身の人々からDVを振るわれるだけでなく、身边的人たちから役に立つように下人扱いされ、利用する人間のエゴにも示されている。エゴは、語源のラテン語では「私」を表す。自分の利益を中心に考えて、他人や社会全般の利害などを軽視し、無視する態度や考え方や行動の様式である。母子四人のうちで敏子だけ人並みではなく生まれついていた。「愚鈍な表情はあきらかだ」が、「奇矯なことをしでかすというのではな」い。指図さえすれば台所仕事ぐらいはできる。

敏子がいると自分の手足のように使えることで、水仕事の手間だけが助かって、その方がよいところもあった。おせきの和裁はある百貨店が出してくれるものでいい品物がくる。だからおせきは手を荒らしたくなかった。一家でおせきの収入は大きかった。だから敏子の働きはおせきの稼ぎのうちに含まれているともいえるものだったが、誰も、おせきさえそれに気はついていなかった。

また、当人の意志を聞くことを考えもせず、自分の手足のように使うおせきの方は、自分の小言に対して、敏子の返答がないから、一層ヒステリックに声が高くなった。

「漬物ひとつ出すのにいつまでかかっとなつてですか。早よせんねッ。日は短かかるとよ。早うすませて仕事にかからじゃ、うちは立ってゆかんからね。兼之はちっともこっちのことは考えとらんし、直之は警察につかまっとなすし、うちはどうなつてですか。みんな、誰もかれも、わたしにばかりおぶせかけて、わたしのおらんごとなつたときや、敏子、お前はどうなつとるね。今のうちばい。少しゃ人並みにならじゃ。ほらほら水のこぼるッ」

こうして、生活の辛さや困窮のため、娘への愛情も異常に変質した母親の姿が歴然としている。それは家の「強者」の前で、返事してもしなくても気に食わないという板挟みになる弱者の姿も照り返している。

兄はまた、家に余裕がないため「出て働け」と怒鳴りつける。そこで、敏子は三度ばかり知り合いの家などへ女中にやられもしたが、結局、敏子は何をしたらいいのか自分では全然わからなかったため、帰されたりした。その上、兼之は敏子の衣類は勿論、他



所でもらってきた給金も取り上げた。敏子はまるでまな板の上の鯉のように、家族の人に思うがままに振り回されている。ところが、尾道に行った兼之は今度の妻がおそい初産なので大事をとりたいたいということで、今までになく敏子をしばらく寄り添ってもらい、いわゆる女中代わりに呼ぶのである。しかし、早産をして嬰兒は助からなかったため、敏子はいわば早速のように送り返された。また、兼之は尾道で再婚して、ずっとそこで暮らしていた。一度夫婦で上京して、一家の生活をみると、自分のほとんど構わなかったことには触れずに「まあこれでよかったな。敏子はしょうがない。一生うちで飼いきれだ」と言った。敏子のことで自分の無責任を紛らすという人間の狡さや敏子を動物のように扱い、軽蔑する人間の傲慢さをリアルに描出した。

このように、敏子はまるで「泥人形」のように、肉親の人からさえ自分の都合によって扱われた。

また、姪にあたるひろ子は、敏子が父親のところへ行くのには、表面的に、子どものときから苦勞させられたから、「今まで何ひとつもしないで、ずいぶん勝手ね。自分都合で敏子叔母ちゃんを呼ぶの。直之叔父ちゃんだってそうだわ。赤ん坊が生まれたとき手伝いに呼んだじゃない。まるで臨時やといの家政婦じゃないの」と不満を言って敏子を庇うように見えるが、実際、今まで当たり前のように下着まで洗いものすべて敏子にさせて、その点ではお嬢さんのようにしていたのに、敏子が居なくなった時の不便を思ったのである。そして、ひろ子の結婚三年目の年である。今度はひろ子が妊娠していた。ひろ子も同じように敏子叔母を呼び寄せることにした。ひろ子は敏子叔母を使いなれてきたし、夫の桑木も、敏子を神経にかけなかった。食糧事情が厳しくなっていたから、ひろ子は時々敏子の食事に苛立った。

ところが、敏子には子どもがあるのにあわされない。彼女にしては、別れたあとのことが気づかいたというように頭は回らないが、子どもの話をし始めると嬉しそうな表情になって、息子の話をし始める。かつてあったことだけがよみがえってきて楽しいというふうであった。そんな敏子には、かえって周りの人々はそれぞれ自分の子供の面倒をみさせる。敏子の気持を全く無視しているばかりか、まるで傷口に塩を振りかかるといふ冷たさである。

だが間もなく夫の桑木が出征したとき、敏子叔母がいてくれて助かったと思う。そして、ある日、敏子が便所で倒れた。

ひろ子は痛ましい顔つきで敏子を見つめたが、ふっと心の中をよこぎる恐ろしいおもいにわれながらはっとした。もし意識がもどって不随のまま寝つかれたらどうしよう。ひろ子は敏子のうなり声を上げる鼻口を塞いでしまいたい、その瞬間おもったのだ。ひろ子のその気持ちには、却ってその方が敏子のためにも幸せだ、という考えがふくまれていた。が、ひろ子はやっぱり自分の恐ろしさにあわてた。

このように、貧困に陥った時、強い人が弱い人間に対して、自己都合により振り回したり、自分に迷惑をかけないようにその命を奪おうとしたのに、当人の幸せのために考えるという人間のエゴイズムや薄情を実に透徹して描きだしている。困窮はまさに鏡のように人間性を映し出す。「泥人形」を読んで、思わず芥川龍之介の短編「羅生門」をおもい出すような感銘を覚える。

ところが、それらの人たちの暴力や使役に対して、敏子は抵抗しないわけでもない。敏子は「赤ごのとき、抱いとった乳母が縁から落としてさい、そいで鈍になってしまわした」らしいが、自分が人並みではないということは知っていたし、人並みに誰かと話をしてみたいという競争意識に似たものを抱いている。小説の中では敏子の抵抗する場面は4カ所を設定している。

兄が酒に酔って、パンと横ぴんたを張ったとき、敏子は「あたしゃ、何にもしとらんでしょうが、たたかんでもよかでしょうが」と、二重瞼の腫れぼったい目を悲しげに伏せる。そして、隣人の男の無理強いに、「あら、いやばい。やめんですか切羽詰まったように」言って抗っていた。またおせきの小言を平気で聞き流しているのではなかった。「彼女はそんなとき額にくっきりと太い筋を立てて、辛そうな顔でぬかみそ桶をかきまわしなどしている」。殊更に際立っているのは、おせきがいつも人前でひろ子と彼女を比較してということにより、ひろ子に対抗意識を持った。「わたしでも障子ぐらい張ることはできる」と言い出して、障子張りを試みたがついに果たせなかったのである。そういう周りの人から、さらに若輩者の姪からも生意気な感情で叔母を圧迫しているような素振りにはとうとう抑えきれず爆発した。ある朝、敏子は狂ったように叫び声をあげて、包丁を握って、おせきに振りかざした。「毎日、毎日、黙っとれば、お母さんは私ばかりいじめて。ああ、もう知らん、知らん。私はこれでも一生懸命やっとする。ああ、もう死んでしもた方がまし」。つかまえられた敏子は身をもんで泣き泣き言っていた。いかに悲惨などん底までに押しつけられた人間のせつない呐喊が響いているだろう。しかし、それが敏子の、ひろ子のことで嫉妬したおせきへの怒りだとは誰も気がつかなかったのである。そういう不平等や差別から引き起こした嫉妬はいかに強烈なものであるかを、筆者が真摯かつ透徹して読者に描いてみせてくれた。

しかし、敏子の抵抗は無力なものである。歳月がたっているうちに、敏子のいつも上目づかいでおせきの小言を聞き流している表情が、この頃はなくなった。上目づかいは黒眸よりも白いところが目の中心になっているかのようなようである。「何事かにじっと耐えている眼だ。内部からの力で堪えているその力のために、自然に黒眸がじっと引き上げられ、下のまぶちの白いところこそ、そういうものだけが見ることのできるのを見つめているようだ」<sup>25</sup>。眼は心の窓であるといわれるように、眼は心的状態の外在化であり、目の運動には精神の運動を伴うのである。敏子が周りからの圧迫に対してとうとう負けてしまい、上目づかいする力さえなくなり惨めな一生が終わった。

「泥人形」というタイトルはメタファー表現を用い、敏子の「丸まっちい身体」と土

塊のように頭の回転が遅れているという二重の意味を持たせ、外的表現と内的知能を統合して、作品全体を引き立たせる画竜点睛の一筆である。しかも「敏子」という名前も意味深い。「敏子」はもともと「愚鈍者」ではあるが、佐多が意図的に皮肉的に「敏子」という名前を与えているのだろう。結末に「(ひろ子は)骨壺の犯すべからざる重さを感じ、敏子叔母の生涯にわびるように目をつぶって祈った」と書かれているように、佐多が「弱い人間に向かった時の普通人間の不遜」と傲慢、弱い人間を利用する人間のエゴと虚偽を深く掘り下げている。この世の苦しみを嘗め尽くした敏子という「愚鈍者」の悲惨な素材を扱いながら、「敏子」という名前を付けたことにより、そこに希望と願いを託している、佐多の一貫した積極的姿勢と温かい人間味をこめていると言える。

上述したように、「泥人形」は敏子というキャラクターの設定を通して、「みんなの方が敏子を利用し、敏子は一生懸命、はたに迷惑をかけぬようにひっそりと従って、却ってみんなに役立ってきた」のに、よその人はともかく、母親を含む血縁者からもさんざんにいじめつくされ、「一生飼殺しだ」とまで言われた。貧困に追い込まれた敏子の親身の人も、障がい者の敏子も皆生活のどん底に陥った弱い人間であるが、しかし、佐多は「泥人形」を通して、同じ社会的弱者でありながら、極端な境遇に置かれた時、やや強い人間の人間性の疎遠と歪みを冷徹に凝視して描出している。佐多の人間性に対する鋭い視線と剔抉を映し出している。

### 第三節 事業に失敗した中小企業家の虚勢と気弱さ——「黄色い煙」から

佐多稲子文学においては、有産者を主人公とするものはほとんどないといえる。そういう意味では「黄色い煙」は中小企業家をめぐって書かれているため、佐多文学における異色の存在である。そうとは言え、主人公の中小企業家は決して事業が隆盛な成功者として描かれるのではなく、却って戦後の政治的、「経済的変動にうまく切り替えのできなかった一人であり」、銀行家や弁護士そして事務員など「権力者」にぐるぐる回された気弱な人間として造型されている。佐多稲子の一貫した弱者への目線が感じられる。いわば強者か弱者か絶対不変ではない。客体によって立場も変わる。前節の母親のおせきも兼之などは、市井の下積みの貧困者として無論弱者である。しかし知的発達が遅れた「敏子」の前に対しては、自分の手足のように当人の意志を構わずに自分勝手に指図する強者に変身した。こうして、佐多稲子は常に弱い人間の生のあり方、そしてそれを通して社会のあり方と人間性を映し出すという彼女独自の文学世界をつくりあげた。

「黄色い煙」は1953年9月、『文学界』第7巻9号に掲載された。所収単行本は1954年8月『黄色い煙』で筑摩書房により出版された。1978年6月『佐多稲子全集』第7巻に収録された<sup>26</sup>。「吉太郎のこの家も戦時中に買ったものだった」「十七年位だよ、たしか。」から見れば、作品内時間と同時代作品だと推定できる。作品の時代背景としては、本章の「はじめに」にも述べたように、1950年代に入って、社会は活気に満ちてい

る。しかし一方、1952年11月27日の衆院本会議で加藤勘十（社会党）の「中小企業発言」の確認に対し、池田通産相は「正常な経済原則によらぬことをやっている方がおられた場合において、それが倒産して、また倒産から思い余って自殺するようなことがあっても、お気の毒でございますが、やむを得ないということにははっきり申してあげます」と示したように、政府の金融引き締め政策によって、競争力の弱い中小企業は破産したり、企業主の自殺も相次いでいた。そして「黄色い煙」の素材については、小林裕子の「佐多稲子の「黄色い煙」と「ばあんばあん」をめぐって」<sup>27</sup>を参考にしてみたい。

これらは佐多稲子の社会的怒りを掻き立てて、自ら中央委員を務める婦人民主クラブの新聞（一九五二・十二・七）に匿名で「政治家の放言」と題するコラムを發表している。「池田元大臣は今度さすがに失脚したが、これも池田元大臣個人の失敗ではない。その立っている吉田政府の性格である。そのことを私たちは、はっきり知っておきたい」というように、鮮明な政府批判を打ち出している。

こうした時期、佐多の日記によれば一九五三年三月から七月にかけて自宅の売買をめぐり、葉子の舅・湊安太郎との直接交渉が始まり、佐多の仲介で湊の家は田中澄江が買い取ることになった。（略）新聞報道だけでなく、身近な姻戚筋の湊安太郎と会い、その風貌、弁舌などに接して、佐多稲子の小説の構想は固まっていたのではないだろうか。

小林裕子のこの論は初めての本格的な「黄色い煙」論でもある。論文の中では時事的關心事を小説に取り込むということをめぐって、作者の未公開の日記などの資料により、作品のモデルと創作動機との関係を解き明かした。

—

「黄色い煙」は中小企業家が事業を起こそうとするが、堅実に事業そのものに努力をしないで、資金の調達のため四方八方奔走していながらついに果たせなかった物語である。当人の夢・焦燥・虚勢・不確かさと気弱な狡さ、およびその過程に出会った様々な人間像に目を据えてリアルに描いている。

田辺吉太郎はもともとは冷蔵倉庫の設計をする「機械屋」であり、戦時中の統制経済の中へ泳ぎだしてゆき、統制の枠を楯にして、安易に経営を成立させ水産業の中に地位を得た。しかしいく分空想的でもある彼は、「企業家ではあっても経営者ではなかった」ために、人間に対しても古風に人情的であった。使用人の運命を自分の都合で取り決めるものだから、自分の掛けてやった恩に対して相手も奉仕しなければならないという人情の解釈で、しばしば裏切られた気持ちも味わっている。そういうこともあり、戦後の政治・経済の激変にうまく対応できず、没落してしまった。

しかし、それで気が済まない彼は一度立ち直らなければならいと思って、戦後、油が不足していたとき、北海道の漁場では、魚の加工工場が魚油の抽出を企てたので、彼も塩干工場を魚油の抽出工場に切りかえるために、開発銀行に融資を申請したが、350万の最初の申請が100万になってやっとおきるまでには、殆ど一年かかっていた。東京から北海道まで何度も往復して、その旅費だけでも40万がすでに空費されていた。

更に、統制時代には水産業に対する金融の道も安易で、彼は担保なしで1億5000万円借りだしている。戦後になってその見返りが必要となったとき、北海道の漁場に1500万円の冷蔵庫を二つ買って、その一つを7000万円に見積もらせることで、1億5000万の借金のバランスをとった。だから彼は事業というより、むしろ背負い込んだ借金のために追い立てられている。結局戦時中購入した家屋も抵当にして売却せざるを得なくなる羽目に陥った。しかし経営者ではなかった彼は、人任せの北海道漁場の冷蔵庫も魚の統制がはずれて立ち行かなくなり、塩干工場にして魚の加工を試みたが、それもうまくゆかなかった。吉太郎は焦り、山形に山を買って酪農を計画したりしたが、それも牛を置くところまでゆかぬうちに資金がつかなくなかった。がそれでもあきらめずに夢見がちな彼は、新たな計画を立てた。それは魚油の抽出から、硫黄の抽出を試みようとする。そのためまた資金借り出しの運動を始めたまま、吉太郎はいよいよ金詰りになって身動きが取れなくなっている。そんな彼は、外で資金調達のためにさんざん白眼視されたが自宅に帰ったら、虚勢を張り、毎朝薪で御飯を炊いたり、家族の前で肩をすくめて笑いを見せたりして一種の気どりをしていた。しかも、相次いで起業計画のビジョンを描き、

「時子も心配しているでしょう。親父が、こんな小さなアパートに入ったとおもって。しかし、今度の仕事が成功したら、土地の新聞が一斉に書きたてますよ。鉦山でも、私の仕事の成功を待ってるんだ。早速、機械の注文があるね。特許もとれるとおもうよ。それでさ、今度、家を建てるなら、地所は、どのへんがいいかね」  
(略)

千代子が父親の気分をあやすように言った。

「私、今度、私の部屋、絶対に洋間にしてね。この前みたいな古くさい家、厭よ」

実際、着実に事業のために工夫するのではなく、資金のために四苦八苦を嘗め尽くした父親の「黄色い」で象徴している硫黄抽出の計画は「煙」のようで、果てしない夢である。

## 二

さて、吉太郎は空想家として描かれている一方、立ち直るために努力を払っているが、

努力の方向性を間違えている人物像に形象化されている。その努力のため様々な権力者から屈辱感を与えられていた。

もともと資金がないのに「田辺さん、政治的に動かなきゃだめだよ」と聞いてその運動費に、高利貸から借金もした。しかし、企業のために融資されるはずの金が、政治的な動きを必要としたり、手続きにいくつも段階を通ったりするうちに、こうして不生産的費えとなった。当時の権利機関は事業の正当性により判断するのではなく、賄賂やコネなど不正手段を利用して、中小企業家を困らせるという時事問題を掲げている。また、硫黄抽出に成功すれば、魚油で総倒れになっている北海道の町が再生するかもしれないので、吉太郎は関係役所と金融機関を説いて回ったが、その手続きをしてもらった算段の金策でも苦勞していた。田村町の銀行で、貸付課長の机のそばに自分の椅子をくっつけるように乗り出した姿勢で、ぐるっとした目に微笑をふくませて相手をうかがいながら懇願したが、貸付課長は口元には微笑を浮かべながら眼鏡の奥でじっとしている眼つきで、はねつけた。権力者の前で吉太郎が示した気弱な気どりが浮かび上がった。

やっと家が売却できた。吉太郎は頼みつけの計理士のところへ行って、税金を負けさせる交渉を頼んで、礼金 5000 円を前渡した後、戦争へ向かう気持ちで北海道へ立った。吉太郎が小樽と札幌の間にある町に降りると、全く敵地を感じた。町全体が活気を失っているのだから、相手からの威圧が少なくなったが、彼はおのずと気負った。「もう一度ここに勝名乗りを上げたい、とおもった」。しかし、資金借り出しは、この町での彼の過去の失敗で、信用の回復が困難だった。この町に来たときいつも滞在する家へ田辺吉太郎が落ちついたとき、この家の主人は軽い調子で「どうもいろいろなこと言う人間がいて困るですな。銀行の信用にもひびきますから」と伝えた。そう言った通り、吉太郎は町の銀行で支店長が出張したとか、申請者の調査などの理由で断られた。それでも彼はあきらめずに、個人の自宅まで訪ねて行った。が「彼はしばしば皮肉なまなざしで、鋭く見つめられ、問い返された」。そして彼の説明を聞いたら「ほう、そうですか」と、相手は、承りました、という顔をわざと見せてそっぽを向くのだ。このように、自信がないし、実際に精練の研鑽もしないのにただ実現してみたいという願望だけに頼り、資金調達のに弄ばれた気弱な人間像が描かれている。結局のところ、工場調査の結果は分からなかったし、書類はどこかに回っているということで、悲観論も聞かされた。「やっぱりね、前の成績が悪いんでね、どうもうまくないんですなア。田辺さん」と、相手は帳面をぱたんと閉じて、椅子に背を持たせながら、じろっと吉太郎を見た。このように、行政上のなすり合いとごまかしにはさすがの吉太郎も激怒した。

「どうしてまた、見込みが立たん、という判定が成り立つですか。私しや、一生懸命なんですよ。(略) 私中小企業者の問題は、社会の問題であるし、政治の問題でしょう。(略) ここで簡単に、見込みが立たんと言って放り出されちゃ、私たちは死ぬ、と言われたようなものなんであんです。池田大蔵大臣の放言が、末端でも実

施されちゃ、これは問題でしょう」

というや否や、自分の言い過ぎに気付き、吉太郎は脂汗のにじんできた額を下げた。

「いや、言い過ぎました。どうもわたしゃ、真っ正直で、つい、余計なことをいっちゃまうんであんす。」、そして前ごごみにして笑った。

「今頃、まごまごしてるんですよ。何とかしてくださいよ」

小企業主のこびへつらう姿が浮かび上がる。更に、破産申請のために石本弁護士を訪ねると、

吉太郎は狎れあつた笑顔をつくって、上着のポケットを叩いて見せた。

「あたしゃねえ、先生、ここに二万持ってるんですが、一万しか上げられないんですよ。それで、かんべん、ということに今度はしといてくださいよ。」

「しょうがないねえ」

冷酷に、色の黒い頬をすぼめて、じろじろ吉太郎を見ていたが、石本は、ひょいと、面をとり変えたように、にやっと子供っぽい笑顔になって、あけた掌を吉太郎の前に差し出した。

「じゃ、その一万円のうちで、俺に、五千円呉れよ」

どれもこれもお金でものをいう社会的現実を物語っている。

一方、吉太郎は資金借りだしのために、さんざん面目をつぶしてまで人に弱腰になるのだが、家族の前で虚勢を張り、「大丈夫だよ、母さん、何を心配するんだ」といい、いつも未来の事業に対して自信やビジョンを見せているため、彼の苦労や苦情には子どもたちは気がつかずにいる。しかし、「若い人はいいいね」と羨望か嘆息か、もう60を越した彼はすっかり疲れ切り、そして自分の衰えを外側からも気づかせられた気持ちでひそかに嘆いている。小説の冒頭には「ひどい雨で、窓の雨戸は吹きとぶかとおもうほど撓うような音を立て、(略)雨戸もガラス障子も、軽い、枯れた音を立てた」という描写はまさに、吉太郎の夢が自分の不確かさと現存の制度のため吹き飛ばされ、ついに煙のように消えることを暗示している。

このように、作者は愛用する会話の文体で、変動期に生きる中小企業者の現実をとらえて、彼らの気弱な狡さ、資金へのねばり強さや、政治、官庁、権利者に振り回された哀れさと家族の前での虚勢を交錯させて描き出している。佐多の時勢に対する批判の姿も示しているが、時代そのものより、時代にうまく乗り切れない人間の生き方や苦しい立場をみせていよう。

同時代評としては「生きた感動をもたらすことはできない」<sup>28</sup>、「現代の政治経済的

機構に深くつながっていかないという感じがする」<sup>29</sup>といったように、高く評価されていないようである。しかし他方、「花田清輝が私の「黄色い煙」をシナリオ化して、映画に売り込もう、と言い出した」<sup>30</sup>。「黄色い煙」を読み返すと、中国改革後からつい十年ぐらい前までのことを思わせる。小説に描かれている中小企業家が起業する場合、資金のための工作だけでなく手続き上の無駄の多いことで、苦しめられ立往生した時代もあった。優れた文学は歴史時代の証言だけではなく、未来への鏡でもあると思われる。

## おわりに

「およそ、ある作家の同時代にたいする誠実さの度合いを測られる場合、その目安となるものは、生きた現実との密着の深浅と、現実をとらえる眼の純粋度とであろう」<sup>31</sup>。1950年に入るときから、佐多稲子は民主主義文学者として、庶民の実感に根差すことにより、再軍備反対、検挙された学生の救援、松川事件の現地調査や裁判の傍聴、共産党分裂による困難な闘いなど民主主義運動に突き進んでいくと同時に、それらを素材にし、社会的弱者の立場に立脚する作品群を書き続けている。その文学における弱者表象は、今までの身边を描く私小説的傾向を見せ、女性人物を中心に据えることから、一層羽ばたき、より広範囲のものにし、社会の底辺で、目立たずに生きている様々な弱者の人物像を描き、また弱者間で差別やいじめが生ずる力の構造にまで視線が届いている。そして、描くことにより、働く階級の現実に対する深い共感と理解を示し、そういう困窮に追い詰められた人間の複雑な心の動きと生の重みをきめ細かく描き、激変する社会の現実を剔抉している。作者の人間に対する深い興味と、適切な観察力、現実に関わりかける働きを十分に表現している。

本章で取り上げた「三等車」「泥人形」及び「黄色い煙」はいずれも生活の重みに耐えているマージナルな人々ばかりである。佐多は彼らに対して絶対批判的あるいは救済者的筆致で描いていない。しかも善し悪しの判断も下さなかった。また感傷に流さないで、一定の距離感を保ち比較的客観視して冷静に描き上げた。一見平易そのものであるが、実にそれらの人々に批評も含めながらも深い理解を与えて、その生き方への認識があり、さらに社会の実態をのぞかせている。

しかし、1950年代以後の佐多稲子文学への研究はまだまだ不十分であり、本格的に論じられていないようである。例えば「三等車」と並べた若い労働者の過労死を扱う「車輪の音」(1954年3月)、炭鉱の労働者その家族の生死を描いた「あるときの接触」(1954年5月)などは、どれもが下積みの人々の切なさに目を据えて共感をこめた作品である。作者の人間に対する深い愛情、現実を見つめる誠実さを映し出している。今読み返しても違和感もなく、濃厚な感銘を受ける作品である。それらに関する読み解きは今後の課題とする。



## 注

- 1 新村出編『広辞苑』第4版 岩波書店 1994年9月
- 2 伊豆利彦他著『座談によるプロレタリア文学案内』 新日本出版社 1990年4月
- 3 北川秋雄「佐多稲子「樹々のさやぎ」「開かれた扉」解説」『戦後の出発と女性文学』第10巻 ゆまに書房 2003年5月
- 4 小田切秀雄「佐多稲子と宮本百合子、壺井栄」 佐多稲子研究会誌『くれない』創刊号 1996年6月
- 5 佐多稲子「まえがき」『たたずまひ』 萬里閣 1946年5月
- 6 佐多稲子「ある女の戸籍」『婦人民主新聞』 1946年8月
- 7 谷口絹枝「戦後の再出発」『佐多稲子文学アルバム』 菁柿堂 2013年8月
- 8 長谷川家「解題——葉文学をうけつぐもの」『佐多稲子全集』第7巻 講談社 1978年6月
- 9 高良留美子「佐多稲子と中野重治——『溪流』をめぐる」『新日本文学』 2004年6月
- 10 小浜裕久・渡辺真知子『戦後日本経済の50年』 日本評論社 1996年9月
- 11 佐多稲子「時と人と私のこと(5)」『佐多稲子全集』第5巻 講談社 1978年4月
- 12 長谷川啓「女・生活・民衆の再発見——佐多稲子における戦後の起点」『日本文学』 1988年10月
- 13 1に同じ。
- 14 鉄道運賃の推移  
[EB/OL] [http://www6.plala.or.jp/orchidplace/fare\\_tokyo\\_osaka.html](http://www6.plala.or.jp/orchidplace/fare_tokyo_osaka.html)  
2009年9月
- 15 佐多稲子「時と人と私のこと」『佐多稲子全集』第11巻 講談社 1978年11月
- 16 佐多稲子「樋口一葉集」解説 『佐多稲子全集』第17巻 講談社 1979年4月
- 17 小林裕子「解題——一つの季節の終焉」『佐多稲子全集』第8巻月報 講談社 1978年7月
- 18 坂上弘「佐多さんの稟質」『佐多稲子全集』第11巻月報 講談社 1973年10月
- 19 花田春兆編『日本文学のなかの障害者像』 明石書店 2002年3月
- 20 19に同じ。
- 21 15に同じ。
- 22 鈴木隆文・石川結貴著『誰にも言えない夫の暴力』 星雲社 1999年7月
- 23 野本泰子「佐多稲子と「女性解放」——「夫の暴力」を描いた作品を中心にして」『比較社会文化研究』第9号 2001年9月

- 
- 24 長谷川啓「解題——女、このいとしきものたち」 『佐多稲子全集』第11巻月報 講談社 1978年10月
  - 25 花田清輝「佐多稲子の姿勢」 『現代日本文学大系』 筑摩書房 1970年6月
  - 26 小林裕子編『人物書誌大系 28 佐多稲子』 日外アソシエーツ 1994年6月
  - 27 小林裕子「佐多稲子の「黄色い煙」と「ばあんばあん」をめぐって」 『始更』第17号 2019年10月
  - 28 山本健吉「文芸時評——小説様式の崩壊」 『読売新聞』 1953年8月
  - 29 臼井吉見「創作合評」 『群像』 1953年10月
  - 30 佐多稲子「時と人と私のこと（7）」 『佐多稲子全集』第7巻 講談社 1978年6月
  - 31 佐々木基一「佐多稲子論」 『近代文学』 1954年3月

## 終章

佐多稲子は家庭の事情で、子どものときから、父親に苦勞させられた。少女労働者としての経験が佐多稲子の幼い心に深く刻みつけられている。そして社会の底辺に近いところで庶民とともに生きた生活環境は彼女の庶民的感情を培っている。また、プロレタリア文学者としての文学的出発は社会的弱者を凝視する文学的表現を身につけさせた。更に、作家としての活動だけではなくプロレタリア文学運動をはじめ社会活動への参加により、社会的弱者をみつめる視線も、身近の素材を越えて、弱者としての社会一般大衆の現実へと次第に広がっていった。児童、女性、老人、障がい者、一般労働者、若い学生、戦争被害者、「外地」の他者など様々な社会的弱者の人間像を描き、彼らの生き方、生の重み、抱えた苦悶に対して、深い共感で表現することにより、自身の置かれた社会や時代を逆照射して、佐多稲子の一貫した文学特質を浮かび上がらせた。つまり、「社会の中で優位な立場に立ち、それを利用して生きていく人間の姿を描いている」<sup>1</sup>「強者の文学」に対して、社会の中で劣位の立場に立った人々が社会・権力者と対峙しながら、その間の苦悩、哀しみ、切なさ並びにやるせなさを細かくリアルな筆致で描いてきたプロレタリア文学の「弱者の文学」といえよう。

本論文は、先行研究を踏まえ、佐多稲子文学に描かれた社会の底辺におけるさまざまな弱い人間の人間性から出発して、フェミニズム／ジェンダー、ポストコロニアリズムそして民主主義の視点に据えて、従来あまり研究されていない、佐多稲子文学の各時期の代表的作品を12編取り上げ、四章構成で主として作品論という研究方法により、時代背景に置かれた佐多稲子文学の社会的弱者表象の展開に焦点を絞り論じてきた。

序章では、図表により佐多稲子文学の業績や先行研究を分類してまとめたうえ、本研究の目的と意義を明らかにし、佐多稲子文学と社会的弱者の関連性を述べ、佐多稲子文学の文学史上の位置づけと「弱者の文学」としての妥当性を確認して本論文独自の研究視点を提出することを試みた。

第一章では、佐多稲子の一貫した少女労働者への描写に光を当て、戦前、戦時中と戦後の作品——「キャラメル工場から」「満州の少女工」「水」を取り上げて、人間的強者の視点から、働く少女の抵抗を論じた。

「キャラメル工場から」に関しては、父親の無責任、貧困の底に陥った生活実態、劣悪な労働環境、非人間的扱い方を凌ぎながら、一家の生計のために一生懸命に働いた主人公ひろ子を論じた。と同時に、追い込まれた若草のような少女は決して運命に負けてはいない。まさに「マント」が象徴しているように、家父長に対する忍従から家父長と工場主による階級的抑圧及び同じ階級からの多重抑圧へのしなやかな抵抗を示していると論じた。

そして「満州の少女工」については、作者が「満州」への慰問の際に、日本人が経営

した「満蒙毛織」を見物した見聞をもとに描いたエッセイだが、佐多稲子本来の働く少女への細かな観察と障がい者への温かい感情を述べた。他人の弱みに付け込んで、幼い少女、しかも障がい者ばかりを集めて安く使う植民者のやり方の卑劣さと搾取を暴露している一方、弱者へ明るい希望を与えるという作者特有の表現で、資本家に搾取された植民地少女の抵抗と未来へのあこがれを紡ぎだしていることを明らかにした。

更に「この『水』が佐多さんの短編中最高のものだ」<sup>2</sup>と評価されたように、「水」はさすがに珠玉の短編といえる。終戦後、大きく発展している過程において、その発達、繁盛、利潤最大化の背後には、下層に生きている人々が過酷な労働をしても裕福な生活ができないという貧富の差がますます広がっていく中、地方から上京した働く娘の素直さ、誠実さと、雇い主の冷酷さ、エゴが対照的に浮き彫りにされた。左足がやや短い主人公幾代は忍従、無抵抗から、その虚偽とエゴを見透かして毅然として抵抗する娘に変貌した。それに加え、出しっぱなしの水道を無意識に閉めたという習性から幾代にもたらす明るい未来が暗示されるとし、作者の人間観の確かさをも反映していると論じた。

第二章では、戦時中に書かれた12編の長編から3編取り上げて、フェミニズム／ジェンダーの視点から目覚めた女性の自我実現を論じた。佐多稲子文学に現しているフェミニズム／ジェンダーは必ずしも男性を対立にする存在としてみならず、破滅型ではない。むしろ両性ひいては人間のそれぞれの個性を認めて尊重することにより、女性の解放を求める人間的解放という調和型である。その点も本論文の独自の視点でもある。日中戦争が勃発するさなか、ファシズム弾圧が一層厳しくなった。恋愛・家庭・仕事をめぐるといゆる通俗小説を執筆することは、ある意味では戦争の本質を知り切っているかつてのプロレタリア文学者の逃げ道ともいえる。戦争の緊迫する情勢とは関係ないようなのんびりした筆致だが、その中に女性の自我希求と解放のモチーフが潜んでいることを見逃してはならない。

「乳房の悲しみ」では錯雑状態におかれた「私」は間違った結婚と母親の苦悶を率直に娘に告白するかどうか迷い、また、新たな恋愛と娘との二者択一に臨んだ母親の葛藤を描写することにより、大正時代の男権社会では、女性は、妻や母としての社会的役割に縛られて自由ではなく、個としての弱さを別決したのである。一人の女性が忍従から抵抗へと繰り返しながら成長していく過程が切実に描かれている。作品世界の問題は現在の女性においてもまだ解決できない問題として存在している。離婚率の高い現代社会では、家庭、子供、新たな恋愛あるいは独身など様々な選択に臨むとき、女性の自我や社会的役割の問題に繋がってしまう。そういう意味からいえば、「乳房の悲しみ」は、まさに今日を生きている私たちに示唆を与えてくれるアクチュアリティを持った作品であると読み解くことができる。

「女三人」に関しては、恋愛と社会参加の視点から、三人三様の女性に焦点を当てて、女性の自己実現を阻む要素とその内面の葛藤を読み解いた。そして恋愛を主線として、家庭や職場において、女性の様々、男性の色々、男女関係（夫婦間、恋人間、同僚間）

の微妙さを巧みに描くことにより、女性の解放とは、自分らしい暮らし方を選ぶことにあると述べている。苦渋に面した時の切り替え方によって、人生も変わって来るというように、佐多稲子に特有な執拗性のない切り方で、それぞれの人物を書き上げていると分析した。

「気づかざりき」は、戦争協力傾向を示す作品として、高く評価されていないようだが、戦時下の女性が国策に束縛されても、自分の大事な恋愛は自分で決めようとする生き方と態度を明らかにしている。厳しい時代において、制度内の女性が恋愛を通して自我を求めて生きていく姿であると述べた。今「気づかざりき」を読み直すと、現在「女性が輝く社会」を打ち出して、日本及び世界における女性のエンパワーメント、女性の活躍促進のために取り組んでいる日本では、女性自身には自己認識を要求され、つまり自分にはどんな生き方で生きようとするのか、個体としてのアイデンティティは確かに尊重されるか、女性解放とは何かを問わなければならないという問題を提起している。

第三章では、「白と紫」「旅情」「髪の手紙」を取り上げて、ポストコロニアリズムの視点から、植民地化された「外地」——朝鮮、「満州」、「南方」の植民者や被植民者の苦境をめぐって論を展開した。

「白と紫」に関しては日本の植民地である朝鮮を舞台に、芳子が代表している植民者側の傲慢と田貞姫が代表している被植民者側の抵抗という二重の視点にそって読み解いた。植民地にいる文化の他者としての誇示と卑下、優越と侮辱という複雑な心理を述べた。植民者女性の傲慢・反省と被植民者女性の怒り・悲哀を細かく紡ぎあげた複雑な魅力をたたえた作品であると読み解いた。白、紫、灰色などの色彩を通して、日本語の強制と朝鮮語の抑圧により「家」や言葉を奪われた被植民者の自負と悲哀を綿密に描出できた論じた。

「旅情」については中国「満州」を背景に、作品の二部構造をめぐって論を展開した。まずは外地で暮らしているうちに育てられた女性主人公の「雑草の強さを思わせる旺盛な若さ」とかすかすの哀歓を論じた。夫と大陸に渡った17歳の妻が、夫だけを頼りにした30年の「外地」生活は幸福に満ちているように見える。しかし、夫に裏切られ、歴史の激流の中を、明治末年から敗戦に至るまでの日本の運命を背景に生き抜いた一人の女性の孤悶と悲嘆の生き様を論じた。それにより、言論不自由な時代、権力に抑圧された弱者としての作者が真摯な筆致で帝国主義反対をひそかにこめているという姿勢を明らかにした。

そして「髪の手紙」は「南方」スマトラを舞台に描かれた短編として、現地における人種問題・階級問題・ジェンダーなどに見る人間性の編入により、佐多稲子の見ている別の世界を味わうことができる。そして、そこに見出す新しい発見を通して、別な角度から「髪の手紙」を価値づけることができると指摘した。つまり表面的には、植民者の支配をほめたたえるようにみえるが、紙面の背後には植民化が存在する限りジェンダー、個体の主張、階級、差別、人種など回避できない問題を浮上させている。また、ロゼエ

の設定を通して、巧みに植民者日本への反抗、植民者の偽りも描き出す。それはまさに「髪の歎き」に隠されているもう一つのモチーフであると論じた。

こうして、戦時下の厳しい事態でありながら、佐多が、プロレタリア作家としての初心を忘れずに、真正面ではないが、副旋律として、作品の随所に反戦意識を潜ませていることが読み解ける。むしろ迂回していて、面従腹背であることがいえる。

第四章では、「三等車」「泥人形」「黄色い煙」を取り上げて、民主主義の視点から戦後のマージナルな人々の切なさへの凝視を通して社会的弱者の生き方と心理を深い愛と共感をこめて洞察して描出していることを論じた。

「三等車」は貧困と飢餓に追い込まれた地方から上京した労働者一家の切なさを、洗練された言葉と凝縮した表現で、客観視して生き生きと描き出している作品だといえる。食糧事情が悪く、多くの国民が飢餓線上をさまよった戦後間もない復興期を背景に、さまざまな登場人物の様子や心情を述べる。その方法は、作者の私的感情を投入せず、歴史上の一瞬として、人間的厚みと生活の辛さを、ニュートラルで少し距離を置いた冷静な姿勢であると指摘した。佐多稲子の一貫した労働者階級への深い関心と理解を読み解いた。

「泥人形」は暴力を振るわれ、使役される知的障がい者の惨めさを透徹して描いた作品として評価した。作者は敏子の悲惨な運命を通して、貧困に追い詰められた、敏子の親身である人々の人間性の歪みとエゴを細かく深刻に掘り出したと論じた。佐多が「弱い人間に向かった時の普通人間の不遜」と傲慢、弱い人間を利用する人間のエゴと虚偽を深く掘り下げている。この世の苦しみを嘗め尽くした敏子という「愚鈍者」の悲惨な素材を扱いながら、「敏子」という名前を付けたことにより、そこに希望と願いを託している佐多の一貫した積極的姿勢と温かい人間味をこめていると述べた。

「黄色い煙」は佐多稲子文学においてはただ一作有産者であった人を主人公にしている小説であるため、佐多文学における異色の存在と指摘した。作者は愛用する会話の文体で、変動期に生きる中小企業者の現実をとらえて、彼らの気弱な狡さ、資金へのねばり強さや、政治、官庁、権利者に振り回された哀れさと家族の前での虚勢を論じた。佐多の時勢を批判する姿、時代そのものより、時代にうまく乗り切れない人間の生き方や苦しい立場を描いていると述べた。

以上の四章を通して、歴史の流れの中、あくまでも底辺を生きている社会的弱者としての一般庶民の生活を、家父長への抵抗、女性解放への目覚め、植民地者へ立ち向かう苦境、そして、貧困線をさまようマージナルな一般労働者の切なさの視点から描いた佐多稲子文学を検討してみた。そして、少女労働者にしろ、働く女性にしろ、植民地化された人々にしろ、一般労働者や心身障がい者にしろ、いずれも社会的弱者であるにもかかわらず、運命に翻弄されながら、しなやかな反抗を示す人間的強者である。しかも、そういう強靱な生き抜く存在だからこそ、主人公には悲観的ではなく、明るい未来を託している。これは佐多稲子文学研究をするとき看過してはならない、彼女の一貫したモ

チーフであり、佐多稲子文学の生命力の核でもある。このように、弱い人間の人間性に光を当て、社会的弱者を基軸に、佐多文学を解読したのは本論文のオリジナリティーである。少女労働者から女性一般を経て社会民衆へのまなざしの開きは佐多稲子の人間としての成長であり、またその文学の円熟を物語っている。

佐多稲子一生涯の著作は彼女の体験した生活、彼女の生きている時代を創作の叙事的基礎としている。作品における語り手の多くは平凡な庶民として設定されて、しかもそれらを見る時、高みから見下ろしている姿勢ではなく、真正面に向けて凝視しているのである。私たちの置かれている今の時代をじっくりとみつめて、ある国の一国主義政治の強まり、経済の不均衡、加速度的科学発展、上調子な人々、当惑する若者、ジェンダー、パワーに悩まされる女性、物質への欲深さと未来への博徒式渴望など現実を念入りに考え合わせれば、佐多稲子が描いた世界は私たちにとって決して遠い過去の存在ではない。だからこそ、彼女の現実に対する誠実な態度で作りに上げた「弱者の文学」を読み返す必要が生まれてくるだろう。

しかも本論文で取り上げた作品の解読を通して、佐多稲子の社会的弱者に対する思考と描写、及びそれらの存在に関して、二つの方面から纏めてみた。

共時的には、佐多はプロレタリア文学出身の作家としての鋭い自覚的立場を貫きながら、弱者としての労働者、障がい者など生活困窮者が生存の危機に脅かされたときに表した無念さ、内在的生存意志とひそやかでしなやかな抵抗を論じた。一方、弱者としての作者を含む女性が国家権力、職場、家庭及び個体であるそれぞれの矛盾と葛藤に追い詰められたときに現した屈折、反省、目覚めとそこからの再出発を述べた。

通時的には、佐多稲子の弱者に対する思考と表現は三つの段階に分けられる。つまり初期の少女労働者から、中期の若い女性を経て、後期の一般労働者への展開である。それによって、佐多稲子の弱者への視線展開のコネクションを解明できる。佐多稲子の作家としての成長は日本プロレタリア文学の発展と深くかかわり、プロレタリア文学の盛衰に伴って歩んできたと言える。佐多稲子の置かれた生存環境を結び付けて、作品論を用い、三つの段階について解析を行った。弱者としての労働者や女性は生存の困窮に陥ったとき、如何に対処したか、如何に抜け出したかをそれぞれの段階で異なった表現を試みている。初期では、プロレタリア文学が勢いよく発展している状況にあたり、階級意識の濃厚な作品が多い。中期の戦時中では、国策文学の雰囲気に入れ、国家の権力、夫の虐め、周囲の大衆の異様な目に遭遇した佐多自身も無論弱者である。彼女は宮本百合子のように理性的力で真正面から闘う姿を取らず、感情的に流されながら、良知と生存の合間を潜り抜けて、女性問題に目を据え、恋愛や家庭を描くことにより、偽装というよりむしろ迂回して戦争や植民政策がもたらした様々な被害を綿密に描き出している。終戦後の後期では、屈折した後の反省と目覚めであり、煉獄を通り過ぎた後の再出発である。従って人間が屈折から立ち直り、深い反省を繰り返すことにより、精神的成長や成熟、そして冷静で透徹した内心を獲得したというプロセスである。

人間は環境や条件によっては誰でも弱者になりうる。あらゆる人間は弱く、依存を免れないことを人間の基本的条件と位置づけている。と同時に相対的に独立した個体の生命である。弱者の文学は弱者のアイデンティティを尊重し、絶えず苦しい環境に生きている人々に未来への希望を与え、人生の困難を乗り越える力を与えるものである。佐多稲子は人間の哀れさを掘り下げる筆致で、弱者の生き方や複雑な心情を深い共感と理解をこめて描きながら、時代や社会に対して「弱者」への想像力を訴求することにより、作者としての使命を全うしたのであるといえよう。

津島佑子は、「文学っていうのは、あくまでも一人ひとりの些細な苦しみ、もう本当につまらないと言ってしまうと言えられないような小さな小さな現実の中でも、みんな涙を流して苦痛を感じ、そういう一人ひとりのために書いているんだ。やっぱりそれは根本として忘れちゃいけないんじゃないかなということを思います。そしてそれは佐多さんは誠実に続けていらした。」<sup>3</sup>と語ったように、佐多稲子は小市民家庭に生まれ育った感情と関係を手掛かりに、大きな歴史の中で、人間の生の重みと辛さ、そして錯綜複雑を描き、平常生活の陰に歪められた社会や人間を映し出している。

以上のような視点と方法で、本博士論文を執筆したが、しかし、筆者の能力は限られて、外国人として、異国の文化、社会や文学表現を読み解く視角や立場など異なるところがあるに相違ないため、研究者の方々のご批判を受け止め、さらに視点と分析を深めていきたいと考えている。

上野千鶴子は「文学もまた時代と状況の産物であり、それを産んだ時代の文脈と切り離せない。(略)歴史と文学、フィクションとノンフィクション、文学研究と文化研究のあいだの境界が揺らいでいる時代である。今ほど学問の領域相互の境界が問われ、揺らいでいることもないのではないか？むしろディシプリンの純粋性の名のもとに、何が排除され、何が守られてきたのかを問い返す時期だろう。」<sup>4</sup>と述べている。文学研究も新たな時代を迎えている。すでに文化人類学、民俗学、精神分析学、フェミニズム／ジェンダーなど隣接諸科学の援用により文学への研究が展開されている。しかし佐多稲子は都市の空間や歴史的空間とともに生きて、愛用した叙景の文体を用いて文学の世界を作り上げたので、エコクリティシズムの視点からメスを入れて研究するのはおもしろい課題ではないかと思っているが、これらのテーマは今後の研究の中で追求していくつもりである。

## 注

- 1 『社会文学事典』刊行会編『社会文学事典』 冬至書房 2007年1月
- 2 大久保房男『終戦後文壇見聞記』 紅書房 2007年8月
- 3 津島佑子「世代を超えた共感」『佐多稲子と戦後日本』 七つ森書館 2005年11月
- 4 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』 朝日新聞社 2002年7月





## 参考文献

### 〈日本国内〉

#### 単行本

1. 『満鉄調査資料第104編 満蒙要覧』 [大連] : 南満州鉄道 1930年
2. 馬郡健次郎『大支那案内』 春陽堂 1939年11月
3. 窪川稲子『女性の言葉／続・女性の言葉』 高山書院 1940年10月
4. 窪川稲子『女性と文学』 實業之日本社 1943年6月
5. 佐多稲子『ひとり歩き』 三月書房 1969年6月
6. 佐多稲子「灰色の午後」 『中野重治・佐多稲子集』 筑摩書房 1970年6月
7. 佐多稲子『佐多稲子全集』第1巻から第18巻 講談社 1977年11月から1979年6月
8. 宮本百合子「窪川稲子のこと」 『宮本百合子全集』第10巻 新日本出版社 1980年12月
9. 佐多稲子『年譜の行間』 中央公論社 1983年10月
10. 『女性作家シリーズ3 佐多稲子/大原富枝』 角川書店 1990年1月
11. 『昭和一二万日の全記録』 講談社 1990年8月
12. 小林裕子編『人物書誌大系 28 佐多稲子』 日外アンシエーツ 1994年6月
13. 石原千秋・木股知史他編『読むための理論 文学思想批評』 世織書房 1994年10月
14. 『佐多稲子 作家の自伝34 解説』 日本図書センター 1995年11月
15. 小浜裕久・渡辺真知子『戦後日本経済の五十年』 日本評論社 1996年9月
16. 佐多稲子『女三人』 ゆまに書房 1999年12月
17. 鈴木隆文・石川結貴著『誰にも言えない夫の暴力』 星雲社 1999年7月
18. 佐多稲子「気づかざりき」 『近代女性作家精選集』047 ゆまに書房 2000年11月
19. 『社会文学事典』刊行会編『社会文学事典』 冬至書房 2001年1月
20. 花田春兆編『日本文学のなかの障碍者像』 明石書店 2002年3月
21. 本橋哲也『ポストコロニアリズム』 岩波書店 2005年1月
22. 『佐多稲子 中野重治・野上弥生子ほか来簡が語る生の足跡』日本近代文学館資料叢書【第Ⅱ期】文学者の手紙7』 博文館新社 2006年4月
23. 村上春樹『雑文集』 新潮社 2011年1月

#### 単行本研究書

24. 奥野健男『奥野健男 作家論集』第2巻 泰流社 1977年5月
25. 巖谷大四『物語女流文壇史』(下) 中央公論社 1977年6月
26. 伊原昭『古典文学における色彩』 笹間書院 1979年5月
27. 水田宗子『ヒロインからヒーローへ女性の自我と表現』 田畑書店 1982年6月
28. 駒尺喜美『魔女的文学論』 三一書房 1982年7月
29. 福永操『あるおんな共産主義者の回想』 れんが書房出版 1982年12月
30. 水田宗子『フェミニズムの彼方——女性表現の深層』 講談社 1991年3月
31. 江種満子他編『女が読む日本近代文学——フェミニズム批評の試み』 新曜社 1992年3月
32. 前田愛『文学テキスト入門』 筑摩書房 1993年9月
33. 北川秋雄『佐多稲子研究』 双文社出版 1993年10月
34. 「占領と文学」編集委員会編『占領と文学』 オリジン出版センター 1993年10月
35. 水田宗子『物語と反物語の風景——文学と女性の想像力』 田畑書店 1993年12月
36. 岩淵宏子・北田幸恵・高良留美子編『フェミニズム批評への招待——近代女性文学を読む』 學藝書林 1995年5月
37. 大屋幸世・松村友視・神田由美子編『スタイルの文学史』 東京堂出版 1995年3月
38. 黒川創編『〈外地〉の日本文学選1』 新宿書房 1996年1月
39. 長谷川啓『佐多稲子論』 オリジン出版センター 1996年10月
40. 小林裕子『佐多稲子—体験と時間』 翰林書房 1997年5月
41. 大坊郁夫他編『被服と化粧の社会心理学』 北大路書房 1997年7月
42. 上村和美『文学作品にみる色彩表現分析』 暁印書館 1999年6月
43. 渡邊澄子編『女性文学を学ぶ人のために』 世界思想社 2000年10月
44. 菅野聡美『消費される恋愛論—大正知識人と性』 青弓社 2001年8月
45. 水田宗子・北田幸恵編『山姥たちの物語』 學藝書林 2002年3月
46. 上野千鶴子『家父長制と資本制』 岩波書店 2002年1月
47. 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』 朝日新聞社 2002年7月
48. 川本三郎『林芙美子の昭和』 新書館 2003年2月
49. 尾形明子・長谷川啓監修『戦後の出発と女性文学』 ゆまに書房 2003年5月
50. 水田宗子『二十世紀の女性表現——ジェンダー文化の外部へ』 學藝書林 2003年11月
51. 岡野幸江・北田幸恵他編『女たちの戦争責任』 東京出版 2004年9月

52. 岩淵宏子・北田幸恵編『はじめて学ぶ日本女性文学史〔近現代編〕』 ミネルヴァ書房 2005年2月
53. 小林美恵子『昭和十年代の佐多稲子』 双文社 2005年3月
54. 小林裕子・長谷川啓編『佐多稲子と戦後日本』 七つ森書館 2005年11月
55. 岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体 近代現代女性文学史』 『国文学解釈と鑑賞』別冊 2005年12月
56. 岩淵宏子・長谷川啓編『ジェンダーで読む 愛・性・家族』 東京堂出版 2006年10月
57. 児玉実英・杉野徹・安森敏隆編『二十世紀女性文学を学ぶ人のために』 世界思想社 2007年3月
58. 北田幸恵『書く女たち』 學藝書林 2007年6月
59. 大久保房男『終戦後文壇見聞記』 紅書房 2007年8月
60. 増田裕美子・佐伯順子編『日本文学の「女性性」』 思文閣出版 2011年2月
61. 上野千鶴子『ケアの社会学』 太田出版 2011年11月
62. 文教政策研究会『日本教育史』 日本図書センター 2013年2月
63. 佐多稲子研究会編『佐多稲子文学アルバム 凜として立つ』 菁柿堂 2013年8月
64. 与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』 晶文社 2014年4月
65. 鈴木貞美『日本文学の論じ方—体系的研究法』 世界思想社 2014年9月
66. 鎌田東二『乳房の文化論』 淡交社 2014年11月
67. 水田宗子編『外地と表現』 城西大学出版会 2015年5月
68. 長谷川啓・岡野幸江編『戦争の記憶と女たちの反戦表現』 ゆまに書房 2015年6月
69. 北川秋雄『佐多稲子研究（戦後篇）』 大阪教育図書 2016年3月
70. 新・フェミニズム批評の会編『昭和前期女性文学論』 翰林書房 2016年10月
71. 日本近代文学会編『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』 ひつじ書房 2016年11月
72. 福田和也『鏡花、水上、万太郎』 キノブックス 2017年2月
73. 長谷川啓『家父長制と近代女性文学』 彩流社 2018年10月

## 論文

74. 平林たい子「プロレタリア文学運動の一年間」 『女人芸術』第1巻第6号 1928年12月
75. 川端康成「窪川氏の『レストラン洛陽』」 『文藝春秋』第7年10号 1929

年10月

76. 川上元九郎「新進閨秀作家批評」『若草』5巻11号 1929年11月
77. 永松定「窪川いね子論」『新潮』28年10号 1931年10月
78. 川端康成「一九三一年創作界の印象」『新潮』28年12号 1931年12月
79. 貴司山治「作家窪川いね子」『新潮』28年3号 1931年3月
80. 窪川鶴次郎「明治以後の婦人作家論」『中央公論』47年2月号 1932年2月
81. 明石京子「女流文壇の愛夫家列伝」『人の噂』3巻4号 1932年4月
82. 大宅壮一「女流作家総評」『文芸』1巻1号 1933年10月
83. 藤森成吉「文芸状——面性的批評」『文芸』2巻8号 1933年8月
84. 堀辰雄「窪川稲子」『文学界』1巻4号 1934年10月
85. 仲町貞子「女流作家を語る」『文芸通信』2巻4号 1934年4月
86. 窪川鶴次郎「街道の児おさと一里子にやられたおけい第三部」『文学評論』1巻5号 1934年5月
87. 徳永直「芸術至上主義的傾向と闘へ—プロレタリア文学の現状」『改造』16巻7号 1934年6月
88. 宮本百合子「窪川稲子のこと」『文芸首都』3巻3号 1935年3月
89. 小熊秀雄「窪川いね子について」『太鼓』2巻1号 1936年1月
90. 小熊秀雄「文壇諷詩曲」『文芸』5巻2号 1937年2月
91. 佐藤俊子「山道」『中央公論』53年11号 1938年11月
92. 宮本百合子「はるかな道—『くれない』について」『法政大学新聞』89号 1938年11月
93. 壺井栄「稲子さんのこと」『文芸』7巻5号 1939年5月
94. 武田麟太郎「女性作家の進出・ひたむきな芸術至上主義 『分身』について」『東京朝日新聞』19121号 1939年6月
95. 北原武夫「女流作家論」『都新聞朝刊』18559、18560号 1939年7月
96. 宮本百合子「転轍—昭和の婦人作家」『文芸』8巻6号 1940年6月
97. 青野季吉「窪川稲子論」『新潮』37年6号 1940年6月
98. 「素足の魅力—女流作家論1 窪川稲子」『都新聞朝刊』18938号 1940年7月
99. 窪川鶴次郎「女流作家論 窪川稲子」『日本読書新聞』124号 1940年7月
100. 宮本百合子「しかし明日へ—昭和の婦人作家」『文芸』8巻10号 1940年10月
101. 浅野晃「国民文学への道」『新潮』1940年11月
102. 佐多稲子「視力」『文藝春秋』第18巻第14号 1940年11月
103. 十返一「女流作家論」『日本の風俗』4巻4号 1941年4月

104. 板垣直子「新旧の女性作家」 『事変下の文学』 1941年5月
105. 小原元「主体の真実—佐多稲子『キャラメル工場から』」 『文学時標』 1946年11月
106. 佐多稲子「色彩」 『美しい暮らしの手帳』 第1号 1948年9月
107. 小田切秀雄「創作方法・転向の問題」 『文芸』5巻10号 1948年10月
108. 石井通「佐多稲子をめぐって—空白の勤労者文学」 『新日本文学』5巻8号 1950年11月
109. 村松定孝「文壇五十年系譜資料」 『文芸』9巻6号 1952年6月
110. 伊藤整他「私小説と文学反動」 『新日本文学』8巻2号 1953年2月
111. 臼井吉見「創作合評」 『群像』 1953年10月
112. 佐々木基一「佐多稲子論」 『近代文学』 1954年3月
113. 松本正雄他「民主主義運動と家庭 『壁にかかる画像』『白夜』『岸うつ波』『くれない』をめぐって」 『多喜二と百合子』6号 1954年10月
114. 中野武彦「佐多稲子論」 『近代文学』9巻3号 1954年3月
115. 佐々木基一「佐多稲子論」 『近代文学』 1954年3月
116. 荒正人他「ナルプ解散前と『転向』の問題」 『近代文学』9巻4号 1954年4月
117. 荒正人他「社会主義リアリズムの問題その他——中日事変の一時的揚期」 『近代文学』9巻6号 1954年6月
118. 瀬沼茂樹「民衆芸術とプロレタリア文学」 『近代日本文学のなりたち』 1954年7月
119. 佐多稲子「私の愛する文章」 『文藝春秋』 1955年6月
120. 寺田透「佐多稲子『子供の眼』『夜の記憶』—柔軟で複雑な情愛」 『日本読書新聞』820号 1955年10月
121. 久保田正文「モチーフの主体性の質—佐多稲子の『夜の記憶』が含む問題」 『日本読書新聞』799号 1955年5月
122. 武井昭夫「私小説性と記録性の混淆 佐多稲子著『みどりの並木路』」 『図書新聞』330号 1956年1月
123. 荒正人「文士と金の使い方—文学を支える清潔な愛情 佐多稲子の『少女たち』」 『読書新聞』829号 1956年1月
124. 村山知義他「『機械のなかの青春』をめぐって」 『新日本文学』11(4) 1956年4月
125. 「佐多稲子作『機械のなかの青春』をめぐって：紡績女工さんのはなし合いから」 『日本読書新聞』849号 1956年5月
126. 佐々木基一「一九五五年の文学(文学・概観)」 『文芸年鑑・1956』 1956年6月

- 1 2 7. 臼井吉見「戦後十年文学の歩み」 『戦後十年傑作小説全集』1 卷 11 号 1956 年 8 月
- 1 2 8. 斉藤達雄「『燃ゆる限り』の暑さとその前後」 『佐多稲子作品集』 第 10 卷 1959 年 2 月
- 1 2 9. 原研吉「燃ゆる線の上の作家」 『佐多稲子作品集』第 10 卷 筑摩書房 1959 年 2 月
- 1 3 0. 小田切秀雄「はげしい抵抗のなかから——『牡丹のある家』『進路』等とさいきんの『歯車』との関係」 『佐多稲子作品集』第 2 卷 筑摩書房 1959 年 6 月
- 1 3 1. 今井好子「佐多稲子研究—『くれない』について」 『国語国文学研究論文集』5 集 1960 年 3 月
- 1 3 2. 室生犀星「佐多稲子」 『婦人公論』45 卷 4 号 1960 年 4 月
- 1 3 3. 湯地朝雄「『灰色の午後』論——一粒の主観・その他」 『新日本文学』15(5) 1960 年 5 月
- 1 3 4. 草部和子「佐多稲子著『灰色の午後』 自己凝視のきびしさ」 『アカハタ』3261 号 1960 年 5 月
- 1 3 5. 佐々木基一『日本文学全集 39 佐多稲子集 解説』 新潮社 1961 年 6 月
- 1 3 6. 木原健作「佐多稲子論—小林多喜二との論争」 『文学評論』13 号 1961 年 4 月
- 1 3 7. 花田清輝「腹話術師とその人形—佐多稲子論」 『群像』16 卷 8 号 1961 年 8 月
- 1 3 8. 板垣直子「日本の女流作家」 『国文学解釈と鑑賞』27 卷 10 号 1962 年 9 月
- 1 3 9. 野島秀勝「女流作家ということ—東西女流作家の今昔」 『国文学解釈と鑑賞』27 卷 10 号 1962 年 9 月
- 1 4 0. 伊東信他「中野・佐多・五代の作品の人間の問題」 『現実と文学』35 号 1964 年 7 月
- 1 4 1. 小田切秀雄「佐多稲子」 『日本近代文学の思想と状況』 法政大学出版局 1965 年 2 月
- 1 4 2. 湯地朝雄「何と対立すべきか—佐多稲子『塑像』について」 『新日本文学』21(10) 1966 年 9 月
- 1 4 3. 坂本育雄「佐多稲子論」 『日本文学』16 卷 3 号 1967 年 3 月
- 1 4 4. 浮橋康彦「佐多稲子『水』—研究授業を通しての教材研究」 『日本文学』16 卷 7 号 1967 年 7 月
- 1 4 5. 草部和子「素足の娘〈佐多稲子〉」 『國文學： 解釈と教材の研究』13(5) 1968 年 4 月

- 1 4 6. 秋元松代「深くたたえられた智慧の優しさ——佐多稲子『哀れ』」 『群像』  
24(10) 1969年10月
- 1 4 7. 梅地和子「『くれない』論」 『くれない』1号 1969年6月
- 1 4 8. 小林裕子「佐多稲子の短編にける抒情性——『合唱』『人形と笛』『沖の火』  
等をめぐって」 『くれない』2号 1970年10月
- 1 4 9. 大島道男「〈中学校〉民間教育の理論となかまの力のだしあいと——佐多稲子  
作『水』の授業をめぐって」 『現代教育科学』13(5) 1970年5月
- 1 5 0. 花田清輝「佐多稲子の姿勢」 『現代日本文学大系』 筑摩書房 1970年6  
月
- 1 5 1. 小林裕子「佐多文学における自己救済」 『くれない』3号 1971年10月
- 1 5 2. 中沢福子「佐多稲子の詩について——その意識過程をさぐる」 『くれない』  
3号 1971年10月
- 1 5 3. 中沢福子「初期作品をめぐって——プロレタリア作家としての出発」 『く  
れない』3号 1971年10月
- 1 5 4. 奥野健男『佐多稲子集 解説』 『新潮日本文学』23 新潮社 1971年11  
月
- 1 5 5. 古林尚「プロレタリア文学運動と女流作家—佐多稲子の場合」 『国文学：  
解釈と鑑賞』37(3) 1972年3月
- 1 5 6. 馬場あき子「戦後の解放と女流文学」 『国文学解釈と鑑賞』37巻3号 1972  
年3月
- 1 5 7. 松原新一「女流作家における政治意識」 『国文学解釈と鑑賞』37巻3号  
1972年3月
- 1 5 8. 鈴木康之「リアリズムの作品における感情調の表現」 『日本文学研究』12  
号 1973年1月
- 1 5 9. 磯田光一「政治小説の二律背反——『樹影』〔佐多稲子〕の教訓」 『海』  
5(2) 1973年2月
- 1 6 0. 長谷川啓「佐多稲子ノート——その文学発想」 『文学』41(5) 1973年5  
月
- 1 6 1. 長谷川啓「佐多稲子著『ひとり旅ふたり旅』——〈作る〉といういとなみ——  
常民の思想」 『新日本文学』28(8) 1973年8月
- 1 6 2. 伊藤忠「中野重治における民衆認識」 『民主文学』(117) 1975年8月
- 1 6 3. 駒井珠江「佐多稲子における『家』の意識」 『民主文学』117号 1975年  
8月
- 1 6 4. 津田孝「文学的反共主義への批判 時評」 『現代の政治と作家たち——  
文学的反共主義への批判』 新日本出版社 1975年8月
- 1 6 5. 山根献「背信の呪縛のなかの反党作家——佐多稲子『時に佇つ』をめぐって」



- 『赤旗』9115号 1976年1月
166. 前田広子「『くれない』論」 『虹鱒』1号 1976年10月
167. 伊佐木有子「佐多稲子『樹影』——色彩を拒否した画家と華僑の女性との十年間」 『たまゆら』8号 1976年10月
168. 田村栄「佐多稲子論」 『民主文学』(124) 1976年3月
169. 山根献「『時に佇つ』とその周辺——佐多稲子の『私』について」 『民主文学』124号 1976年3月
170. 菊池章一「心情の問題——佐多稲子『時に佇つ』について」 『新日本文学』31(6) 1976年6月
171. 大橋健三郎「『時』を繋ぎとめるもの——佐多稲子『時に佇つ』、藤枝静男『田紳有楽』、丸山健二『火山の歌』」 『群像』31(7) 1976年7月
172. 津田孝「佐多稲子『時に佇つ』その他——政治的変質と作家の戦争責任を問う力作評論」 『文化評論』(185) 1976年9月
173. 山田有策「男を描く女流文学の眼——近代より現代へ」 『国文学：解釈と鑑賞』41巻11号 1976年9月
174. 長谷川啓「『くれない』から『灰色の午後』への屈折——佐多稲子における昭和十年代」 『日本文学』26号 1977年1月
175. 長谷川啓「文学散歩(その3) 佐多稲子の生誕地長崎を訪ねて——『私の長崎地図』『樹影』の舞台を中心に」 『くれない』4号 1977年4月
176. 小林裕子「『樹影』論—退廃を拒み通す強さ」 『くれない』4号 1977年4月
177. 松原新一「佐多稲子と『配給された自由』 佐多稲子の福田恒存批判日本共産党と文学者」 『現代の文学別巻 戦後日本文学史・年表』 講談社 1978年2月
178. 磯田光一「左翼文学者の成熟と展開」 『現代の文学別巻 戦後日本文学史・年表』 講談社 1978年2月
179. 長谷川啓「佐多文学の軌跡——人間と文学深めた戦争協力」 『社会新報』2133号 1978年6月
180. 亀井秀雄「文学史の技術——松原新一・磯田光一・秋山駿『戦後日本文学史・年表』、庄野潤三『水の都』、瀬沼茂樹『日本文壇史』第十九巻～二十三巻、佐多稲子『由縁の子』」 『群像』33(7) 1978年7月
181. 佐伯彰一「『私』の中の異層——佐多稲子『由縁(ゆかり)の子』」 『海』10(7) 1978年7月
182. 小林隆久「救済者としての都市—佐多稲子『私の東京地図』をめぐる」 『エポス』3号 1978年9月
183. 古浦千穂子「『時に佇つ』の位相」 『新日本文学』33(11) 1978年11

月

184. 湯地朝雄「佐多稲子の『我が家』の問題——『溪流』と『塑像』」 『新日本文学』33(11) 1978年11月
185. 菅野圭昭「佐多稲子『水』の教材化をめぐる」 『日本文学』28(11) 1979年11月
186. 五十嵐福子「佐多稲子の『童話』から」 『国語教育研究』(26上) 1980年11月
187. 大塚博「女流における革命と文学——平林たい子・佐多稲子の帰趨」 『国文学解釈と教材の研究』25巻15号 1980年12月
188. 小林裕子「佐多稲子の挫折と再起——『虚偽』『泡沫の記録』をめぐる」 『昭和文学研究 第7集』 1983年7月
189. 川西政明「感覚の深部——佐多稲子論——『夏の葉——中野重治をおくる』を中心に」 『文学界』37(7) 1983年7月
190. 新船海三郎「『夏の葉』まで 佐多稲子の変節とその文学」 『文化評論』1983年9月
191. 神谷忠孝「南方徴用作家」 『北海道大学人文科学論集』 1984年2月
192. 北川秋雄「戦前・戦中の佐多稲子における創作方法の一側面」 『同志社国文学』(23) 1984年3月
193. 小田切秀雄「私の見た昭和の思想と文学の五十年——圧倒的な重圧、地獄からの脱出」 『すばる』6巻7号 1984年7月
194. 清水克二「戦争責任・近代・女の生き方をめぐって——『私の東京地図』と『妻の座』」 『月刊社会党』341号 1984年9月
195. 磯田光一「左翼がサヨクになるとき-2- “わが家”の内と外——中野重治・佐多稲子・平野謙」 『すばる』7(7) 1985年3月
196. 長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子(下)」 『独立文学』8号 1985年7月
197. 久保田芳太郎「『樹影』佐多稲子」 『国文学：解釈と鑑賞』50(9) 1985年8月
198. 長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子(上)」 『くれない』5号 1985年8月
199. 古林尚「戦争下の佐多稲子」 『国文学：解釈と鑑賞』50(10) 1985年9月
200. 北川秋雄「雑誌初出『くれない』における創作方法上の問題点について」 『日本文学』35(11) 1986年11月
201. 磯田光一「“わが家”の内と外——中野重治、佐多稲子、平野謙」 『左翼がサヨクになるとき——ある時代の精神史』 集英社 1986年11月

202. 青木一男「佐多稲子女史の『たけくらべ』解釈について」 『城西文学』(5)  
1986年12月
203. 長谷川啓「佐多稲子『夏の栞——中野重治をおくる』——男との美しい関係  
性を生きる女」 『国文学：解釈と教材の研究』31(5) 1986年5月
204. 中山和子「女流文学とその意識変革の主題」 『国文学：解釈と教材の研究』  
31(5) 1986年5月
205. 中島和夫「佐多稲子氏のこと——『樹影』に佇つ——その成立をめぐって」  
『文学者における人間の研究』 武蔵野書房 1986年9月
206. 香内信子「『くれなゐ』(佐多稲子)」 『国文学：解釈と鑑賞』52(10) 1987  
年1月
207. 北川秋雄「『くれない』論—佐多稲子における転向の内実」 『日本近代文  
学』(36) 1987年5月
208. 長谷川啓「佐多稲子『素足の娘』の虚構空間——桃代にみる性の目覚め」 『新  
日本文学』42(7) 1987年7月
209. 小林裕子「動作と身ぶりの意味するもの——佐多稲子の『溪流』をめぐって」  
『昭和文学研究』(15) 1987年7月
210. 長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子——南方慰問以降」 『近代文学研究』  
(4) 1987年8月
211. 香内信子「『くれない』——個の主張と愛のかたち」 『国文学：解釈と鑑  
賞』52巻10号 1987年10月
212. 大橋清秀「『たけくらべ』についての佐多稲子説の裏付をする」 『帝塚山  
学院大学研究論集』(23) 1988年12月
213. 長谷川啓「女・生活・民衆の再発見——佐多稲子における戦後の起点」 『日  
本文学』37(10) 1988年1月
214. 黒古一夫「都市労働者の論理——『キャラメル工場から』『太陽のない街』  
を中心にして」 『昭和文学史』第1巻 1988年2月
215. 加藤康秀「文の構造——佐多稲子『水』の冒頭を例として」 『国文学：解  
釈と鑑賞』53巻7号 1988年7月
216. 谷口絹枝「佐多稲子『くれない』論」 『近代文学論集』(14) 1988年  
11月
217. 北川秋雄「戦敗直後の佐多稲子——戦後改作をめぐって」 『同志社国文学』  
(31) 1988年12月
218. 長谷川啓「『灰色の午後』論——夫婦の共犯風景」 『日本の文学』第6集  
1989年12月
219. 田中益三「満州と文学(5) 女人往還——佐多・矢田・網野」 『法政大学  
大学院紀要』(24) 1990年3月

220. 長谷川啓「妻の官能の覚醒——不倫小説『灰色の午後』の光景」 『日本文学誌要』42号 1990年3月
221. 長谷川啓「戦争中から戦後へ——太平洋戦争期の佐多稲子（下）女・生活・民衆の再発見」 『くれない』7号 1990年4月
222. 松島芳昭「『キャラメル工場から』にみる佐多文学の特質」 『解釈学』(3) 1990年6月
223. 山下悦子「女性と転向文学—佐多稲子『くれない』」 『マザコン文学論—呪縛としての<母>』 新曜社 1991年10月
224. 乙部宗徳「中野重治・佐多稲子の評価をめぐって——川西政明批判」 『民主文学』(313) 1991年12月
225. 小林裕子「『私の東京地図』の文体について」 『日本文学誌要』(47) 1992年12月
226. 杉浦芳夫「キャラメル工場への道程—空間的相互作用とは？」 『文学のなかの地理空間—東京とその近傍』 古今書院 1992年4月
227. 小林裕子「沈黙の論理と恥の倫理」 『時に佇つ』講談社 1992年8月
228. 小林裕子「妾・妻・母の狂気——佐多稲子の『女の宿』をめぐって」 『新日本文学』48(10) 1993年1月
229. 北川秋雄「太平洋戦争前夜の佐多稲子」 『昭和文学研究』第26集 1993年2月
230. 高崎隆治「中国戦線での佐多稲子——15年戦争下、文学を裏切ったひとりの女性作家」 『文化評論』(387) 1993年3月
231. 和田敦彦「「乳房の悲しみ」評」 『日本近代文学』第48集 1993年5月
232. 北川秋雄「「気づかざりき」と「南京の驟雨」の位相」 『佐多稲子研究』 双文社 1993年10月
233. 横手一彦「佐多稲子『樹影』論考」 『日本文学』44(9) 1995年9月
234. 岩淵宏子「近代女性作家の文体」 『スタイルの文学史』 東京堂出版 1995年3月
235. 小田切秀雄「文学—近見と遠見と—9—佐多稲子と昭和文学の基本の問題——長編『歯車』を再読しながら」 『すばる』17(4) 1995年4月
236. 石川巧「彼女の朝から別の朝へ——佐多稲子『キャラメル工場から』」 『国語と国文学』73(10) 1996年1月
237. 今井清人「論文の構成と主旨」 『国文学解釈と鑑賞 別冊』 至文堂 1996年1月
238. 山田有策「作家論・作品論の彼方」 『国文学解釈と鑑賞 別冊』 至文堂 1996年1月
239. 窪川健造「三つの喜び」 『くれない』第8号 1996年12月

240. 長谷川啓「母が語る〈母の声〉、そして〈母と娘〉の光景——佐多稲子の自伝小説を読む」 『くれない』 第8号 1997年12月
241. 谷口絹枝「研究動向 佐多稲子」 『昭和文学研究』(37) 1998年9月
242. 田畑佐和子「丁玲と佐多稲子」 『中国研究月報』53(2) 1999年2月
243. 小林美恵子「『樹々新緑』論—〈母性〉との訣別」 『昭和文学研究』(38) 1999年3月
244. 森本泰子「優秀作『生き方の規範』としての百合子——佐多稲子の『人生的敗北』をめぐって」 『民主文学』(410) 1999年12月
245. 小林美恵子「『分身』論——〈母〉を求める『分身』」 『国文目白』(39) 2000年2月
246. 澤田章子「近代文学探訪(41)佐多稲子『キャラメル工場から』」 『民主文学』(413) 2000年3月
247. 野本泰子「佐多稲子の恋愛観」 『Comparatio』(4) 2000年3月
248. 長谷川啓「旅の記録・写真が語る戦地慰問——佐多稲子の未発表資料をめぐって」 『城西文学』 2000年3月
249. 長谷川啓「女性の移動と表現〈資料紹介〉旅の記録・写真が語る戦地慰問(承前)佐多稲子の未発表資料をめぐって」 環太平洋女性学研究会誌『Rim』第2巻第2号 2000年6月
250. 小田切秀雄「佐多稲子」 『小田切秀雄全集13』 勉誠出版 2000年11月
251. 北川秋雄「「気づかざりき」解説」 『近代女性作家精選集』047 ゆまに書房 2000年11月
252. 野本泰子「佐多稲子と『女性の解放』——『夫の暴力』を描いた作品を中心として」 『比較社会文化研究』(9) 2001年9月
253. 北川秋雄「佐多稲子『樹々のさやぎ』——敗戦直後の勸善懲悪小説」 『姫路独協大学外国語学部紀要』(14) 2001年1月
254. 矢澤美佐紀「敗戦後の佐多稲子についての一考察——『虚偽』を視点に」 『日本文学誌要』第63号 2001年3月
255. 野本泰子「佐多稲子のフェミニズム」 『九大日文』 2002年7月
256. 野本泰子「佐多稲子とロマンティック・ラブのジレンマ」 『比較社会文化研究』(11) 2002年11月
257. 津島佑子他「座談会昭和文学史(21) 女性作家——野上弥生子、佐多稲子、円地文子を中心に」 『すばる』24(1) 2002年1月
258. 山本欣司「売られる娘の物語——『たけくらべ』試論」 『弘前大学教育学部紀要』(87) 2002年3月
259. 田邊園子「女性作家による日本の文学史(17)エロスと生死——川端康成『禽獣』・夏目漱石『それから』・佐多稲子『くれない』・平塚らいてう」 『本

- の窓』25(10) 2002年12月
260. 伊原美好「年譜——佐多稲子の戦時下の見直しとして」 『日本文学論叢』  
(32) 2003年3月
261. 北川秋雄「佐多稲子「樹々のさやぎ」「開かれた扉」解説」 『戦後の出発  
と女性文学』第10巻 ゆまに書房 2003年5月
262. 紅野敏郎「逍遙・文学誌(146)婦人サロン(下)村山知義・木村庄三郎・久米  
艶子・林芙美子・山田順子・佐多稲子ら」 『国文学:解釈と教材の研究』48(10)  
2003年8月
263. 小林美恵子「佐多稲子『善良な人達』: 閉じ込め合う〈女たち〉」 『国文  
目白』(43) 2004年2月
264. 岩淵宏子「戦時下の結婚をめぐる抑圧と抵抗——佐多稲子『気づかざりき』  
／宮本百合子『雪の後』」 『国文学解釈と鑑賞』別冊 2004年3月
265. 櫻田俊子「二人の『女作者』——佐多稲子『女作者』論」 『日本文学論叢』  
(33) 2004年3月
266. 北川秋雄「佐多稲子『私の東京地図』という迷路」 『新日本文学』59(3)  
2004年5月
267. 谷口絹枝「『白と紫』論——隠されたモチーフ」 『新日本文学』59(3)  
2004年5月
268. 長谷川啓「内なる戦争責任の凝視(1) 戦後の出発と苦渋・佐多稲子書簡を  
読む」 『新日本文学59』(3) 2004年5月
269. 渡邊澄子「佐多稲子というひと——『時に佇つ』を中心に」 『新日本文学』  
59(3) 2004年5月
270. 高良留美子「佐多稲子と中野重治・信頼と裏切り——『溪流』をめぐって」  
『新日本文学』59(3) 2004年5月
271. 小林裕子「佐多稲子の『みどりの並木道』をめぐって」 『新日本文学』59(3)  
2004年5月
272. 針生一郎「佐多文学の中の公と私」 『新日本文学』59(3) 2004年5月
273. 大久保房男「女流作家と佐多稲子・平林たい子」 『三田文学』第3期83(79)  
2004年秋季号
274. 野本泰子「佐多稲子の〈ディスコース〉と〈性役割〉変革の可能性」 『九大  
日文』(05) 2004年12月
275. 樋口雄一「戦時下朝鮮における女性動員」 早川紀代編『植民地と戦争責任』  
吉川弘文館 2005年2月
276. 源淳子「知識人の戦争責任・戦後責任——佐多稲子の場合」 『研究紀要』  
(10) 2005年3月
277. 津島佑子「世代を超えた共感」 『佐多稲子と戦後日本』 七つ森書館 2005

年11月

278. 矢澤美佐紀「『重き流れに』における佐多稲子の位相」 『佐多稲子と戦後日本』 七つ森書館 2005年11月
279. 石月静恵「知識人女性の台湾訪問と台湾認識」 『桜花学園大学人文学部研究紀要』 (8) 2006年3月
280. 高良留美子「佐多稲子の詩と転換期の時代」 『社会文学』 (24) 2006年
281. 森まゆみ「『婦人公論』にみる昭和文芸史(3) 佐多稲子と『くれない』」 『婦人公論』 91(5) 2006年2月
282. 矢澤美佐紀「『労働』と女性文学——佐多稲子・角田光代・絲山秋子を手がかりに」 『社会文学』 (25) 2007年2月
283. 小林美恵子「佐多稲子『新しい義務』——姉と妹の『渴き』」 『社会文学』 (25) 2007年2月
284. 内藤由直「佐多稲子『みどりの並木道』論——国民文学の問題点」 『昭和文学研究』 (54) 2007年3月
285. 北川秋雄「佐多稲子の五〇年問題：『みどりの並木道』のことなど」 『國文學』 (91) 2007年3月
286. 田崎弘章「後日談であることを拒絶する長崎原爆文学：女性視点と日常性」 『人間文化研究』 (5) 2007年3月
287. 谷口絹枝「『女作者』から『私の東京地図』への転回——戦後出発期の佐多稲子にみる〈戦争と女性作家〉」 『昭和文学研究』 (55) 2007年9月
288. 小林美恵子「昭和10年代の佐多稲子作品——〈姉妹〉たちの戦時下」 『世界文学』 (106) 2007年12月
289. 伊原美好「佐多稲子『女作者』の位相——二人の女作者と戦争責任」 『日本文学論叢』 (37) 2008年3月
290. 北川秋雄「佐多稲子『虚偽』その後——『ある夜の客』『年賀状』のこと」 『姫路独協大学外国語学部紀要』 (22) 2009年3月
291. 山口直孝「大西巨人と新日本文学会、あるいは『神聖喜劇』の前夜——佐多稲子文庫『溪流』関連資料を補助線として」 『日本近代文学館年誌』 (5) 2009年10月
292. 鳥木圭太「プロレタリア文学と児童労働—佐多稲子「キャラメル工場から」の描いたもの」 『立命館言語文化研究』 21巻2号 2009年11月
293. 宮本阿伎「プロレタリア文学時代の佐多稲子」 『民主文学』 (532) 2010年2月
294. 伊原美好「作品の事実調べ：佐多稲子と〈吾妻橋〉及び叔父佐田秀実について」 『かりんかりん：女性学・ジェンダー研究』 第10号 2010年3月
295. 北川秋雄「佐多稲子・戦後の中間小説——『体の中を風が吹く』『愛とおそ

- れと』を中心に」 『姫路独協大学外国語学部紀要』 (23) 2010年4月
296. 谷口絹枝「無産階級者というアイデンティティと女性身体——佐多稲子『煙草工女』『別れ』をめぐって」 『国文学:解釈と鑑賞』75(4) 2010年4月
297. 谷口絹枝「『女性』文学における戦後民主主義の女性像——占領期・佐多稲子の小説を中心に」 『熊本学園大学文学・言語学論集』17 (2) 2010年12月
298. 竹内栄美子「書くことを選ぶ娘たち——佐多稲子『機械のなかの青春』一九五〇年代」 『社会文学』(33) 2011年
299. 伊原美好「女給物語——家族・労働・母性とセクシャリティ窪川稲子(佐多稲子)「レストラン・洛陽」から」 『かりんかりん:女性学・ジェンダー研究』第11号 2011年3月
300. 北川秋雄「佐多稲子『歯車』論——非合法時代(正史)としての制約」 『昭和文学研究』(62) 2011年3月
301. 鈴木康之「文学作品の教育と言語学——奥田靖雄、国分一太郎、そして佐多稲子」 『国文学:解釈と鑑賞』76(7) 2011年7月
302. 北川秋雄「佐多稲子『溪流』私注:三つの家と背後の闇」 『姫路外国語大学外国語学報』(25) 2012年3月
303. 長谷川啓「佐多稲子が描くアジアの女性表象」 『芸術至上主義文芸』(38) 2012年11月
304. 田村嘉勝「佐多稲子と『レストラン洛陽』:『夏江』と伊藤ハツヨと川端康成と」 『芸術至上主義文芸』(38) 2012年11月
305. 新藤謙「yuiken 交差点 佐多稲子の文体:「私の東京地図」における」 『季報唯物論研究(121)』 2012年11月
306. 藤枝史江「『キャラメル工場から』の<ひろこ>——戦う涙」 『芸術至上主義文芸』38号 2012年11月
307. 中嶋展子「佐多稲子『時に佇つ』論:川端康成文学賞・受賞作『その十一』を中心に」 『芸術至上主義文芸』(38) 2012年11月
308. 竹内清己「佐多稲子へ/堀辰雄から:『美しかれ、悲しかれ』と、『女よ』と」 『芸術至上主義文芸』(38) 2012年11月
309. 金原安里「佐多稲子『キャラメル工場から』論:服装・時間・場所からの分析」 『論究日本文学』(97) 2012年12月
310. 竹内直人「佐多稲子『歯車』の主観性」 『清和大学短期大学部紀要』(41) 2013年1月
311. 北川秋雄「佐多稲子『塑像』私注:階級的と、人間的ということ」 『姫路外国語大学外国語学報』(26) 2013年3月
312. 黄容「佐多稲子のプロレタリア文学運動への目的意識:初期作品における



- 女性労働者の姿を通して」 『長崎純心比較文化学会会報』(7) 2013年5月
- 3 1 3. 西田勝「佐多稲子と「満州」」 『植民地文化研究資料と分析』12号 2013年7月
- 3 1 4. 下田城玄「佐多稲子と戦争責任」 『民主文学』574 2013年8月
- 3 1 5. 谷口絹枝「戦後の再出発」 『佐多稲子文学アルバム』 菁柿堂 2013年8月
- 3 1 6. 藤田梨那『中国現当代文学中的跨文化書写』 中央編訳出版社 2013年9月
- 3 1 7. 久野通広「佐多稲子の立つ位置とは：『没後15周年記念』展を見て」 『民主文学』(578) 2013年12月
- 3 1 8. 後藤ひろ子「日本語教育における小説を使った上級読解授業の構想：佐多稲子『牡丹のある家』の試み」 『日本語教育論集』(23) (姫路獨協大学) 2014年
- 3 1 9. 北川秋雄他「佐多稲子『灰色の午後』論：恥をさらすということ」 『同志社国文学』(81) 2014年11月
- 3 2 0. 渡部麻実「衣服・はなみづ・鉄道：佐多稲子『キャラメル工場から』」 『国文目白』(54) 2015年2月
- 3 2 1. 小林美恵子「佐多稲子『夢の彼方』論：国策に絶たれた〈夢〉のゆくえ」 『国文目白』(54) 2015年2月
- 3 2 2. 長谷川啓「佐多稲子のアジアへのまなざし」 『戦争の記憶と女たちの反戦表現』 ゆまに書房 2015年6月
- 3 2 3. 松永京子「原爆文学「古典」再読(2)佐多稲子『樹影』報告」 『原爆文学研究』(14) 2015年12月
- 3 2 4. 坂口博「福岡千鶴子と醇次郎：鎮魂(レクイエム)の通奏低音」 『原爆文学研究』(14) 2015年12月
- 3 2 5. 村上陽子「孤独の諸相：佐多稲子『樹影』における被爆意識の変遷」 『原爆文学研究』(14) 2015年12月
- 3 2 6. 松永京子「原爆文学『古典』再読(2) 佐多稲子『樹影』」 『原爆文学研究』(14) 2015年12月
- 3 2 7. 北川秋雄「佐多稲子文学の会話表現にみるセクシュアリティについて：『キャラメル工場から』・『素足の娘』・『或る女の戸籍』・『年譜の行間』を視座に」 『姫路獨協大学外国語学部紀要』(29) 2016年2月
- 3 2 8. 谷口絹枝「佐多稲子『灰色の午後』論：〈同志的夫婦〉とは何者か」 『昭和文学研究』(72) 2016年3月
- 3 2 9. 北田幸恵「一九四十年前後の女性文学——宮本百合子・牛島春子・小山いと子における〈抵抗の諸相〉」 『昭和前期女性文学論』 翰林書房 2016年10月

月

- 3 3 0. 鳥木圭太「女性作家の見た〈南方〉：林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論  
究日本文学』（106） 2017年5月
- 3 3 1. 鳥木圭太「同化と異化のはざままで：佐多稲子「髪の歎き」における植民地  
的主体の形成について」『立命館文学』 2017年8月
- 3 3 2. 北田幸恵「在日、家族、居場所探しの物語」『現代女性文学を読む』ア  
ーツアンドクラフツ 2017年12月
- 3 3 3. 山口直孝「「この人」という他者：大西巨人における佐多稲子」『日本  
近代文学館年誌:資料探索』（13） 2018年3月
- 3 3 4. 北川秋雄「拙著『佐多稲子研究(戦後篇)』に於ける、「佐多稲子日記」記述  
についての事実誤認その他」『姫路獨協大学外国語学部紀要』 2019年2月
- 3 3 5. 小林美恵子「佐多稲子『子供の眼』論：戦後核家族にみる束縛と希望」『沼  
津工業高等専門学校研究報告』 2019年1月
- 3 3 6. 谷口絹枝「佐多稲子「怒り」・「レストラン洛陽」の位相：「性」と「階  
級」の関係から」『近代文学論集』（44） 2019年3月
- 3 3 7. 畑中佳恵「ひとりになるということ：佐多稲子「水」精読」『近代文学  
論集』（44） 2019年3月
- 3 3 8. 久米依子「殖民地ハルピンと女性の表象：佐多稲子宛て上田家の書簡から」  
『日本近代文学館年誌:資料探索』（14） 2019年3月
- 3 3 9. 矢澤美佐紀「佐多稲子没後二〇周年に考える：研究会の軌跡をたどりつつ」  
『日本近代文学』（100） 2019年5月
- 3 4 0. 小林裕子「佐多稲子の「黄色い煙」と「ばあんばあん」をめぐる」『始  
更』第17号 2019年10月

## 〈日本国外〉

### 単行本

- 3 4 1. ガヤトリ・スビヴァック／鈴木聡ほか訳『文化としての他者』 紀伊国屋  
書店 1990年12月
- 3 4 2. マリアンヌ・ハーシュ／寺沢みずほ訳『母と娘の物語』 紀伊国屋書店 1992  
年9月
- 3 4 3. シモーヌ・ド・ボーヴォワール／井上たか子・木村信子監訳『第二の性』 新  
潮社 1997年4月
- 3 4 4. ギルバート、スーザン・グーバー／山田晴子・藪田美和子訳『屋根裏の狂  
女』 朝日出版社 2000年6月

345. サンドラ・ホミ・バーバ『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』 法政大学出版局 2012年9月

## 論文

346. エヌ・ア・パイコー「日本作家の印象」 『文芸』1巻1号 1941年1月
347. ア・ストルガツキー「佐多稲子論」 『現実と文学』12号 1962年8月
348. 浅田喬二・刘含発・鄭毅「关于日本帝国主義満洲移民問題研究的思考」 『吉林师范学院学报』 1989年10月
349. アルバート・ウェント「『太平洋歴史会議』での演説」 『占領と文学』 オリジン出版センター 1993年10月
350. 朱必圣「弱者的文学性格」 『当代作家評論』 1996年9月
351. Patrick ClaireDiana 「佐多稲子・壺井栄：女性の友情から生まれたアイデンティティ」 『U.S.-Japan women's journal. English supplement : a journal for the international exchange of gender studies』 (15) 1998年12月
352. HENRY Nathalie「佐多稲子の『くれなゐ』：アイデンティティの動揺」 『教養論叢』 (124) 2005年
353. 劉晶輝「『満州国』における婦人団体」 『植民地と戦争責任』 吉川弘文館 2005年2月
354. 林賢治「蕭紅和她的弱勢文学」 『新文学史料』 人民文学出版社 2008年5月
355. 鉄道運賃の推移 [EB/OL]  
[http://www6.plala.or.jp/orchidplace/fare\\_tokyo\\_osaka.html](http://www6.plala.or.jp/orchidplace/fare_tokyo_osaka.html) 2009年9月
356. 李晶編「日本開拓団の移民の中国東北地区での暮らし（写真集）」 中国網日本語版 2011年8月
357. 杨国荣「理由、原因与行动」 『哲学研究』 2011年9月
358. 孔蕙英「韓国における佐多稲子研究の一側面：朴愛淑『佐多稲子作品研究：人間平等の懇望』を中心に」 『日本語教育論集』 (23) (姫路独協大学) 2014年3月
359. 趙科「佐多稲子の『分身』を読む：「混血現象」をめぐって」 『九大日文』 (26) 2015年10月
360. 趙科「佐多稲子の朝鮮旅行と植民地に対する認識：随筆を中心に」 『Comparatio』 (19) 2015年12月
361. 黄翠娥「佐多稲子の眼差しと台湾の記憶：「台湾の旅」をめぐって」 『日本語日本文学』 (46) 2017年7月

362. Hayashi Hiro Mitsuo 「『樹影』における華僑出身の原爆被爆者の描写と  
佐多稲子の文学における少数派グループ」 『地球社会統合科学研究』(7) 2017  
年9月
363. 尹小娟「佐多稲子の戦中と戦後：南方慰問をめぐる一考察」 『跨境:日本  
語文学研究』（高麗大学校日本研究センター） 2018年